
魔王と魔王の友達と

千夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と魔王の友達と

【Nコード】

N5043Q

【作者名】

千夜

【あらすじ】

どこにでもいるありふれた少年は、ある日神殺しの魔王となった。護堂という同胞の友人を得た魔王が、久々に活動を開始する。

処女作かつチートオリ主ですのでご注意ください。
ゆっくりめの更新になるかと思えます

注意書き

今まで小説を書いたことがありませんので色々おかしい点多いと思います。がよろしくお願ひします。

・・・初めてが二次創作とかハードルが高い気も若干あります（苦笑

以下注意点をば

・前述の通り処女作です
・オリ主系です。更にチートです

・カンピオーネ！なのに神話を紐解いたりは（多分）ありません
・神々に関しては一応調べていますが無理矢理感や変な点とかある
かもしれません

・原作と矛盾するかもしれません。独自解釈おそらく入ります

・護堂一行の中で恵那だけでも下さい（笑 エリカや祐理、リリアナは護堂一行で変わらない予定です

以上が平気、という方はよろしくお願ひします。最後、できればアドバイス、批評、ご指摘等よろしくお願ひします。

§1 魔王になった日

某県某市駅前カラオケ店706号室、ドリンクバー付きフリータイム。学生料金で1人460円也。

友達連れで来るには最高の場所である。心からそう思う。しかしそれは「友達連れで来るならば」の話。1人でカラオケなど御免被る。寂しい。

ぶつくさ文句を言う水羽黎斗^{みずはなれいと}、ただいま1人カラオケ挑戦中。

「やっと60曲…… ノルマまであと40曲か……」

賭けなんてしなきゃよかった。そう思うが全ては後悔しても後の祭りである。

二学期期末テスト最下位は1人カラオケで100曲歌うこと。曲目及び採点された点数はその都度メンバーにメールで一斉送信すること。800点中421点でボロ負けした黎斗は店員さんの「今日は混んでおります……」という一言で20人は入れそうな大部屋を独占である。端から見るとかなり寂しい人に見えるだろう。(ちなみに点数平均は580、最高は783だった)

「エタブレ75点、次は風にあそばれて……っ」と

カラオケの点数は60〜70をいったりきたりである。もらい泣きの81点が最高であったりする。

時刻は現在午後5時。……はたして終わるのだろうか？

午後7時。現在78曲目。

「終わらねー……　　つか無理。もう無理……」

メロンソーダを飲みながらため息を一つ。炭酸と甘みが疲れた喉を刺激し心地良い。癒しのひととき。

そして気づく。妙に暑い。もうじき冬なのに服一枚汗の出る温度は流石におかしい。いくら歌っていたとしても。扉の外に煙しか見えないのも気になる。

「……け、煙？」

外では、サイレンが聞こえはじめた。消防車だろうか？

「ちよ……嘘でしょ……え……」

気づけば、部屋内にも煙が入ってきている。

「ヤバ……!!」

貴重品を持つ。鞆の中から昨日の調理実習で使った後出し忘れて放置していた三角巾を引っ張り出し口に。背を屈めて扉を開け、外へ。避難訓練の成果は伊達じゃない。

「……!？」

外は煙一色だった。ロクに前も見れない。なぜ今まで気づかなかつた、と自己嫌悪をしながら非常口の方向に見当をつけ、進む。

煙はだんだん濃くなっていく。どうやったらこんな濃くなるのだらう? ドアノブを捻り、足を踏み出す。段差に躓き、転ぶ。

「おわー!？」

頭から下の階に落ちる、という黎斗の予想は裏切られた。
数秒後、彼は人の上に落下した。

時刻は多少遡る

翼を持つ者が2人、アルプス山頂付近で剣戟を繰り広げていた。
漆黒の翼を持つ者は片腕を失い、純白の翼を持つ者は片目を失っている。全身の負傷具合は両者とも同程度といったところか。

「バラキエル、そろそろ倒れる」

「ナメんなサリエル、俺様の悪運が火を吹くぜー！！」

バラキエルは叫びサリエルへ突撃する。相手の剣を体で受けて、
右手の剣で相手の瞳を切り裂く。全ては相手の邪眼を封じる為。

「ぐおお……！？」

体で受ける、という狂気じみた行動を予測できなかったサリエル
は両目を切り裂かれたが故に、バラキエルに実は致命傷を与えてい
ることに気づいていない。

「へっ、ざまあねえなサリエル。いくぜ、このバラキエル様一世一代の大博打いー!!」

瀕死となつてまでバラキエルが狙っていた切り札。召喚術。

ただし、彼の術はひと味違う。何を呼び出すかわからないのだ。それは石ころかもしれない。子犬かもしれない。神々かもしれない。雑誌かもしれない。そして、この召喚術の真価は対象を呼び出す際に時空を超越すること。過去、現在、未来。そのいずれかから何かを呼び出すのだ。それはまさにハイリスクハイリターン。代償は己の命の一部。瀕死の彼のなけなしの命が、全て掛け金へと変わる。賭博で有名な彼は最後の最後まで一攫千金を目指して果てた。薄れゆく意識の中、彼が最後に聞いたのはマヌケな声。最後に感じたのは、何かが自分の上に落下した感触。

「っっー……」

黎斗が体を起こすと、そこは一面雪景色だった。寒い。自分の下に人がいることに気づき、慌てて退こうとして今度は剣に躓いた。

「痛っ」

「バーラーキーエールー!!」

狂気に染まった声を聞き、黎斗の本能が警鐘を鳴らす。

ここにいてはいけない

殺気にあてられて立つことすら叶わず、四つん這いになって逃げようとするも、右足を鋭い痛みが襲う。

「ああー!!」

いたいいたいいたいいたい!!!

蹴られて飛ばされ背が地にぶつかった。口から血が流れ出る。頭上には目を瞑った白い翼の男。剣をこちらへ向けてくる。助けを求めて必死に周囲の大地に手を伸ばす。指先に、冷たい感触。男が振り下ろしてくる剣に恐怖を感じ、目を瞑りながらもそれを防ごうと手を前に出す。

ぶすっ、という生々しい感触。

「があ……」

呻き声が聞こえ、目を開く黎斗。彼が突き出した剣は男を貫いていた。

「あ……あ……」

もう限界だった。黎斗は意識を、手放した。

§2 幽界にて(前書き)

もうちょいで原作開始です。

あと1、2話くらい？

§2 幽界にて

パチ、パチ、と駒の音が響く。

「ほれ」

「……詰み、か。また負けたあああ」

黎斗の呻きが屋内に響く。

「昔から比べりゃだいぶ強くなったよ。ここ数十年でだいぶ追い込まれる事が増えてきたしな」

対局相手は、かつて現世で暴れた雷雨を操る英雄神。

黎斗がこの地に住み着いて数百年が経つ。

七天使の一人サリエルを撃破した後、自身が千年前に跳ばされた事を知り激しく狼狽、逆恨みの如く神殺しを行い続けたが復讐の無意味さに気づいたあとは気楽に生きてきた。もともと元凶たるバラキエルが復活したなら八つ裂きにしてやる、とは公言しているのだが。

「……通算何敗？」

「さあ？」

「須佐之男命様が8762勝、マスターが91勝です」

風鈴のような涼しげな声で足元から戦績開示をしてくれたのは黎

斗にエルと名付けられた狐。もう100年程生きると千歳となるこの狐は黎斗の使い魔だったりする。まあ人語を介し魔術を察知できる以外は普通の狐と変わりはないのだが。

「勝負は既に終わってしまわれましたか」

穏やかな声とともに襖が開く。微笑みながら入ってきたのは媛と呼ばれし瑠璃の美女。

「その様子ですと今回も黎斗様の負け、といった所でしょうか。……粗茶ですがお持ちいたしましたのでお飲みになって元気を出して下さいませ」

半ば苦笑いの彼女からお茶を受け取る。

「あ、ありがとうございます。やっぱりサノオに負けました。……勝率1%くらいか」

自分の発言で落ち込む黎斗。欧州からシルクロードを旅して流浪の末に日本に辿り着いた彼は、須佐之男命と激戦を繰り広げた。戦いの後に芽生える友情というのは、どうやらマンガの中だけでなく実際にあつたらしい。すっかり意気投合した彼らは幽世に引きこもり、将棋を指す毎日だ。須佐之男は時たま現世に関与しているようだが、黎斗はしない。屋敷から出ることすら稀である。ダメ人間ここに極まれり、とは彼の弁。

「そついや黎斗、お前嫁とらんのか？神殺しを宣言すりゃ引く手数多だろうに。こんなとこに引きこもって。女嫌いか？」

話題を変えようと未だにへこんでいる黎斗に須佐之男が尋ねる。

「よめえー？人生〓彼女いない歴の僕に何を…… だいたい神殺しを宣言してモテたところでソレ僕じゃなく神殺しっつー肩書きがモテとるだけやん」

「こんのひねくれ者が……」

呆れる須佐之男。

「てめえそんなんじや後輩の神殺し共に越されんぞ。俺との模擬稽古以外ここ数百年してねえだろ」

「んー、しょうがないなあ。ちよっくら現世行ってくるわ。百年くらいたら帰ってくるから」

「そつそ……へ？」

「あら？」

「……気のせいでしょうか。私の耳に間違いがなければ今マスターが現世に旅立つ、と聞こえたのですが？」

三人揃って意外そうな顔をする。自分の耳を疑うような表情。

「なによ、言い出しっぺは須佐之男だろ」

「こんなに簡単に行くと言つとは……」

「日本人に神殺しが居るんでしょ？会ってみようかな、と。エル、行くよ」

そう言って荷物をまとめる黎斗。彼は自身の持ち物手早くまとめる。

「ん、じゃね。また今度」

須佐之男が気を取り戻したのはしばらく後の話。

「……明日は嵐だぞおい」

家族がこの世界には存在しない。須佐之男に頼んで調べてもらった。彼の調査でないのならば、そうなのだろう。彼が現世へ来た目的の一つは携帯電話の購入である。千年の永きを経て彼の携帯電話は故障したが、内部のマイクロSDは無事だと信じたい。保存した情報の中には家族、友人の写真といくつかのメール。つまり元々平成の世になったら彼は現世へ帰還するつもりでいたのだ。

「ん、これでいいかな」

「周囲に人はいませんよ」

エルを隠すためのリュックを背負った黎斗は手頃な石を拾い権能を発動。石はダイヤモンドに変貌した。これ売り、資金源にする。強欲の悪魔、マモンの権能。宝石、貴金属の類を作り出す。金銀だけでなくレアメタルまで生成してしまうその力は世界の経済をあ

つというまに破壊可能な最強ともいえる力。作り出されたものは貨幣と異なりどんな時代でも価値を持つ。彼はに資金難の文字は存在しない。まあ、あまり大っぴらにすると目立つため少して十分だろう。

みゃー。みゃー。三毛猫が鳴く。飼い猫だろうか？毛並みが綺麗だ。

「宝石店、知ってる？」

みゃー。

「あ、マジ？ありがと。あとでキャットフード奢るよ」

みゃー。みゃー。

「御主人様が出張じゃご飯大変でしょ？気にすんなって。これから金持ちになる（予定）だからさ」

「…………マスター。もうちょっと声を小さくした方が。端から見ると可哀想な人ですよ」

背中からボソツと呟くエルの声。

「…………ん、そだね」

みゃー。

「あ、お願い」

さつきより声を下げ猫と話す。猫が歩き始め、彼は後ろをついて行く。

命を持つあらゆる存在と意思疎通が出来る。悪魔カイムの権能。鳥、虫、木々等々……彼は話し相手に事欠かない。彼らは友好的な存在が多く、彼の手助けをしてくれる。もちろん、彼も頼まれればできる範囲で手伝いをする。

宝石店の女主人にダイヤモンドを6万で売り払った彼はキャットフードを大量購入し猫を大勢引き連れて公園に長期滞在したためちよっとした注目を浴びることになるのだが、いかに彼といえどもこの時点でそれは予想できなかったのだった。

§2 幽界にて（後書き）

修正をいくつか。

・・・改行ミスも多々ありました（汗

整理用（前書き）

正直コレは居るのかわかりませんが一応。ここに記載した神以外は
会ってない方針で行きたいと思います。

2011/03/30

周辺地域追加っ

・・・コレも誰得なんですけど

2011/05/10

大幅改変、すいません

流れを展開に矛盾出さないでいのように一端リセットしました
替わりに権能追加

ホントは入れないで済めばよかったんですけど、権能が飛び飛
びでてくるせいでわかりにくいかな、と。

未熟者だと痛感しました・・・orz

でも権能丸写しだと少し悔しいので権能の元ネタにしておきます
公開していない分は推理してみると面白いかもしれませんよ？

あ、アパートの欄に設定追加

コレ加えてないと9巻の事実に対応できませんので（苦笑

ドサクサ紛れていくつか追加してみたり（笑

整理用

移動記録

アルプス 欧州 シルクロード インド 中国 日本 幽世
約千年前に神殺しとなる
カール大帝在位時（768～814）と思われる

撃破順

サリエル「退魔の天使／7大天使」

・邪眼

ディオニュソス「狂乱の神／オリンポス12神」

・狂乱

・人間離れた信者の身体能力

ラファエル「四大天使」

・旅人の守護天使

マモン「強欲の悪魔」

・万魔殿建築

カイク「ソロモン72柱」

・言語の悪魔

テュール「天空神」

・フェンリル捕縛

アーリマン「友愛の神／闇の邪神」

・ミトラ教でのアーリマン崇拜

・悪の最高神

シヤマシユ「太陽神」

・ハンムラビ法典

ヤマ「冥界の神」

・最初に死んだ者

・地獄の支配者

・地藏菩薩は転生する

スーリヤ「太陽神」

・神すら我慢できない輝き

スクナビコナ「医療の神」

・一寸法師の原型

・温泉療法の創始者

・酒造の神

・穀物の化身

ツクヨミ「月の神」

・潮の満ち引き

・月曆

オマケ

ロンギヌス「聖遺物」

・目を治癒

・神を刺す

地理とかそんなの

・黎斗のアパート

キッチン、トイレ、風呂付き、光通信対応。6畳の畳。洗濯機&乾燥機備え付けでベランダ有りの2階、ペット不可。管理人さんは斎藤さん（67歳、女性）

ちなみに黎斗の部屋は（汚い癖に）異常に清浄、澱みが存在しない。下手な霊山も真つ青なレベルなのだが恵那は「なんか空気キレイだなー」程度にしか考えていない
エリカやリリアナクラスならば一瞬で存在者の力量を予想できるくらい

・宝石店

黎斗がよくマモンの権能で貴金属を作成し換金する店。藤川さん（48歳、女性）の個人経営。最近何故か経営が右肩上がりです売上が増加の一途を辿っている

商店街福引が今回異常に豪華になった元凶

・高校

私立城南高校、1年、護堂と同じクラスなのは本当に偶然
最近立派な蜥蜴が出没するらしい。写真などの証拠が無いのに噂は広まり続け、もはや七不思議の一角に。

・ラーメン屋

学生証入手により大盛り無料になったらしい。黎斗お気に入りのお店主とは顔パスの中。好物は味噌ラーメン（500円）

一番奥のカウンターが（ほぼ）黎斗専用席

整理用（後書き）

どうぞでしょー？

・・・あと皆さんの小説を回ると能力解説のある方がちらほら。
僕も作った方が良いのでしょうかね？
うーん、ご意見ありましたらお願いします。

護堂さんてば1年なんですね（汗
2年と勘違いしてましたよ
これから修正の嵐だぁ・・・

§3 初の遭遇（前書き）

とりあえず書きため（ってほどじゃありませんでしたね・・・）
出 放

§3 初の遭遇

「つ……詰んだ、だと……」

「マスター無様ですね」

道端で冷や汗を流す水羽黎斗、ただいま絶賛迷子中。

猫軍団に振る舞ったキャットフードの残骸を始末し黎斗が向かった先はラーメン屋。都会では目立つであろうエルはリュックの中に潜ませる。腹が減ってはなんとやら。醤油らーめん大盛り（学生は無料らしいので思わず大盛りにしてしまったが学生証がボロボロであったため学割は泣く泣く諦めた）を貪るように食べて会計を済ませる。1000年の時を越えて食べるラーメンは格別だった。何せ1000年近く和食オンリーだったのだ。感動に震え泣きながら食べたら店主のおじさんにチャーシューをオマケしてもらえた。万々歳である。

「ふひいゝ…… 食った食った」

宝石を換金した時に調べてみたことだが保険証は黎斗が現在所持している物と形が同じ為使えそうである。もちろん、きちんと調べられれば「データ上では存在しない」保険証であることはすぐにわかる。が、そこまで調べられることは滅多にないだろう。つまり控えを取られない範囲で身分証明書を入手したことになる。鼻歌を歌いながら駅前商店街へ歩き出す。

しかし、これが運の尽きだった。浮かれていた彼は「住処の確保」という最大の問題を失念していた。アパートの空き部屋を調べるどころかどこにアパートがあるかすらわからない。木々や動物に聞いてみたが彼らにとってアパートとビルとの区別は難しいらしい。ビルまで案内される事が多かった。アパートに案内してもらえても軒並み満室。

「ネットカフェに住む神殺しとか絶対バカにされるよう……」

絶望に染まる黎斗の瞳。かくして冒頭の場面となる。

「冷静に考えりゃ住所なきや携帯電話つて買えなかつたかも……」

「携帯電話とやらを買えないのではマスター目的果たせませんね。私はネットカフェなるものを知りませんがカフェと名の付く建物に私みたいな狐入れるんですか？リュックの外に出られない、なんてバカな展開は勘弁してくださいよ？」

「……あ」

いよいよもって万事休す。ディオニユソスの権能を使えば他人の家で生活することは出来る、がそれを良心が許さない。第一いざれボロが出る。他の権能はこの局面ではどうしようもない。時刻は午後3時を少し回ったところ。早く寝床を決めなければエルを連れてくる以上野宿になってしまう。野宿の神殺し（笑）と言われる自分を想像し落ち込む黎斗。

「なあ、そのあんた。どうしたんだ？」

「ちょっと護堂、私とのデート、という自覚がないの？」

「デートって……とにかくへこんでいる相手を見て、放っておけないだろ」

「まったく…… まあいいわ。お人好しな面は大目に見ましよう。またの機会を楽しみにしてるわよ」

……カップルか。カップルなのか。しかもラブラブの。

妬ましく思いながらも優しき男性にお礼と相談をしようとして振り向く。

「イケメンカップルがおる……」

相手と自分の容姿の差に愕然。ついでに生で見た金髪美少女に呆然。結果、第一声は情けない物になった。

「は？」

「ああ、ごめんごめん」

我を取り戻した黎斗は事情を説明する。エルはリュックの中で丸まって動かない。

（強大な魔力……神殺し？マスターの御同胞かな？彼女は……魔術師？ 私じゃ相手になりそうにないですね。おそらく逃げるだけで
精一杯）

おそらく見られたら一発で妖狐とバレるだろう。厄介事を増やさないためにも、彼女は気配を押し殺した。

「ありがとう！」

「気にすんなって」

「うん！エリカさんも、デートの邪魔してごめんねー？」

「だからちが「あら、殊勝なのね」……エリカ、お前…… まあ、また夜にな！」

2人が、帰って行く。幸運な事に護堂の家の隣にマンションがあり、運良く部屋が空いていた。2階の端で日当たり良好。トイレ、キッチン、風呂ありで窓を開ければ外は綺麗。お買い得である。手続きをサラッと済ませ住所を入れた彼はエルと共に家を出た。目指すは携帯電話の購入及び護堂の通う高校への編入である。日本に来て初めての”人間の”友人だ。でも神殺しの魔王だから人間ではないのだろうか？夕食を招かれていますので用事はサクサク済ませたい。

護堂の家の前で木々を眺める。

「ねえねえ、護堂ってどこの高校かわかる？」

……

「ふむ、わかった。ありがとう」

……

「ん？ああ、その高校に転入しようかな、と」

……

「だいじょーぶ。これからよろしくね」

木から高校名を聞いて歩き始める。迷ったら鳥に聞けばよい。まず入学手続き、それから携帯電話購入。須佐之男に友達ができたことを自慢し新居を伝えよう。そんな事を考えながら黎斗はのんびり歩き始めた。

§3 初の遭遇（後書き）

さて、次話以降の文量が課題・・・
携帯電話から打つてるときがつきにくいもんですね。

・・・まあ、他の作者様の文量と比較すればすぐにわかったんでし
ょうけどね。あははははorz

§ 4 夕食と魔王と(前書き)

文量大幅増加してみました。すこしはマシになったかな・・・？

§ 4 夕食と魔王と

携帯電話を買い、転校手続きを済ませた黎斗は早速須佐之男命に電話をかける。

「スサノオー！友達出来たんだよ！！あと住居も決まった！」

嬉しそうに話す黎斗。彼からかけているせいか、須佐之男命が通話相手であるにも関わらず天候は晴れそのものである。

「うん、うん、まあだいじょぶでしょう。多分。第一僕を神殺し
ああ、カンピオーネだっけ？カンピオーネと知ることは出来な
いよ。相手が本気になりや別だろうけど、一般人にしか見えない相
手に本気にならんだろうさ。もっともお前やアテナ辺りだったら
顔バレしてるから話は別なんだけど」

笑みを浮かべて、彼は続ける。

「それに神の1人や2人で負けはしないよ。そんなヤワな人生送っ
てきてないって。……うん、油断はしないから大丈夫」

関係者が知れば戦慄するであろう会話を続ける2人。夕方の商店
街でそんなことが話されていることを知るのは、当事者のみ。

「ん、じゃあこの辺で。みんなによろしく」

通話を切る。

「……………!?!?」

ふと、懐かしい、気配がした。

平静を装い、周囲を見渡す。少し離れたところに居た。千年近く前に戦った顔。その力の前に逃走を余儀なくされた銀の髪を持つ美少女。

だが、どこかがおかしい。

「アテナ……」

彼女はこちらへ気づかず通り過ぎていく。僅かな違和感を残して。

「なんだ……？ だいたいなぜ彼女が日本へ……？」

違和感が恐らく鍵だ。あの女神に何があったのだろうか？

「マスター、アテナ様を気にするのは結構ですが六時になりますよ？」

「うわっ！？ ヤベ！？」

慌てて走り出す黎斗。戦いの日々から離れ平和に慣れきっていた彼は、アテナの事をすぐに頭の片隅から追い払った。

「お、おじやましませ……」

「ははは、いらっしやい」

「嘘！？ お、お兄ちゃんが同性の友人を連れてきた……」

「静花、お前は俺をなんだと思っているんだ……？」

草薙家はとても賑やかだった。一人っ子である黎斗には、兄妹のじゃれあいが少し羨ましい。

「護堂が珍しく男の子の友達を連れてきたからね。少しいつもと変えてみたんだ。お口に合うと良いのだけれど」

そう言って朗らかに微笑む護堂の祖父は、やっぱりイケメンだった。

「草薙家のイケメンは遺伝か……っ!？」

草薙家のスペックを改めて思い知らされ、絶望する黎斗。

「ーん。」

自分を無視するな、とばかりにエルが飛び出してくる。もし妖狐云々を聞かれても、ごまかしきる。2人でそう結論を出したため、黎斗はエルの存在を大っぴらにする。

「きゃー!!! この子可愛い!!!」

「おやおや、これは小さなお客さんだね」

「黎斗、コイツどうしたんだ？」

三者三様の反応。狐はやっぱり珍しいらしい。護堂の反応ばかりはエルが「妖狐」であることに對してなのかは判断がつかないが。

「ああ、地元で怪我してるトコを手当てしたら懐いちゃってさ。昼間はリュックの中に居たんだよ?」

……嘘は言っではない。嘘は。出会ったのが恐ろしく昔であるだけのことだ。

「名前! ! 名前はなんて言っんですか! ?」

テンションがMAX状態の静花の発言に自己紹介をしていないことを思い出す。

「僕は水羽黎斗、コイツはエル。よろしくね」

エルもまた挨拶するかのように、こーん、と鳴いた。

「ふひいー。ご馳走様でした……」

「すげえ食べっぷりだったな…… 腹壊すなよ?」

千年振りの豪華な食事。ここでも黎斗は昼間のラーメン屋よろしく感激の嵐だった。口を開けば「おいしい」「うまい」「おかわり!」である。

「後半泣きながら食べてたよね……」

静花など途中から箸を止めこちらを見ていたくらいだ。

「……あ」

自らの所業を思い出す黎斗。

「う、ごめんなさい……」

穴があつたら入りたい、とはまさにこの事だ。友達になったばかりの家に来て五、六杯もおかわりをして泣きながら食べる。やりすぎである。

「いやいや、ここまで喜んでもらえると思利につきるねえ」

そう言って笑う護堂の祖父に思わずジーン、とくる黎斗。

「うん。」

「ごっそそエルが荷物を漁る仕草をする。」

「あ、そうだった。エル、ありがとう」

思い出した黎斗は持ってきた荷物から一リットルのペットボトルを取り出す。中には透明の液体が並々と入っている。

「あの、これ。自家製のお酒なんですけど。もしよろしければ、どうぞ。こっちに越してくるときに作り方だけ習って来たんです。未

成年は無理だからおじさんしか飲めませんが勘弁してください」

例によって権能で作ったものだ。少名毘古那神の権能の一つ。一週間に一リットルだけ液体から酒を生成でき、アルコールの濃度や味を自在に変えられる。好みの味を作れるが数量制限のせいで須佐之男命と2人で酒盛りをするときくらいしか役に立たない能力。メタノールなどを作り出しても、神との戦いに有効か、と言われれば疑問符がつく。エル曰く「微妙すぎる能力」である。こういう時には役立つのだが。

「おや、これは随分と美味しそうなお酒だね。ありがとう、あとでいただくよ」

「酒作れるってすげーなお前」

「まーね」

護堂の言葉に胸を張る黎斗。能力で作ったくせに偉そうに言うな、と言わんばかりにエルが飛びかかってきた。笑い声に包まれる食卓。夜は更けていく。

「みなさん、いい人達でしたね」

時刻は9時を回り、黎斗とエルは草薙一家にお礼を言って帰路に

ついた。黎斗は包みを抱えている。

「こつちに越してきたばかり、それも一人暮らしは大変だろう？
余り物で申し訳ないが、もしよかったら明日の朝食にどうだい？」

護堂の祖父のその言葉に甘えさせてもらい、朝食を用意してくれ
た彼に何回もお礼を言った黎斗は、包みを落とさないよう慎重に階
段を登る。

「マスター」

どことなく張り詰めたエルの声。

「わかってる。誰だろうね。スサノオくらいにしか住居教えてない
んだけどな」

自分達の部屋の前に、何者かの気配を感じる。須佐之男命の神力
を僅かながら感じるので恐らく彼の子孫だろう、と適当に予想する。

「んー…… あなたがれーとさん？」

「……今日は美少女とよく会うなオイ。しかも巫女さん？ 刀持ち
？ あー、なんかもうどーでもいいや……」

巫女装束の美少女が、見覚えのある太刀を持って体育座りであつ
らつら船をこいでいた。予想外の光景に黎斗は一瞬固まってしま
う。鍵をかけていたから入れなかったのだろうが、いつから居たの
だろう？

「……とりあえず中にどーぞ？」

夜は冷える。風邪をひかれたらたまらない。黎斗は昼間買ってきたココアを早速使おう、と思いながら客人を部屋に招き入れた。

「うん、あなたがれーとさんだね？ 惠那は清秋院惠那っていいます。とりあえずこれからお世話になるかもしれないけどよろしくっ」

「まで、意味が分からない」

自己紹介したらコレである。黎斗はフリーズ状態だ。

「えー、おじいちゃまから聞いてない？」

「おじいちゃま？」

まるでおじいちゃまとやらが黎斗の知り合いであるかのような口ぶりだ。しかし悲しいかな、彼に知り合いと呼べるのは草薙家を除けば須佐之男命達しかない。そこまで考えて、ふと思いつく。眼前の少女からは須佐之男命の神力を僅かながら感じるとれる存在であることを。

「……もしかしてスサノオのこと？」

適度に冷めたココアを飲みながら尋ねてみる。

「おじいちゃまが親友が越してきたから挨拶しとけ、って。……そもそもれーとさんって何者？ 気配は一般人。魔力も無いみたいだし。部屋見渡しても呪術的な道具無いみたいだし。でもただの人が

おじいちゃまと知り合えるもんなの？」

あ、ココアおいしいね、と飲みながら恵那は続ける。

「それに」他の人達にバレないように”挨拶してこい、つてのも気になるんだよね。れーとさんつてもしかして危険人物でいるんな人から追われてたり？まさかその狐さんが原因つてわけじゃないだろうし」

……おいおい、この巫女。鋭すぎだろう。黎斗は内心舌を巻く。正体がバレればいるんな所から追われそうなプロフィールの所持者である気もするが自分では危険人物ではないと思う。まあ一撃で都心を無に帰すことの出来る力を持っている人を安全人物とは言えない気もするけれど。

どうする自分。まず須佐之男命に関しては将棋仲間……無理だ。絶対信じてもらえない。

「えつと……」

いつそバラすか。一人二人バレても黙っていてもえれば問題ないし。護堂にもいずれば話すわけだし。もう妖狐とバレてるんだし対して変わらないだろう。そう考えて口を開こうとする。

「昔ある事情がありました。須佐之男命様と私でマスターのサポートをしています」

「ナイスアシスト、エル！」と黎斗は心の中でエルに感謝した。しかし問題はここから。果たしてこの直感巫女から隠し通せるか。

「あ、そーなんだ。それにキミ、喋れるんだね。お名前は？」

「私はエルといます。あ、術とかは使えませんよ？ 感じとれるだけです。」

「あ、あら……？」

巫女と妖狐の会話は瞬く間に話題を変え誤魔化し方を考えずにすんでしまった。黎斗はほっとひと息つきながらココアを口に入れる。とっても、おいしかった。

巫女の隣には懐かしい剣。須佐之男命と打ち合った時に散々苦戦した神代より伝わる神剣だ。彼女が継承したのだろうか？

「どうしたの？」

どうやら天叢雲剣を見ていたのがバレたらしい。笑って誤魔化する。

「ん。いや、ちょっとね。剣だなーって」

「恵那さん、マスターが変なのは昔からです。あまりお気になさらず」

あんまりと言えばあんまりなエルの言い分に思わず苦笑いせざるを得ない。エルを軽く小突き外を眺める。

先ほどまで月が見えていたのに、今は見えない。風雨が突然襲ってきたようだ。窓を雨が叩くのとほぼ同時に、携帯電話が鳴る。無論、黎斗のではない。

「あ、おじいちゃま？」

どうやら須佐之男命との会話らしい。通話の度に嵐とは、相変わ

らずはた迷惑な神様だ。恵那と会話している須佐之男命を想像して顔が少しにやけた。彼はどんな顔をして彼女と会話をしているのだろうか？

「えーっ!？」

恵那の声に、意識を室内に戻す。どうやら須佐之男命と揉めているらしい。こっちを恵那がチラチラ見ている。もしかしてトラブルに巻き込まれるのだろうか？ 黎斗の背筋に嫌な汗が流れる。

「バレないように、つてのが大変なんだけどなあー……」

”バレないように”のフレーズで嫌な予感がピンピンくる黎斗。

「うん、わかった。やってみる！ 祐理のためだもんね！」

どうやら解決したらしい。恵那の張り切り具合がすごい。背景に炎がメラメラと燃え盛っているのが見えるようだ。

「恵那さん、今のスサノオ？」

分かりきっているけれど一応確認。

「恵那でいいよー。ってワケで、これからよろしくお願いします」

そう言って三つ指をつき、深々と頭を下げる恵那。

「……へ？」

「恵那さん、須佐之男命様は何と仰られたのですか……?？」

突然の事態に硬直する主従。

「私の友達のお手伝いをしなきゃいけないっちゃってさ。この近辺に居た方が都合が良いんだって。で、れーとさんの住んでるココを当面の住居にしる、ってことなんだ。おじいちゃまからさっき聞いたけどれーとさん寂しいと死んじゃう性格なんでしょ？ エルちゃんもいるし恵那もいるから寂しくないよ」

確かに寂しいのは嫌な性格だけれどさ、という黎斗の呟きはアツサリ流され恵那の爆弾発言は続く。

「こっから見つかからないよう動かなきゃなのが問題なんだけどおじいちゃまが認識障害の呪を込めた服を送ってくれるらしいからなんとかなるかな、って。だからこれから荷物とりに一旦帰るね」

それだけ言っつて、恵那は部屋から出て行った。黎斗は荷物運びを申し出たものの「黎斗さんが動くとき色んな人にバレちゃうからダメだよ」と言われたため自宅待機中だったりする。

「……人生初の同棲ですよ」

「須佐之男命様に見事に利用されつつからかわれてるカンジですけどね。女の子の頼みなら断らないだろう、的な」

「……ごもつとも」

冷静なエルの発言に、黎斗はぐうの音も出ない。

「……手を出したらスサノオにロリコン呼ばわりされるんだろうな」

あ。手を出すつもりはないけどさ」

美少女なんだから男の家に泊まらせるなよ、とも言いたくなつたが千歳を越えている彼が十代の少女に手を出したらロリコン扱いされそうで怖い。

「全てはスサノオの手のひらの上、か。多分僕の世界年齢二十いてないと思うんだけどなあ」

黎斗の溜め息はエルの付けたニュース番組の声にかき消された。荷物がかさばるから、と主に置き去りにされた天叢雲剣が反射を受けてキラリと光る。笑われた、と彼は思った。

§ 4 夕食と魔王と（後書き）

祐理と護堂の関係がどうだったかなあ・・・と悩む今日この頃。1
巻回収が遅れるので書き始めたばかりのくせに更新1ヶ月くらい遅
れそうです・・・ごめんなさいー！！

§5 転校する魔王（前書き）

あとがきが懺悔タイムです（苦笑）

§5 転校する魔王

エルはベランダに居た。万が一管理人にバレたら黎斗はこの住居を追い出されてしまう。周囲をよくみて誰も見てないことを確認、隣の大木に飛び移る。

「丸一日暇ですし、探検しますか。マスターの故郷とやらを」

そう言つてこそこそ走り出す。認識阻害等が使えれば堂々と走れるのだが、ないものねだりしてもしょうがない。車に気をつけて道路を渡る。妖狐が出歩いたらマズい気もするが妖力を抑えているのでカンピオーネとその彼女、もしくは恵那並みの実力が無ければバレないだろう、多分。

もつとも恵那曰わくこの町は諸事情で術者が多いらしいので油断は禁物だが。

「お魚屋ないかなー」

山吹色の毛並みを風に靡かせてエルは足を商店街に向けた。

「水羽黎斗です。よ、よろしくお願いします……」

同じ頃、転校生として黎斗は若干緊張しつつ自己紹介をこなしていた。護堂と同じクラスである。正直これは予想外だった。席は右端の最後尾。流石に教科書を1日で全て揃えることは出来なかった。授業は隣の人に見せてもらうことになる。

幽世ひきこもり時代から暇つぶしに受験勉強をしてきたため、大
学入試レベルならそこそこ解けるであろう彼にとって学校転入は勉
強目的ではなく青春、もとい学生生活をエンジョイすることが目的
である。授業なんて楽勝だ。元受験生舐めんな。そう、思っていた。

「……やつべえ」

正直、舐めていた。舐めていたのは自分のほうだった。黎斗は自
分の甘さに絶望する。カンピオーネの特性もあり言語は楽勝。問題
は、理系科目、特に数学、確率がヤバい。学習指導要領が変わった
としか思えない。実際は忘れているだけなのだろうけれど。重複組
み合わせ？ 二項定理？ 期待値？ 問題集を眺めて脳が硬直する。
解ける気が全くしない。

「なんてこつたい」

気合いを入れないと赤点生活だ、と危機感を強める。言語は適度
に点数を落とすべきだろうか？ 妖狐を連れている上言語ペラペラだ
と警戒されたりしないだろうか？ こんなことで怪しまれたらたま
らない。不信の目は徹底的に摘み取るべきだろう。テスト時はほど
ほどに間違えて八十五点くらいを狙えば大丈夫だろうか？ 自分が
敏感になりすぎていている気もするが用心に越したことはない。

「これで問題は……まあ、大丈夫か」

勉強という予想外の強敵の出現に慌てふためいたが、それ以外に
彼に困る事態は発生しなかった。

違うクラスに強大な霊視能力を持つ巫女がいるらしいが、彼はバ
しることを心配しない。

「流浪の守護」

大天使ラファエルの権能。能力は単純明快、

彼の持つ神力の類といった気配を消失させ、存在を一般人と同化させる。

これが、彼が永きにわたり生存してこれた最大の理由。”戦いを避ける”力。神々が本気になって探ったところで、彼をカンピオーネと気付けるかはわからない。直接顔が割れている須佐之男命やアテナを別とすれば、彼をカンピオーネと見抜ける者はおそらくないだろう。

だから、警戒するのは日常からの露見。妖狐と言語で怪しまれ、護堂に探索魔術を使われたら叶わない。

須佐之男命の話ではカンピオーネは基本的に組織を作っているらしい。そんな真似は自分には無理だ。政治のゴタゴタは勘弁願いたい。バレて組織作成とか罰ゲームすぎる。

「護堂に黙ってるってのも心苦しいけどねー……」

須佐之男命、エル以外にも愚痴れる仲間が欲しいものだ。そんな呟きは、休み時間の喧騒にかき消されすぐに消えた。

「じ、護堂先生流石です……」

一見すると正統派ツンデレのオーラが見えるエリカがデレ100%。しかも周囲の女子から彼に対する熱烈な視線を感じる。これが彼の権能なのだろうか？

「まったく、どこのギャルゲ主人公だよ……」

思わず口に出してしまった。まあ、あの二人に聞かれていないし

いいや。などとぶつくさ言いながら自席で昼食を再開する。護堂に誘われてはいたものの、馬に蹴られて死ぬのは御免だ。他人の恋路を邪魔する者は馬に蹴られてなんとやら、そんな単語が頭をよぎる。だいたいあの中に割り込む勇氣など黎斗は持ち合わせていない。

「これが勝ち組か」

感傷に浸っていれば肩に手が置かれる感触。振り向けば三人の男子がそこにいた。

「オレは高木、こつたは名波、そして反町。我らは草薙護堂による美少女の独占に抵抗する非モテ同盟だ。男子転入生と聞いてどんなイケメン野郎かと警戒したが思ったより普通に安心した」

さり気なく酷いこと言われてる気がするが高木と名乗った少年の秀囲気に黎斗は反論を諦めた。

「そして君の瞳に宿る嫉妬の炎…… 共に草薙護堂に対して天誅を下さないか？」

ようはモテる男にモテない男共の嫉妬をぶつける、と。護堂と三人、どちらをとるか。

黎斗は、迷わなかった。

護堂、恵那の他に三人のメールアドレスを黎斗はこの日に入手することになる。ちなみに須佐之男命は適当ににかけても繋がるから登録の必要無し。神様万歳。

「……？」

アドレスを交換している最中にふと、妙な気配を感じ廊下を眺め

る。美少女と目があつた。彼女は驚くと慌てて目を逸らし立ち去ろうとする。最後に護堂の方を一目見て、彼女は立ち去った。ピンポイントでカンピオーネを見ていたということは彼女が件の巫女だろうか？

しかし、ありえない。「流浪の守護」が展開されているのだ。現に護堂もエリカも気づいた気配は無い。それなのに彼女は気づいたとでも言うのか。

「マジか…… いや、まさかね」

彼女の事は、後でエルに相談しよう。

「……？ どうした？ 水羽」

高木の声。急に調子が変わったので困惑しているようだ。

「ん、ごめんごめん」

苦笑いと共に返事をする。

「しかし万里谷さん、いつ見ても素晴らしいよなー」

「万里谷さん？」

「…… ああ水羽はまだ知らないのか。さっき廊下からこの教室を覗いていたのがこの学校のアイドル万里谷祐理さんだ。我がクラスのエリカ様と並ぶ二大美少女」

反町の解説を受けて先の巫女の名前を知る黎斗。帰ったら恵那に聞いてみよう、同じ巫女どうし友達かもしれない、などと考えなが

ら彼は次の授業の準備をする。

次は数学。油断禁物だ。赤点カンピオーネなぞ須佐之男命辺りに爆笑されてしまうだろう。

「マスターの気配が察知された？ そんな馬鹿な。いかにその巫女様とやらが強大な力を所有していたとしてもまつるわぬ神々にすら通じる、神殺しの権能を突破できると思えないんですが」

下校時間にエルと合流し黎斗は昼の件を相談したが、エルも見解は一緒だった。では、彼女がこちらを見ていたのは偶然だったのだろうか？

「偶然にしても確率は天文学的でしょうね。マスターの外見って冴えない高校生ってカンジですし。一目惚れとかあり得ないし。現実考えたら目が合った幸運噛み締めてりゃいいんじゃないですか？」

……この狐様はいつからこんなボロクソ言うようになったのだろう？ 事実っぽいのがまた反論をさせない雰囲気で少し悲しい。

「……て、ちよつとまって。マスター、”流浪の守護”弛んでます。僅か、ですが」

しばらく静かにしていたエル、突如爆弾発言。

「……へ？」

思考が止まったのは1秒にも満たない間。すぐさま感覚を研ぎ澄

ませる。風船の内側から、小さな穴を探すイメージ。

見つけた。穴を塞ぎ急ピッチで修復、他の箇所も探すが漏れている所はこの場所だけのようだ。

「……あ、大丈夫です。もう漏れてません。しかし、この程度の弛みで察知とかその巫女さん尋常じゃありませんよ」

エルの言うとおり、彼女の霊視能力は危なすぎる。下手を打てばすぐにバれてしまいそうだ。脳内要注意人物筆頭にその名を記す。

「マスター、平和ボケしすぎです。展開の仕方がいい加減だから気配が外に漏れるんです。ここは幽世とは違うんですから。……まあ、私も言われるまで気づけなかったんですけどね」

しかしそのエルに言われるまで術者たる黎斗すら気づかなかった。安穩と過ごしすぎたか。

「今まで引きこもってたのが裏目にでたのね。あっちじゃ適当ですんでたからな……」

須佐之男命に大口をたたいておきながらこれは少し情けない。気落ちした自分を励ますように自販機で紅茶を購入。景気づけに一気に飲み。心機一転。

「うし、もうへまはしない！」

「ま、私としてもそれを願ってますよ。缶ジュースを一人で買って一人で飲んでせっかく気合い入れておきながらへましたら情けなさ過ぎますしねー」

「……」

この狐は淡白だった。紅茶を一人で飲み干したのがお気に召さなかったらしい。そういえばこの狐様は紅茶が好物だということも忘れていた。今から買おうにもさっきので最後だったらしく売り切れ。

「……ちやつちやつと帰って休憩しますか」

どうやら帰宅してからの最初の仕事はエルのご機嫌とりになりそうだ。きつとキツネに頭が上がらないカンピオーネも、やっぱり自分だけだろう。自由奔放をしていると噂に聞いた後輩達を想像してほんのり切なくなる。いつか自分も彼らのようになれるだろうか？
……なつたとしたら自分は何を望むだろう？

傍若無人の例としてもっとも一般的（だろう）、と黎斗がかつてに思っている（酒池肉林を想像してみる。要素として挙げられるのは酒、食料、好みの異性達、それらを用意する経費。こんなところだろう。

資金……マモンの権能があるから問題外。「金をよこせ！ぐへへへ〜！！」なんて馬鹿な真似をする必要がない。寧ろ多すぎて使いきれない。純金の宮殿を全ての国に建造することだつて余裕なのだから。

食料……ありあまる財に任せて買い漁る。流石に食料を作り出す権能は持ち合わせていないが少名毘古那神の力で農業するのも悪くない。

酒……少名毘古那神の権能によりやっぱり問題外。好みの酒を作れてしまうので買う必要もなし。まあ、問題にはならないだろう。

好みの異性、もとい女。暴君の必須事項にして歴史上の亡国に学ぶまでもない最重要項目……無理。美女侍らせるとかそんなキャラじゃないし。数人居るだけでお釣りがくる。つか心臓が破裂する。

気後れするレベルの美女によるハーレムとか精神が耐えられない。土下座して逃げ出す自信がある。まあ、実現可能か不可能か、という事なら余裕で可能だったりする。恐るべしディオニユロス。

「あれ……？」

なんだ、全部実現可能ではないか。天上下唯一独尊を普通に出来そうだ。もしかして自分は位人臣を極めた全てを超えしもの？

「HPは1000万」

「……マスターが壊れた」

失礼な発言を繰り返すエルにデコピンをお見舞い。黎斗は帰り道を意気揚々と歩き出す。狐との力関係、というそもその考えの出発点を、忘れてしまったお気楽モード。

天気がいつの間にか崩れていることにも、闇が濃くなってきていることにも、気づかない。

§5 転校する魔王（後書き）

原作との相違点増えてきましたがご了承下さい（汗

いや、よくよく考えてみれば致命的でもないかぎりオリ設定で行けばいい、ということに最近気づきました。そんなに原作外すつもりはありませんけども。

今回で言えばゴルゴネイオンと祐理とか。黎斗達の帰宅最中に事態が進展している感じです。その辺のタイミングを改変させていたきました。

以下更なる懺悔という名のネタバレ？です

おそらく原作5巻辺りまではねーと君はほとんど戦闘しません。
つか以降も基本裏方かも。調子に乗ってチートしすぎたので目標は
護堂を支援するポジションで。

そんなカンジで進んでいきますがお付き合い頂ければ幸いです。

§ 6 課題山積みの魔王（前書き）

急展開すぎる気も・・・（汗）

§ 6 課題山積みの魔王

「あれ？」

「……マスター、暗い中でそんなことすると目が悪くなりますよ」

「うん……っかテレビつかない……」

無人の部屋に帰宅した黎斗。「ただいまー」と虚しく声を響かせつつ彼は首を傾げて尋ねる。

「エルー？ ブレーカー落ちてる？」

「んなもん私にわかるわけじゃないじゃないですか。マスター調べてくださいよ」

このアパートはブレーカーが各自の台所上にある。キツネであるエルに判別できないのはしょうがない。

「やれやれ……」

ブレーカーは落ちていない。となれば、停電か。窓の外も、軒並み真っ暗だ。視界を魔力で増強しなければ歩くことすらままならない。

「停電とかついてないなあ……」

静寂が支配する闇の中、突如携帯電話から軽快なテンポの曲が流れ、暖色系のランプが点灯した。深紅のランプは恵那のものだ。

「エル、恵那からメール。今日明日は合宿だって。言っの忘れててゴメン、だと」

恵那としても黎斗のアパートに住み込むことが決まったのも突然だったわけだし連絡を忘れるのもしょうがないか。ちゃんと連絡くれただけ御の字だと黎斗は彼女に感謝した。

「恵那さん今日は居ないんですか…… やっぱり少し寂しいですね」

恵那が居れば停電して暗い雰囲気でも明るくしてくれたかもしれない。そんなことを思いつつ再び外に意識を向け、彼はようやく気がついた。

「ははっ…… ホント情けないなこりゃ」

思わず自嘲してしまふ。

「？ マスター？」

こんなにも、明確な気配を見逃していたことに。

「エル、外の気配、探ってみ」

呪力、魔力、神力の濃厚な気配。かなり、いや、すごく強い。意識を研ぎ澄ませれば圧倒的な死のオーラを感じ取れる。

これに今に至るまで気付かなかった自分は本当に平和ボケしすぎている。

「……!？」

絶句するエル。

「明日から二人。仲良く修行ね」

「そうですね…… 正直、鈍りすぎてて笑えません……」

索敵がこれだけ出来なくなっていると、黎斗にもし「流浪の守護」が無ければ、つまり相手に対し絶対的な隠密能力を持っていなければ。相手に容易く奇襲を許してしまいかねない。

決意してから数時間と経たないうちにこの有り様。まったくもって、笑えない。

だが、今は反省している場合ではない。

闇の中目立たないように紺色の服とジーンズに着替え、更にその上からバレないように冬物の黒いコートを羽織る。エルを肩に飛び乗らせ扉をしつかり施錠する。防犯は大切です。準備万端。監視の目が無いことを一応確認し彼は夜空へ飛び立った。

認識障害と消音。二つの術をかけた黎斗は、忍者よろしく屋根の上を疾走する。消音の呪のおかげで、音は気にしなくてすむ。ソニックムーブを起こさないギリギリの速度で気配を強く感じる方向へ。状況が掴めない今、権能の発動は抑える必要がある。移動は自らの足で行った方が安全だろう。

「まあ、順当に考えれば今ドンパチやってるのは護堂とアテナかな」

護堂が何の神の権能を篡奪したのか、黎斗は知らない。しかし最近と聞いているので、おそらく一柱。果たしてあの女神を倒せるのか。黎斗は否と考える。彼女は新米のカンピオーネの相手にしては強大すぎる。手負いだったとはいえ、複数の権能を持っていた黎斗ですらかつてはあの女神を前に逃亡を余儀なくされたのだ。

「あの金髪の女の子も、かなりの手練れだと思います。アテナ様が本気で挑まない限り、あの方々は敗北なさらないでしょう」

アテナ。昨日すれ違ったときのあの違和感はいったい何だったのだろうか？今でこそ感じられないが、あの時感じた妙な気配が気になる。エルと会話しながらも黎斗の焦点はそこにあった。

「会って、確かめるしかないか」

黎斗は足の裏に魔力を込め、跳躍。この事件の火消しに奔走しているらしい人間達（役人なのだろうか？）を眼下にひと息で越える。電柱の上を跳ね、ビル群を易々と飛び越え、壁を垂直に爆走する。その速度、方法共に常軌を逸していた。

故にエルは思う。特撮物の撮影と誤解されかねないこの非常識な行動。もしかしたら認識阻害をする必要はないのではないだろうか。この光景を見た人間全てが自分の目を疑い、まばたきをする頃には黎斗はもうその場にはいない。よって彼らは自らが見た光景を目の錯覚として処理するだろう。

更に黒いコートを羽織っており丁寧にフードまでした黎斗の顔を見ることは至難の技だろう。術者にしたところで黒コートの怪人という認識で済むような気がする。黎斗「黒コートの怪人、と推測するのは厳しいだろう。わざわざ認識阻害なぞしないでよい、と。」

黎斗曰わく警察の能力を舐めたら足下をすくわれる、らしいが本当に黒のコートという手がかりだけで犯人を絞れるものなのだろうか

か。生のほとんどを幽世で過ごしてきたエルにはその感覚がわからなかった。必要ないと思いついてもなお主が必要と判断したということは、きつと必要なだろう。エルには強引に納得する他はない。自らのマスターたる黎斗にエルは全幅の信頼を置いている。

「……認識遮断、もうワンランク上げるよ」

「マスター、わざわざそこまでなさらなくても」

「こつから先にいる術者はそれなりに強いっばい。現状で突破しようとするれば多分彼らも違和感を感じる。違和感与えるのは得策じゃないかなと思つてさ」

「どうやら主は完全に自身の情報を秘匿したいらしい。魔王らしく堂々介入すればいいのに、と思いつながら返す言葉は決まっている。

「わかりました。全てはマスターの望むがままに」

「ありがとう」と声を発した黎斗は認識遮断を一段階上昇させ、速度も更に上げて走る。ソニックムーブを防ぐ術を知らないため、風操作の術で代用。ただし使い慣れないため調子に乗ってスピードを出し過ぎるわけにはいかない。

術者の真後ろを何回か通ったがそよ風すら吹かず認識不可とあれば彼らが気付かぬのも無理はない。

川上を走り足に魔力をこめる。壁を踏みしめひときわ高いビルの上上に飛び降りた。

「やーっと、見つけた……」

魔王の見下ろす先にいるのは、新しき魔王と戦の女神。

「ああ、あつちに他の皆様はいらっしゃるのね」

「あちらの方々が神と魔王の戦いに介入するのは些か厳しいかと」

「だよねえ…… やっぱバレるの覚悟で援護するか……？」

折角ここまで気付かれずに来たのだから最後まで影でありたい、と思うのだがそんなちっぽけな願望のために友達をほったらかし周辺地域の被害を無視するというのは外道だろう。

……「来い、古より畏れられし神殺しの神槍」

言葉が紡がれると同時に、黎斗の影が水面のように揺らめいた。影の中に棒が浮かび上がる。彼によって引き抜かれたソレは幾星霜もの時を経て、すっかりボロボロになってしまった長い木の棒にしか見えない。呪力など欠片も発さず、軽くふっただけで壊れそうだ。

「思い出したまえ。呪われしものどもを罰し」

黎斗が言葉を発するたびに、棒に亀裂が入っていく。

「主、憐れみたまえ」

瞬間、棒が砕けた。内部より漆黒の長柄物が現れた。数世紀の時を越え再び神殺しの槍が顕現する。

飾りの全くない質素な槍が黎斗の手に収まる。二メートルくらいだろうか。流浪の守護を展開してさえいなければ地上の二人も気づいたであろう、凶悪な程の呪力。所有者に栄光をもたらすと伝えられるそれは名をロンギヌスという。

「……流石にメンテ必要だったか。まさか棒きれに戻ってるとはね」
苦笑いをしながら、ロンギヌスを軽く振り異常が無いことを確認する。

「少なくともここ四百年は使っておられませんでしたししょうがないと思います」

「さて、いきま……え？」

いざ行かんと下を眺めた黎斗は予想外の光景に目を丸くした。

「光の……剣？」

「……あれ絶対ヤバイですよ。傍目に見てこれだけ危険なんだから……あれ？もしかしてアテナ様負けた？」

「流石にそれはない……だろう、うん。大打撃受ける程度じゃないかな？ 多分。なにあの剣……」

顎が外れたように見つめることしか出来ない主従。いざ援護しようとした矢先、意味不明な剣により戦局がひっくり返りそんな気配だ。神や魔王の戦いは不条理であるとはいえ、目の当たりにすると驚きを通り越して呆れてしまう。

「神力を直接攻撃したのか？ ゲームで言うならMP攻撃？ それとも特殊能力破壊？」

幽世で引きこもりをやっていた黎斗は、まつろわぬ神と戦った事は数あれど、同族たるカンピオーネが戦うのを噂で聞いたことはあっても見るのはこれが初めてだ。最初に見た他人の権能が非常に強力であったが故に、我を忘れて二人の戦いに見入ってしまうことになってしまった。

「護堂、強いね」

我を取り戻し、感心したように呟く黎斗。何の権能か依然彼にはわからないが光り輝く剣がアテナの神力を大幅に減らしてしまったことにより互角の争いを繰り広げる両者。急いで来る必要なかったのではなからうか。なんとかなりそうだ。そう思いながらアテナの方を見る。流石と言うべきか、予想以上にしぶとかった。

「あー、アテナの方が余力あるっぽいなこれ」

「護堂様は善戦なさっていると思います。しかしアテナ様は闘神でもあらせられる。一枚上手なのはやむを得ないかと」

介入するか。黎斗は考える。いくら鈍っていたとしても、ここで彼が参戦すればおそらくアテナには勝てる。だが、それでよいのか。

「護堂にも強くなつてもらつた方がいいよねえ。なんかこれから多くのトラブルに巻き込まれるような気がするし」

「正体がバレるのがイヤだから介入しない、とは流石に言われませんね」

どことなくからかうようなエルの声。

「あたりまえですー バレたら幽世に戻るだけで済むっつーの。そんなことで友達見捨てませんー」

方針はここに決定した。傍観である。ただし護堂が危なくなつたら即座に介入する。彼にはこの先生き残るため、まつろわぬ神を安定して倒すための戦闘経験が必要だろう。

アテナが有利な状態を維持し続けられるか、護堂が会心の一撃を与えるか。パツと見、前者に見える。

先に動いたのは、護堂。なにかを呟いた、と思えば突如空が明るくなり、天から太陽が降ってきた。

「え？ えー!？」

慌てる黎斗。護堂は一柱の神から権能を篡奪したのではなかったのか。

「複数を扱うタイプの権能ですか…… 条件型？ 代償型？ 複数タイプでこれだけ強大ならノーリスクなんて甘い話はないでしょうし」

これでノーリスクだったら酷すぎる。光り輝く剣とこの太陽を乱発されれば黎斗だって負けかねない。とくにあのチートじみた剣。

しかし剣を連続使用してこないあたり一回使ったらインターバルが何日か必要なのだろう。

「っはー……マジかよ、あの女神サマ太陽防いでるよライ……この人たちこわい。苦手だろうになんで防げんのよ」

アテナが必死に防いでいる様子を見る限り、これが正念場なのだろう。護堂も流石にこんな大火力技を複数持つてはいないだろう。というか、持っていたら自分の立場が無い。黎斗は大火力を一つしか持っていない。

「この調子だとアテナが防ぎきって護堂の負け、か。……悪いねアテナ。介入させてもらおうよ」

七天使・サリエルの権能、オンリー・ザ・シャイニング「我が前に邪悪無し」を発動する黎斗。エルが面白がつてつけた名前だが、長くてかなわないため結局黎斗もエルもこの名で呼ばない。サリエルが邪眼を持つ天使として有名なため邪眼で意味が通じるからだ。「名付ける意味ありませんでしたね」とエルが苦笑いをしたのは懐かしい記憶だ。黎斗が最初に手に入れた権能である。

能力は明快。視界内の呪術を任意で無効化。多くの権能は莫迦らしいほどに強大すぎるため無効化こそできないものの視界内に捉えている限り弱体化させ続ける。手軽で単純、特に魔術師に対し凶悪な効果を発揮するので使い勝手がよい。守りの鬼札。「流浪の守護」のおかげで権能を発動させても他者に気付かれることはない。この程度の神力なら流浪の守護で隠蔽が可能なのだ。

狙うは、アテナが現在進行形で展開している闇の守り。

「ははっ……！！ 勝負あつたな、草薙護堂よ、妾の勝ちだ！！」

額に汗を浮かべながらも、アテナは高らかに宣言する。敵の真の切り札が”白馬”であることなど叡智の女神たる彼女にはお見通しだ。防ぐのに十分すぎるほどの余力を残してきた彼女は、その力をもつて太陽を防ぐ。

今でこそ敵は猛攻を仕掛けてきてはいるが、これさえ耐え凌げば敵にもう彼女への有効打が存在しない以上勝利は決まったも同然。敵の従者が持つ剣も余裕を持って防ぎきれぬ。この太陽もじきに弱まり消滅する。その時が最大の勝機。

アテナの読みと判断は正しい。

この場に水羽黎斗という存在がいなければ。

「……！？」

背筋に突如、悪寒が走った。誰かが、自分を見ている。この感覚は昔にもあつた。忘れもしない、自分の前から平然と逃亡したあの神殺しの時と同じもの。たしかこの視線は術を弱体化させてしまう。支える足場が、少しずつ、少しずつ崩れていくような、そんな不安な気分させられるこの感覚。自身を纏う力が、だんだん消失していく。

「……いかん！！」

アテナの思考はそこまでだった。

いつの間に刺さつたのだろうか？ 胸を貫くのは獅子心王の剣。しかし、それはあくまで切り札を通すための布石にすぎない。

均衡を保っていた太陽と闇。そのうちの片方が弱体化したらどうなるか。均衡が崩れたことにより莫大な熱量が彼女を襲う。

アテナを、太陽が飲み込んだ。その輝きは辺り一面を焼き尽くさなければかりに眩く、誰も目をあけていられない。

「……まぶしー。なにあのふざけた太陽。代償支払った形跡ないっばいしケンカ売ってんの？」

どことなく拗ねた口調の黎斗。彼の戦闘系権能は単純な破壊力なら先ほどの太陽を上回るものもあるものの代償が洒落にならない。使いどころを間違えただけで死亡しかねないハイリスクハイリターンな力。ノーリスクである（ように見える）護堂の権能を見て理不尽を感じるのはやむなしといったところだろう。

「でもまあ、これで終わったね。……しかし鈍ったなあ。ヤバいかも」

苦虫を踏み潰した表情の黎斗。原因は邪眼だ。

邪眼の消去効率が悪すぎる。現役時代の半分にも満たないのではないだろうか？

「須佐之男命様との試合では大抵能力使用しないで戦っていらっしやいましたものね」

エルはある程度この状況を予想していたらしい。言葉に淀みがない

い。

「サリエルでこれなら他も推して知るべし、か……アーリマン、ツクヨミ、ディオニユソス辺りはリハビリだなこりゃ」

「ですね。でもスーリヤ様、テュール様みたいな代償が致命的なのはどうなさるおつもりですか？」

「うーん、昔の勳を取り戻せたらなんとかなると信じよう、うん」

黎斗が挙げた権能はエルが口にしたものと異なり制限が無い、又は比較的軽いものばかり。これらから少しずつ実力を取り戻していこうと心に決める。現状では武術でこそ勝っても権能が原因でまっろわぬ神に負けかねない。

「まったく、今日は反省が多いなあ。課題も山のように見つかるし散々」

「気づかないよりはよろしいかと」

エルの言うとおり発見できてよかったのだろう。戦闘中の誤算は敗北に直結する。即ち、死。そう思い直した黎斗はロンギヌスをしまい未だ騒がしい現場を眺める。

「……護堂、お疲れ様」

最後に一言呟き、黎斗は踵を返す。見られないように帰る必要があるのだ。無事帰宅できるまで、気を抜くことは許されない。更にこの場には実力者が犇めいているのだ。難易度は到着時よりも跳ね上がっていてもおかしくはない。認識阻害を念入りにつけ、慎重に、

しかし迅速に。

あらゆる建築物倒壊し、融解し、粉碎され、クレーターが出来てしまった戦場を背景に、一人と一匹はこっそりその場を後にする。

「……マスター」

「ん？」

エルの声に上機嫌な声音で返事する。よくよく考えれば100%望んだ通りとは言わないがそれなりに望んだ結果を手に入れたので気分は爽快だ。

「夜、あけますね」

「ああ、そうだね」

やっぱり、夜明けは綺麗だ。太陽が夜闇を切り裂き万物を照らす。ああ、今日も新しい1日が始まる。

「新しい、一日……?」

頭から冷や水をぶっかけられたかのように、瞬間的にテンション

が下がった。顔色がどんどん悪くなっていく。

「て、徹夜……?」

そんな馬鹿な。せいぜい数時間の筈だ。いつの間にこんな時間が過ぎた?

「マスターが迷子になった時間、プライストレス。夜の町、しかも見知らぬ地域なら仕方ないかもしれないかもしれませんがカイク様の権能を使えばよろしかったでしょうに。妙な意地はるから……」

エルの声も耳に入らない。このままだと、授業で寝てしまう。というか、宿題が終わっていない。それ以前に現在何処にいるのかすら、わかっていない。

「いやあああ!!!!?」

雄鶏の鳴く直前、黎斗の絶叫が周辺地域に響き渡った。

§6 課題山積みの魔王（後書き）

アテナもうちよい長引かせるべきだったのかやっぱり迷いますね

・・・即断即決できるよう精進しますorz

§7 アテナ編あとしまつ(?) (前書き)

不定期更新っぽくなってますが気にしない!

§7 アテナ編あとしまっ(?)

「はぁ……はぁ……」

静寂が支配する空間に、1人黎斗の音が響く。全身が真っ黒です。すだらけ、両目が充血し血の涙が流れている。左目は、輝きが全くない。

「やはり、大技使うと流浪の守護がぶっ飛びますね。上手く隠そうとしても強大な気配を数秒垂れ流し状態に。アーリマン、スーリヤ、テュール、ツクヨミは使用要注意ですよ」

半径十数kmはありそんなクレーター。その広大なクレーターの外から声を張り上げるエル。空間を歪める程の威力で抉られたそこは、あまりの熱量に未だ大地より煙が立ち込め中央部の視認が叶わない。

「ふらふらと、そしてゆっくりとこちらへ向かってくる自らの主は今にも倒れそうな雰囲気を身に纏っている。」

「そろそろ恵那さんが帰ってくる時間帯です。現世へ帰還しましよっつ?」

「そだね、ちゃっっちゃと風呂に入って汚れ落とさなきゃ」

「左目、大丈夫ですか?」

「ククだけど大丈夫。1日くらい誤魔化しきれなさ。明日休日だし」

太陽神スーリヤの権能。黎斗の所有する力の中で最大の破壊力を

誇る。威力、範囲共にこれを凌駕する力は、黎斗の1000年近い人生でもお目にかかったことはない。これに次ぐ破壊力を持つのは、黎斗の知ってる範疇においてはおそらく護堂の太陽召喚だろう。それですら、かなりの違いがある。

その超威力の代償は、1日の間左目が使えなくなる。また、攻撃範囲が広大なのでおいそれと使うことはできない。半径数m程度ならともかく半径数十km以内を全て消滅させる力は使い勝手が悪すぎる。街中で使うなどというのは論外だ。昔1回海の上で使ったのだが、瞬時に水蒸気の煙が周囲を覆い、冷水が熱湯に代わりゆでだこになった生物の死骸が、常軌を逸した悪臭と共にプカプカ浮かぶ様はトラウマだ。しかも津波が発生するというオマケつきである。なんとか被害は防げたものの、これでは怖くて使えないだろう。ちなみに、あれ以来黎斗は焼いた魚を食べられない。魚の皮の焦げ目を見るたびにこのことを思い出すのだからしょうがない。

「うし、風呂ー!!!」

現世に戻るなり叫ぶが早いか黎斗は風呂へ直行した。恵那の超人的な勘で怪しまれないため、という理由もある。

護堂とアテナの戦いの翌日から、黎斗は訓練を開始した。バレないよう幽世で。幽界なら人目を気にせず力を振るえる。授業が終わったら幽世へ。ツクヨミで自身の時間を加速し、他の権能をぶっ放して訓練。鈍りきった今では倍速しか出来ないからたいして効率が良くはないが、加速時間の倍率を全盛期まで戻せば、スーリヤの1日左目使用不可という代償も加速時間内で約半日以上消化できる。次の日の朝には復活だ。

だが、それまでは日常生活を片目ですごさねばならない。周囲に露見したらおしまいだ。それを防ぐため黎斗1日引き籠もっている。休日も色々忙しいらしく日中滅多に家に居ない。だから、休日。

もし、今まつろわぬ神が出現しても弱りきっている黎斗では敵わない。そこは護堂にお任せだ。エルは呆れていたがしょうがない。今のままの碌に権能を使えない状態では連戦になったら詰む。それがエルとの共通認識だった。

「ふいー、風呂あがつ………!?!」

その後は言葉にならずに絶句する。視線の先には、お茶を仲良く飲むアテナとエル。

……なんだこれは。

「む、意外と早風呂だな、古き王よ。これが烏の行水というやつか？」

「アテナ様どこでそんな言葉を覚えられたのですか？」

「いやいやキミ達………」

事情についていけない黎斗。アテナは何故この場所がわかったの
だろっ？

「古き王よ、御身も相当鈍っておるな。そこまで気配を隠していないのに妾の存在を察知できないとは」

彼女の言葉に息を呑む黎斗。これが好戦的な神だったら終わりだ。まだ全快でないであろうアテナであったことに感謝するべきか。

「……ふむ、すぐさま戦闘とならんところは相変わらずよのう。傷ついている今の妾なら鈍っているあなたでも楽勝だろうに」

はう、と気の抜けたように息を漏らしながらお茶を飲む様子を見ていると、なんだか気を張っている自分が馬鹿のように思えてくる。

「んなことせんわ。で、なんでここがわかった？」

ココアを飲みながらアテナへ尋ねる。智慧の女神は智慧を司るのであって、直感や予知を司る訳ではないだろう。日本に無数にある建造物の中から、数日のうちにここを見つけ出す術が勘以外に存在するならば、それは脅威以外の何者でもない。

「簡単なこと。古き王、あなたはたしか、気配を打ち消す力を常に纏っておる。ならば妾の呪力を誰にも気づかれぬようこの地域に薄く撒けばどうなるか？ あなたがいる所だけが、妾の呪力が消滅しているように見えるのだよ。あとはその痕跡をたどるだけ」

「流浪の守護は気配を遮断する。展開領域は僕及び僕に触れている物。だから、足元に存在するアテナの呪力も踏んでる間は外界から遮断してしまっていたワケね……」

なんとという出鱈目な方法だ。呪力の無駄遣い以外の何者でもない。しかし、黎斗を発見するにはうつつけの方法であることも事実。

流石は智慧の女神というべきか。完敗である。

「さて、種明かしもしたところで本題だ。あなたはあの日、妾に邪眼を放ったな？」

「うん。悪いけど、あのままだと護堂が負けただろうから横槍入れさせてもらったよ」

あのままだと被害が甚大になるし、と続けて話す。アテナは目を瞑り黙っている。

「……決闘に介入したこと、やっぱり怒る？」

おそろおそろ、尋ねるのは、ここで戦闘をしたくないから。正々堂々の戦いを汚しておいて今更コレはないよなあ、と心の奥底で自嘲する。

「別に。何時、何処で、何が起こるか予測がつかないのが戦というものだ。とくにこの国ならばあなたの妨害を予想して然るべきだ。しかし何故姿を現さなかった？ 900年程前のアレはあなたは負傷していたが今回はそうではないだろう。今のあなたなら妾とも戦えるはずだ」

「うーん、ちょっと事情がありました……」

苦笑いする黎斗の様子を眺めるうちに、アテナの表情が意地の悪い笑みに変わる。

「ほう…… さては草薙護堂に神殺しであることを隠しているな？」

あっさりバレた。まあ、当然か。隠していなければ共闘すればよかったのだから。

「うん。だから口裏合わせてくれないかな？」

「……妾にそれを頼むか？」

いかにも呆れた、という様子のアテナ。

「妾にそれを聞く義理も道理もないぞ。むしろ草薙護堂に告げてやるうか悩んでおるわ」

「僕の正体がバレないほうが護堂が成長するでしょ。味方のカンピオーネが居なければ否が応でも頼れるのは自分だけだ」

「アテナ様も草薙様と再戦なさりたいのでしょうか？ 強い敵と戦いたいではありませんか？」

口には出さずにそつと心の中でエルのアシストに感謝し、彼女の様子を伺ってみる。

「ふむ、やつを鍛えるためか。たしかに一理ある。彼には我が敵として十分な力を備えてもらい、その上で大戦といきたいものだ。よかるう、その案を呑んでしんぜよう」

えっ、何この展開。予想外に早い納得って何よ。まさか護堂、アテナも落とした！？

……などと黎斗の驚愕をよそにしばしの沈黙の後肯定的な返事を返すアテナ。

「あなたと戦っても良いと考えていたのだが、どうやら今のあなたは先の戦いで力を消耗した私では相手にならないようだ。ここはおとなしく茶会としゃれこもつぞ」

「あ、マスターおかわり」

「……なんともまあアナタ方ごーいんぐまいっすな。いやいいけどね」

ため息をつきながら空となったアテナとエルの茶碗に抹茶を入れる。

「ただいまー。やっぱり神様いたんだ？この感じだと外国の神様？」

恵那が帰宅したらしい。この場の言い訳どうしよう？つか彼女は何故外国の神の気配を当てられるのだろう？野生児の超感覚で済ませられる次元ではないだろう。黎斗の頭を無数の疑問が駆け巡る。

「あ、おかえりなさいー」

「うむ。誰か知らぬが邪魔しておるぞ。……お主も隅に置けないのう」

ニヤニヤ、という擬音がもつともふさわしいであろう表情でアテナが脇を小突く。嫁か何かだと思われるのだろう、きつと。この場での反論は不利だと黎斗はすばやく話題転換を図る。

「おかえりい。今アテナ様とお茶会だよ。抹茶とココア、どっちがいい？」

アテナ様、ときちんと様付けにする。無駄な努力のような気もするのだがするにこしたことはないだろう。

「んー、抹茶でお願いしていい？着替えたらそっちいくね」

返事だけよこしてアツサリ部屋の奥へ引つ込んだ恵那。1分もしないうちに着替えを終えて居間に舞い戻ってきた。上機嫌で黎斗とエルの間、アテナの向かいに座りニコニコとしている。

「れーとさんおじいちゃまの他にアテナ様ともお友達なんだ。普通の人とは思えない交友関係だよねえ」

「スサノオはともかくアテナ様は微妙に違うんだけどな・・・」

「ほう……そなたが……」

今の僅かなやりとりだけで、恵那の立場と黎斗がカンピオーネであることを彼女に隠していることを察したらしいアテナは余計な発言を控えたらしい。意味深な笑みを浮かべながら抹茶を再びおかわりする。

「あ、抹茶ありがと。れーとさんだけココアなんだね。みんな抹茶なのに」

「まさか抹茶をみんなして飲むとは思わなかったんですー」

玲瓏な声音で笑う恵那にしかえしの意味も込めて表面張力ギリギリまで抹茶を注いでやる。

「あ、あー、こぼれるよー」

「マスター、精神年齢低すぎですよ……」

悲しい人を見るようなエルが目がとても痛い。すごく痛い。まあこれは自業自得なのだ。隣で恵那がこぼさないように必死で飲んでいる光景とアテナがクツクツと笑う様子が見える。

「精神年齢は肉体に引きつられるんですー」

「また屁理屈を……」

「黎斗よ、その論理でいったら妾はどうなる？」

事情を知らない恵那が居ることわざわざ黎斗、と呼び方を変えてくれたアテナの反論に、黎斗は何もいえない。ここには彼よりも長生きで外見は幼い癖に精神は成熟している存在が居ることをすっかり忘れていた黎斗は押し黙る。

「れーとさんの負けだね」

こぼさずに飲みきった恵那の自慢げな表情が、ただただ恨めしかった。今度は熱湯をそそいでやろう。そう心に誓う黎斗、（外見年齢は）17歳のある日の夕方。外でカラスが、アホーと鳴いた。

§7 アテナ編あとしまつ(?) (後書き)

ちよつと強引っぽいよーな(汗

違和感とかなくせるようがんばりまっす

原作2巻編は收拾が全然つかないのでけっこう遅れますスイマセン。
・
・

強引に絡ませたのはミスったかな・・・

§ 8 欧州の大魔王、襲来（前書き）

今回の震災で被害に遭われた方々が早く立ち直れますように、と
前書きにかえさせていただきますの

揺れが長引いて焦りましたわ

どうしてこうなった。

対面に座る誤堂が助けを求める視線をこちらへ向けてくる、が勘弁願いたい。いや、むしろ助けてほしいのはこっちの方だ。ひとにらみして黙ってもらおう。本日何度目かもうわからないが、ためいきを吐いた。隠す気力はとうの昔に尽きている。

「ホント、どうしてこうなった……」

時間は昼休み前に遡る……

箸を運悪く落としてしまった黎斗は箸を洗いに教室から水場まで足を運んでいた。時間はそう、5分あるかないかというところだろう。その間に「何か」が起こった、のたろうきつと。

教室の扉を開けた瞬間、黎斗と助けを求めるような護堂の視線が重なった。周囲を見渡せば、取り囲むような男子生徒。中心に居るのはやはり護堂とエリカ。2人の傍に居るのは霊視能力がすごい巫女。

「……ok なるほど」

大体状況が予想できてしまった。しかし、この後の展開を予想できなかつたのが黎斗の明暗を分けることになる。

「護堂つてばマジ漢だな……」

そんなことを思っている間に、事態は取り返しにならないところまで進行していたようだ。彼らが行動を起こし始めた。どうやら席を移動するようだ。まったく、ご苦勞なことである。

「ホラ、黎斗行くぞ」

「えっ？」

気づけば護堂は黎斗の弁当をご丁寧持っている。

コイツ、僕も巻き添えにする気だ！！

戦慄する黎斗。女性陣を見るが既に2人ともこの場にはいない。護堂に半ば引きづられるように、黎斗は教室を後にした。高木をはじめとする男子生徒諸君が哀れみの眼差しをむけている。気分はドナドナだ。

こうして今の状況がめでたく完成となってしまった。

エリカが自分のみ例外的に食事等に参加することを許しているのは、エルを連れているからである、と黎斗は思っている。完全な一般人が妖狐を飼いならすことはまずない。つまり必ず何かある。敵対する気配は現時点ではないようだが要注意。日常の中で正体を暴く。おそらくそんなところだろう。アパートの方を盗聴等しないのは、相手の実力がわからない以上盗聴が危険と判断したのか、はてさて盗聴がもたらすメリットと露見した際のデメリットで天秤にかけたときに比重がデメリットのほうに傾いたのか。黎斗にはわからないが多分どちらかだろう。時々、彼女から探るような視線を向けられることだし。護堂とのいちやつきを邪魔しないからというのも理由に含まれている気もするけれど。

普段はこのおかげでぼっちを回避できていたのだが、今回は恨まざるをえない。誰が好き好んで痴話喧嘩に参加せにやならんのか。

リア充爆発しろ。口には出さずに呪いを呟きながら、弁当をつつく。

あまり得意ではないと言っていたが、恵那お手製のお弁当は自分で作る何倍もおいしかった。

「……で、いいよな？ 黎斗」

護堂の呼びかけに、意識を再びこちらへ戻す。

「え？ ごめん聞いてなかった」

「だから今日エリカを家に連れて行かなきゃならないんだけど万理谷と一緒に来てくれないか？ 俺だけじゃこいつを抑え切れそうにないし」

これ以上痴話喧嘩に巻き込むのは勘弁してくれ。あやうく口から出てしまいそうになったこの言葉をあわてて飲み込む。流石に酷かもうちよいオブラートに包んでいってあげよう。

「今日はちょっと宿題がたまってるヤバいからうれしいけどまた今度」

途端にこの世の終わりのような表情をする護堂。ちっとも悪くないはずなのに罪悪感が湧いてくる。

「ん、時間が出来たらお邪魔してもいい？」

「おう！」

エリカに向けて勝ち誇る護堂の顔に心の中で思わず付け足した。

必ず行くとはいってないんだけどな、と。エリカもそれをわかつているのか不敵な笑みは健在だ。そつと護堂に合掌しておくことにしよう。

「マスター、これ不足してる食材のリストです」

帰宅するなりちよこちよこと足元にやってきたエルはどうやって書いたのやら、メモ帳に不足食材のリストを持ってきた。……字が上手い。下手したら自分より上手かもしれない。

「……字、書けたんだ？」

「幽界に居る間ひたすら練習してましたから。私はただの狐とは一味違うのですよ？ あ、私も行きますので認識阻害お願いしますね」

得意げなエルの頭を撫でて買い物袋に持ち帰る。恵那にメールを打って出発。ちなみにエルは魔力が殺菌の役割を果たすのだろうか、何故かノミがつかずばい菌を持つてこないの衛生面では食材売り場に連れて行っても問題ない。バレなければ。当然バレたら大目玉だ。もっとも認識阻害を仕掛けるからまず発覚することはないのだが。

「買うべきは……主に炭水化物と魚、調味料ね」

恵那がどうやってかよくわからないが、野生動物の肉やら山菜をとってきてくれるおかげで、肉や野菜の調達を気にせずに済むよう

になった。難点は肉が鹿やら熊となり豚肉や牛肉が食べられないことだがまあそれは贅沢というものだろう。どこから狩ってきたのかわからないが狼1匹を丸まる持つてこられたときには流石に困ったけれど。ニホンオオカミは絶滅していたハズだからあれは外来種だったのだろうか？

「ついでに資金調達もしてしましましょう。はい、コレいらないであろう無駄な紙」

そういつて差し出された紙はチラシ、授業で使われた数学のプリント e t c e t c . . .

念のため目を通してからマモンの権能を発動させ、大量のダイヤモンドの板に変換する。これだけ売れば10万はいくだろう。よくもまあ、これだけ集めた物だ。換金してからスーパー、ついでに薬局もよつて洗剤買おうかと頭の中で道順を組み立てる。もう慣れたから迷いはしない。きつと。

「あとは洗剤買って終わりかな」

買い物袋に結局入りきらず、ビニール袋をもらってしまった。2円の値引きをしてもらえなかったのが少し残念だがしょうがない。人の気配がないことを確認して、自らの影に袋をしまおうとしたが許容量オーバーで買い物袋はしまえたもののビニール袋はしまえなかった。術というのは便利といえば便利だが、時々妙に融通が利かない。袋の1つ2つでたいして変わるとは思えないのに。

そんな家への帰り道。街路樹がいきなり、ざわめいた。カイクの力で、街路樹と会話を取ろうと試みる。どうにも嫌な予感がする。

「こつこつときの勘はえてしてあたるものだ。

「どつじたの？」

ざわ、ざわ……

「え？ 誰それ？」

ざわ……ざわ……

「場所は、わかる？」

ざわざわ……

「そつか、ありがと。こつちで探してみるよ」

街路樹との会話を終えると、アパートへの帰路を急ぐ。洗剤はまたの機会だ。買い物を全部部屋において、黒いコートをとってこなければならぬ。

「マスター、いったい何が？」

「なんかヤバイカンピオーネが来日したんだと。木々の恐怖がここまで伝染してきてる。一体全体そやつは何をしでかしたんだろうねえ。いったん帰って、外出準備」

今は左目が利かないが我が俣をいつてはいられない。敵はおそらく関東、十中八九東京にいる。木々がここまで恐怖に震える、ということは広範囲破壊を幾度も繰り返しているのだろう。ぺんぺん草すら残らないぐらいに蹂躪しなければここまで木々はざわめかない。

「ロクな事態じゃないことは明白だけれど、常識的な範囲で事が済みますように」

「マスター、多分願うだけ無駄です。動物的勘ですけど」

神に祈るなり我が家のキツネ様に即否定された。エルの勘は馬鹿にできない。元野生動物だからか命がかかわる状況でのエルの勘はよくあたる。戦いになりかねない事態なので今度もきつとあたるのだろう。憂鬱だ。

「そんなため息ばっかつくと幸せ逃げちゃいますよ？ イヤなら放置しとけばどうです？ もっともその場合護堂様に全被害が行きまですけど。多分」

「そーれーを防ぐんだって。とりあえず敵情視察といくよ」

帰るなり買った物を部屋に山積みにして黒いコートを羽織る。パツと見不審者に見えないこともないが認識障害をかけるので問題はない。敵の場所がわからないから「みんな」の恐怖を辿っていくことにしよう。

「ぜえ……ぜえ……」

「マスター、日が暮れちゃいましたよ……」

恐怖の元を辿ろうと探索を開始して早3時間。時刻は8時を回っ

たところだ。近くまで迫れているのはわかるのだが絞り込めない。相手の力があまりにも強すぎてこの周囲全てから気配を感じてしまふ。カンピオーネが滞在しているのだから魔術的防御を備えている建物かと推測したものの周りの建物全てに結界が張られていてはお手上げだ。流石にそこまで甘くはなかつたか。唇をかみ締める。

「ミスつたな…… こんなことになるならもうちよいスサノオから探査系の術教わっとくんだつた」

もうちよい歩いて収穫がなければ退却しよう。明日の授業に差し障る。なにより、いくら認識阻害をかけているとはいえ、夜にここをふらふらと出歩いていれば「同類」だと知られてしまいかねない。そこまで考えて空気の違いに気づく。

「……エル」

「困もうとしてますね。気配が皆無であることを考えると死者かと数は……ごめんなさい、わかりません」

「ん、十分だよ。ありがとう」

流石に認識阻害程度ではカンピオーネを騙す事は出来なかつたらしい。包囲しようとしている敵のもつとも甘い部分へ駆け出す。ロギヌスは、顕現させない。出そうものなら次にあったときに今回のことに関してしらをきることが出来ない。今回はあくまで「正体不明の存在を撃退した」と相手に認識してもらわなければ困るのだ。正体が発覚すれば今までの苦労がおじゃんになってしまう。よって権能は使わない。

「この程度で僕を止めるなんてムリだよ。さよなら」

そつと呟き、死人の群れをすり抜ける。かなりの手練れのようにだが、敵ではない。包囲に失敗した死人たちは、こちらへ向かってくるがなんら脅威となりえない。このまま逃げさせてもらおう。

「ふむ、尻尾を巻いて逃げるかね？ 少年。」

「……チツ」

屋根の上、100m程のところに入居る。彼がおそらく噂のインピオーネだろう。やはりバレたか。舌打ちを思わずしてしまう。大丈夫だ、フードを被っている以上相手はこちらの顔まではわからない。

「魔力を感じない癖に認識阻害をこつも巧妙に仕掛ける。我が”死せる従僕”を赤子同然にあしらう。貴様も我が同胞だろう。気配を断つ能力は珍しいな。ずいぶん若いことといい将来が楽しみだ。ああ、先に無断で君の所領に入った非礼をわびよう」

余裕を感じさせるその口振り。護堂と勘違いしているのだろうか。だとしたらまずいか。お前より長生きだと言いつ返してやりたいが言つてやるうか。

「私を探りに来たのだろうか？ はるばるご苦労。君は私の名を知っているだろうか私は知らぬ。名乗ってもらえるとありがたいのだが」

「……水羽黎斗。僕は貴方を見なかった。貴方は僕を見なかった。僕はここを去る。それで手打ちにしよう」

「貴様は何を言っている？ ……まあ良い、もし私から逃げ切れた

ら今夜のことは忘れてやろう。せいぜい私を楽しませろ」

フードをとり、相手を見つめる。交渉が上手く行き過ぎて、黎斗としては少し怖い。

「その言葉、二言はないね？ 明日までに見つけられなかったら今回の件は忘れてもらうよ」

「私を誰だと思っている？ そしてその条件でかまわんよ。それよりも本当に私から逃れられると思っているのかね？」

余裕の表情を崩さない相手。隙は全くないので戦うのは苦勞しそ
うだが逃げるだけならなんとでもなる。

「楽勝だね。」

死人の投擲した槍が黎斗を貫こうとして すり抜けた。

「ほっ」

相手の気配が、余裕から警戒へと変わる。

「じゃあね。せいぜい頑張って探してちょうだいな？」

黎斗の体が、闇と同化していく。同時に撒き散らされる邪気が、
コンクリートに刺さった槍を灰に帰していく。黎斗の言葉を最後に、
完全に消失してしまう。

「……………！？」

流浪の守護はその瞬間、解除されていた。アーリマン、夜の権能は悪の最高神としての能力。闇と同化し、周囲に邪気を撒き散らし、生命の命を奪い去る。長く浴びればまつろわぬ神ですら奪えてしまうその凶悪な力は流浪の守護で抑え切れなかったのだ。完全に闇と同化した瞬間、流浪の守護は効力を失った。

1000年を超えるであろう時を生き、膨大な魔力を溜め込んだ黎斗の気配が露出したのは、日本で初めての事。容易に観測できてしまう、突如出現した、神にも匹敵する謎の莫大な力。一瞬だけとはいえ、未だかつてない事態に、正史編纂委員会をはじめとする各種組織は大混乱をすることになるのだがそれは余談である。

「……逃げられたか。いや、助かったといつべきか」

相手の気配を見失ったヴォバンは、知らず知らずのうちにでていた汗をぬぐう。おそらくあの少年はもう捉えることは出来ないだろう。気配を遮断する術を持つ存在を”死せる従僕”で見つけ出すのは至難の業だ。なにより、消え去る直前に感じた魔力。あの強大な力の持ち主に無策で挑むのはいくら自分でも厳しいだろう。

「ふん、まあいい。次に会うときはその命、貰い受けるとしようか」

誰もいない空間に、死の宣告が読み上げられる。次の決闘に心を躍らせ、東欧の魔王は姿を消した。

§ 8 欧州の大魔王、襲来（後書き）

今更ですが僕はネーミングセンスがすごく無いです（汗

しかもなんか黎斗vsヴォバンになりそうなカンジに・・・あれ

？

§9 逃亡した魔王の反省会（前書き）

3月入ってからカンピオーネの二次SS増えてきたのでちよっぴり
幸せだったり

§9 逃亡した魔王の反省会

「ミスったなあ……」

ヴォバンの前から消え去った黎斗は、東京タワーの先端部分で姿を現した。流浪の守護が一瞬といえど解除されてしまったのは大きい。あのまま直接家に帰ると呪力を辿れば身元の割り出しが容易だろう。念のため慎重に帰る必要がある。

「バレちゃいましたね。逃亡には成功したと思いますけど、先程マスターの神力が流出してしまいましたからこれから厳しくなりますよ。いくら魔力を感じなくても私みたいな妖怪を連れている時点で術者に狙われる危険性も」

「こんなことでバレるなんてなあ…… アーリマンじゃなくてツクヨミの権能で逃亡すべきだったか」

「どちらにしろそのレベルの権能の行使に流浪の守護が耐えられたとは思えませんけど。幽世の訓練忘れちゃいました？ それに力を使わずに逃げるのはいくらマスターでも厳しいでしょう。相手も同じカンピオーネであるようですし」

エルの言葉はおそらく現実になる。なんにしてもこれからは今まで以上に行動に気をつけねばなるまい。エリカだけでも大変なのだ。他の人間までもが監視に加わることを想像するとぞっとしてしまふ。

「しばらくは幽世行くの控えてネットでもやってるか」

「うっわ……」

肩の上で呆れてるキツネを無視して三百メートル以上の高さから勢い良く飛び降りる。認識障害だけでなく複数の術を起動する。失敗して正体がばれてしまえば現存する最古のカンピオーネとして祭り上げられる運命が待っているであろうことは明白。そんなのはまっぴらゴメンだ。これだけ駆使すればまず露見はしないだろう。

「ん？」

突如、流れ出すメロディ。携帯電話が点滅している。電話番号00-00000-00000、このありえない番号をかけてくるのは、須佐之男命。

「もっしー？」

「よう、なに、お前。結局正体バラすワケ？」

流石、すぐに見抜いたか。まあ彼なら黙っていてくれるだろう。そんな期待を胸に秘め返答する。

「違う。ミスった」

「ふーん。まあいいや。そっち居られなくなったら戻ってこいさ。お前が居なくなつてから戦う相手がいなくなつたら。んで、本題だ。頼まれてた件”7”人目の魔王、草薙護堂について。どうやらやっこさんは軍神ウルスラグナの権能を篡奪したらしい。ま、これは組織の人間の調べたことだからホントかウソかはしらねえがな」

須佐之男命の持つ人脈を使って護堂の権能を調べてもらっていたのだが、予想外に早い。調べる、という経験が無い黎斗は早くて2

ヶ月はかかると予想していただけに1週間かからないというのは嬉しい誤算だ。

「ありがと。にしてもウルスラグナ、か。最初護堂に会った時に感じた妙な感覚はアーリマンとウルスラグナが反応したのかな？」

「さてな。そこらは専門外なんでわからん。2神ともミスラの盟友という点は共通してっからな」

ペルシャ神話などあまり馴染みのない黎斗にとってこのレベルの知識となると完全に未知の領域だ。そして須佐之男命がここまで知ってることに疑問を覚えてしまう。彼は異国の神々を積極的に調べようとする性格だっただろうか？

「なんでそんなに詳しいの？ ぶっちゃけ大抵の人はアーリマン〓悪だと思っただけど」

「そこは、お前の持つ力だし？」

「さいですか……」

理由がイマイチ納得いかないが強引に納得する。神々の持つ理由なんてものは大抵理解不能な理由だし。これ真理。

「んで、話変わるが恵那はどうだ？」

何故か嫌な予感がする。雰囲気ガラリと変わったせいだろうか？ こう、タチの悪い酔っ払いの絡みみたいな。

「どっ、って？」

「お前、外見は恵那のやつと同じような年だろ。年若い男女が一つ屋」

通信回線を切断する。三十六計逃げるにしかず。この手の話題で勝てる気がしない。

「マスター、切っちゃってよかったのですか？」

肩で沈黙を貫いていたエルが、ひそかに笑っている。終始会話を聞いていた筈だろうに、趣味が悪い。

答える代わりに、街道を走る速度を上げた。アパートまでもう少しだ。

「ちっ、あんにゃろー。途中で切りやがって」

電話を切られた須佐之男命は不平を漏らす。それを見て笑う姫君と黒衣の僧。

「流石の黎斗様も口では御老公に敵いませぬゆえ、仕方ないかと」

「然り。然り。黎斗様に今回はしてやられましたなあ」

「まるで剣では黎斗がオレより強いような言い方じゃねえか。オレはまだ黎斗のやつにそっちも負ける気はないぜ」

心外だと言わんばかりの須佐之男命の苦言にますます笑みを深める二人。それがますます須佐之男命のぼやきに拍車をかける。電話なら話題を強制終了させる切断、という手段がとれない須佐之男命に出来ることは、二人のからかいを耐えることだけだった。

「御老公、今の方は？ 清秋院様以外に通話とは珍しい」

事態を静観していた、背広姿の男が口を開く。古老の一角たる彼は、正史編纂委員会の重鎮として普段現世に存在しているので黎斗と直接面識はないのだ。もっとも、基本的に引きこもっていた黎斗と面識があるのは須佐之男命達三人くらいのものなのだが。

「お前はそういえば会ったことなかったな。電話の相手はオレのトコの居候だよ」

「居候……？」

要領を得ない、といった表情の男に対し、黒衣の僧が補足に加わる。

「日本に現れた最初の羅刹の君。御老公と激戦の末、引き分けたお方です。ついでこの間、現世へ行かれました」

背広の男は啞然とする。今こいつは何と言った？ 草薙護堂以外のカンピオーネが日本にいたというのか？

「羅刹の……君？」

「左様」

「な！？ そのようなこと、我々は認知しておりません！！」

「そりゃあ、話さなかったからな」

黒衣の僧の話に取り乱す男にあっさりと返す須佐之男命。

「このことはここだけの話だからな？ 絶対現世で漏らすなよ」

「……おっしゃる意味がわかりかねます」

「アイツは自分の存在を秘匿することを望んでいる。下手に探ると火傷じゃ済まない痛手を被るぞ。オレもバラしたことアイツに知られたら何言われるかわかったもんじゃねえ」

途中からばやきに変わった須佐之男命に引き続いて、黒衣の僧が、意地悪く笑う。

「あのお方、普段は温厚ですが正体を探られたなら激昂して国の一や二つ易々と滅ぼすでしょうなあ」

男の顔が真っ青に染まっていく。自分が今知った情報は、「知るべきではない」情報だったのだろうか？ だが、日本のためにはここで情報を得ておいた方が良くも事実。須佐之男命達の話が事実ならば、海外の結社は「居候」のカンピオーネを知らない。これは大きなアドバンテージになる。

「……どんな能力がお伺いしても？」

恐る恐る、という表現がピッタリの表情で問いかける。一歩間違えれば待っているのは国を巻き込んだ破滅だ。慎重すぎて困ること

はない。

「話してやってもいいんだが、アイツは権能多いから全部説明するのはめんどくせえ。洗脳したり束縛したり真似したり周囲を消し飛ばしたり。連戦になると怖くもなんともないが1対1ならつえーぞ。権能抜きの特異な武術でもオレと張り合えるしな。なに、そんな怖れなくてもオマエがここで聞いたことを忘れてしまえば問題ないだろ。さっさと忘れる。お前が黙ってさえいれば、みんなが幸せってなあ」

今度こそ、男は完全に沈黙した。権能を使わない武術で目の前の神と互角というのは戯言だと信じたい。この神が認める実力者とは、どれほどのものなのだろうか。

「……時が満ちるまで、このことは胸の内に秘めておきます。ご教授、ありがとうございます」

しばしの沈黙の後、一礼と共に男が告げる。直後に姿が喪失したが誰も気に留めない。現世に戻ったことを皆が知っているからだ。

「随分慌ててたな」

須佐之男命が杯を傾け、黎斗が調査した世界に二つと無い美酒に酔いしれる。

「御老公が脅かしすぎましたな。まあ、問題は無いでしょう」

黒衣の僧が笑いながらつまみを食べる。

「くれぐれも黎斗様を怒らせないようにお願いいたしますね」

姫君の眩きが聞こえてくるのかいないのか、男達の酒宴が始まる。

「ただいまー」

夜の9時になるつかという時間にようやく帰宅に成功する。追っ手の気配も監視されている様子も、ない。

「おかえりなさい。晩御飯食べよ？」

そういつて準備を始める恵那の後姿が見える。

「……もしかして待っていてくれたの？」

まさか、と思いながらも聞いてしまう。

「うん。流石に家主様を無視して食べるのは気が引けるしね。一人で晩御飯っていうのもつままないし」

「……すみません」

「……………」
「ごめんなさい」

思わず土下座してしまう。お腹が空いていただけに、料理を作って更に待っていてくれる優しさに申し訳なさと胸がいっぱいになってくる。

「いいよいよよ。待ってたのは恵那の勝手だし。あ、お風呂も入ってるけど先に入っちゃう？ 急用があったなら疲れてるでしょ？」

笑顔で風呂を先に勧めてくる恵那。まさにいたせりつくせりである。外出理由の詳細を隠してカンピオーネを探しに行っていた黎斗としては罪悪感しかない。ここで先に風呂などというわけにはいかないだろう。

「先にご飯いただくよ。洗い物は僕がやるから先にお風呂入っちゃって」

「私も洗い物の手伝い……は出来ませんね…… 布団敷いてきます」

いうが早いか駆け出すエル。食事先にしようと言う暇すらなかった。補足しておくとのアパートは多くの部屋があるわけではない。某幻想殺しの人と違い黎斗には浴槽で寝る根性はない。つまり居間に恵那、エル、黎斗の順で布団（エルは籠の中に柔らかい毛布を敷き詰めるのがお気に入りなので厳密には布団、籠、布団の順であるのだが）を敷いている。エルが真ん中で寝ているのはエルが最終防衛線だからだ。恵那があんまり気にしてないようなので内心複雑な気分の黎斗である。

「……」

「……」

しばし無言の末、恵那と2人で苦笑い。おそろく口で引つ張って布団を敷くのだろうが、布団を破かないように敷くのは至難の技だろう。そんなことを考えていた矢先、雪崩が崩壊するような轟音が

響く。夜更けにこの音は近所迷惑以外の何者でもない。次いでエルの助けを求める悲鳴が届く。

「マスター！！ つーぶーねーるー！！ 助け……！！ 重……！！」

おそらく布団を押し入れから引つ張り出したまではよかったがその後で押しつぶされたのだろう。エルの大きさならば、布団でも十分脅威になりえるような気もする。

「夕食の前に、エルの発掘作業だな。こりゃ」

じたばたと抵抗する音がだんだん小さくなっていく。疲れてきたらしい。恵那と再び笑いあい、黎斗は居間へエル発掘に向かった。早く行かないとまたキツネ様にへそを曲げられてしまう。とつとと敷いて、ご飯にしよう。

「あのカンピオーネはまた明日でいつか」

課題は全て後回し。いつもこれで首を絞めているのだが気にしない。あの男がトラブルを起こさないよう神に祈って黎斗は今後の方針を考えることを諦めた。

§9 逃亡した魔王の反省会（後書き）

視点変更回数減らせるようにがんばりませう

あ、今回登場した委員会の方はもう登場しないかと。

幽世で行動可能な人材が必要となったのでご足労願いましたっ

あとはヴォバン編終了まで一直線かな？

§ 10 戦禍来來（前書き）

調子に乗りすぎた感じがいなめない・・・
戦いの描写って難しいですね

そんなこんなで投稿です

昨夜なんだかんだいって行かなかったことに、護堂から恨みの視線を受けたのが朝の話。そしてその護堂は今男子チームに混ざり無双を繰り広げているエリカに呆れている。

「マジか・・・」

呆然と呟く黎斗。魔力を使っている様子が全く無い（もつともこれは使うまでも無いということなのか正々堂々ということなのかはわからないが）にもかかわらず男子軍団を圧倒しているのが凄まじい。勝てる気が全くしないので黎斗は応援に回っている。

黎斗の身体能力は、ただの人間にすぎない。最初に死んだ神、ヤマの権能を篡奪したときに黎斗の肉体はそれまでと変質してしまったのだ。強大な呪術に対する耐性、という特権は失われ魔力もカンピオーネになる前と同じくらい、つまり皆無になった。運動神経も0といっても過言ではない。権能を発動時は圧倒的な魔力を得られるがそれは一時的なものに過ぎず、長年の修行により魔力などを増やしてきたものの神々の半分あるかどうかといったところだろう。

黎斗の圧倒的な戦闘能力は、全て少名毘古那神の権能や呪力による肉体強化の結果に過ぎない。不意打ちに対処するため神経強化を当たり前にしているが、していなければ中級の騎士にすら遅れをとってしまう。長年を得て莫大な量となった神力はそうそう枯渇しないので出来る無茶苦茶な芸当だ。もっとも、殺された程度で「死にはしない」のだが。

だからなおさらなのか、エリカの身体能力をこつこつもまざまざと見せ付けられると羨望の眼差しを送ってしまう。

「しかも護堂はちゃっかり万理谷さんと仲良くしてるしさ」

護堂に目を向ければ祐理と仲良くしている様子が垣間見られる。美少女とお近づきになるのが本当にお上手な方である。護堂を主人公にしてラブコメ小説が書けそうな勢いだ。

「・・・アホなコト考えてる暇あったら今後について考えるか」

黎斗を悩ませるのは、自身の扱う武器に関してだ。彼にはロンギヌスという相棒がいるのだが、現代での戦闘を考えると心もとない。昔と違い今の時代は狭い空間で戦闘になる危険性がある。仮に電車の中である死人に襲われたとして、槍を使うのは厳しい。素手で戦うと殲滅速度が格段に落ちてしまうしリーチが皆無。魔法を詠唱している時間がもつたいたいなし詠唱破棄で使おうものなら電車が吹き飛んでしまうだろう。黎斗はそこまで破壊系の魔法を使いこなせる訳ではないので詠唱破棄・無詠唱で威力・範囲を絞れる自信がない。それに神力・呪力などの力を使い切ってしまうとヤマの権能により変質してしまったこの身体は戦闘に耐え切れない恐れもある。

「やっぱ銃か刀剣、ナイフ辺りかなあ」

今度幽世に行ったときにも武器を漁ってみるか。しばらくは傘を使うことにしよう、と当面の間の代用品に目処をつける。まさか大魔術師の住居に譲ってくれるように願う訳にはいくまい。盗む、奪うという論外な選択肢は当然却下。欲しいからといって相手の都合を無視したらいけません。

この辺りの思考はパンドラに言わせると異色だとか。もっとも「まあ、まだ化けの皮が剥がれていないだけかも」などと恐ろしいことを言っていた気もするが。本来パンドラの事を現世で思い出すことはできないらしいのだが、なんの因果かバラキエルに召喚された際にも色々変化があったらしくそのまま記憶しておくことができ

いるらしい。おかげで「神殺し」の変態」などという不名誉なあだ名をつけられそうになる寸前にまで追い詰められたことがある。補足しておくところの場合の変態というのは「正常ではない」という意味であって「キヤー！！変態よー！！」の変態ではない。けっして

「そうしたら銃刀法違反にならないようにごまかさなきゃか。めんどくせえ・・・」

一般の銃器や刀剣の類も入手が容易ではない上に迂闊に大衆の目に晒してしまえば銃刀法違反で警察に捕まってしまう。昔と違って大変な時代になったものだ。

「もっとも隣人の家から銃火器が一式出てきたら僕もびびるし、武器の入手が困難なのは良いことが」

アパートの各部屋から爆薬だのミサイルが出てくる様子を想像し青くなる。やっぱり法律があつてよかった、と思う黎斗だった。

得物について考えた翌日の夜。

不穏な気配に、目が覚めた。背中を嫌な汗が伝ってくる。今日は早く寝たのになんてことだ。

「ん・・・？」

「あ、れーとさんもこのイヤな気配感じたの？」

目を開ければ、何時の間に着替えたのか、巫女装束の恵那が草薙の剣を片手に出て行くこうとしている。

「どうなってるの？」

「わかんない。なんとなくヤな予感がするの。私ちよつと様子見てくるかられーとさん待ってて」

おそらくあのカンピオーネが暴れ始めたのだろう。それ以外に要因が無い。ここ数日平和が続いていたから、争いは起こらないと思っただがどうやらそれは儚い願いだっただよう。相手は護堂だろうか？ 事態がよくわからない。もし、カンピオーネ同士の争いなら恵那がいくら強かるうが敵うわけがない。

「危険だから外にでちゃダメだつて」

恵那に声をかけながら外を眺めた。カイムの権能を発動、木々から情報を得ようと試みる。流浪の守護のおかげで至近距離で発動しても恵那に気づかれた様子は無い。

「大丈夫だつて。こう見えても恵那強いんだよ？ れーとさんを守つてあげられるくらい。じゃ、いつてきまーす」

「は！？ ちょ、待てつてばー！！」

やんちゃな娘さんは止める暇なく外へ飛び出していった。猪武者じゃあるまいし、口に出かけた言葉を飲み込む。そんな悠長なことを言つて入られない。

「・・・ちつ、スサノオどういいう教育してんだよ！！ みすみす死

地に行くなっつーの!!」

幸せそうに安眠しているエルの毛布を奪い取る。哀れ丸まっていたキツネは籠から投げ出され、畳の上をころころ転がっていき壁にぶつかった。

「ぎゃふっ！　ますたあ、いきな・・・ッ!？」

寝ぼけまなこでいたエルも外の気配を察するなり意識をすぐさま覚醒させる。

「これはいったい!？」

「わかんない！　恵那が飛び出していつちゃったから追いかけるよ!!」

相手が本当にカンピオーネなら恵那が危ない。それなりの実力があることはわかるがおそらくエリカと同等程度、神剣の神懸りで挑んでも相手にならないだろう。着替えている時間すら惜しい。ジャージの上から自分の姿を隠すための黒いコートを羽織り、武器用に傘を持って外に飛び出す。

「うわ・・・」

狼。狼。狼。見渡す限りが狼の群れ。30まで数えたところで黎斗は数えるのを放棄した。

「この狼統率されてますね。あっちに向かっていているようですが、どうします?」

おそらくこの狼は権能だろう。道路をわき目もふらずに走っている狼の大群はなんだかシユールだ。恵那が暴走していなければ動画でもとりたいがそんなことをしている場合ではない。

「恵那は・・・こつちか」

草薙の剣の僅かな神力を頼りに狼の走り去っていく方向へ目的地を定める。認識障害をかけて走り出した。狼の進路を邪魔するわけにはいかないので、電線の上を並走する。

「この前のカンピオ・ネの方が行動を？」

「わかんない。木々に聞いたけど死人と狼が徘徊してることしか。おそらく護堂とアイツとの戦闘だと思う」

「世も末ですね・・・」

本当に、世も末だ。こんな大規模に迷惑をかけるのは勘弁願いたい。あの時に逃げずに挑んでおけばよかったか、と物騒なことを考えてしまう。

「見つけた・・・！」

少し前に見失った恵那だが再び視界に収めることに成功する。足元で呪力を爆発、一気に加速し恵那に追いつく。

「恵那！」

その声に恵那が振り向く。追いつくことは無いと思ったのか追ってくることが無いと思ったのかはわからないが、その表情は驚きに

包まれている。

「れーとさん!? なんで!?!」

「恵那、帰るよ。これ以上は危ない」

「えー、大丈夫だって。れーとさんつまんなーい」

大丈夫と言われても、相手を鑑みるに大丈夫の根拠が全く無い。戦闘の余波で吹き飛ばされるだろうに。

「つまんなくて結構。帰るの!」

なんだろう。駄々をこねている子供をしかる親の気分だ。ジト目でつまらないと言われてもひくわけにはいかない。最悪、ディオニユソスを使うか。

「マスター、恵那さん、囲まれていますよ」

周囲を見渡せば、死人が自分達を包围しようとしている。全員がそこそこの使い手、大騎士クラスもいくつか見受けられる。数が多いから恵那を連れての逃走は厳しい。即、全滅させる。

「・・・はあ、こいつら殲滅したら逃亡するよ」

「しょーがないなア。・・・正直これも相手の全力ではなさそうだし、なーんか恵那では荷が重そうだね。たしかに逃げちゃったほうがいいかも」

この死者達が恵那の説得に役立つてくるとは皮肉なものだ。大体

ビックリな野生の勘があるんだから相手の危険を察してほしかったと思うのは我侭だろうか？

「うし、じゃあ蹴散らしますか。・・・行ける？」

傘を構えつつ、恵那に尋ねる。ロンギヌスを使えば恵那に正体がバレるだけでなく、死者を通してあのカンピオーネにも気づかれかねない。もし彼が来た場合、恵那を守りながらの戦闘は困難を極める。今日が満月か新月だったら月読命の権能でなんとかなったのだが、無いものねだりでもしようがない。こんなに早く傘で戦うことになるのは少々予想外だが、まあなんとかなるだろう。

「恵那は大丈夫だけど・・・れーとさん、戦えるの？　ってか傘で戦うの？」

戸惑いを含んだ表情で恵那が返事をよこす。傘2本で戦おうとすれば、当然か。

「それでも僕、そこそこ強いよ」

そう返し、両手に傘を持ち、駆け出す。大騎士級はおそらくこの半数。恵那でもおそらく荷が重いこの敵は大半を自分が倒さねばならないだろう。

相手の刺突を避け、間合いに入り込む。呪力で強化した右手の傘で、左下から切り上げる。と、同時に左の傘を投擲、音速を超え放たれた傘は狙い違わず前方の死者の心臓を直撃した。空いた左手で切り裂いた死者の持つ剣を奪い、左側の死者を頭から切り下ろす。背後からの一閃を地に伏せ見ずに回避、そのまま回転し右に薙いで両断する。

「……ざつとこんなもんか」

生前名を馳せた大騎士といえども、黎斗の前では赤子同然。剣を交えることすらできず、傘の見事な連携の前に為す術なく屠られていく死者の群れ。惨劇の幕は一向に降りる様子を見せない。もし死せる従僕に血が流れていたのならば、この場には血の雨が降りそそいだらう。そんな一方的な蹂躪。

「流石マスター、腕は鈍ってませんね」

肩にしがみついているエルが口を開く。慣れたものでしつかりとしがみつきながらも口調には余裕が見受けられる。

「……訂正。結構鈍ってますよ。昔なら」

「黙ってて、舌嚙むよっ」

衰えが一番わかっているのは自分自身だ。術だけでなく、こちらも鈍っているとは。指摘しようとするエルを黙らせ、電光石火の速さで敵に切り込む。ついさっき黎斗がいた場所から、先ほど切断された死者の首が灰となって飛んでいく。敵の総数はもうそろそろ十人を割る勢いだ。

「マスター！」

エルの悲鳴に、思わず振り向く。

「ちっ！！」

黎斗の駆け出す先には、恵那と彼女を囲む大騎士。足元に数体の

死体が灰になりつつある辺り互角に戦えることがわかるが、満身創痍な今の恵那ではもう無理だろう。殲滅したつもりが取りこぼしていたことに歯噛みしつつ駆け寄り恵那に振り下ろさんとする刃を傘で受ける。

「れ、れーとさん!？」

「大丈夫？ こいつら倒すからちよい待ち」

返事をしながら、左に剣を突き刺す。右手の傘を前に投げる。投げられた傘は、途中で開き相手の視界を奪う。右からの攻撃から恵那を庇いつつ避け、後方からの切り上げに合わせて上空に飛び上がる。傘が破壊される頃には黎斗は距離をとることに成功した。

「くっ……」

傷に触れたのか、恵那が苦しそうなうめき声を上げる。このままではまずいか。顔色が土気色になりつつある。

「限界だな」

これ以上の戦闘は危険だと判断し、邪眼を発動。瞬間、相手の輪郭が歪む。ゆっくりと、しかし確実に相手の身体が消滅していく。あの男が今の消滅に反応するか。半ば博打だったがどうやら到来する気配は無い。

「あ……ありがとう……」

最後に、そんな言葉を残して死人は全員消え去った。意思でなかったとするならば、権能で囚われていたのだろうか。

「ほんにまあロクでもない力だな・・・」

無然と呟き、気を失っている恵那を背負う。早く帰って手当てをしなければ。

「つか、認識障害かけていなければコレ明らかに僕不審者だよなあ・・・」

夜更けに意識の無い美少女を背負う男。絶対これはアウトだ。認識障害をかけていることに感謝しつつ家路を急ぐ。

「治癒は苦手なんだよな・・・」

出血自体は収まりつつあるものの恵那の容態は回復しない。こんなことなら本当、治癒を習っておけばよかった。

「マスターは身体の構造上やむなしかと。いつも自己再生リジェネレーションですし」

この際泣き言は言っていられない。やらないよりはマシだろう。恵那へ呪力を送り治癒の術をかける。

「早く帰って風呂に投げ込もう」

「少名毘古那神の力ですか・・・治癒を名目に女の子を全裸にす

るとか鬼畜ですね」

「このまま突っ込むわ！」

お湯の量を少なめにしておけば溺死はしないだろう。それにいくら治癒のためとはいえ女の子の衣服を勝手に脱がすのはいけない気がする。

「マスター」

「わかってる」

真剣な声音になったエルに返す。恵那を戦闘不能にしてくれたお礼はきつちりしよう。もつとも、恵那の自業自得とも言えるのだが。

「恵那の手当てだけしたら行くから。エルは恵那を看てて」

アパートに戻ると恵那を部屋に寝かせる。出血箇所が多い上に雨に当たっているので衰弱が激しい。激しい振動が悪影響を与えることと覚悟で疾走すべきだったか。応急処置レベルでもいいから手当ての方法を学んでおくべきだったと今更後悔してしまう。

「マスター、お湯入れてきました。私見てますけど溺死しないレベルの水量にしてくださいね？」

エルに頷き、恵那の部屋に侵入。流石に筆筒を開けるのは気が引けるので、壁にかかっている干早を一着持って退室、バスタオルと共に脱衣所の籠に入れる。水量を確認。まあ、こんなものだろう。

「あつつ・・・」

右手を浸し、少名毘古那神のもうひとつの権能を発動、温泉療法の創始者たる彼にかかればただの風呂を治癒効果のある秘湯に変えるなど造作も無い。今回の風呂は傷・疲労に良く効くように効能を調整した。ついでに温度も適温にする。火傷されたら怪我が増えてしまう。これならば即効性こそないものの、数時間つけておけば全治するだろう。

「ま、こんなもんか」

一人で納得し、恵那を抱いてくるために部屋まで戻る。抱きかかえて風呂まで運ぶ。出血していなければ、アヤシイ雰囲気にもえないこともない。今は別の意味で怪しいが。

「よつと。・・・服濡れるけど勘弁ね」

服を着せたまま浴槽へそつと下ろす。脱がす脱がさないで葛藤したのは心の隅にしまっておく。お湯につける瞬間に、恵那が僅かに身じろぎした。

「エル、後は頼むね」

エルが浴槽にやってくるのと入れ替わりで黎斗は部屋に戻る。ふと、見下ろせば畳が血でベトベトだ。振り返れば、廊下もだいぶひどい。

「うへえ・・・これ乾いたら絶対落ちないよなあ」

雑巾を持ってきて、掃除を始める。数回往復してようやく血は目立たなくなった。

「これでいいや。暢気に掃除してる時間はないし」

バケツを洗って、ようやく玄関に出る。外の天気は荒れに荒れて
いる。

「さあて、行きますか」

目指すは、この嵐の中心部。そこにあの男も、護堂も、きつとい
る。

§ 10 戦禍来來（後書き）

V S ペルセウスをすっかり忘れていたので微妙に焦ってます（汗
外国まで黎斗飛ばす理由があああ

あ、原作3巻の話（護堂 V S ウルスラグナとか）は当然のごとく省
かれます。ご理解を
まあそこは変化させようないし・・・

§ 1 1 都内決戦（前書き）

ええ、題名魔王縛りしてたつもりなんですけど諦めました（苦笑

活動報告で10日とか言っていましたけど予想外に周辺整備が進んだので前日投稿っ！

2011/04/10

リアナの台詞と月の神の下りを若干修正

わからない。

「今日が日本最後の日にならなきゃいいんですが…… あそこまでノリノリだと……」

正史編纂委員会は今、都内の人間の避難にかかりつきりだ。政府と協力しているものの人口を鑑みればもうしばらくはこちらに手を回す余裕はないだろう。もっとも、こちらに人手が来たところで何もできないのだが。

「欧州のほうはどうやって被害を抑えていらっしやるのですか？」

隣でこの光景を眺めているエリカへ語りかける甘粕の口には、いつもの余裕が感じられない。この展開に相当参っているらしい。予想外にヴォバンが上機嫌で権能を振るっているのだ。

政治的な話を苦手とするリリアナは、エリカと甘粕の話を半分流し聞きしながら老王を眺め、護堂と彼の会合を思い出す。候は草薙護堂との会合のとき、なんと言ったか。

「そうか、この所領の主は君の方だったのか」

君「の方」だったのか。君でなく君の方と言ったのは何故だろう？ おそらく先日の強大な気配が関係しているはず。つまり

「候のあの台詞が意味するのはおそらくもう一人のカンピオーネ。リリイもやっぱり引っかけたのね。甘粕さん、こちらについては何かご存知？」

こちらの考えていることを一瞬で悟ったエリカは甘粕へ疑問を投げかける。

「残念ながら全く何も。こつちが知りたくらいですよ。魔王なんて大物の誕生がここまで秘匿されてるってこと自体が異例中の異例だと思いますが。存在を隠す旨みなんてないでしょうし」

「組織の言いなりになるカンピオーネなんて未だかつて聞いたことが無いわ。だからこれは本人の意思よ」

本人の意思、と断定したエリカにリリアナは懐疑的な視線を向ける。

「隠遁生活をしている方が居られる、と？ 賢人会議にすら察知されないなんていったいどのような行動をとればよいと思う？ アイシヤ婦人ですら」

「落ち着いてリリイ。別にそれ以外にも方法はあるわ。たとえば、賢人会議発足前に権能を篡奪し直後に隠遁とか」

雪崩のごとく言葉を吐き出すリリアナをエリカは諭すように語り掛ける。

「・・・我らがまつろわぬ神の出現を把握する前に篡奪した、ということがあるか」

エリカの澄んだ瞳に彼女が言わんとすることを察し、リリアナは言葉を吐き出した。

「なるほど、それなら可能性はありますねエ。だとしたらその方、被害を隠し切ったワケですから凄腕ですね。組織が絡んでいれば情報は漏れるでしょうし単独ってところですか。・・・今回の事態に

介入してくれないかなア」

甘粕は切実な表情で、神殺しの来臨を神に祈った。目を開ければ少女達がヴォバンに挑まんと動き出す。見送ろうとした矢先、電話が入る。嵐の拡大に歯止めがかかったらしい。護堂との戦いを前に呪力の放出を控え始めたようだ。なんとという僥倖。

「御武運を」

声にならないその眩きとともに改めて彼女達を見送る。自分の実力では歯が立たない。足手まといもいいところだろう。青年は神殺しの少年と彼に仕える騎士達の勝利を願う。

闇夜を疾走する。周囲に人影は皆無であるが、認識障害は怠らない。

「なんかアテナの時と似てるな」

漠然と思つたことを口にする。あの時との最大の違いは黎斗が被害を被つたか否か、ということだろう。水を回避する古い呪法、”避水訣”により雨は彼に当たらない。勝手に避けて落ちていく。流石に暴風は抑えきれず若干速度が鈍るが、その程度なんの障害にもならない。

「風除け呪文習つとけばよかった」

そう呟く彼の表情は、厳しい。今回参戦したら、今までの苦労が全ておじやんになってしまふ。護堂にバれてしまえば、これから先は護堂単独で戦う機会を奪ってしまうことになるだろう。それは避けたい。しかし、参戦しなければ首都壊滅が時間の問題になってしまふ。最悪の場合、護堂死亡のオマケつきで。それは絶対に阻止せねばならない。個人的には恵那の分のお返しもしてやりたいのだがそんな私情を挟める余地はなさそうだ。

「僕が影から援護したとして護堂にあの男を倒せるか。つまるところ、焦点はそこなんだよなあ」

とりあえず状況把握、と黎斗は両者をよく見ることのできる位置に移動する。

「・・・護堂、また女の子連れてるし。なにもこんな非常時にハレム建設しなくても。事態の深刻さわかってんのか？ 人が必死に被害を抑える結界を都内全域に張っている時に・・・なーんか馬鹿らしくなってきた」

首都が壊滅しそうという話が出ていることを近所のタマ（三歳

三毛猫）からの連絡で察知した黎斗は急遽行動を変更、護堂の援護より先に暴風雷雨の抑制結界を見抜かれないように苦労して張ってきたのだ。護堂が秒殺されないことを前提として、それでも全力疾走でやってきたというのに当の本人は新たな美少女を捕まえている。こっちの必死の努力を返せと叫びたい。

「あーあー。やってらんねー。」

氷点下の瞳で護堂を眺める黎斗。状況は依然不利なのだが光る剣で狼に変化した男を切り裂いたし、銀髪& amp; エリカがサポー

トしてるし、危機的状況に陥ることはないだろう。あの剣は反則と
思えるほど強い。

「あとはあの死者をなんとかできればい………え？」

いいんだけどね、と続けようとして絶句した。護堂が再び光る剣
を持っている。あの剣は一回ポツキリではなかったのか！

「はあ！？ ひよつとして条件は一日一回、じゃなく一つの神に一
回、とかそういうオチ！？ 意味わかんねえぞ！！」

周囲に人が居ないのをこれ幸いと喚き散らす。足元に合った空き
缶が黎斗の蹴りを受けて彼方まで吹き飛ばされ、小石は遙か上空に
打ち上げられた。本当に護堂はいつたい何なんだ。もつとも、彼も
疲弊が凄いように見える。傍目にわかるほど息が荒い。

「もつともこれが朝飯前だったらそれはそれで困るんだけど。護堂
のあの疲弊具合じゃこれ以上は厳しいか？」

黎斗の言を証明するかのごとく、男の一方的な攻撃が始まる。稲
妻を落とし、暴風をぶつける。銀の少女も、エリカも、抗うすべな
く吹き飛ばされる。護堂も反撃に移れる様子が無い。今回はここま
でか。

「なんかこの人長年現役やってそうなおーラだしてるしね。生涯現
役じいさんの相手が今の護堂じゃムリなのは当たり前か」

覚悟を決め、乱入しようとして足が止まる。護堂の気配が、変わ
った。

「なんか雷撃使い始めやがったし・・・」

突然稲妻を打ち始めた彼をみて、驚くより先に呆れてしまう。窮地に能力覚醒とか主人公みたいなのをする奴ではないか。もっとも今はまだ互角だがいずれは押し切られるだろう。おそらくあの男は覚醒すれば勝てるほど甘い相手では、ない。

「っーかさつきからこの辺ノイズが多いな。誰かが誰かになんか話しかけているのか？」

稲妻の応酬が始まってから、この周辺で雑音がしきりに発生し黎斗の脳に響く。ここまで喧しいのは非常に稀だ。カイムを発動、意思疎通を試みる。

死者の、応援。あの男を倒せ、と護堂を奨励する無数の呼び声。

呼び声が増えるほど、稲妻の威力が僅かだが上がっていく。

「なーる、っーことはあの雷撃は応援もらうと強くなるのかな？」

ならば、陰から手を貸すことは出来る。カイムの権能はそういうことに特化している。まさにうってつけではないか。

「これすんの久々なんだよなあ・・・ 最大出力、いきますか」

自身の周囲に不可視の結界を簡易生成。認識障害も重ねがけをする。その上で、カイムの権能を最大出力で発動。神、カンピオーネ、人間以外で都内に居る、あらゆる生命に協力を要請する。協力してくれる生命の思念を収束、護堂のみに届くように変換して送りつける。幸か不幸か今回は災害を引き起こす存在が相手だ。こちらへの協力者は鼠算で増えていく。最初こそ膨大な量の思念を掌握するの

に手間取ったが、慣れてしまえばあとはたやすい。

「破壊者を食い止める。みんな、護堂に力を・・・!!」

「ヴオバンと戦う力を貸してくれ!!」

手を掲げ叫ぶ護堂。瞬間、とてつもない量の思念が舞い込んできた。さつきまでとは桁が違う。

死者だけではない。近隣住民だけでもない。エリ力達だけでもない。この嵐によって苦境に立たされた、数多の生物。彼らまでもが老王を倒せと護堂に呼びかける。個々の呪力は取るに足らないものの、それが無数の量となれば話は別だ。倍以上の呪力を得て、彼らの声援を受けた護堂は、灼熱の雷をヴオバンへ放つ。

「!?!? 小僧、貴様いったい何をした!?!」

突然、段違いの威力・精度で雷撃を放ってきた護堂にヴオバンは目を見開く。更に現在進行形で護堂の呪力が膨れ上がっていく。

「ならば、これでどうだ!!」

護堂の呪力が急激な増加の一途にある。その上数十名はいるだろうが、元従僕達が齒向かって来る。これ以上長引かせても自分に利無く害しかない。そう判断したヴオバンは、頭上に蓄積してきた莫大な雷雲を解き放つ。必滅の紫電が護堂へ向けて落とされる。

勘付いたのは、卓越した霊視能力を持ち、離れた場で見守っていた祐理だけだった。

突如護堂に直撃しようとしていた、紫電が歪む。姿を捉えることが出来なくても、祐理の霊視は何者かの存在を感じ取る。僅かに感じたのは、強大な月の神の気配。出鼻を挫かれ呪力を減らした紫電は、護堂、エリカ、リリアナを直撃することなく大きく逸れて大地へ落ちた。当事者達には、紫電が歪んだ事は認識できなかったに違いない。

「我は全ての敵と悪を打ち砕く！！ 我は勝利を掴む者なり！！」

護堂の声と共に、まばゆい閃光が視界の全てを塗りつぶしていく。

「無事に防げたようだなによりなにより」

ロンギヌスを右手に黎斗が呟く。

あの雷を護堂達だけでは防ぎきれない、と判断した彼はロンギヌスで雷と化した呪力の核を破壊したのだ。神すら殺すこの槍に呪力を破壊できない道理は無い。核を失った雷はもはやただの落雷、彼らだけでも対処は可能だろう、と踏んだのだがどうやら目論見通りに事が運んだようだ。月読の権能により生じさせた外界との時間差は三十倍以上、その上自身の最大速度を出していたのだ。流浪の守護による隠密効果は月読の権能のような強大な力を発動させると一時的に無効化されてしまうのだが、認識障害を重ねがけし超神速とも呼べる速度で飛翔した黎斗を認識できたのはおそらく誰もいないだろう。雷を遙かに凌駕する速度を久々に出したせいか、足が痛い。

「相手が相手だったからこのくらいの助けはしょうがないか。そういえばあの男、なんて名前なんだろう？」

今回は動物からの情報以外口くな情報を持っていないためなのか、あの男の名前が最後までわからないままだった。護堂に聞けばわかるだろうがそれをしてしまえば関わっていたことがばれてしまう。隠した意味が無い。

「ま、この勝負ドローになったつばいしいか。　僕が帰っても大丈夫かな？」

様子を見れば、祐理が二人の中に乱入しているではないか。あの中に乱入する胆力は感嘆に値する。彼女が口を開いた途端、男の殺気がみるみる失われていく。私のために争わないで！的ななにかなのだろうか？

「・・・あの男ロリコン？　万理谷さんになんか言われると矛収めるんかい」

当事者達の会話を聞いていない黎斗の中で誤解が加速していく。

「ロリコンVSハーレム大王。万理谷さんを巡っての争い。首都崩壊はオマケ、ですか。崩壊防ぐために必死してたこっちがホント、馬鹿みたいだ。かえろかーえろ、ったく・・・」

すっかりへそを曲げた黎斗は、護堂達をもう一度見るとアパートへ向けて歩き出す。打ち上げられていた小石が地面に衝突し、小さな音を軽く立てた。

§ 1 1 都内決戦（後書き）

場面転換多いですね・・・

これは今後の課題かなあ（汗

あ、前回の補足なんですけど恵那が神懸りしなかったのは相手が自分と同レベルで複数いたため発動させる余裕が無かった、という流れです

これもしっかり描写できなきゃなあ・・・

・・・つか僕って愚痴ばっかな気がしますな（苦笑

ヴォバン編、もう一回続きます

§12 ヴォバン編、あとしまつ（前書き）

場面切り替え頻繁に起こりますがご勘弁を
とりあえずこれで原作2巻までは終了、かな？

あ、感想下さった皆様、評価してくださった皆様、ありがとうございます
いますっ

累計PVが5万超えててビックリしました。

これからお付き合いたいだけねばと思いますっ

§12 ヴォバン編、あとしまつ

「あ、れーとさん・・・迷惑かけてごめんなさい・・・」

帰宅するなり恵那が頭を下げてきた。顔色良好、目立つ外傷もなさそうだ。エルにこつてり絞られたらしい。

「んー、今度から気をつけて。それと今日のこと、秘密だよ。僕は今日ずっと家に居た、ってコトで口裏あわせよろしく」

「うん・・・おじいちゃまかられーとさんを戦わせたこと怒られちゃったよ。れーとさんもおじいちゃま達から力を借りてるんだね。恵那よりも格段に親和性が高いから戦うたびに取り込まれやすくなつて危険なんだってね。本当にごめんなさい」

どうやって誤魔化そうかと悩んでいた矢先、須佐之男命が上手く誤魔化してくれたことを知りそつと心の中で感謝する。こんなに上手な言い訳は黎斗では出てこなかっただろう。

「いいって、こつちも毎日迷惑かけてるからあいこつてコトで」

笑いながら手を少し振る。治癒した、といつてもそれは肉体的な話。疲労まではおそらくとれていないだろう。はやく寝かせたほうがよい。反省してくれたなら特にそれ以上咎めるつもりはないし。

「今日は早く寝なさいな。明日からまた忙しい毎日が始まるんだし」

睡眠を促すと、しばし逡巡した後おずおずと尋ねてきた。

「あ、あのさ・・・今度、恵那に武術教えてくれないかな？ 恵那ちよつと強くなきゃいけない用事があつて」

「強くなきゃいけない用事？ 恵那くらい強ければ十分な気もするけれど」

普通の女子高生に強さなんて必要ないだろうに。草薙の剣も持つてるし巫女というのはいつの間に物騒な職になったのか？

「まだ、今の恵那じゃ敵わない気がするんだ。おじいちゃまがれーとさんにはまだ言うなって言うから詳細は教えてあげられないの。ごめんね」

須佐之男命が一枚噛んでいる、という時点で何か怪しいものを感じる。あいつは恵那を強くしてどうするつもりなのだろう？

「危険なニオイが漂ってるんですが・・・」

「だいじょうぶ！ みんなの迷惑になるようなことはしないから、きつと」

「きつとつて恵那さん・・・」

エルが呆れたように口を挟む。自信満々で大丈夫と言い切るところが逆にすごく不安を感じる。きつととか付け加えてるし。

「まあ・・・恵那が元気になったらね」

恵那はまだ数日は体調の様子見が必要だ。その間に直接、須佐之男命に聞いただそう。現代日本で今の恵那以上の武術が必要という

のはどんな事態なのか。

恵那が先に寝かせた後、ベランダに出て麦茶を飲む。三日月を見ながらのお茶も、乙なものだ。馬鹿正直に一人働いた今日はなんか飲まないとやってられない。

「まさか護堂がこの恵那の件に関係してるんじゃないかなろうな・・・」

「何を馬鹿なこと言ってるんですか、と言い切れないのがまた・・・」

普段なら一笑に付す発言だ。だが巫女という立場にいながら力を必要とするのだ。まず無いであろうそんな事態（黎斗にとっての巫女は神社で箒を掃いているイメージしかないのだ）ならば神殺しが関連している可能性が非常に高い、というかそれ以外に彼の貧困な脳では考えられない。祐理も確か巫女だったはず。彼女に聞いてみるか。

「でもリスク高いよなあ・・・」

「恵那さんと一緒なのがバレたら絶対面倒なことになりますよ。たださえエリカさん達に目をつけられているのに」

「ですよねー」

祐理に話せばおそらくエリカにも伝わる。そうしたらバレるのは時間の問題だ。巫女&mp;妖狐を連れている一般人で通すにはエリカという相手は強すぎる。

「ホントどうしたもんかねえ……」

「いつそほったらかしては？ 過保護になりすぎると愛娘から嫌われますよ？」

「結婚もしてないのに娘がいるか！」

反論しつつエル言葉に頭を冷やし考え直す。ここは恵那の好きに任せるべきか。いくら狡猾な須佐之男命でも自らの身内（しかもすごく自分に懐いている相手）を使って権謀術数の類をする程ひどくはないはずだ、きっと。今回の敗北を須佐之男命に知られ笑われたので修行に目覚めたとかそんなオチなのだろう。疑ってしまったことに若干の後ろめたさを感じつつ黎斗はベランダより部屋に戻り茶碗を洗う。静かな台所に水の流れる音が響き、エルが欠伸をひとつした。

「……ねえ、帰っていい？ どう考えても僕場違いだよね？もしかして僕も護堂の攻略対象なの？ ねえ？ 僕ソツチの趣味はないんだけど」

溜息とともに尋ねる黎斗。

「お兄ちゃんソレ本当！？ だらしないにも程があるんじゃない！？」

真に受けた静花が取り乱す。

「あら、護堂、今まで私達に素直になつてくれなかったのは男色の気もあることを言い出せなかったからなのね。そういうのでも理解あるから心配いらないわよ？」

これはおもしろそうだと、エリカが悪魔の笑みを浮かべて参戦する。

「草薙さん！？ ふ・・・不潔ですつ！！」

顔を真っ赤にしながら叫ぶ祐理。

「俺だつてねえよ！！ なんでそんな話になるんだよ！！ エリカも煽らないでくれ！！」

屋上での昼食は護堂の絶叫で始まった。護堂にとって既に黎斗も一緒に昼食をとる相手の一人になっているのだが、黎斗からすれば護堂を中心としたハーレムの中に迷い込んだようで居心地が悪い。

草薙静花はブラコンである。今クラスの男子の間で囁かれる噂だ。護堂（及び周囲の女性陣）と親しい（と思われる）黎斗に噂の真偽を確かめる役だ回ってくるのは、ある種当然といえよう。もっともクラス男子の八割はこの噂は真実だと認識しているのだが。かくいう黎斗もその一人だ。正直確かめる意味があつたのだろうか疑わしい。

「なんで僕がこんなこと・・・ 妹萌えの伝道師反町辺りが適任でしょーが・・・」

こっそり呟きながら状況を観察する。彼女の向かいに護堂が中央、右にエリカ左に祐理が座っている形だ。ちなみに黎斗はエリカと静花の間だつたりする。

「・・・まあ、静花ちゃんがキレるのもわかるよ、うん」

ここまで自然にいちやつかれると黎斗としては噛み付くのも馬鹿らしく感じるが。噛み付いたら負けな気がしてしまう。護堂によりそった祐理がさりげなくお茶を注ぐ様など見ていて虚しくなっていくので少し前に視界から外した。他所でいちやつけと言いたいがここは妹さんに任せよう。

「だいたい何よその王様ポジション！！」

鋭い、正解です。彼は王様ですよ。魔王だけど。

そう答えたくなつたが必死に我慢。答えたところで静花からは頭の可哀想な人扱いされ三人に事情を説明せねばなくなるだけなのだから労力の無駄というものだ。黎斗を取り巻く状況も悪化するし。

そんなことを思い耳を澄ましながら弁当を突つついていると祐理が真っ赤になつて静花に反論を始めたではないか。

「に、新妻　私が護堂さんの！？」

結局そこかよ。

どうやら本当に祐理も護堂のハーレム入りか。あの男の一件で仲が深まったのかと勝手に予想を立てる黎斗。新妻に反応する辺り彼

女も自覚があるのではないだろうか。

「なんか僕ギャルゲの親友ポジだよなあ・・・」

黎斗がぼんやりとくだらない考えをしている間も、ずっと護堂達のランチタイムは華やかで賑やかだった。珍しくエリカが静かにしていたのが気になるが、放っておいて十分だろう。何か考えているのだろうけどどうせ護堂が巻き込まれるだけだ。こっちは関係ないだろう。

そう思った日の夜。

「黎斗助けてくれ!!」

「・・・護堂、こんな夜にどうしたよ」

眠っている最中にたたき起こされた黎斗は、薬草図鑑に熱中している恵那とエルを横目にそう答えた。どうせ昼間予想したようにエリカが何か仕掛けてきたのだろう。

「エリカの奴が俺を婚前旅行に連れて行こうと画策しているんだ！
！ じいちゃんも味方につけて根回しも済んでるみたいなんだよ。
夏休みの間どこかに身を隠さないと無理矢理」

「・・・行けばいいじゃん。っかこんな時間に惚気かよ」

「こんな計画に付き合ったら待ってるのは破滅だろうが!!」

護堂の台詞を途中で遮り提案するもあっけなく却下される。しかしなぜ破滅なのだろうか。相思相愛なら破滅どころか幸福へ一直線だと思っただが。

「なるほど。つまりもうしばらく美少女を侍らせる生活を続けたい、と。流石外道な護堂先生。そこに痺れるけど憧れねえ。いつそ地獄にでも行けば流石のエリカさんも追ってはこれな・・・おっとごめん、本音が出た」

「お前俺に恨みでもあるのか!? すごい黒いぞ!!」

流石にここで肯定するのは可哀想だと思い沈黙を選ぶ。この場合は肯定と同じ意味になってしまう気もするが直接言うよりはいいだろう。

「.....」

「れーとおおお!!」

「護堂、こんな夜更けに近所迷惑だよ。こっちも耳が痛い」

護堂の叫びで耳が麻痺した黎斗は、しかめ面で抗議する。

「誰のせいだ誰の!! ええい、話がすすまん! そういう訳だからどこか潜伏場所ですよさそうなところ探しておいてくれ。俺も探すが黎斗は転校してきたんだからここ以外の地理も詳しいだろ? 前住んでいた土地とか」

そんじやな、と一方的に通話が切れる。たしかに転校してきたが前黎斗が住んでいたのは幽世だ。そんなところに招けとでもいうのだろうか。あいにく他人を連れて幽世へ行けるほど魔導に熟練していないのでそれは無理な話だ。

「故郷は日本海側なんだけど・・・夏休みにもう一度、行ってみようかなあ」

パンドラによれば黎斗にとってここは平行世界ではなく過去の世界らしい。本来ならば存在すべき家族が居ないのは黎斗のしてきた行動によるバタフライ効果が積み重なった結果とのこと。事実、元の世界で東京タワーが炎上した、という噂を聞いた記憶がある。ネットで映像が流れて荒れに荒れた事件だ。すぐに消されたらしく動画を直接見えない黎斗はデマだと思っていた話。真相はこれだったのか。

「とすれば栃木のクレーター事件もか？」

黎斗の知っている最後の怪奇事件。これもカンピオーネが関わっていたのだろうか？

「そのことはその時考えればいいか」

「マスター、どうしました？」

微妙な雰囲気を感じ取ったのか、エルがこちらへ視線をよこす。

「んー、夏休みどうしようかな、って話」

「恵那夏休みは山籠りしなきゃなんだー。れーとさんもどう？」

たつたいま風呂から上がったと思われる恵那が会話に参入する。湿気を帯びた髪と上気した顔が色っぽい。物騒な刀を持っているだけでそれも台無しなのだけど。

「……謹んでご辞退させていただきます」

「恵那さん、マスターは肉体強化かけなきゃ100メートル20秒近いんですよ？ 登山なんかさせたらぶっ倒れますって」

情けなさ過ぎる事情に恵那も苦笑いを隠せない。自分が苦戦したような敵をダース単位で秒殺した相手の身体能力が論外な程低レベルだったのだから無理もないだろう。

「じゃあ夏休みは恵那も居ないのか。はてさて、本格的にどーしようかねえ……」

夏なのに引きこもっているのは青春をドブに捨てているようでもつたいない。

「夏だし反町達とバカな事するかな」

「脈絡全然ありませんしソレいつもと同じじゃないですか」

「……」

間接的に言われると堪える。いつもバカじゃないですが、と言われたほうがまだマシな気がしてしまうのは気のせいではないだろう。

「夏休みに勉強してみる？」

「マスターが勉強を続けられるとは思えませんね。三日坊主で終わります」

「・・・」

「つまるところ、夏休みに期待するだけ無駄ですよ。私はマスターは言葉だけで行動しないってことも計画立案能力皆無であることもわかってますし」

「・・・」

黎斗は無言で空を仰ぐ。絶対に何か一味違うことをしてやる、その心に決めた、夏のある夜のことだった。

§12 ヴォバン編、あとしまつ（後書き）

ちよこつと前にも触れましたがペルセウス戦開幕前に短すぎるネタ集だけ投稿させていただきなっ

あ、「整理用」ですが9巻の内容受けて若干訂正入れるかもしれませんが。ご迷惑おかけしますっ

履歴つ（ただの確認用です）（前書き）

あってもなくても変わらない気もしますけど、一応。

更新したら載っけていきますので参考までに

細かいところを修正する日が来そうですので作ってみる（何

特に最初の方は文字も少なかったので少しずつ話を変えない程度に

修正を加えていけたらな、と思ってます

・・・こういうのって余計な物に入りますかね（汗

とりあえずこれを作り始めた時のログから残しますっ

履歴つ（ただの確認用です）

2011/04/09 §11投稿

2011/04/10 §11修正

2011/04/16 §12投稿&コレを投稿

2011/04/17 §???投稿

2011/04/22 整理をちよこつと修正。本格修正はもう

少し先で。10巻が出たとき辺りに修正しようかな、と考えてます

けど上手い考えが思いついたらその前にするかもしれせん。§

02修正。千年幽世に住んでるかつ召喚されたのも千年前は少し変

ですよね（汗

2011/04/24 §13投稿

2011/04/26 §4&§10修正

2011/05/01 §13結末修正、混乱させる真似ごめんな

さい！&§14投稿

2011/05/09 §15投稿

2011/05/10 整理用大幅変更、毎度ご迷惑おかけします

（汗

2011/05/18 §15修正&§16投稿つ

2011/05/27 §15&§16修正 お騒がせしました

2011/05/29 §17投稿

2011/06/08 §1-?投稿

2011/06/20 §1-6までを修正。「・・・」「……」

他数点。

2011/06/20 §小ネタ集part2投稿

2011/06/21 §小ネタ集part2修正（ラスト追加は

まだです）

2011/06/30 §小ネタ集part2修正……というカラ

スト追加&改変。またやらかしてしまいました、ごめんなさい！！

2011/07/01 §小ネタ集part2修正(汗 修正前の
 上げてましたよははは……すいません §17.5 投稿&修正
 2011/07/04 §小ネタ集part2修正&§17.5修正
 2011/07/16 §18 投稿っ §7.9を修正「……」
 「……」
 2011/08/01 §19 投稿&即日修正
 2011/09/01 §小ネタ集part2に「お盆」を追
 加 季節的にだいぶ遅れた感がありますが、まあ。&§1修正。正
 直前半部分は分量も論外ですし書き直したいところ。冬辺りにはど
 うしようか考えたいところ
 2011/09/05 §20 投稿っ
 2011/09/22 §21 投稿っ
 2011/09/29 §21修正 マシになってるといいなあ……
 2011/10/12 §1-?ちよびつと修正っ
 2011/10/13 §22 投稿&修正っ 題名忘れと後書きが
 途中ででした(爆
 2011/10/15 §22修正っ チート剣迦具土に使うの忘
 れるとは……
 2011/10/25 §22修正っ まさかの権能力ウントミス。
 それと能力がキンクリすぎたので修正
 2011/10/30 §23 投稿っ 同修正っ 修正してさらに
 g d g d になったよ(汗
 2011/11/09 §4 §5 §10 §11 §15 §21 §1 -
 ? 怒涛の修正祭り!!(汗
 2011/11/15 §24 投稿っ よーやっと原作5巻分終了
 つ ついでに履歴の解説部分を前書きに移動っ。後書きにちよいと
 2011/11/20 §24 修正っ
 2011/12/01 §25 投稿っ & §24 修正っ 呪術関係で追
 加をば
 2011/12/03 §25 修正っ

2011/12/19 §26 投稿

履歴つ（ただの確認用です）（後書き）

とうとう前書きに文動かしても文字数が1000超えました。

なんか感慨深いです

前書きに動かした文は当初アレがないと文字制限に引っかかってしまったのでやむなく本文に書いていた、というしょうもない裏話が
（苦笑）

まあ1000超えたのなんて修正ばっか書いていたからなんですけど
（苦笑）

§???.? 番外編〈短編集〉（前書き）

これは小ネタ的なやつです。

本当は一つの話にしたかったんですけど話を上手く膨らませることができずめっちゃ短いお話に・・・

でも没にするのも癪なのでまとめてしまおう、的なノリだったり（汗
やっぱり話作るのがって難しい・・・!!

多分本編と絡みませんので飛ばしても問題ないです。

っていうか、蛇足感が非常に強いです。閲覧要注意。

ちよこちよこ書いているので、また溜まったらこんな形で出していければ、と思います

《4VS1》

「黎斗、今日決行するぞ」

「マジか。とうとうやんの?」

「コレがお前の仮面だ」

そう言って渡されたのは、紙袋に視界を確保するための覗き穴が二つくりぬかれたものだった。

「・・・コレハナンデショウ?」

「何ってお前、正体を隠すためのマスクに決まってるだろ」

平然と答える高木に、二の句が告げなくなってしまった黎斗。コシなんかまるつきり不審者じゃないか、と発言することも憚られる。文化祭ならまだしも平日にこの仮面を被って廊下を移動するのは正直勘弁願いたい。

「・・・まあ、なににしるなんか被った時点で不審者っぽくなるんだからコレじゃなくても一緒か」

「なんか激しく不名誉な納得のされ方されたぞ!」

叫ぶ高木を華麗にスルーし、反町へ最終確認を取る。

「次の月曜、なんだね？」

「ああ。次の月曜にこそ、草薙護堂に正義の裁きを下してくれる！」

「「美少女を独占するクズに呪いあれ！！」「」

もし、教室に誰が残っていたならば、まず間違いなくドン引きされたであろうテンションで、4人の勇者は爪を砥ぐ。全てはハーレム王を打倒するため……！！

「俺？ 平凡だろ？」

翌日、勇者達は護堂まおつに問うた。汝何者なりや、と。その結果が、平凡発言。現実には、彼らに残酷だった。護堂は自分を平凡だと思っているらしい。彼がカンピオーネであることを知っている黎斗としては「嘘つけえ！！ オマエが平凡なら六十億以上の人間は平凡じゃなくなるだろうが！！」と叫びたかったが自制心をフル稼働、抑えることに成功する。

「……」

「……」

後ろ側に座っている黎斗には護堂の前で会議を開いている三人の会話内容は聞こえないが予想できる。鋭すぎる視線だけでも予想は

容易だ。

「……大丈夫か？」

護堂が心配して声をかけてくるが、元凶に心配されても、と思う。

「黎斗、予定変更だ。今日の放課後に決行する」

「了解。流石にこれは捨て置けないね」

高木と一瞬でアイコンタクトを成立させる。大丈夫。計画が早まっただけだ。準備は万全、いつでもできる状態にしてある。あとは、放課後を待つのみ。

「今だ！」

先陣を切って、黎斗が駆け出す。職員室の帰り、今なら周囲に人は居ない。護堂を捕獲する絶好の機会　　！！！！

「うお！？」

暴れる護堂。誰だつて麻の袋を被せられれば抵抗するだろう。しかし事前準備を重ねに重ねた四人の行動に一切の無駄など存在しない。ただ、黎斗の不幸は階段付近で護堂を襲撃したことだ。護堂の力にインドア派少年黎斗が敵うわけはなく、反町の援護が来る前に黎斗は体勢を崩してしまった。踏ん張ろうと足を伸ばした先にあっ

たのは、ビニール袋。風で飛んできたのだろうか。

ビニール袋を踏んでしまった黎斗は、体勢を支えきれず、階段下へ落ちていくことになる。

「おわー！！？」

「同志しよ、お前の犠牲は無駄にはしない！！」

落ちていく黎斗に投げかけられる頼もしい言葉。見上げれば、護堂確保に成功した反町、もとい同志Sの勇姿。革命の成功を確信し、黎斗は運良く(?) 階段の踊り場に放置してあったゴミ箱の中へ、吸い込まれるように姿を消した。

「う・・・、ゲヘツ、ゴハツ・・・！！」

黎斗が目を覚めたのは、外のゴミ焼却場。天に届きそうな高さ
に積まれた燃えるゴミの山の中だった。夕日が目にしみる。

「えつと・・・たしか護堂を捕まえようとして落下したんだっけ」

やっとの事でゴミの山から脱出する。埃やバナナの皮が気持ち悪い。運んだ人は中に人が居る事に気がつかなかったのだろうか？
平均やや上の身長だから気づかれない訳はない筈なのだが・・・

「うう・・・最悪だ・・・」

このなりで校舎に入るのはおおいに噂されそうだがやむを得ない。教科書の類は全て教室だ。数学の宿題をサボったら死ぬ。それに携帯電話がなければ天罰の結果がわからない。

「…………おのれ、護堂」

教室で見たのは、絶望に倒れ伏す我が同志達。黎斗は天井を見上げ、呪詛を紡ぐ。

ゴミまみれの黎斗が恵那&エルに冷水を浴びせられるまであと一時間。

あまりの冷たさに絶叫を上げた打ち回るまで、あと一時間。

《》

「ぶえつくし!!」

「…………三十八度。完全に風邪ですね。だから水風呂に浸かるなどあれほど…………」

エルがぶつくさと小言を言っているが、黎斗にそれを聞く元気など残っていない。声を発することさえままならず、苦しそうに寝返りをうった。今のような状況まで追い詰められたのは久々だ。

「こんな無様な神殺しってマスターくらいじゃないですか？ 変質したせいで肉体の成長は止まってるくせに睡眠やら食事やら排泄やらする必要があつて更に風邪まで引くなんて。ヤマの権能、メリツトよりデメリツトの方が格段に大きいんじゃない？」

エルがボロクソ言っている横で、黎斗は鼻を噉っていた。やつぱり水風呂はマズったか。恵那が風呂から上がった後数時間経過後に入った湯船は見事に水風呂。面倒くさいからとお湯を新たに入れなかった黎斗は水風呂で我慢をしたのだが、朝起きてみればこのザマだ。人間だったころはあまり身体が丈夫ではなかった黎斗だが、風邪を引いたのは実に五百年振りだろうか？

「恵那さんがおかゆ作ってってくれたんですからとつと食べて薬飲んでください」

最後まで黎斗の身を心配していた恵那だったが風邪をうつさないためにも普段どおり学校に行かせている。朝の忙しい時間帯におかゆまで作ってくれたのだから感謝はいくらしても足りることは無いだろう。

「おかゆあじないからいや・・・ うめぼしすっぱいしくすりにがい・・・」

「何言ってますか・・・ 良薬口に苦しうていうでしょ。今まつろわぬ神が襲ってきたらどうするんですか。本日急病につき休ませ

てもらいます、なんてマヌケな展開私は御免ですよ」

「ごどーがいるし・・・」

「ああ、もう！ この人はー！！」

エルの怒号が室内に響く。このていたらくつぷりで古参の王と呼んでいいのだろうか。

皮膚にもこれによって「カンピオーネともあるうお方が風邪なんて引くわけ無いわね」とエリカが黎斗への疑いの視線を弱めることになるのだが、それはまた別の話である。

「ん・・・」

「あ、れーとさん。どう？ よくなった？」

部屋が夕焼けに染まる頃、黎斗は流れる水の音で目を覚ました。一日中寝ていたおかげか、はたまたエルに無理やり飲まされた薬が効いたのか、体調はすこぶる調子が良い。冷やした手ぬぐいを頭に載せるなどして、かかりつきりで看病していたと思われるエルはすっかり夢の中だ。そっと籠の中へ入れて毛布をかける。

「うん。だいぶ良さそう。ありがと、ご迷惑おかけしました」

「油断はダメだよ？ とりあえず山から色々探ってきたんだ。ちょっとまってて」

「……山？」

激しく嫌な予感がする。山ってなんだ？ 採ってきたってなんだ？ 一旦台所へ姿を消した恵那は、洗ったばかりとおぼしき数種類の雑草といくつかの妙な道具を引っさげて姿を現した。黎斗の背筋を汗が伝う。

「え、恵那さん？ それはいったい……？」

「何って風邪に良く効く野草だよー？ どれもこれもすごく苦いけど効き目は抜群なんだ。今磨り潰して煎じるから」

いやけっこうです、という黎斗の発言はさらりと流され、緑の粉末が大量に生成されていく。いかにも苦いオーラが漂ってくる。

「できたー！ ささ、どうぞ」

「え、ちょ、まっ」

必死に避けようとするが、弱りきった今の黎斗の身体は上手く動いてくれなかった。避けようとして、恵那の方へ倒れこむ。

「うおっ」

「きゃっ」

恵那を見つめること数秒。それが黎斗の限界だった。再び風邪が活動をはじめ、黎斗の意識を奪っていく。

「……もう、しょうがないなア」

最後に聞こえたのは、そんな声。口の中に何か入ってくるのを感じながら黎斗は眠りにつこうとして 飛び起きる。

「#”\$%’\$”&#・・・!!」

声にならない悲鳴。口の中のものを吐き出しそうになるが吐瀉物が恵那に直撃コースになってしまうので必死に我慢。目を白黒させていると恵那が天使の微笑みを浮かべている。

「どう？ すっごい効くんだよ。コレ」

その言葉を最後に意識が途切れる。殺人ドリンクとはこういうものか、などということ漠然と感じながら。

あまりの味に黎斗は一週間もの間味覚障害を引き起こすのだが、それもまた些細な出来事である。

《嫉妬狂奏曲》

「質量モル濃度？ 溶液100g中の物質質量だっけ？」

今にも泣きそうな黎斗の声に、呆れたようにエルが答える。

「キツネの私がそんなの知るわけないじゃないですか。この時代の子供はこんなのやってんですか」

日差しが強くなりひぐらしの鳴く季節、夏がやってくる。期末テストが、やってくる。

赤点をとって追試に追われる学生生活は真つ平だ。元受験生だし大丈夫、とタカを括っていた中間試験では化学が赤点だったのである。これでも元理系なのだが……

「今回場合の数と確率は範囲外だから放置でいいな。化学は濃度と物質量を抑えれば八割はいけるハズ」

明日は日曜なので護堂・高木・名波・反町の四人と教室で勉強会だ。未だかつて高校生活でこんなに勉強したことがあっただろうか、いやない。明日で化学を抑えてみせる。熱意に燃える黎斗の隣でエールが「ふわぁ」と欠伸をしていた。

「なあ黎斗、この式どうなってんだ？」

「この式これ以上割り切れくないか？」

「なんでこれ塩基性塩なんだ？」

ある程度予想していたことだがもつぱら解説側のようだ。彼らの聞いてくる問題を解くことだけならなんとかなる。ただ苦手分野を除いても平均的受験生の知識の持ち主でしかない黎斗には「わかり

やすく「解くという行為はなかなか難題なのだが。一応こうなる」とを予想して広範囲を確認してきて正解だったようだ。

「そっぴや護堂は？」

護堂の姿が見当たらないことに気づいた黎斗はそう問いかける。

「草薙の奴、昨日電話したら先約あるからって言ってたな」

高木から返事がきた。確かに急に言われれば厳しいだろうしやむを得ないか。そう思った矢先、爆弾発言が廊下を通り過ぎるクラスメートから飛び出した。

「草薙君？ さっきブランデッリさんと歩いているのを見たよ」

護堂デートとはいいいご身分だな、と軽く妬んだのはどうやら黎斗だけだったらしい。後ろの席から悲痛な叫びが聞こえてくる。

「うおおお草薙のヤツ！！ こんな時までツ……!？」

「畜生、畜生っ……」

「神はいないのか!？」

あ、ヤバい。そう思ったときにはもう遅い。悪鬼と化した三人の殺気に、流石の黎斗も後ずさる。このままだとこいつらがいつ怨念を放つ悪霊になっても不思議ではない。

「やってられるかー!ー!」

「俺達が学生の本分に励んでいるのにアイツはエリカさんとデートだとお!!」

「絶対間違ってる!!」

ここになつてようやく地雷を踏んだと認識したクラスメートが縋るような目でこっちを見てくる。止めるというのだろうか。保護者ではないのだけれど。

「まあまあ、とりあえずおちつ・・・」

「れいとお!!」

「は、はひい!?!」

無理でした。高木の剣幕に疎んでしまったのが敗因、そのままズルズルと、なし崩し的に参加するハメになりそうだ。

「者ども、招集をかける!! 第一種非常態勢!! ハーレム野郎を叩き潰す!!」

「無駄にかっこよいのね・・・ 理由は非常にかっこ悪いけど」

どこからか無線を取り出した名波の叫びに呼応するように、学校が震えた。まるで学校全体が護堂に嫉妬しているかのようで。

「いくぞ、同志達よ!」

その言葉と一緒に、黎斗は教室を連れ出される。向かう先は、体育館。何十人いるのかわからない。男子は全校の半分と近くが居る

勢いだ。女子がちらほら混じっているのは、護堂の周囲の女子のレベルが高すぎて彼に話しかけられない子なのだろうか？ 反町、高木、名波の三人が入場すると水を打ったようにざわめきが鳴り止み、モーセの如く進路が分かれていく。悠然とそこを歩いていく三人＋引つ張られる黎斗。

「諸君、集まってもらったのは・・・」

名波の演説を聞きながら絶望に襲われる黎斗。ここまでするのか、全員目がヤバイ。みんな、明日のテストは大丈夫なの？ こっちはまだ試験範囲の復習終わってないのだけれど。

「天罰を！！ 天罰を！！ 天罰を！！」

ヒートアップしていく場内。もうだれにも止められない。黎斗も嫉妬することはするが流石にこのレベルになるとついていける気がしない。デモ行進やらかしそうな勢いだ。おそるべし、草薙勢力。

「誰か止めて・・・」

神に祈る彼に、救いの手が差し伸べられる。もっとも、悪魔の手だけれども。

「ごらー！！ 貴様ら、何をやっている！！」

風紀委員と体育科教師の強制介入。こちらの人数が多くテンションが高いことを警戒したためか、いつのまにやら風紀委員が包囲網を敷いていた。体育館を使ってこんなことしていれば当然か。怒られるのはいやだが三人を止められなかった責任を甘んじて受けとめよう、そう覚悟した黎斗だったが、事態は彼の予想の遙か斜め上に

向かっていく。

「おのれ、草薙のやつ教師と風紀委員まで味方につけたか！！よろしい、ならば戦争だ」

名波の声は、黎斗の思考を停止させるのに十分で。

「へ？」

その一瞬が、明暗を分けた。ここで名波を止めなかったことが、城南高校史上初の学生運動（学生運動）を引き起こしてしまうなんて、千年の時を生きた黎斗といえども予想出来るわけなどない。

「草薙に独占された美少女を解放するという崇高な使命を背負いし同志よ、敵は強大だが立ち向かうぞ！ 我らに負けは許されない！」

「「「応！！！」」」

ここに、一人の高校生への嫉妬から始まった、教師陣&風紀委員と生徒達（八割男子）の大乱闘という前代未聞の珍事件、通称「血涙大戦争」が幕を開けたのだ。夜七時まで続いたこの休日に来た抗争は、生徒側の敗北で幕を下ろした。この日来校していなかった生徒には嚴重に伏せられ関係者の心の奥にこの事件は秘められた。最後の方は教師陣も「俺だってなあ！！」などと泣いていたような気もするが気のせいだ。絶対に。

参加した生徒は、全員が正座と反省文五枚。富の独占に教師側にも思うところがあったのだろうか。主犯のうちの一人に認定されてしまった黎斗が解放されたのは、午後十時のこと。

「エライ目にあつた・・・」

長時間の正座で足が痺れるせいで歩くことすらままならない。担任にアパート前まで送ってもらった後、手すりを使いながら必死に階段を上がっていく。背中の荷物が重い。きつと青チャート一冊で十分なのに三冊も持ってきたせいだ。

「た、ただいま・・・」

「敗残兵ですね、マスター。恵那さんさっきまで起きて待っていたしやいましたが寝てもらいました。お静かに」

「りょーかい」

ふと時計を眺めれば、もう日付が変わってしまふ。階段をのぼるのに一時間以上使っていたのか。寝るよう説得してくれたエルに小声で礼を言い、防音術式を展開し、気配を殺して移動する。こうでもしないとせつかく眠ったあの野生娘を起こしてしまふ。

「あとで化学最終確認を・・・」

そう呟く黎斗の顔は幽鬼のようだったと、後にエルは語っている。

「よじ黎・・・どーしたんだ？」

「やあ」

誰かと思えば草薙護堂。一瞬誰かわからなかった。頭を活性化させなければ。このままでは非常に不味い。

「・・・おい大丈夫かお前。今日はなんかクラスの奴ら眠そうな奴がいつぱいいるけどお前特に重症だぞ？」

「多分大丈夫・・・一限数学か・・・」

すれ違う生徒が皆怯えている。そこまで顔酷いだろうか？ 恵那やエルが起きる前に家を飛び出したのは失敗だったようだ。

「席につけー、問題配るぞー」

チャイムと前後して教師が入ってくる。数学は今回の範囲なら楽勝だ。

「はじめー」

教師の声と共に用紙を表に。眠い。まず問題を一通り眺める。眠い。大丈夫だ、問題ない。眠い。この程度ならすぐ終わらせて睡眠時間にしよう。眠・・・い。まずは・・・平方完・・・成を。

そこで黎斗の意識は途切れた。

「・・・」

もう一度、名前が間違っていないか確認する。間違っていない。ということはこの用紙は僕のものだ。頬を抓ってみる。痛い。ということは間違いなく現実だ。

水羽黎斗、数学零点。開始直後の爆睡により白紙提出。問題解く姿勢で爆睡した結果、教師もクラスメートも彼の睡眠に気付かなかつたらしい。回収の時に気付きそうなものだがなんで気付いてくれなかったのだろう。結果、彼は一限数学から始まるその日のテスト全て零点という人生初の経験をしてしまった。

「護堂、どうだった？ この私が直々に教えてあげたんだからそれなりに出来たわよね？」

「ああ、ありがとう。エリカのおかげで今回のテストは九割いった」

後ろで何か声が聞こえる。神様、この展開は理不尽すぎはしませんか？

「うわああああああああああああああああああ！！！！」

「ど、どうした黎斗！？」

「じどー！！ お前ー！！」

ワケも分からず追われる護堂と発狂して追いかける黎斗。血涙大戦争の情報をどこからか入手していたエリカだけが、魔性の笑みで二人を見ていた。

§ 13 強運と凶運（前書き）

通称三馬鹿の扱いがエラいことになってます（汗
彼ら好きな方ごめんなさい、と今のうちに謝罪を

そんなこんなでvsペルセウス編、開幕です

2011/05/01

ごめんなさい、修正入れました

結末が変わっているので申し訳ありませんがもう一回見ていただけ
ると幸いです

§ 13 強運と凶運

空を眺める。澄んだ青い色。快晴だ。眼下には無数の建造物と人せわしなく動く様子はまるでいつも黎とが見ている風景と同じで。街中を闊歩している日本人が黎斗達四人だけであること以外は、普段の日常と変わりない。太陽の日差しに黎斗は思わず目を細めた。

「やっぱ外国つてすげーな！！ どこもかしこも文字が読めねえ・
」

訂正。そういえば看板などの文字も日本語ではない。あらゆる言語をすぐに理解できる黎斗は反町の反応を見るまでその事に気付かなかった。今からこんなことでは先が思いやられる。すぐにボロが出るな、と苦笑する。エリカや祐理といった強敵が居ないからといって気を抜きすぎだ。反町達経由で誇張された情報が彼女たちの耳に入る恐れだつてあるのだから。彼女達に聞かれれば三人は天にも昇る心地で今回のことをペラペラ喋るに違いない。「そんなことまで気にするなんて神経質すぎですよ」とエルは言っているがあの二人は、特に祐理は黎斗の直観が危険だと告げている。

「ささ、黎斗センチセ、通訳頼むぜ」

「へいへい・・・」

名波が商店街の福引一等を当てた。景品は欧州への飛行機チケット五人分。売るのは勿体ないが家族みんなで欧州に行っても誰も言語がわからない。困り果てた名波は黎斗の「欧州？（五百年以上前だけど）一応行ったことあるかな」という発言に喰らいついた。すったもんだの末、黎斗をガイド役に男子高校生四人で夏休みに欧

州へ行くという事態となつてしまったのである。本来は護堂も一緒に行く予定だったのだが、更に安全な隠れ家を見つけたからそつちへ避難する、などとわけのわからないことを言つて少し前に参加辞退を表明している。三人の家族から「息子をよろしくお願いします」と土下座までされて困り果てたのは一昨日の話だ。今ならわかる、三人のご家族の心境が・・・！！

「さつすが黎斗！ 英語のテストで八割以上とるだけのことはあるぜ」

「いやキミ達、高一の英語のテストで八割以上取ればガイドが務まるって発想がまずおかしいからね・・・」

「おお、美女発見！」

ダメだこいつら。人の話聞いてない。カンピオーネの言語能力をこんなことで使う日が来るとは夢にも思わなかった。しかもこれではまるで引率の先生だ。嗚呼、周囲の視線が痛い。美女と見るや手当り次第話しかけ（言葉が通じてないのに！）ナンパを仕掛けるバカを連れ戻す。汚らわしいものを見るような女性の視線が黎斗を見た瞬間憐れむような眼差しに変わるのが堪えた。そんなに疲れた表情をしているのだろうか？ この勇者達を抑えるのは非常に骨が折れる。そもそも現地語がわからないのに三人は来るという決断をしたのだ。その勇気の前には勇者も裸足で逃げ出すか。

「ったく・・・ガイドの基準がひどすぎだよ。現地で僕の会話が通じなかつたらどうする気だったのさ。そもそも現地の有名物件とか観光名所なんてグーグル検索で調べた付け焼刃知識でしかないんだけど」

何十枚もあるうかという分厚いA4サイズの紙の束を隣において一人木陰のベンチに座った黎斗。中身は欧州の名所一覧と観光ポイント。カバンの中にもそんなガイドブックが何十冊も入っている。一息ついて沈黙したのもほんの数秒、すぐに口から文句が飛び出る。カンピオーネたる黎斗が意思疎通に困ることはまずないが彼らがそんなことを知るわけがない。彼らは本当に「高校一年のテストが良ければ」現地でのガイドができると思ったのだらう。カンピオーネになる前に外国に行った経験がない、つまり日本語とセンター試験レベルの英語能力で海外旅行をしたことのない黎斗には本当にその程度の能力で大丈夫なのかわからない。一応、中学三年で一応日常会話くらいの英会話能力がつくところかで聞いたような気もする。それでもガイドを出来るとは思えないのだけれど。

考えていて思ったのだがここでは英語が使えるのだろうか？ 考えなしに話していると自分が今何語を使っているのかわからなくなってしまう。相手との会話に支障こそないものの何語を喋っていたのか三人に聞かれても何処の言語か答えられないというのはどう考えても変な話だ。学校生活でも本を読んでいてどれがなんという言葉で書かれているのかわからなくなることが多々発生するし。今回三人になんの言語か聞かれなかったのは幸いというほかない。他のカンピオーネもこんな風にどの言語を使っているのかわからなくなることがあるのだろうか？

「古今東西こんなことで頭を悩ませた神殺しは僕くらいのもんだらうな・・・」

その言葉を聞いて理解したのかしてないのか、湖を泳ぐ白鳥がこちらを見つめる。同情するように鳴いた。つられたのか、近くにいた他の白鳥も鳴き始める。輪唱のような鳴き声は当然周囲の耳にも入る。

「・・・」

ベンチに座る日本人と湖から顔をこちらへと向けた白鳥達の大会唱。これが美男or美女なら絵になるのだが、あいにく黎斗は冴えない顔の学生だ。白昼突如発生したある種異様な光景に注目が集まり始めるのはある種当然で。ビデオカメラを回す家族もちらほら見受けられる。黎斗としては見世物になったつもりはないのだけれど。

「・・・僕こんなキャラだっけなあ」

自分のことはこれまでお気楽極楽人間だと思っていたのだが、いつの間にこんな苦労性リーダータイプにクラスチェンジしたのだろうか。半ば諦めにも似た表情で、黎斗は買い物に飛び出したまま帰ってこない三人をひたすら待った。止めようとしたのだが「大丈夫だって！ 黎斗の様子さつきからずっと見てたから要領はわかった」と言う三人に押し切られたのだ。さつきからジロジロと大衆の目にさらされている自覚はあるが、動く気力も全くない。きっと明日にはいろんな動画サイトにこの光景がアップされているだろう。そんなことを考えて、気分がますます下降していく黎斗だった。

「おい、三人ともー。ホテルこっちよ。そろっとチェックインだから行くぞー」

「あいよー」

「おお！！ このゲームに萌えを感じる！」

「華麗なそのお姉さま、そこでお茶でもいかがですか？」

・・・彼らに反省の文字はないのか。眩暈が黎斗を襲う。襲ってきた回数は本日だけで二桁を超えた。ここまでくると胃薬が欲しい。いい加減心労で倒れそうだ。それともここは暴走する人間が三人から二人に減ったことを喜ぶ場面なのだろうか？

「・・・いい加減話を聞けー！！」

三者三様の返事。夕方になって日が暮れても結局反町以外の二人は現れず、迷子を捜しに出かけた黎斗達は、警察のご厄介になっている高木と迷子になってグルグル回っている名波を確保することに成功する。あっちへフラフラこっちへフラフラ、そんな三人を引き連れて早数時間、もうすぐ夕食の時間帯だとみてとった黎斗はナポリの中心部へ歩き出そうとして 動きを止めた。

「・・・ッ!？」

「黎斗？」

心配してくれる高木に努めて普通の声を返す。大丈夫、硬い声になっっていないはず。

「ん、ごめん。ちょっと忘れ物。先に行つてて？ あのホテルは日本語大丈夫だから。いい？ あのメツチャでかい建物だからね」

そう言っただけで念を押してから走り出す。近くで凄まじい呪力が発生している。その原因を確認しなければ。この発生は普通ではない。まつろわぬ神がこの近くに降臨したのか、それとも魔物の類に施さ

れていた封印が解けたのか。現状では情報が少なく的確な判断が出来るそうにないため、危険性が高いということしかわからない。

幸い、時刻は夜だ。アーリマンの悪の最高神としての権能が使える時間帯となつた今なら、現地へ直接転移が出来る。

「エル、一気に邪気化して転移するよ」

「帰りどうするんですか。行きは相手をご丁寧に呪力垂れ流ししてから場所丸わかりですけど、マスターこの周辺の地理に疎いでしょ。帰り目印ないから転移できませんよ？ 邪気化の転移は座標をしつかりわかつてないとダメでしょう。私雪崩の現場まで飛ばされるのはもう勘弁ですよ」

邪気化したのちに転移をすることで、夜の地域なら一瞬にしてどこでも移動ができる。どこにでも行けるということは、転移先の選択肢が無数にあるということだ。試したことはないのだが夜でありさえすれば火星や月といった別の惑星にまで転移できるのではないだろうか、と黎斗は思っている。試してみたいのだが失敗したらどうなるか見当がつかない。呼吸やら温度の問題は呪力・神力で強化すれば十中八九平気だろうが、真空の中に放り込まれて無事に動けるかわからない。もし平気ならば別の惑星に別荘を建てて優雅な生活を送れるので今後の人生は安泰だ。重力が地球と同じくらいあれば各種権能を駆使してもう一つの地球を作れる自信が彼にはある。その環境に辿り着くには何千何億年必要になるかはわからないけれど不老不死たる彼にとって時間など大した意味はない。

閑話休題、とにかく今回のように相手が呪力を放出して居場所を教えてくれているような状況でない限り狙った場所への転移は困難を極める。世界地図を用いて金閣寺の位置を探すようなものだ。地元の地理に精通していなければ、普通にやったら大体の位置しか補足できない。誤差が数十kmともなればエルでなくとも難色を示す

だろう。しかも転移した先の安全は保障されていないのだ。

「帰りは歩く。なんとしても明け方までには戻るよ。とりあえずここでこんなことされたら三人に被害が出かねない」

「ホントに良いんですか？ これだけ呪力放出している相手の所にノコノコ行くのは正体を晒すことと同義だと思いますが。欧州にどれだけ神殺しがいらっしやるとお思いですか？」

「・・・」

黎斗が権能の行使をピタリとやめる。

「・・・何人いたっけ？」

黎斗のあまりの酷さにエルは嘆きなくなった。同胞の情報をきちんと把握していないにも程がある。隠遁生活するのならこれくらいの情報仕入れておくべきだろうに。

「・・・アメリカ大陸に御一人、中華大陸にも御一人、日本にマスター含めて御二人、あとは全員欧州かと」

「ってことは・・・四人？ 行ったらバレるんじゃないかね？」

「だからそう言ってるじゃないですか。アフリカ大陸やらオセアニア地域、南極北極ならまだしもこんな激戦区に首を突っ込む必要性ありませんって」

道端で作戦会議を始める主従。突如立ち止まり顔を白黒させはじめた黎斗に関わらないよう、周囲の人間が彼を避けて動いている。

そんなことにも気づかず、会議を続行するので、傍目には独り言を
呟く危ない人にしか見えない。

「……気配、消えたわ」

白熱した談義の最中、状況を把握しようとした彼は呪力が消えて
いることに気付いた。これではもはや搜索も叶わない。こんな土地
で夜中出歩けば迷子になるのは確定だ。

「現地の神殺しが対応なさったのではないかと。流石欧州、対応が
素早いですね」

「それで呪力が消えたのか。じゃあ解決じゃん。とっとと帰ろう。
……でも、なーんかひっかかるんだよなあ」

そう言ってホテルへ戻る主従。あと五分でも相談を続けていたな
らば、不審者扱いされ警察の厄介になったであろうことを知らない
で済んだのは、きつと幸運なのだろう。

§ 13 強運と凶運（後書き）

七巻くらいまでの話の中でこの話が一番護堂の出番が少ない、かな？
今後の展開次第にもよるんですけど（汗）

プロット中の行動に矛盾を感じて若干の修正したらチュールの権能
使う機会が消滅
あるえー？

・・・そんなこんなですが頑張ります

以下話と全然関係ない余談

最新刊読んで最強の剣がやっぱりそれなのか、と複雑な心境になっ
たのはここだけの話（笑）
たまにはアンサラーとかデュランダルにも光を！
リリなのでデュランダルは（一応）最強クラスですけどクロノ君出
番削られまくりですし・・・
なによりS2U派なんですよ（何
完璧余談でしたね

§ 1 4 東西奔走イタリア紀行（前書き）

§ 1 3、修正しました。結末が微妙に変わってます。

お手数ですがこちらの前に一度ご覧になっていただけると幸いです。
めちやくちやしちやってごめんなさい！ 今後気をつけますのでお
許しを

意見を下さったお二方、ありがとうございました。

こついつこと言っていただけるととてもありがたいです

・・・前書きに私信って良いのかな（汗

§ 14 東西奔走イタリア紀行

「黎斗、起きろー。今日はとても清々しい天気だ。まるで俺たちを祝福しているかのような・・・!!」

朝の四時。反町の陽気な声が頭に響く。個人的にはもう少し眠っていたい。が、そんなことを言えばこんなテンションの彼らは自分たちだけで外出してしまうだろう。そうなってしまったが最期、迷子になった三人を必死に探す未来しか見えない。やむなく黎斗はベッドから抜け出した。

昨晚、嫌なカンがして結末が気になった彼はカイムの権能を用いて情報収集をした。護堂が敗北したと事件の真相を把握した彼は、ため息をついたものだ。まとめるとペルセウスが現れ、護堂が倒れ、アテナ&ペルセウスで一時停戦したらしい。死んだり生き返ったりハーレム作ったり神と戦ったり、護堂はほんとうに忙しいやつだ。アテナにまでフラグを建てたのだろうか。

「結局解決しなかったのね。でもなんでペルセウスに護堂の力が無効化されるんだ？ ペルセウスの権能って封印系能力ではないよな」

他の可能性はギリシアとベルシヤの神話に何か繋がりがあること。知識の無い黎斗にはそれを確かめる術がない。唯一ウルスリケナの力を無効化するペルセウス戦はいくらなんでも相性が悪すぎるだろう。

「・・・これは僕が代打でできるべき？ あの光る剣まで無効化されたら勝機皆無だろ。流石にスルーして護堂を見殺しにするわけにやいかんよなあ。ザルパートレだかなんだか知らんけど元凶に見つからないよううまくやらなきゃ。つかザルさん働けよ。欧州のカンピ

オーネ達働けよ。全員二ートかつつこの」

「サルバトーレ卿、です。あとそんなに見つかるのイヤでしたら最終手段で口封じもありますよ？ 相手がどんな存在だろうがテュール神の権能、破滅の呪鎖グレイブニールで絡め取れば終わりです。これは相手が一人でなかったら逆にマスターが終わっちゃいますけど。ペルセウスと卿で苦戦の末両者相討ちって展開もうまく偽装すれば出来ますよ？ もっとも、そんな外道案実行しようとしたら噛み付きますけど。欧州たつてどんくらい広いと思ってんですか。マスターここを横断したんでしょ？ この広さなら一日二日対応できなくてもしょうがありませんって」

後半はともかく、前半で物騒な案を出してきたエルに再考を願ってみる。というか、噛み付くくらいならそんな案を提案しないでいいのではないだろうか。

「もうちよい平和的なさ。話し合いとかありません・・・？ 最後の方は納得せざるを得ないけどさ。まあ飛行機あるじゃんとか言い出したらキリがないからやめておくよ」

「自分が戦いたいがために都市に大損害を与える人間と話し合いが通じるとは思えませんが」

「うぐっ」

行動を考えるとサルバトーレとかいう男はおそらく、黎斗を神殺しと察知すれば勝負を挑んでくる。そうなれば自衛のために戦うわけだが噂になるのは避けられない。現在最古のカンピオーネとしてゴタゴタにかかわってしまうのは必至。そんな結末を遠慮したい黎斗のとる手段は二つ。

隠しきるか、知られたら倒すか。つまるところ、それしかないのだ。

「・・・ペルセウスは潰す。サルバドールからは逃亡。見つかったら黙ってくれるよう説得。最悪倒すことも視野に入れる」

仮案を出してみる。とにかく護堂が挑む前に決着をつけねばならない。

「三人には悪いけど今日僕は別行ど・・・」

「マスター、それは彼らの遭難フラグ、しいては死亡フラグですよ」

これまでの惨状を鑑みるに、彼らの末路がありありと見えてくる。下手したら”本当に”死亡しかねない。まったく、現地での会話が出来ないのにくるなんて！

「エル、至急幽世行くよ。姫さんとスサノオに協力してもらおう。人化の術式を組み上げる」

「ママママスター、一体何を!？」

突然飛んできた思わぬ言葉に慌てふためく様は見えてとても面白い。が、ここで面白がっている時間はない。広大なイタリアを身一つで探すのだ。カイムの権能で情報を集めようとしてもペルセウスと同じような姿恰好をしている人間だって大勢いるだろう。こういう探し人の場合この力はあまりアテにならないものだ。だから、探索に割ける時間は多いほど良い。今から探せば、夜までには見つけられるだろう。

「幽世で二人の協力の下、エルを女性に変化させる。あとは僕の海外の従妹ってことで三人の案内を」

「イヤですよあんな変態達の!？」

即答。即答である。彼らの自業自得とはいえ、流石に哀れになる黎斗。一応友達として弁護してやるのが仁義だろう。

「たまにはそうかもしれないけどさ、三人ともいい奴だし、ね？」

「・・・いい方々かどうかはこの際置いておきましょう。マスター、あの人たちは本当に”たまに”変態なだけですか？」

思い返してみる。今まで過ごしてきた三人の言動を。変な影響を受けやすく、一度染まってしまうと凄まじい暴走を見せつける高木。巫女萌えを公共の場で宣言してしまう名波。そして、二次元に百人を超える妹を持つと言い、常日頃から彼女たちに愛を注ぐ反町。

「・・・・・・」

思わずエルから顔を背ける。変えることの出来ない現実があるのなら、それを受け入れて未来へ進むしかないのだから。

「マスターあー!!」

「高木ー、三人で悪いけどロビー先に行つて。ちよつとトイレ」

エルの悲鳴を外部に漏れないよう器用に遮断しつつトイレの個室に入っていく。ホテルのトイレから幽世へ転移するのは僕ぐらいだろうな、などととりとめもないことを考えながら黎斗はエルを連れ

て転移の術式を組み上げた。

「おまたせー」

「なんで部屋のトイレに入った黎斗が外から現れ・・・!?」

ホテルの玄関から現れた黎斗を見るなり絶句する反町。名波と高木も口をポカンと開けたまま身じろぎ一つしない。黎斗の隣には、紫髪の美少女が一人。護堂の周囲の女性陣に勝るとも劣らない容姿は周囲の視線を釘付けにする。見かけは十八、九だろうか。白いながらも決して病的ではない肌と華奢だが恐ろしくスタイルのよい肢体。艶やかな長髪は腰のあたりまで伸ばされており、そよ風が吹くと流れるように髪先が舞う。薄手のノースリーブとスカートはどちらも黒で地味そうだが、不思議と彼女に似合っているように見えた。

「えっと、エルっていいいます。今日はよろしくお願いしますね？」

可憐な声音による挨拶と向日葵のような笑顔を向けてくる彼女に、そろって三人の動きが停止する。

「」「」

「おーい、生きてるー？・・・まあいいや。この子は僕の親戚なんだ。折角だし案内を頼もうと思って呼んでみたんだ」

（マスター！！ 私もこの周囲の地理詳しいわけじゃありませんよ

！！)

念話で、エルの抗議が脳裏に響いてくる。

幽世に撤退した黎斗は須佐之男達の協力を借りて、エルを人に化けさせることに成功した。万が一の為同じ国なら黎斗との念話を可能にしてあるので正直、単純なスペックは普段より高い。魔力消去の結果は時間物資共に足りず簡易術式しか組めなかったが大騎士クラスの相手と至近距離での接触をしなければ問題ない。悪質な不良程度なら一人でも無事に逃げ切れるだろう。半ば即興に近いものの神&神祖&神殺しが共同で術を掛けたのだから当然と言えば当然なのだ。簡素な護身用の呪符も持たせているし事件に巻き込まれても大事には至らないハズだ。

容姿は人化の準備を二人にしてもらっている間に单身様々な店を巡り買ってきた作品のヒロイン達を元に設定。ギャルゲーを山のようを買った時の周囲の視線の痛いこと痛いこと。女性の店員の汚物を見るような視線に内心涙した。エロゲーを全品買い揃えれば当然かもしれないけれど。もうこんな真似はこりぎりだ。僅か十分足らずで幽世へ大量の資料を持ち込んだ黎斗。彼の並々ならぬ熱意に当初は呆れていた須佐之男命だったが、最終的に二人で容姿について議論を重ねるまでになってしまい二人の様子を女性陣は苦笑い。コスプレにならない程度に服を含めた装飾品も参考にし、エル人間ver.の完成と相成ったのである。ちなみに幽世の黎斗の部屋その二は今回資料として用いたラノベ、マンガ、ギャルゲーの類(全部未開封)で埋め尽くされてしまったので、他人を部屋に招くのは恐ろしい部屋に変貌している。

「今日はエルに案内を……って聞いてねえ……」

硬直したのもほんの数秒、黎斗の話を書くことなくエルに群がる野郎三人。少し離れたここからでもエルの顔が引きつっているのが

よくわかる。出来ることなら助けてやりたいがここは彼女に頑張ってもらってその間にペルセウスを探そう。

「今日はエルに任せて僕はちよつとホテルで寝てるよ。あとで目的地に行くからさ、現地合流にしましょ」

そう言つて自室に戻るうとする黎斗の肩を朗らかな声と共に高木が叩く。

「なーに辛気臭いこと言つてんだよ。具合悪いわけじゃないんだろ？ みんなで楽しむべきだ！」

それはもう爽やかな笑顔で。マンガだったら歯がキラリと輝いているような。思わず呆けた一瞬の内に黎斗は腕を反町に捕獲されていた。抜け出そうとしても抜け出せない。こやつは捕縛のプロか、プロなのか。

「せつかく黎斗が美人な親戚連れてきてくれたんだ。まずはどっかで朝飯にしようぜ！」

そのままずるずる連行される中で思考を放棄する。鳥達の話が真実ならば護堂はアテナと一緒になのだ。あの女神様と一緒に悪いようにはならないだろう。彼女が大丈夫と判断しているなら護堂に勝機はあるはずだ。当然のことながら智慧の女神様は黎斗などより遙かに賢い。凡人黎斗なんか心配する必要はないか。ここは三人と一緒に行くこう。

「……りょーかい。朝ごはん食べたら移動開始。今日はシチリアだっけ？」

「シチリアは明日だよ。今日はサルデーニャだ。明後日レジョディカラブリアに行つて帰国だ。・・・ガイドだろ、しっかりしろよ」

「・・・すげー屈辱だわ。まさか名波にそんなことを言われるとは。つかガイドは無理だと何度言えば」

思いつきだけでここまで来たような人間にすっかりしろと言われるとは世も末だ。だいたい、一日ごとにイタリアを縦横無尽に駆け抜けるこんな日程では観光なんてほとんど出来ないではないか。一日の大半は移動時間で消えてしまう。もし、観光したいのなら今回のように早起きなりなんなり、睡眠時間を削るしかない。商店街は何を考えてこんな滅茶苦茶なプランにしたのだろうか。「イタリア全土を駆け抜ける！ 夏に攻略するイタリア！！」という副題がついていたらしいが、本当に駆け抜けることになるとは。

「マス・・・じゃない、黎斗の負けですよ。名波君しっかり日程覚えてるじゃないですか。しかしホント、強行日程みたいな無理ありすぎる日程ですね」

マスター、と言いかけて慌てて訂正するエルだが、三人の耳はこっとういう時に限つて恐ろしい精度を發揮する。

「マスつてなんだよマスつて！？ 黎斗、てめーまさかマスターとか呼ばせて悦に浸つてるんじゃないやねえだろうな！？」

「お前だけは俺たちの仲間だと思つていたのに。紫髪の美少女のマスター気取りかよ！！ この裏切り者！！」

「天誅だ！！」

「ちょっと待て三人とも！！ マスだけでマスターって決めつけるなよ。もしかしたら鱒が食べたかったのかもしれないだろ！！」

悦には浸っていないがマスター呼びされているのは事実。ここでバレたら学校生活が大惨事になりかねない。助けを求めてエルを見るが、三人の剣幕に彼女も口を挟めないようだ。オロオロとすることは。助けが当てにならないことを悟った黎斗は、最終手段を選択した。

「だー、朝ごはんいくぞ！！」

強引に誤魔化する。朝食を食べてしまえば、少しは三人も落ち着くだろう。そんな希望を胸に秘め、黎斗は中央街へ走り出す。彼と彼を追いかける三人を、エルが苦笑いしながら歩いて追った。

§ 14 東西奔走イタリア紀行（後書き）

え？強引すぎ？

・・・まあ島行く計画は前からあったのでご容赦くださいな

とりあえずご迷惑おかけしました。

今後は展開を変更するような修正をしないで済ませられるようにしていききたいのでご容赦くださいませ

権能の漢字やらルビがいよいよカンピにあるまじきことになってる
気もしますがご了承ください。

カンピって基本的に漢字のルビは同じ意味の別の言語、っていう素
直な形が多いですよ。ドニとかドニとか。ヴォバン侯爵はドイツ
語かな？ わかりませんけどそんなカンジが。教主と護堂は割愛。

スミスさんは・・・漢字。アメリカなのに漢字だよ（汗

アイーシャさんは不明でおいとくとしても、関係ないのでアレク
さんくらい？

僕はFateっぽいルビも好きだから権能時に結構悩みます・・・

（苦笑

あ、タグって追加した方がいいんですかね？

このままでも良い気はするのですが・・・寂しい？

§15 魔王に立ち向かうのは勇者だけではない(前書き)

某キャラ大暴走の回

・・・どうしてこうなった？(汗

とりあえず各キャラの行動に違和感がないようやってみたんですけど・・・違和感あります？

詳しくはあとがきにまわしまーす

§ 15 魔王に立ち向かうのは勇者だけではない

「・・・・・・・・」

右手にビニール袋を持ったまま、黎斗は呆然と立ち尽くす。ちょっと目を離れた隙に、四人の姿が消え失せてしまった。一人で飲み物を買に行ったのは選択ミスだったか。彼らが座っていたベンチには、日本のレシートと思しき紙の裏に何かが書かれており、風で飛ばされないように石で押さえられている。

「何コレ？ 書置きか？ 誰かがここに座ったらどうする気だったんだあいつら・・・」

呆れながら紙を手取る。筆ペンだかなんだかよくわからないが、字が潰れていてとっても読みにくい。大方通りすがりの誰かから借りた慣れないペンで立ちながら書いたのだろう。下に何も敷かず、急いで書いたとしか思えない。

エルさんを連れてちょっと散歩してくる。五分くらいで戻るわ

心の友より

「朝まで裏切り者呼ばわりしていたのにエルをきちんと紹介したら心の友ねえ。現金なやつらだこと」

まあらしいといえばらしいか。笑いがこぼれる。散歩くらい大目に見るか、と思ったところで気付く。今変な単語があったぞ。

「散・・・歩・・・？」

もう一度、読み直す。

エルさんを連れてちよつと散歩してくる。五分くらいで戻るわ

心の友より

「ちよつと散歩してくるわ」に開いた口が塞がらない。彼らは現地語ができないこと忘れているのだろうか。昨日も言語が通じないのに勝手に突撃していたことを思い出せば、そもそも考えていないのかもしれない。エルが付いているから最悪の事態は無いだろうが。

「・・・はあ」

溜息が飛び出る。念話でエルに場所を聞けばすぐに済む事態なのだが、そんなに楽な展開になつてくれれば苦労しない。空のたびの最中に機内で試してわかつたことだが、エルは念話が得意ではなかつた。エルは念話で喋る際、発言を声に出してしまうのだ。これでは緊急事態以外は使いが無い。いきなり空に向かつて話しかければ変人扱いされること請け合いだ。国内ならば携帯電話でカモフ

ラージュ出来たのかもしれないが、ここは海外。その手段を用いることが出来はしない。念話で搜索というもつとも確実かつ楽な方法が使えない。

「ねえねえ、この近辺に居た男三人と女一人のグループ、どこに行つたか知らない？」

ざわ・・・ざわ・・・

「・・・おーけー、ありがと。さて、ウォーリーを探せモドキ始めますか。つたく、あんにやるー」

カイムの権能を発動。木々の話では既に十五分は経っているではないか。街路樹の助けを借りて搜索を開始する。雑草達に応援されながら、黎斗は四人が去った方角へ歩き始める。ビニール袋からペツトボトルを取り出す。封を開けてお茶をラツパ飲み。まったく、飲まなきゃやってられない。

黎斗が搜索を開始した頃、事態はとんでもない方向へと動いていた。

「その金髪！！ 万理谷さんに触れるな！！」

サルバトーレ・ドニ。欧州最強の剣士。”剣の王”と呼ばれ畏怖される魔王に立ち向かったのは、変態紳士の一角、名波だった。

「え？」

間の抜けた声を出してしまつドニ。まあ、当然だろう。どっからどう見ても観光客にしか見えない日本人が、いきなり立ち向かってきたのだから。

彼らはただの一般人だ。だが、一般人であるが故に、同級生が暴行を受けているのを看過出来はしない……！！

カンピオーネという存在を知らない彼らは、自分の前に立つ存在がどれほど恐ろしい存在か理解できない。相手との実力差があまりにもありすぎて、どれだけドニが規格外な存在なのかもわかつてはいないだろう。彼らにとつて目の前の金髪は、憧れの同級生に襲い掛かつて縛ろうとしている暴漢以外の何者でもない。

「貴方達、やめなさい！！ サルバトーレ卿はあなた方が束になつても敵つような相手ではないわ！！」

エリカですら大声をあげる事態。アンドレアに至つては、目を見開いたまま硬直している。目の前の現実に、理解が追いついていないのだ。そんな状況下で放たれた、エリカの声は逆効果だった。普段の彼女なら気づいたはず。倒れ伏す自分の姿が、彼らにどんな影響を与えるのか。

「うおお、エリカ様！？ てめえ、エリカ様に何をした！！」

逆上する反町。ドニを見つめる目はとても険しい。

「……ははは、よくぞ着た勇者達。僕に勝てばここの二人を解放しよう！」

おそらく彼らは彼女たちの日本での友人だろう。通りすがりのク

ラスメートが彼女達を襲う自分に敵意を持つのは不思議なことではない。ならば、とことん悪役をやってやるうではないか。その方がきつと面白い。いち早く状況を理解したドニは気取った台詞と共に、三人へと向き合う。さながら悪の大王のように。

「このバカ!! 遊びが過ぎるぞ!!」

事態を把握したアンドレアがドニを罵倒する。ただの少年相手に本気を出すはず無いとわかっているが、だからといって許容できる事態ではない。

「三人ともダメです!! その方には絶対に敵いません!」

「なっ……」

「うああ!!」

エルの叫びに反応し彼女に視線を向けたドニが硬直する。結果、素人といっても差し支えの無い反町の一撃が、彼を捉えた。直撃した拳が、彼の身体を吹き飛ばす。

「……?!?!?」

無論、ドニに対する影響など無い。しかし、一般人に過ぎない反町の一撃を受ける彼に、エリカも祐理もアンドレアも息を呑む。目の前の光景は一体なんなのだろう。

「……へえ、面白い。こんな形で戦いを仕掛けてくる神様は初めてだよ。ついでに言うなら、直視するまで察することが出来なかったのも初めてだよ」

立ち上がるドニ。そこにさっきまでのおふざけはない。あるのは明確な闘志。その覇気に三人は無意識下で後ずさる。

「バカ、冷静になれ！！ この少年達の何処がまつろわぬ神だというのだ！！」

「違うよ。後ろに控えてる紫のコだよ。微かに、ほんの僅かだけど気配がする。身体が勝手に臨戦態勢をとるんだから、間違いない」

エルに用いた変化の術は特殊な物だ。須佐之男命の神力を基本的に黎斗の神力を反応させる為、他の誰にも真似することなど出来はない。今のエルは「存在だけなら」まつろわぬ神と同等なのだ。ドニの身体が臨戦態勢をとったのもそこに起因する。だが、そんなことを理解している者などこの場に居ない。欧州最強の剣の王、サルバトーレ・ドニが本気になる。今重要なことはそれだけ。他は全て枝葉末節、些細な出来事。

「・・・くっ」

プレッシャーに押され、後退するエル。当たり前だが、彼はエル達を逃がしてくれるほど甘くはない。反町達三人も、エリカと祐理がこの状況では引くことはないだろう。彼らの目は、恐怖に怯えながらも立ち向かおうとしている。

(・・・やむなし、ですか)

懐から呪符を取り出し、三人の方へと投げつける。強制転移で幽世にある須佐之男命の館へと問答無用で吹き飛ばす。あとで須佐之男命から文句を言われるだろうが事態が事態だ、しょうがない。あ

とはこの場から逃亡するだけ。この時エルはそう思っていた。

「へえ、彼らを消したか。」

結果から言えば、エルの判断は間違っていた。彼女はこの場で一目散に逃走すべきだったのだ。そうすれば、追跡してくるであろうドニを三人から引き離すことができるのだから。なまじっか強制転移などという高等術を用いたせいで、ドニの警戒心を煽る結果となってしまうのだ。一般人を駒にするくらいの雑魚かもしれない、という印象から一転、次元転移を可能とする実力者として見られてしまったエルに、彼女一人では生存の目は万に一つもない。転移の護符は一枚しか受け取っていない以上無駄遣い出来ない代物だったのだ。

殺気を察知し背後に飛び退くエル。奇跡的に回避に成功した命を奪う一撃は、彼女の左腕をたやすく吹き飛ばす。

(くっ……マスター!!)

進退窮まったエルは、自らの主に念話を送る。ここに黎斗を呼び寄せることは本来なら下策かもしれない。しかし、エルが死亡すれば変化の術が解け、狐の死体としてこの場に残る。解剖されどもしたら、黎斗の神力の残滓を察知されてしまうだろう。そうなれば事態が露見するだけではすまない。こんなでも一応神殺しの眷属なのだ。神殺しの眷属の死亡は、絶対に黎斗と欧州に禍根を残す。最善手は一人でのここからの離脱。それが敵わぬ今、次の一手は生きてここから抜け出すこと。幸い相手は勘違いしている。今エルが黎斗を呼び出しても己の契約した人間を呼び出した、と誤解させられるはず。それに、賭ける。

「……!!」

風が吹いた。遠くにいても、相手の下へ駆けつけることのできるウルスラグナの力的一端。ただその使用者は護堂ではない。友愛の神アーリマンの権能でその権能を一時的に拝借した黎斗だ。両手にビニール袋を持つ、という戦場に似つかわしくない姿で現れた彼は周囲の様子を素早く確認する。

「今度は買い物帰りの民間人？　・・・本気を出す気が無いのなら、出させてみせようか！」

ドニの剣が、エルへと放たれる。神速で振るわれた一撃は、黎斗の左腕に阻まれた。出血しながらもしつかりと握り締めた手は剣の些細な動きも許さない。ドニの瞳が驚きで僅かに見開かれる。

「へえ・・・」

「有り得ない・・・」

感嘆する魔王。呆然と呟くエリカ。彼の王の剣を見切るような芸当を出来る人間が、この世に果たして何人いるのだろうか！　まして対峙しているのは、自分たちのクラスメート。彼がカンピオーネだったとしても、自分たちと年齢はほとんど変わらない。エリカは夏休み少し前に赤銅黒十字の力を借りて秘密裏で彼の戸籍調査を行ったことがある。結果、水羽黎斗は幼い頃に両親と死別してはいるものの、生年月日および戸籍に偽造された形跡はない。つまり、彼が権能を篡奪し神殺しとなったのはこの十数年以内の話の筈なのだ。十年いくかどうかの鍛錬で最強の剣士と張り合えるようになると思えるほどエリカは非現実的な思考回路を持ち合わせていない。この事態は、異常だ。

「あなた誰？ 僕ら須佐之男命様の眷属に対して恨みでもあんの？」

僅かな隙にエルと念話で相談した黎斗の結論は、須佐之男命の眷属という扱いで強引に誤魔化すこと。ここでドニを殺し闇に葬れば、事態は沈黙するどころか大事になるだろう。カンピオーネ殺害などしてしまえばそれは世界中にあらたな神殺しかまつるわぬ神か、更なる存在が居ることを発信するようなものだ。だから黎斗は神に仕える者と偽りこの身を晒す。ゴタゴタに巻き込まれるだろうが、神殺しとバレルよりは影響はないだろう。護堂の傘下に加わるのも悪くないかもしれない。若き神殺しがどこまで育つのか興味がないわけではないし。神と戦って負けかけても援護は出来なくなるが、雑魚の掃討くらいなら大手を振って出来るようになる。チート剣があればまず敗北はないだろう。

須佐之男命には事後承諾をもらえばいい。そう結論付けて彼に拒否される場合を考えていない黎斗の思考は、事態の樂觀視故なのか須佐之男命への信頼故か。

「眷属？」

「そう。こっちの娘は諸事情で須佐之男命様の力を一時的に借りているだけの存在だ。あなたが誰か知らないけれど、その剣を仕舞ってもらおうか」

「・・・断る、と言ったら？」

「貴方、それなりの立場の人間でしょ？ ここで倒すのは忍びない」

黎斗の宣告に、ドニは獰猛な笑みを見せる。まるで、予想外の大物を発見した漁師のように。

「黎斗、貴方何馬鹿な事を言っているの!? その御方はカンピオーネの御一人、”剣の王”サルバトーレ卿よ。いくら貴方が強くても、勝てる筈がないわ。お引きなさい!!!」

エリカが何か言っているが、黎斗の耳には入っていない。万が一戦闘になった場合、権能を使わないで勝つのは如何に彼でも厳しいものがある。気を抜くことは許されない。

「僕がカンピオーネと知ってなお、立ち向かう意思を見せるか。なかなかどうして、面白い。君その自信の根拠を見てみたい。一手御手合わせ願えるかな? 大丈夫、勝敗にかかわらず彼女には手を出さないよ。まつろわぬ神でない上にそんなに強くないのなら戦う理由はないからね。あ、そうそうさっきの少年たちにも謝っておいてくれ。無闇に威嚇しちゃったからねえ」

「・・・随分物分かりがよろしいですね。カンピオーネの皆様は傍若無人と伝え聞いておりますが」

三人に謝っておいてくれ、などという殊勝な言葉に黎斗は感心を通り越して疑問を浮かべる。カンピオーネは自分勝手な連中だけだと聞いていたのだけれど。そう思った彼は一応敬語で返答する。カンピオーネと知らされてしまった以上、タメ口をきくのは不味いだろう。

「だってそりゃあ君、これから御手合わせ願う人に対して、最低限の礼儀くらいはねえ」

「・・・戦うことへの拒否権は無しですか」

なるほど、たしかに自分勝手だ。こっちは良いと言っていないの

にいつの間にか勝負すること前提で話が進んでいる。人の都合を全く考えていない。「願う」とか言っておきながら決定事項とは。

「ショーがないか。・・・ロンギヌス」

自身を呼ぶ声に呼応して、神殺しの槍が姿を現す。他に武器になりそうなのはビニール袋&たくさんの食べ物しかない。手の内を晒したくないが負けるよりマシだ。負けにいく考えを即却下するあたりなんだかんだ言ってもやはり自分はカンピオーネだな、と心の中で自嘲する。

「では剣の王、サルバトーレ卿。お相手するは神殺しの槍とその所有者。神殺しの力、とくにご覧あれ」

§ 15 魔王に立ち向かうのは勇者だけではない（後書き）

このままだと原作焼き直し（ってか、改悪？）になりそうなのでそこをどうにかするのが課題、ですかね

五巻は恵那の都合上絶対関わるし・・・教主戦ちょっと考えてみなきゃ

ノリノリで書いていたら三馬鹿が・・・

問題はサルバトーレ卿が興味を示すか云々なのですが、まあそこはご容赦を（爆

名前覚えの件とかから見るとこの展開は有り得ないっちゃ有り得ないんですよー（汗

多分護堂の友達だろうポコれば護堂に発破かけられるだろう！
みたいな考えがあつたと脳内補完お願いします（汗

違和感、矛盾等ありましたら是非ご助言いただけると幸いです

以下戯言

改めて9巻読んで思ったこと

あれ？ロンギヌスなら不滅設定の聖杯壊せるんじゃない？（爆

聖杯も聖槍も聖遺物の一端だし同種同士がぶつかり合えば相互消滅するんでなかるうか

・・・そんなことを思いロンギヌスの破壊フラグ建てるべきなのかな、と思う今日この頃

あ、9巻で恵那がヒロインやってくれてるので（しかも叢雲だから回避不可ですし）結構焦ってます（笑

護堂に叢雲持たせる場合恵那が護堂側じゃないと無理じゃん！みたいな（苦笑

ま、そこまで到達するのに時間はまだかかりますし気長に考えます

§ 16 知りすぎた者（前書き）

サルバトーレ ドニ

でしたね（汗

前回の訂正します・・・

§ 16 知りすぎた者

「信じられん。あの少年は一体……」

アンドレアも、エリカも己の目を疑った。

サルバトーレ・ドニと水羽黎斗は既に十分以上刃を交えている。戦局は、互角。

「もしやサルバトーレ卿、手を抜いていらつしやいますか？ いくら権能を使っておられないとはいえ、互角に打ち合える人間がいるなんて……」

アンドレアに問いかけるが、正直これで手加減しているなどと信じたくはない。これが手加減なら自分たちへのあの一撃など彼にとつては手加減どころか見戯に等しいではないか。そう思う一方で、彼は剣を極め神を殺した存在であるのだから実際自分たちとの勝負など見戯かもしれない、とも思う。武芸においてエリカの上を行くであろう陸家の御曹司も彼の前に何秒立っていられるのだろう。”

「剣の王」の名は伊達ではない。そんな彼がもし本気ならば、黎斗が互角に戦えることなどありえない。これは黎斗が人間と仮定した場合だが。いくら神降ろしを出来たとしても、剣で神を殺した人間に匹敵する武を修めた人間なんてそう何人もいてたまるものか。

「あのバカは手を抜いているが本気の数歩手前だ。おそらく本気になると自制が効かなくなり権能を使いかねないから意識して抜いているのだろう。いくら降霊術が使えたところで人間が張り合える領域では、ない」

予想はしていたが、これでも手加減なのか。この戦いは見るもの

が見れば目を奪われるような素晴らしい勝負なのだろう。だがエリカではその速すぎる動きに目が追いつかない。不可能な体勢から一撃を繰り出し、無数に放つフェイクの中に、必殺であろう一撃を流れるように描き出す。全てが速く、重い。そんな常軌を逸した技の数々。そこまで考えて、ふと痛みが消えていることに気付く。

「・・・あら？」

「大丈夫ですか？ エリカさん」

暖かな光に振り向けば、戒めを解かれた祐理とエルと名乗る少女の姿。エリカが動けるようになったのがわかると、祐理はエリカの治癒をやめてアンドレアの縄を解きに向かう。

「純粋な武術ならばマスターとサルバトーレ卿の實力はほぼ互角。権能を使われない限りしばらくこの拮抗は続きますが、権能を使われると收拾がつかなくなります。私たちがここにいる限り、マスターはサルバトーレ卿と交戦せざるを得ません。よって私たちは全員一回退却します。ご理解をお願いします」

エルの提案は、この場においてもどうしようもないのだから間違っではないだろう。黎斗は彼女にえらく信頼されているようだ。カンプイオーネ相手なのに敗北を全く考慮されていない。

「私達はこの事態の解決をして速やかに護堂の援護に行かなければならないの。・・・と言っても私達では何も出来ないわね。わかつたわ、いったん引きましょ。護堂が悲しむでしょうしここで黎斗を殺されるわけにはいかないわ。」

エルと会話しているエリカは、とうとう「收拾がつかなくなりま

す」という言葉の真の意味に気付くことはなかった。彼女は「ド二が権能を用いると黎斗を殺してしまう。そうなる则の事態の收拾がつかなくなる」と最後まで思い込んでいたが、エルの真意は「権能合戦になって最悪周囲が焦土になる」である。普段なら気付いたであろう違和感に気付けなかったのは、日常でどんくさいところしか見せていない（体力測定だと彼は学年最下位組の一人だ）黎斗がド二と互角に打ち合う光景を見ていたからだろう。ギャップが大きすぎたのだ。

「この事態とはなんですか？」

「あら、貴女気付いていなかったの？ この周囲一帯に今結界が張られているのよ。効果は文明レベルの衰退。結界内では電化製品などが使えなくなるわ。せめてあの板だけでも破壊できればよいのだが、おそらく私たちに臨戦態勢のサルバトーレ卿の索敵能力を越えられるとは思えないわ」

「はい……はい、了解です。御武運を……エリカさん、今の内容を念話でマスターに連絡しました。私たちの撤退後に破壊を試みるそうです」

あの”剣の王”を相手に戦いながら他の人間と念話をする余裕まであるなんて、そう思ったが疑問は呑み込む。今はそんなことを考えている時間も惜しい。

「……詮索はあとね。今は頼らせてもらっわ」

「参ったな。自覚してなかったけど相当鈍っているみたいだ」

全盛期なら、容易く勝てただろう。二刀流で互角、槍でなら快勝、といったところか。しかし、今の身体では動きが追いついてこない。模擬戦だけで実力の維持はやはり厳しいらしい。負けることはまずないが、楽に勝てる相手でもなさそうだ。

幾度目かの交差、自分の弱体化を目の当たりにし黎斗は密かに口を噛み締める。周囲から見ればこれは破格の大健闘。なにせ欧州最強の剣士と張り合っているのだから。

だが、これでは駄目だ。一番得意な槍でこの有様ではひどすぎる。圧勝とはいかなくても優勢に立ち回れるくらいの力量を有して無くてはこれからが思いやられる。黎斗の権能は安定した単体攻撃権能が存在しないのだから。邪眼や流浪の守護といった安定した守りはあっても攻撃は日中専用の広域殲滅だったり夜限定の邪気波動だったりして不安定だ。今回だって相手の後ろにある変な板を武術で破壊せねばならない。四人が撤退し、更に結界を破壊されればいかに天性の負けず嫌いとはいえ諦めるだろう。というか、諦めてくれないと困る。黎斗は殺人者になって警察の厄介になりたくはない。

「……そろそろいいでしょうか？ 腕試しならこれで十分かと存じます」

その言葉と共に、ロングノースを一閃。全盛期ならサルバトーレの持つ剣を吹き飛ばしたであろう一撃も、今の彼ではそこまでの成果を發揮できない。楽に止められ、弾かれた。しかし、それも織り込み済みだ。弾かれた勢いを利用して、背後へ跳躍。結界の中心と思しき板切れを串刺しにする。四人の逃亡は確認済み。これで諦めてくれるといいのだけれど。

「あ……」

ド二の一言と同時に、結界の破壊される感覚。このはた迷惑な結界は効力を失った筈だ。

「……やれやれ、ここは大人しく引こうか。いつの間にかみんな逃げちゃったし板も割られちゃったし。悔しいけどこれは僕の負けかなあ。流石に”本気”になっちゃうワケにはいかないしね。それにここで時間を食って護堂メインディッシュvs神様に間に合わないのはとっても困る。だからこれで妥協するよ。ああそうそう、君名前は？」

剣を収めるサルバトーレ。残念そうな台詞の癖に嬉々とした表情を浮かべ王は尋ねる。

「水羽黎斗と申します、王よ」

「うん、黎斗か。面白い少年も発掘できたし成果は上々ということにしとこうかな。本当に護堂の周りは面白い。じゃあね」

去っていく彼を見届けて、黎斗は四人の後を追う。エル達の位置は念話でだいたい判明しているので問題はない。あるとすれば、ただ一つ。

「後始末、めんどくせえ……」

思わず口に出してしまう。エリカと祐理だけならディオニュソスによる洗脳でどうにでもなるのだが、眼鏡の男の存在だ。

酒の神にして死と復活の神、ディオニュソス。ディオニュソスの密儀は女性信者のみに許され、男が参加するには女装するしかなかったという。密儀で踊り狂う女性は尋常でない力を誇り、自分の息

子の判別すら出来ない程に狂わされることになる。ここにある彼の力の一部を用いる。ここまで聞けばアイスマンがなぜ問題なのかわかるだろう。この神、なんと権能が女性限定なのだ。「女性限定の能力。手加減で完全洗脳、全力で精神破壊とかねーよ。しかも声聞かせるか相手見れば即発動って下手なエロゲーも真っ青だなオイ」などと黎斗が言うのも無理はあるまい。ドニも護堂みたく周囲の人間が女性だけだったなら、こんな誤魔化すことに苦労しなくてすんだのに。そしたら全部洗脳で解決、という手段がとれる。

「あーあ・・・ 権能使ってないし誤魔化せるかな・・・」

出来ることなら行きたくない。お母さんに0点のテストを見せる子供の気分だ。避けられない追及を想像し、回避の方策を考える。ドニの言っていた「護堂vs神様」のことなどもう頭の外だ。黎斗の足取りは亀のようだった。

「羅刹の君、本日はお助けいただきありがとうございました」

「・・・・・・・・」

開口一番に言われたのは、祐理からの感謝。だがそこには、聞き捨てならない単語が入っている。

「えーと、万里谷さん？ 羅刹の君って」

「エルさんに全て教えていただきました。勝手に事情をお伺いして

「しまい申し訳ありません」

祐理の言葉に口が外れた。黎斗はすごい速度でエルの方を見る。

「エルー!?」

「ご、ごめんなさいい・・・ エリカさん相手に隠し通すのは無理でした・・・」

駆け引きになれていないエルは黙秘以外の行動をとらずポーカーフェイスも出来るわけではない。そんなエルが権謀術数に優れるエリカ相手に情報を隠し通すのはやはり無理だったようだ。驚きを素直に顔に出してしまう時点で、敗北は決定していた。彼女ならばエルの表情の一つ一つから見破ることも不可能ではないだろう。大人しく白旗だ。

「はあ・・・負け、か。では改めて自己紹介。かなり昔に神殺しになりました、水羽黎斗です。おそらく現存する同胞の中では最長なんじゃないかな? 異名つぱいのもあったけど、それを呼ぶ者はみんな死んでると思う。何世紀も前の話だし。だから普通に呼んでもらって構わない。ああ、この話オフレコね。口外しないで。あと録音とか盗聴も禁止の方向でよろしく。普段と同じように接してちょうだいな」

あっけらかんと答えてみる。今まで必死に隠してきたのだ。もっと隠すと予想していたのだろう。呆気にとられる三人の様子を見て、思わず彼はニヤリと笑う。そんな微妙な空気の中で、果敢にエリカが切り込んでくる。

「御身が我らの王、草薙護堂の周囲にいるのはなぜでしょう?」

「友達だからねえ。正体を告げないのは護堂が”僕”の存在を知って安心することを防ぐためって理由もあるんだよ？ 気の緩みは死を招く。もうちょっと強くなったら言おうかな。今僕の存在を知らせることはマイナスにしかならない。もつとも、僕が魔術結社とあまり関わりたくない、という理由の方が大きかったりはするのだけれど」

護堂と敵対する、と答えたらどうする気だったのだろうか。いや、考えるだけ無駄か。そうしたらこの少女達は確実に黎斗を敵と見なすだろう。

「・・・さて、重要情報大安売りしたワケですが」

がらり、と黎斗の雰囲気が変わる。彼女たちにこの権能を使ったくはなかったがやむを得ない。知り合いに対する精神操作を嫌がっていたら今までの苦労が水の泡だ。精神を破壊しないように加減。宝石店での換金作業やらアパートの手続きやらでお世話になった権能。ディオニユソスの力の一端を発動させる。

「我は心を汚す者。全てを忘れて？ 僕は神の力をその身に移す事のできる一般人。ただそれだけだよ？」

葡萄酒の色に染まる黎斗の瞳。色が鮮やかになっていく彼の瞳と対照的に、少女たちの瞳はだんだん虚ろになっていく。彼の言葉が途切れると、糸の切れた人形のように二人は机に突っ伏した。本来ならば意識を奪う必要はないのだが、これからの会話を聞かれるわけにはいかない。

「これで二人に関しては終了。彼女たちの記憶は封印した。僕が公

開する日まで、今日の出来事は偽りの記憶で彼女たちの中に残り続ける。・・・さて、本題に入ろうか。貴方の、名前は？」

そう言っアンドレアの方を向く黎斗。カンピオーネの視線を受けて、王の執事は僅かに震えた。

§ 16 知りすぎた者（後書き）

実は書いていて違和感が終始消えなかつたり（爆
文章練るのって難しいですね・・・

そしてアンドレアが居なければ・・・！！
いや、まあ目論見が甘すぎたといえればそれまでなんですが（苦笑

そして最近気付いた事実

カンピ、もしかして男キャラ絵少ない・・・？
ドニアレクヴオバンは除くと御曹司と甘粕さんとアイスマンくらい
じゃないですか

三馬鹿もスサノオもじっちゃんもないんだよなあとか思った五月の
昼（何

§17 ペルセウス・・・もといサルバトーレあつしまつ (前書き)

ここにグダグダ書かなくても活動報告あるじゃん!と思った今日この頃(苦笑)

§17 ペルセウス・・・もといサルバトーレあつしまつ

それは、恐るべき剣筋。神速の剣は、既に護堂と戦い負傷していたペルセウスに回避出来るような代物ではない。サルバトーレ・ド二の一撃で、”まつろわぬ神”ペルセウスはあっけなく消滅した。

「やれやれ。これならまだ黎斗の方が強かったよ、全く。あ、失敗したな。黎斗に倒してもらえば神殺しになったかもしれない。首に縄つけてでも、引きずって来れば良かった」

色々な意味で間違った考えをしているド二だが、生憎この場にはツッコミが出来る人間も、訂正が出来る人間も存在していない。

「大体弱った神様倒しても権能は増やさない、って釘刺されてたもんなあ。あーあ、ホント連れてくればよかった。本当大失敗だよ。・・・あれ？ どこで釘刺されたんだっけ？ そういえば黎斗が変態だからあまり関わらないほうがいいってどうということなんだろう。え？ 変態って何処で聞いたんだっけ？」

黎斗変態説について聞いたのはパンドラに会った時なのだが、彼はそんなことを覚えていない。彼女が黎斗のことを変態呼ばわりしていたのが頭の片隅に残っていたのだ。

「ふーむ。ま、いいや。黎斗が変態かどうかは今度、護堂やエリカ・ブランデッリに聞いてみよう。最悪彼の周囲に聞けばいいかな」

勝手に納得したド二は、一人その場を後にする。背後でなにやら喧騒が騒がしくなってきたが、彼の知ったことではない。

「ん・・・」

エリカ・ブランデッリは目が覚めた。ここがカフェの一角であることを認識した彼女の頭脳は素早く状況を整理し始める。祐理が隣で平和そうに眠っているということは、二人で仲良く寝落ちしてしまったのだろうか。太陽の日差しが心地よい。

「目が覚めたかね」

男の声に、一瞬硬直した彼女は、顔から血が引いていくのを自覚した。状況を完全に思い出し、失態に動揺してしまう。エリカ・ブランデッリともあるうものが会談の席で眠ってしまうなんて！この場には”王の執事”アンドレア・リベラと”須佐之男命の秘蔵っ子（仮）”水羽黎斗が居るのだ。こんな所で無様な真似は許されないのに！

「申し訳ありません・・・！！」

「私はあまり気にしていない。まつろわぬ神に加えてあのバカの行動があつたのだから疲労が蓄積していて当然だ。寧ろ謝るべきはあいつだろう。・・・そうそう水羽君は先に帰っていった。なんでも友達を回収するだのなんだのと言っていたが」

回収、とはあの三馬鹿のことだろう。自分達が危機に陥ったのが原因とはいえ、彼らの行動は自殺行為以外の何物でもなかった。一段落ついたら説教するべきか。それよりも記憶をどうにかしなければ

ば。おそらく黎斗が記憶改竄をやってくれているとは思うが。

「それにしてもこれだけの実力を完璧に隠していたなんて。黎斗、今に見てなさいよ……」

不気味な笑みを浮かべることで、アンドレアの表情が引き攣っていることに彼女は気づいていない。彼は今まで「こちら側」であることを隠し切ってきた。不審な点は多々あれど、明確な証拠を一切出してこない。これを彼女は自身の敗北と考える。彼を細かく調査して「異常なし」と判断していたのだから。ここで一矢報いずになんとする。本来ならば交渉で有利に使える手札だが、幸か不幸か今の彼女は年相応の精神になっていた。結果、黎斗（というより背後の須佐之男命達）はとんでもない地獄に叩き落されることになる。

「って、いけない！ 早く護堂と合流しなければ……祐理、起きなさい。失礼します。アンドレア卿、ご無礼ご容赦を」

今自分がすべきことは何かを思い出した彼女は慌てて祐理を叩き起こす。駆け足で去っていく少女達を見て、アンドレアは溜息をつ。

「……なんとか誤魔化せたか」

彼の顔には、疲労の色が隠しきれないほど滲み出ていた。

「とりあえず黙っててもらえるかな？」

少女達がすやすやと眠っている隣で、アンドレアと黎斗は対峙する。交渉が黎斗以上に苦手なエルは一人で暢気にグレープジュースを啜っている。口出ししてこれ以上事態が悪化したらとても困るし。

「王の仰せとあらば」

声を絞りだすアンドレアに、黎斗は更なる追い討ちをかける。

「サルバトーレにも、言っちゃダメだからね。現在、僕が神殺しであることが露見するとしたら貴方経由以外にないんだよね。だから、一発でわかるよ」

本来ならば須佐之男命ご一行を除きヴォバンともう一人、黎斗がカンピオーネであることを知る者が居る。だがヴォバンからは秘密にする、と言質を取っているから問題ない、きつと。もう一人の方はそもそも黎斗自身が「正体がバレていること」を知らないのだから対処しようがない。

「一応警告しておこうか。もし僕がカンピオーネであるという噂が広まるようならば、北半球根こそぎ焦土にするよ」

「は・・・?」

隣でエルが、ジュースを吹き出したが無視。ちなみに黎斗としてはそんな事をするつもりは毛頭無い。ただこう言っておけば確実に黙っているだろう、程度の軽い気持ちである。暴虐で知られている(らしい)後輩達の所業を考えればこれくらい法螺を吹いても大丈夫だろう。と思ったのだがアンドレアの顔色が変わる。流石に北半球

は無理があつたか？　だがここで案を引つ込めるわけにはいかない。ここで引つ込めたら怪しまれること請け合いだろう。

「疑ってる？　なんならやってみせようか？　全員合わせても僕の年齢に届かない後輩達をかき集めても防止できるとは思えないけれど。妨害なければ一日で十分だし。地球から人間がほとんど消えるから環境もマシになるよね」

勝手に暴走して引くに引けなくなった黎斗はとうとう恐ろしい発言をしてしまう。正直、爆弾発言をカバーするために更に自爆している気がする。エルが呆れた視線を向けてくるのだが、どうしようもない。墓穴を掘りすぎたことに気づいたが、後の祭りである。

(頼む、ここで引いてくれ・・・！！)

ここで「そうですか、ではやってみてください」などと言われたら土下座することになる。すいません調子乗りました、と。各個撃破が出来るならまだしも七人の神殺しと一度に戦おうもんなら勝てるかどうか分からない。スーリヤの権能を乱発すれば大丈夫だとは思うのだが、太陽に耐性のある神が居たり夜戦う可能性も有る。自分にとって最善の戦法で戦える保障は何処にも無い。逐一邪気を叩きつけていてはキリが無いしロンギヌスでぶすぶす刺すのも馬鹿馬鹿しい。そしてそれらを遥かに上回る最大の問題は大量殺人者になつてしまうことである。地球の人口は六十億。人口密度を考えなければざっと半分の三十億は殺してしまうことになる。そんなのは真つ平ごめんだ。黎斗の背中を冷や汗が流れる。

「・・・かしこまりました。命に代えても、このことは私の心の内に秘めさせていただきます」

勝った。黎斗は勝負に、勝利した。相手の顔を見るにちよっぴりの罪悪感。

「そう、ありがとう」

立ち上がって小躍りしたいがそんな様子はおくびにも出さず、彼はアンドレアの方を見る。これ以上ボロを出す前にとんずらしよう。三十六計逃げるに如かず、だ。

「エル、行くよ。スサノオのトコ行って三人を拾わにゃならん」

「了解です、マスター」

彼女の動きに合わせて紫の長髪がふわりとなびく。柑橘系の香りが漂い、鈴の音がちりん、と鳴った。

「とりあえずここに代金置いておくね。釣りは・・・あげる」

これ一度でいいから言ってみたかったんだよねえ、などと言いなから最古の神殺しは姿を消した。人の技量を凌駕した転移魔法によって。後に残ったのは、拳ほどの大きさの金塊。

「・・・これで払えと」

自分のポケットマネーから出して、この金塊は換金しておこう。そう決めたアンドレアは財布から札束を出す。

少女達に意識が戻るのは、この数分後の事になる。

「あー助かった。ホント、北半球潰さないで済んで良かった良かった」

「マスター、もうちょっと考えてから行動してください。下手したら大惨事だったんですよ。もっともマスターにそんな事出来る度胸があるとは思えませんけど。第一、何発スーリヤの権能を打ち込めば北半球全域焦土に出来ると思っっているのですか？」

「・・・あ」

まったく考えていなかった。スーリヤの権能で半径十数km以内は焦土に出来る。これを何回繰り返す必要がある？

「えっと地球の面積が・・・5・10072×10¹⁴?か。北半球ってことは単純に半分にして大体2・5×10¹⁴?。スーリヤ一撃で半径十km焦土にすると考えて面積は3・14×10⁸?。ザル勘定で10¹⁴/10⁸≒10⁶だから・・・ひやくまん？」

幽世では必要な情報がすぐに手に入る。地球の面積がすぐにわかるなんて便利すぎる。嗚呼、大学入試もここで受けたい。ここではどんな入試問題でも満点回答を作成出来る。

思わずそんな現実逃避をしてしまう。百万なんて単語知らないわからない聞いてない。

「マスター馬鹿でしょ。その計算があつてると仮定して、スーリヤの権能を”場所を変えながら”百万回撃てると思ってます？ 一日

で。妨害以前の問題だと思っんですけど」

「出来るワケがねえ・・・」

物理的に不可能だったのだ。大量殺人者になるのは不可能だったらしい。そう思い安堵する一方、改めてアンドレアに感謝する。ヤケクソになって実行したら人類史に残る大馬鹿者になるところだったのだから。有言不実行にしても趣味が悪い。百万という単語で自分のやるうとしていた事に、今更ながら背筋が冷えた。果たして自分に力があれば本当に実行したのだろうか？

「・・・やっぱ無理、だな。その場のノリって怖ろしい。帰ったらボランティアでもして道德やり直すか」

戦慄の会話をしながら主従が目指すのは須佐之男命の屋敷。転移することにより一気に庭までは来るのだが、やはり玄関から入るのが礼儀だろうとの考えにより彼は直接屋内へ転移したことは無い。今回も庭まで一気に転移するつもりだったのだが、気が緩んだ状態で座標を組んだせいだろうか、誤差が山一つ分になっていた。かくして主従は山を越えるのに余計な手間を取る羽目になる。そしてこの時間は、エリカ・ブランドゥ紅の悪魔が一矢報いる準備をするのに十分すぎる時間だった。

「やほー、邪魔するよー。あ、スサノオの眷属ってことで誤魔化してたから口裏あわせヨロシク」

気楽に構えて須佐之男命の屋敷に入る。普段は黒衣の僧達がいるのに、今日は須佐之男命しかいない。レアな日だ、などと暢気な思考は須佐之男命の怒声に掻き消された。

「黎斗、てめえざけんな！！ ヨロシクじゃねえよこのボケ！！」

普段の彼らしかからぬ乱雑な口調に黎斗は内心眉を顰める。不良時代の口癖に戻っているということは何かあったのだろうか。

「どしたん？」

「どしたもクソもあるか！ 神殺し相手に引き分けるとか何馬鹿やっつてんだてめえ。今日だけでどれだけ魔術組織から追求されたと思っつてやがる。姫さんまで弁明に現世に出張っつてんだぞ」

須佐之男命の一言は、黎斗の予想を超えていた。もうちょっと緩やかに噂が広まっていく、と考えていたのだがその考えは甘すぎたらしい。

「……マジ？」

「証拠に姫さん達がこの場にいなえだろうが」

「……早くない？」

「紅の悪魔経由で情報が拡散してやがる。ホントてめえは……」

情報の拡散具合が異常なのはエリカのせいらしい。記憶操作で胡坐をかいていたらこれか。彼女らしくない気がするが。

「またイヤがらせしてくれたなオイ……」

「んで、俺たちはもう過労死しそうな位に忙しいんだが？ どうかの誰かが滅茶苦茶目立ってくれやがったせいで」

「……ごめんなさい」

こんな状況でもきちんと庇ってくれている須佐之男命一行に沸いてくる罪悪感と感謝。このタイミングで書き物を須佐之男命がしているとなると十中八九自分のことだろう。聞いてみようかとも思ったがあまり引つ掻き回さない方が良いか。ここは三人を引き取ってとっとと退散しよう。

「あ……こつちに転移させた三人は？」

「その机の上に麵棒が三本あるだろ。あんまこつちに人間、それもただの一般人連れてくんなよ」

「ごめんごめん。非常事態だった、ってことで勘弁してちょうだい
な」

麵棒になつて机の上を転がっている三人を回収。櫛でなく麵棒なのはなんでだろう？ ふと疑問に感じるが、答えを須佐之男命にわざわざ聞くのも馬鹿らしい。これ以上迷惑かけないうちに離脱が吉か。

「んじゃ邪魔したね。迷惑かけてるけどよろしく頼むわ」

「おう。茶を出せなくて悪いな。次来た時はいい菓子用意しといてやるよ」

「……期待してる」

次に来るときは上質の酒を持って来ようと、心に固く決意した。

北半球云々の計算ですが策勘定以前に「海洋面積」込みで計算しているので計算間違つてたりします。

陸地面積だけでやればもうちょっと減るとは思いますけどどっちにしる万超えは確定ですね(苦笑)

まあ口では潰すだのなんだかんだ言ってますが一般人に毛が生えた程度の精神なんでそんな事したら精神が押しつぶされて倒れる気がします(爆)

とりあえず、原作五巻相当に入るのは七月〜八月になるかと(殴
小ネタやらなんやらの更新がしばらく続きますのでご了承をば

・・・ベツニ、テンカイカンガエテナカッタワケジャアリマセンヨ
?

§ 1 - ? 数百年前(前書き)

オリキャラオンリーです。申し訳ありませんが苦手な方は注意をば。
・・・今更何を、ってカンジですけど(汗)

日が沈み、大地が漆黒に染まっていく。一寸先も見えぬ闇の中、人外同士が激突する。

「がはっ……」

「これでまた終わりだよ、ヤマ。アンタが何度でも復活するのなら、こっちは再生できなくなるまで殺すだけだ。あと何回で神力は尽きるかな？」

黎斗は指揮者のように腕を振る。それだけで死の神の身体はコマ切れになった。よく目を凝らせば見えるかもしれない。この空間に張り巡らされた無数の糸が。もっともそれは昼の話。星明り以外の光が存在しないこの場において、規格外の呪力を込められて魔術強化されたこれらの糸を視認することは容易なことではない。とても細く、とても複雑に張り巡らされているそれは、黎斗の意に沿い自在に動く。欧州で生活していた時に身に着けた、糸を用いての戦闘技術。

「小僧が……いい気になるな!!」

地の底から響くような声と、突き刺すような殺気が黎斗を襲うが、当の本人は涼しい顔。瘴気の満ちる毒々しい空間の内部に存在してなお、彼の表情に焦りは見えない。いや、無表情な仮面の裏では焦っているのだ。神殺したる彼には大したことない毒だとしても、他の生命体には猛毒以外の何物でもないのだから。早急に決着をつけねばならない。村まで瘴気が広がればこちらの負けだ。

「だから、無駄だよ」

数多の糸が絡みつく。直後、またもや微塵切りの命運を辿るヤマ。糸はただの糸にあらず。魔力を通したそれはとても頑丈で、容易く鉄をも切断する。まつろわぬ神を相手にしても、武器としての役割を十二分に果たしてくれる。この場に来る前に泊まっていた宿の老婆から譲ってもらったなけなしの一品。彼女もまさかこんなことに使われるとは思っていなかっただろう。いや、魔術師の類が見ても夢と思うに違いない。ただ呪力で強化を施したに過ぎない普通の糸がまつろわぬ神を痛めつけているのだから。

「小癩な……！」

最初こそ傲岸不遜だったヤマだが、今や彼の神の声は焦りと苛立ちに満ちている。黎斗の指先が僅かに動いた瞬間、右足が吹き飛び左腕が細切れになった。更に首が吹き飛び、再びヤマは「死」を迎える。これで三百六十七回目。状況だけで判断するならば黎斗有利に見える。しかし日没と共に始まったこの戦闘は、当初の予定を超えて長引いていた。もうすぐ夜明けだ。このままではヤマの放出している瘴気がこの地域を制圧してしまう。ここまで広大に広がってしまったては邪眼で消去しきるのは無理だ。焦燥感が徐々に心の内で鎌首をもたげる。

「死者よ、私の……」

「唱えさせるかっーの……！」

敵が言霊を唱えきる前に頭部を粉碎する。相手に攻撃させない
それは一方的な蹂躪以外の何物でもない。主を守ろうと突撃してく
る鬼達も、時折吹き荒ぶ死の風も、邪眼が輝くたびに消去されてい

く。ある程度消去耐性を持つ強大な鬼ですら、黎斗まであと数歩というところで崩れて消える。それでもヤマは召喚を続ける。

「舐めるなあ！！」

ヤマが採ったのは、強靱な再生能力に物を言わせた突撃。本来ならば瞬時に再生する肉体も、邪眼のせいで速度が鈍い。しかしくらは身体が引き裂かれようと再生するのだ。こちらが限界を迎える前に黎斗を殺せばいい。単純であるがもつとも効果的。普段、このような戦法をヤマはとらない。神力の限界が早く来るからだ。更に彼はアテナ達と異なり闘神では無い。純粋な戦闘能力ならば彼女たちの下に位置するだろう。しかし今回は話が別。このままではギリ貧なのだから、肉を切らせてでも骨を断つ。彼の得意とするのは眷属大量召喚と瘴気放出。黎斗との相性は最悪だ。片っ端から消去されてしまう。それゆえの、突撃。

「……ちつ、まだ再生すんのか。ロンギヌス！」

舌打ちと共に召喚するは、神殺しの槍。ヤマが間合いに入った刹那、右手が煌めき敵の心臓を貫く。そのまま蹴って相手との距離を引き離す。左手の指先から糸が舞い、更に四肢を寸断した。

「まだまだあ……！！」

「……マジ化け物だろ、オイ」

接近してくるヤマをロンギヌスで突いてまた殺しながら、辟易とした声で黎斗が呟く。何度殺そうが甦り襲ってくる様は軽くホラー。手持ちの糸はもう無い。さっきの攻撃でとうとう耐久が限界を迎え自壊した。いくら丈夫でも聖遺物たるロンギヌスと異なり限界があ

平然と嗤うヤマ相手にやはり、と言った表情で邪気化を解除。ロ
ンギヌスで接近してきたヤマを吹き飛ばす。「最初に死んだ」とい
う名を持つ神に即死系攻撃が無効だったのは当然というべきか。死
人に概念的な死を与えることなど出来はしない。もう死んでいるの
だから死によろがない。黎斗はそう思い納得している。死者から生
命力を奪うなんておかしな話だ。まあ、死者が動いている時点でお
かしいのだけれど。とにかく、これで黎斗の手札は無くなった。彼
は防御系の能力こそ豊富にあるが、攻撃系の能力が少ない。負けは
しないが勝てもしない、いわゆる千日手になりやすいのが現在の欠
点だ。だが、今はそんなことを憂いている余裕など無い。やはり、
物理的に破壊することで死を与えるしかない。

「……しようがない、奥の手だ」

ヤマの神力は莫大。半分以上削ったとはいえ、おそらくあと三十
回以上は殺さねばならない。正攻法を諦めた黎斗は、一対一の戦闘
の切り札を切る。それはこの場に敵がもう一人でも居た場合、黎斗
の敗北を確定させかねない諸刃の剣。

「天空よ、我が名の下に裁きを与えよ。未来より迫る滅びを縛れ。
左に剣を。右には鎖を。我が腕を贅とし汝を封ぜん！」

言霊を紡ぐと黎斗の右腕が壊死を始める。それは、天空神テュー
ルの権能、破滅の呪鎖の代価。一ヶ月もの長きに渡り彼は利き手を
奪われる。だが、この力はその欠点を補って余りある力。邪眼と破
滅の呪鎖。この二つこそ黎斗がシルクロードを旅していた頃、無に
帰する主と呼ばれ畏怖された所以。相手に行動をさせないのが彼の
戦闘法。どんな相手でも封殺する。一切の抵抗を許さず潰す。数百
年を生き延びて来たのは流浪の守護だけに頼ってきた訳では無く、
また決してまぐれなどではない。

「ぐつ、なんだこれは!？」

鎖に囚われ叫ぶヤマ。グレイプニールに絡め取られ自由を失った相手は、自力で戒めを破れない。たとえどんな権能を持っていたとしても、どんなに身体能力が高くても。一度捕まっつてしまえば脱出は不可能。転移も、破壊も、憑依も、ありとあらゆる力を撥ね退ける。外部より攻撃を受けるその日まで、所有者を破滅より守護し続ける呪いの鎖。外部からの攻撃には非常に脆いが、内部からの行動には絶対を誇るインチキジミた、滅びの鎖。紐でなく鎖なのはパンドラ曰く黎斗の心理が関係しているらしいが、鎖でも紐でも構わない。今の彼にとっては形状より効果こそが重要なものだから。

「こういうのは卑怯であまり好みではないのだけれど、流石にこれ以上相手をするのはしんどいからな。時間も無いし。悪いが許して頂戴な」

黎斗の声と同時に、槍の一撃がヤマを襲う。心臓を抉った一撃を受けてなお、不死なる肉体は甦る。だが、鎖に囚われたヤマはもう、蘇生以外の行動が出来ない。動くことも攻撃することも叶わないヤマの頭部を再び槍が穿って抉る。

「甚振るのは嫌いだから、全部心臓か頭狙うよ。お互い早く終わらせよう? 早く、死ね」

冷酷なる宣言。一方的というにはあまりにも一方的な、情け容赦の無い蹂躪。ヤマの絶叫が辺りに響き渡る。

それは幾度目か。一方的に飛ばれていく光景が、ついに終わりを告げる。既に死亡数のカウンントを放棄した両者だが、神力の減り具合がヤマの余命を確実に伝える。太陽が姿を見せ始めるころには、彼は死亡寸前になっていた。残り命運が僅かとなった彼を前に、思うところがあつたのだろうか。黎斗は最後にヤマへ告げる。

「これで終わりかな。次会うときは再生ばつかすんなよ。っーか瘡気撒き散らすな」

夜明けの日差しを浴びながら、黎斗は最後になるであろう一撃を放つ。ロンギヌスが太陽の光を受けて、黄金色に輝いた。対象の消滅と共に役目を果たした破滅の呪鎖も消えていく。死者が七色に煌めく粒子となりて、霧散していくのは幻想的で、ついさっきまで凄惨な虐殺の場だったとは思えない。

「ん……権能の片方はヤマみたいな超再生か」

パンドラに会ってきた黎斗は、自身の篡奪した権能を確認する。最初に死亡した神、ヤマ。彼の神を葬った彼は不老不死となった。正確にはこの権能を篡奪した時点で一回死亡。その反動で神殺しとなる以前まで肉体が戻る。一見デメリットしか見えないこの権能、この権能の真価は”既に死亡していること”これに尽きる。老いることは無い。寿命も無い。既に死んでいるのだから。死の呪詛も受

け付けない。死者を呪い殺すことなど、誰にも出来はしない。あらゆる精神攻撃も通用しない。死んでいるのに風邪引いたり生理現象があつたりするのが謎だが、そこはまあご愛嬌だろう。死人と化した彼を討ち滅ぼすには物理的に肉体を破壊し尽くす他は無い。しかし、ヤマの力により規格外ともいえる再生能力を有した彼を殺し尽くすの困難を極める。肉体全てを一瞬で全消滅させても次の瞬間には再生するのだから。神力での再生が何回可能かは彼自身にもわからない。ただ二桁ギリギリくらいは再生できるだろう。ヤマの逸話に再生関連のエピソードがあつたかどうか知らないが、死者を救う地蔵菩薩と同一視されたことからこの権能は誕生したのだろうか？

小学生の頃、授業で調べた地蔵菩薩のご利益に「何度でも天界に生まれ変わる」というのがあつたような気がする。正直、ご利益が多すぎたので合っている自信はない。小学校での学習がこんなところで役立つとは。

それより問題は人間時代、つまり引きこもり少年時代だった頃に戻った、ということだ。身体能力が壊滅した、ということでもある。致命的な弱点となつてしまった以上魔術強化で補うしかない。神殺し時代とは比ぶべくも無いが、魔術強化しないよりはマシだろう。強化すれば聖騎士級までとはいかずとも大騎士一步手前くらいまでなら追隨可能だと思いたい。

「しかも魔力ガタ落ちつてのが笑えないな……地道に鍛錬しかないか」

魔力が神殺しとなる前まで戻ったことにより、激減してしまつたことも痛い。こっちは訓練で伸ばしていくしかないだろう。一般人クラスの身体能力&凡人級の魔力量ではまっろわぬ神と戦つても鬪り殺しに合うだけだ。下手をすれば聖騎士にも劣る。今後の課題を認識した彼は、下を向いていた顔を上げる。

「さて、とりあえずこれで問題は解決でしょう。パンドラさんに文句言われたけど」

今回のように破滅の呪鎖で絡め取り一方的に攻撃するのは次から権能を増やさないと、と言われてしまった。破滅の呪鎖は使い道に気をつけなければならなくなりそうだ。戦法に頭を悩めつつも気を取り直した黎斗は朝の日差しを背に、宿泊している村へ戻る。ヤマの撃破に伴い、死の瘴気は無くなっているだろう。村のみんなが無事だとよいのだけれど。

「……………」

世話になっている村への帰り道、金色の毛並みのキツネが足元に倒れている。何かの事情で右前足を失ったキツネ。既に呼吸をしていない。そっと、手を触れてみる。冷たく硬い感触が、黎斗の指を迎え入れた。

「……………はあ」

迷子になり空腹で今にも倒れそうな彼を今居る村まで案内してくれたのは、このキツネだった。畏にかかっているのを助けはしたが、それだけだ。カイムの権能で植物と会話することが出来ても動物と会話は黎斗には出来ない。意思疎通ができないにも関わらず村までの道を案内してくれたのだ。

そのキツネは、もう動かない。周囲を見渡せば木々が枯れている。この辺はヤマの瘴気に当てられた領域か。

「恩人……じゃない。恩狐が死んでいる、つてのは目覚めが悪いな。やっぱり」

それは、禁忌を破る決意。死者は蘇らない。世界の根本原理を覆す力。地獄の主、閻魔王となったヤマのもう一つの権能。

「開け、黄泉の扉。地獄の主たる我に応えよ。魂を、呼び戻せ。喪われた時を、巻き戻せ。我は遍く死を司る者。死を領域とし、万物を従える者。終焉を破棄し輪廻を呼び込まん」

一つの種に対し、同時代に現界させられる魂は一つのみ。このキツネを蘇生させれば、このキツネが死なない限り黎斗は他のキツネを蘇らせることができない。しかし、これは完全な蘇生を可能にする力。肉体のみの復活や人格の完全再生リブレイなどといった程度の能力ではない、真正正銘、生命を従え制御する術。更に蘇った命は寿命の楔から解き放たれる。古来より幾人もの権力者が渴望した、秘術。それがヤマのもう一つの力、”偽りの灯火”イミテーション・ライフ。

とくん、と既に止まった心臓が再び鼓動を始める。むくりと、起き上がりこちらを見つめてくるキツネ。失った足もどういう理屈か取り戻している。どうやら完全な状態での蘇生を可能とする権能のようだ。

右手を動かして撫でようとして、失敗。右は壊死していることをすっかり忘れていた。気を取り直して、左手で撫でる。チロツと舌を出して嘗めてくるキツネに、思わず笑みが零れた。なんか気が合いそうだ。今まで一人旅だったし、こいつをこれから相棒としようか。村へ連れて行く道中に交渉してみよう。

真夏の正午、少年が一人砂漠を歩く。フード付きローブの下はジーンズとパーカー。この時代には有り得ない服装だ。少し後ろを、一匹の狐が追いかけてくる。カイクの権能を完全に掌握し、動物とも会話できるようになったのはこの時のことだった。

これは、過去の物語。一人の神殺しが、相棒を見つけた時の昔話。

§ 1 - ? 数百年前（後書き）

ルーツを調べたり民俗学的にひも解くのは僕の技量では難しいので
すっ飛ばしました（爆

注意書きにも前から記載してましたしね・・・

些細な話ですが今回戦闘で使用した糸は村の御婆さんから貰ってきた
たものです、ってコレ本当は作中で言わなきゃなんですよ・・・

（苦笑

割と圧勝している印象を受ける方もいらっしゃるかもしれませんが
ヤマは”闘神”ではないので、ともう一度。
相性が最悪だったのもありますし。

アテナ辺りだと多分こう上手くは決まりませんよ・・・？

§ 小ネタ集 part 2 (前書き)

信憑性に期待しないでくださいませ (殴

特定宗教の方で不快な思いをなさる方がいらっしやいましたらごめんなさい

と、予め予防線を張っておきます (爆

…… スサノオのキャラがエライことになってます。 要注意 (これも今更ですかね)

あ、三点リーダーの件に関してはしばしお待ちを。

また明日以降チマチマ修正していきます

書き方なくてなくてすいません (汗

§ 小ネタ集 part 2

鬼札

アールリマン。闇の最高神にして諸悪の根源。「善」を司る叡智のアフラ・マ主に挑む無知の魔王。文献によっては一度勝つてんだぜ？ スゴクスダね？ 別名、怒りの霊。アンラ・マンユ

アールリマン。友愛の神にして救世神ミトラ第一の従神。ミトラの天地創造に助力した善良な神。拝火教以前の神話において重要な神の石柱。アールリマンとは古代ペルシア語で「人間の友」を指す。月日が流れ、拝火教の信仰が拡大する中で悪魔に墮とされても、一部の地域ではその信仰は続いていた。これはミトラとの絆を示しているとも。墮天してなお、ミトラは庇いつづけたという話から来たのだろう。

アールリマン。アフラ・マズダの双子の兄と言われる存在。ズルワーンの子。

アザゼル。グリゴリの統率者の一人とされる墮天使。名前は「遠くへ去る」の意。元はシリアの神とされる。人間に兵器の製造法を伝え、化粧を教えた。

アザゼル。別名孔雀王。ミトラ教七大天使筆頭。日曜日の天使。墮天使となるも復位、全天使の頂点に立ち光芒に包まれている。その古き名をアールリマンという。真名は「われは神なり」

アザゼル。キリスト教・ユダヤ教のサタン・ルシファーに相当したことから欧米には悪魔崇拜として伝えられた神。イスラム教での名は「イブリース」

僕ジョーカーのとおきであるこの神は非常に多岐に渡って伝えられている。地方によって伝承が異なり、名前も異なっている神だ。善神にして悪神。筆頭天使にしてグリゴリの長。・・・ロマンじゃね？

またアザゼルが象徴とする孔雀、仏教では孔雀明王という名の明王が存在する。孔雀は毒蛇を食べることから命を救うとされインドの女神マハーマーユリーがルーツと言われる。道教において孔宣と呼ばれる將軍として、周の前に立ちはだかる。太公望達崑崙の道士では全く歯が立たないチート……もとい圧倒的な強さを叩きだす楊？一（＝二郎真君）や？？ですらフルボッコ。彼が封神されたのち、孔雀明王となる。

「……ってことはさ、孔雀王＝孔雀明王だしたら、東西あらゆる宗教に登場するメチャメチャ知名度のデカイ神様だよ。本地垂迹説合わせればこの神様で欧州から日本まで全部つなげるんじゃない？ いや、この神様日本に対応版あるかなんて知らないけどさ。八百万の中に一柱くらいいるだろ、って痛っ！！」

書物が指先に落下してきて黎斗が呻いた。幽世の屋敷で山のような資料に埋もれた彼は、一見どこにいるのかわからない。よく見れば、崩れた古びた冊子の中で指がもぞもぞ動いているのがわかる。足の踏み場の全くないその部屋は、黎斗が現世から持ち帰ってきたり、黒衣の僧に頼んで持ってきてもらった本が所狭しとひしめいていた。過去形なのは黎斗の不注意により天高く積まれたそれらが今しがた崩れたからだ。部屋が揺れるような轟音と共に、彼は本の中に埋没している。

「道教じゃなくて封神演技だろ。しかもまたいい加減にまとめたなお前……つかコレ人に見せる文章じゃねえよ もうちょい粘れ。あと僕ってなんだ僕って。ちゃんと名前に直せ。これは作文じゃねーの、わかってんのか？ チートとかフルボッコとか意味わかんねえ

ぞ」

隣に座り酒を飲んでいた須佐之男命が呆れている。彼は黎斗の解説の真偽に言及することはほとんどない。言及するのは書類の書き方など内容以外の面がほとんどだ。「素人にひも解きなんざ期待してねえ」と言うくらいならやらせるな、と黎斗は思う。これだけ資料があれば、もう少しまともな解説を作れそうなもののだが。途中までは（贋目に見れば）それらしかったのに、後半のまとめ方文章も酷い。これでは（三人の中で最も採点の甘い）瑠璃の媛でも赤点と言っだろう。

「結局何書こうと同じでしょ？ アーリマンが親しい相手の力を拝借できるってことと邪気化して轉移したり生命力奪えることがわかればいーじゃん。それにいい加減書物漁るのあきたし」

「……はあ」

須佐之男命は呆れることを諦めた。この馬鹿に呆れる時間が勿体ない。こんな使い方をされているのだ。世界中から集められた資料に意思があつたならきつと泣いているだろう。集めた人間も報われない。

「っーかさ、なんで僕の権能解説を「僕が」やらにやらんのだ。全部”No, Date”でよくねえ？ その方が格好いいし。何より秘密保持の観点でみてもいいじゃない。プライバシーの保護を求めろー！」

現世ではようやくプライバシー保護が叫ばれる時代になったらしい。ここまで本当に長かった。これでやっと須佐之男命にもプライバシーという単語が伝わる。今までは説明が面倒で口に出せなかつ

た言葉だ。

「一応作っておけば便利なんだよ。お前が現世で暴れて存在が公になつたときかな。正史編纂委員会の連中がオレに事情を聞きにやってきたところでこいつを突き出してやればお前の危険性は十分わかる。お前がオレの力を使えば絶対聞きに来るだろ。そつから情報
が他の神やら神殺し共に漏れれば万々歳だ。友人が増えるたびに危険度を増していく神殺し。人の輪を断ち切らない限り延々と強化され続ける存在相手に真つ向から噛み付く阿呆はそう居ないだろうよ。……夜の闇討ちはあり得るだろうがな」

今の黎斗は須佐之男命から一時的だが彼の権能を含む全ての力を借りることが出来る。彼が今までに篡奪した権能と組み合わせることで非常に多彩な戦法がとれるのだ。この脅威だけでも教えておけば黎斗に手を出す輩はまず居ないだろう。惜しむらくは借りれる相手が死亡すると能力を借りれなくなることか。

「そのためかよ！ ……つたく、現世にはケータイの充電関係以外で出ることないから無用なのに。しかも最後こわいから」

「まあそう言うな。人生何があるかわかったもんじゃない。大体お前少し前に数日間どっか行つてたじゃねえか」

そう言う須佐之男命に、どこか保護者のようなものを感じて黎斗は一人笑う。保護者。それは、どこか懐かしい響き。須佐之男命が怪訝な顔をしているが、別にそれを教えるつもりはなかった。

この会話の僅か数ヶ月後、水羽黎斗は現世へと旅立つことになる。彼がまとめた資料は、皆から忘れ去られ、今も机の引き出しに眠っている。結局埃を被っていた。

自称魔神

幽世に引きこもってから数百年が経過したある日、酒を飲む黎斗の口からとんでもない発言が飛び出した。

「やっぱり、魔王ってなんかやだなあ」

「は？」

この時点で須佐之男命は、黎斗は永遠の命に飽きて神殺しの生をやめたくなったのだと思った。だが、次の発言は彼をして想像出来はしなかった。

「だってなんか負けちゃいそうじゃん？ 魔王って最後は勇者や英雄、神によって負けるイメージが」

須佐之男命は思わず彼を凝視する。どこか頭でも打ったのだろうか、こやつは。

「……」

彼の沈黙を肯定と受け取ったのか、黎斗は持論を展開する。

「魔神とかかつこよくない？。まあ魔神が負けないとは言わないけれどさ、魔の王と魔の神くらべてみ？ 後者つて心にすげえ響かない？」

「発想が痛々しいぞ、お前……」

黎斗のあんまりな発言に須佐之男命は突っ込む気力も失せた。永久に等しい命は人の精神を蝕むらしいがこれは酷い。一回現世に出して娑婆の空気を吸わせるべきだ。良くなる保証はどこにもないが悪化はしないだろう。それともこれは酔っているのだろうか。いろんな意味で。それなら寝かしつけるのが手っ取り早いだけけれど。

「……媛さんがいりゃあ話は楽なんだがな。酔っ払いの世話押し付けられるし。エルもこんな時に限っていねえ」

自説を延々主張する黎斗に対し須佐之男命は身代わりを探すも見つからない。ヒートアップしていく黎斗を目に、須佐之男命は彼が酔っ払っているのだと認識する。自説を垂れ流すだけならともかく、それについて絡んでくる酔っ払い程、性質の悪いものはない。

「ちょっとー、スサノオ聞いてるうー？」

逐一聞いてるか確認してくる酔っ払い。勘弁してほしい。黎斗に飲ませる水を取りに動きたくても、黎斗がそれを許さない。これは覚悟を決めるしかないか。

「あーあー、聞いてるよ畜生う……」

抵抗を断念する英雄神。酔っ払いに逆らうはこの世界でも下策なのだ。相手に思う存分喋らせてとっと眠らせよう。下手に歯向かえば喧しい事この上ない。

かくして須佐之男命の憂鬱な一日が幕を開けた。酒を飲みながら行われた黎斗による須佐之男命への主張「いかに魔神という称号が素晴らしいか」は限界に達した須佐之男命が黎斗に詫びを入れることで幕を閉じる。最期の方は黎斗も朦朧としながら喋っていたのだが、酷く酔っ払ったことにより発言内容がより一層理不尽に、意味不明になり更に一々確認をとってくる程に悪化していた。酔っ払いの猛威の前には流石の彼も無力だったのだ。

屋敷へ帰宅したエル達が見たのは、部屋に転がる無数の酒瓶と、堂々と中央に陣取り大の字で眠る黎斗、部屋の隅で打ちひしがれている須佐之男命という意味不明な光景だった。須佐之男命がこんな醜態を晒すことなど、前代未聞だ。これまでも、これからも無いだろう。

以後、百年近く黎斗は禁酒をさせられる羽目になった。本人は異議を申し立てていたが、まあ自業自得である。

水羽黎斗

水羽黎斗

黒髪黒目の日本人。身長175cm、体重62kg。右利き。学業は平均的、外国語と数学が平均より若干上。身体能力は学年最下位、視力も悪い。甲信越地方出身で家族から離れて一人暮らし。家族構成は父、母、祖父、祖母、妹。父は大学講師で専攻は看護及び介護、母は量販店の店員、祖父母は農業を営んでいる。妹は今年から県内の公立高校に通学。家族中は良好。孤児であったところを数年前に引き取られた模様。

重要事項

須佐之男命の眷属。眷属でありながら須佐之男命と対等の立場のように振る舞い、また何故か須佐之男命本人もそれを認めている節がある。事実上古老の第二位。正史編纂委員会含む各魔術結社との面識は確認できず。”剣の王”サルバトーレ・ドニの剣に匹敵する槍術を修めている。隠密系の術に優れ一度逃せば発見は絶望的。他の魔術は不明だが要警戒。魔力・霊力を巧妙に隠しており全力は未知数。

以下現在調査中の案件

- ・いつ須佐之男命の眷属となったのか
彼の家系はごく普通であり「こちら側」との関係は皆無に等しい
- ・どこでこれだけの実力を修めたのか
権能こそ未使用なもののカンピオーネと互角という非常識な戦果を叩き出している
- ・嚴重すぎる秘匿性について
古老直々に水羽黎斗本人の調査を打ち切るよう圧力をかけてくるといふ異常性をどう判断するか

「とんだ大物が釣れましたねえ。エリカさんに人間がカンピオーネとやりあった、と聞いた時は四月馬鹿を疑いましたが。……しっかしこの少年、胡散臭いことこの上ないですねえ」

自身の胡散臭さを棚に上げて、甘粕東馬は上司に見ている書類を渡す。手書きで色々書き込まれており、空白の部分がほとんどない。黎斗について調べ上げられたこの紙の束は、ここ数日で慌てて作成されたものだ。

「正史編纂委員会が知らない、ということとはご隠居様の私的な友人かなにかかな？ ……いや、まつろわぬ神に人間の友が居るはずなどないか」

書類の内容を頭に叩き込んでいく。その最中にふと湧いた思考。ありえないと一蹴したこの考えこそが、真実であるを沙耶宮馨はまだ知らない。

「監視は……やめておこう。バレた際のリスクが大きすぎる。恵那が情報をくれるとは考えにくいけど、一応聞いてみることにしておこう。恵那がこんな長期間山籠もりに行かないというのも引っかけるんだよね。そこから何か掴めるかもしれない」

神懸りをする巫女は強大な力を得ることが出来る。しかし、そのかわりに彼女たちは俗世の穢れに身を汚すことは許されない。恵那も例外ではない筈なのだ。にもかかわらず、彼女は春からずっと彼

の住処に居座っている。霊山に行くこともあるようだが、頻度も期間も以前とは比べ物にならない。もはや行っていないも同然だ。上層部の一部には「清秋院家の娘が駆け落ちした」などと言う者が出る始末。一歩間違えれば分裂しかねない状況だったにも関わらず古老がこの行動を黙認していたのは、宿泊先が彼らの手の内だったからなのだろう。だが、だとすれば彼女が霊山に行かなくなったのにも理由がある筈なのだ。

「そうそう、その件なのですがね」

事の真偽はわかりませんが、と前置きして甘粕は馨にとんでもないことを言い放つ。

「彼の家、この前お邪魔してみたんですよ」

「……は？」

「彼の周囲をそれとなく探ろうとしましたらあっさりとバレてしまいました。彼の部屋でお茶を頂いてきました」

隠密に関して言えば最高峰の実力者である甘粕を容易く発見する。黎斗の脅威を再確認した馨は、黎斗が凄まじいまでの気配察知能力保持者と認識したのだが実際は異なる。

いかに黎斗でも甘粕の隠行の術を察知することは出来なかった。せいぜいが「なんか見られてる気がするなあ……」「レベルの話である。だから黎斗がもしカンピオーネでなければ、この事態は起こらなかっただろう。甘粕の誤算は、黎斗がカイムの権能”リンク・ザ・ウィル繋げる意思”を所持していたことだ。いかに甘粕といえど、大自然全てからその身を隠すことなど出来るはずもない。

「……なにをやっつてい」

「それです、入った時に感じたんですが彼の部屋は人間のものじゃありません。ラノベとかゲームが乱雑に置かれてるんですが、澱みが全くないんですよ。下手な霊山を凌駕する聖域ですよ、あそこ。最初入ったとき震えが止まりませんでした」

馨の叱責を回避するため、彼女の言に割り込んだ彼は言いたいことを言っつて肩をすくめた。

「……お灸は後回しだね。とりあえず合点がいったよ。それならわざわざ山に行くことはないだろう。不肖の部下が行ったことを謝罪するためにも直接こちらから会いに行こうか。二学期始まっているし学校帰りの方がいいかな」

甘粕が無事に帰ってきているのだから、相手はそれほど気性の荒い相手ではないのだろう。もし彼がヴォバンに代表されるカンピオーネのような存在ならば、甘粕は今頃墓地にいるはずだ。古老の関係者なのだからこちらに害をなさないだろうという予想もある。ならば彼の暴挙の謝罪を兼ねて直接会ってみた方が早いかもしれない。そんな決意を、甘粕はいとも容易く打ち砕く。

「ひどいですねえ。人をダシにするなんて。ああ、彼今居ませんよ。友達に引きずられて昨夜北海道へ旅立ちました」

「北海道？」

「なんでも夏休みの続きだとか。昨夜散々メールで愚痴ってましたねえ」

「……メール？」

「はい。私お茶した時に彼とアドレス交換したんですよ。ハマってるゲームの対戦もすることになりましたし。言ってますでしたっけ？」

「……なんかもういいよ」

ここまで相手の懐に潜り込めた甘粕を称賛すべきなのだろうが、素直に称賛できない馨だった。目の前で「吹雪？ …… やっぱ冷凍チームですかね。特性はシエルアーマーか」などと言い出した男を見れば、しょうがないのかもしれない。

「だが、これで他組織には一歩リードかな」

黎斗はカンピオーネとは違う。警戒しすぎる必要もないとわかってはいるのだが、サルバトーレ・ドニと打ち合える程の手練れを野放ししておくのは危険すぎる。当人にバレないように首に鈴をつけるのなら、甘粕のやり方が一番良いのかもしれない。何より、これから先彼が神を殺める可能性は非常に高い。日本に二人目のカンピオーネが現れれば万々歳だ。正史編纂委員会自分たちが強大なパイプを持つ神殺し、というのは他の魔術結社に対し優位に立ち回ることを可能にしてくれるだろう。草薙護堂センパイとの仲も良好。なんとまあ、おあつらえむきではないか。

「こんな考え、お偉いさまに聞かれたら怒られそうだけどね」

一応繋がりを強固にするために甘粕友人Aだけでなく愛人も送っておくべきか。年頃の男子なら美少女をつければ一発だろう。ハニートラップ万歳。

「って、恵那が居たんだけ。じゃあ十分か。……ふふっ、しかし我ながら罰当たりな事考えてるなあ」

あとは、水羽黎斗が神殺しとなるのを待つばかり。そんなことを考えながら沙耶宮馨は一人苦笑する。

「へくしっ!」

「なんだなんだ黎斗、風邪か？」

「待て、反町。そんなことあってたまるか。ここで風邪引いたら新学期そうそうにピンチじゃん…… 噂だよ噂」

「こういつ時の噂ってのはロクな噂じゃねえぞ、きつと」

名波の言うとおりだと黎斗も思う。嫌な予感がピンピン来ている。虫の知らせというやつだろうか？ こちらは昨夜敵さんと戦って疲れているというのに。今回は相手が精神攻撃系だったので物理被害がほとんど無く、魔術組織への隠蔽工作も楽に終わったのが救いだ。被害者全員の記憶が無いおかげで黎斗がした隠蔽工作など必要最低限でしかない。しかし一難去ってまた一難。もうウンザリだ。このエンカウント率はおかしい気がする。

「多分寝不足だよ。昨日遅くまで眠れなかったし」

「……夜コッソリと外出してお姉さまとよろしくやってなかっただろうな!？」

なぜそうなる、と事実無根な反町の問いに言い切れなかったのは悪魔狩りに外出していたからで。ばれないだろうと思っていた事実が一部あつけなく露見したことに黎斗はわずかに動揺する。

「アホか、反町。黎斗がそんなことするワケねーだろ、と冗談は置いておいて、風邪引いたらお前親御さん心配するだろ？ 早く治せよ?？」

絶妙のタイミングで援護してくれた高木が居なければ、事態は更にややこしくなっていただろう。

「ありがと、そーするわ。みんな心配性だからねえ」

「ま、長男が一人で上京してくれば心配するのも当然だろ。むしろオレは黎斗一人を都会に送り出したことに驚くぞ」

家族が居ないままではマズイと考えた黎斗が記憶改竄と洗脳の呪術を用いて偽造家族を作り出したのが、飛行機に乗る数日前。記憶改竄をミスったのか元からなのかはわからないが、親の黎斗に対する想いが重い。これが本当の家族なら気にならないのだが、偽りであることが黎斗の良心を刺激する。

「せめて立派な長男を演じないとな。あと仕送りか……」

「あ？ 黎斗なんか言ったか?？」

「んーん、なんでもないよ。大丈夫。北海道の土産も郵送するかな」
今、委員会で自分の正体が論議されているとも知らずに、黎斗はお土産コーナーへ歩き始めた。知らぬが仏とはこういうことを言うのだろうか？

お盆

「あーづーいー」

「お兄ちゃんだらしないよ」

「そう言ってやるな。都会のクーラー生活に慣れた黎斗にこの大地は辛いだろうさ」

お盆。実家に戻った黎斗は熱気に負けて倒れていた。扇風機の前でグダグダしている様は、とてもじゃないが恐れる魔王に見えない。扇風機に向かって「あゝ」などと叫んでいる神殺しが見れるのは後にも先にもここだけだろう。ちなみにエルは留守番。連れて行くとしたのだが「私をまたリュックに押し詰める気ですか!？」とキレられて断念したのだ。

(洗脳してなきゃホント寛げるんだがなあ……)

洗脳していることによる罪悪感がひしひしと募り、心があまり安らがない。

「あ、お父さん。はい、コレ宝くじ当たったからお裾分け」

「また！？ お兄ちゃんどれだけクジ運良いのよ…… 今度は一体何等？」

少しでも家族の役に立てるように、マモンの権能で得た財産を換金し渡す。といっても現金数百万を稼ぐ高校生など目立ちすぎてしようがないので、宝くじが当たったことにしているのだが、流石にやりすぎたか。義妹が呆れた目でこちらを見てくる。

「何等だったっけなあ。そんなこと忘れたよ」

「お父さんとお母さんの稼ぎより黎斗の宝くじの方が稼ぎが良いわねえ」

義母も苦笑いを隠さない。春と夏だけで一千万近くを当てているのにこの対応。これは器が大きいと言えるのだろうか。少なくとも選んだ家族が強欲まみれでなかったことは幸運だった。

「運が良かったんだよ」

「運、ねえ。私、最初はお兄ちゃんが犯罪でも始めたのかと思ったけど、犯罪に走ってもこんな額なかなか貯まるはずないし。ホントお兄ちゃん神がかつてる運だよな」

「お義兄様をなんだと思ってるんだ…… 犯罪なんかしませんよ」

真つ当な稼ぎか、と言われれば疑問符が付くが犯罪には接触していない筈だ。相場より若干安値で宝石を市場に流しているのでその筋の人間にとってみれば不倶戴天の敵かもしれないが。

「黎斗、お客様。玄関で待っていていらっしやるから早く行っておあげなさい」

そんな兄妹のじゃれあいの中。義理の祖母……もとい祖母の呼びかけに応じ、玄関まで出た黎斗を迎えたのは予想外の人物だった。

「媛さん……？ な、何故に……」

玻璃の媛は涼しげな声でクスリと笑う。

「お久しぶりです、黎斗様」

黎斗より早く、二人の人物が素っ頓狂な叫びをあげる。

「「れ、黎斗様あ！？」」

「義父さんも母さんも煩い。近所迷惑でしょーが」

振り返れば義妹は口を金魚のようにパクパクさせ、声を出す様子は全くない。

「媛さん、人が悪いぞ。らしくない。こーなることくらい予想して

「いたでしょ？」

「申し訳ありません。早期に隠密かつ確実に黎斗様に接触する方法がこれ以外に思いつきませんでした」

「念話でここまで言われればいくら黎斗とて重大用件と気づく。この距離でなら念話の盗聴もまずされないだろう。」

「……おっけー。部屋に行こうか。僕の部屋で良い？ お茶くらい出すよ」

階段を上っている最中に下から「お、お兄ちゃんが亜麻髪美人の彼女を連れてきたー！！」などと悲鳴が聞こえるが、聞こえないふり。嗚呼、今日の晩御飯が怖い。みんなから尋問されそつだ。

「申し訳ありません。幽世ひびきの黎斗様のお部屋を掃除させて頂いたのですが、黎斗様の権能を記載した用紙が紛失しております」

「部屋……あーギャルゲエロゲ乙女ゲーで足の踏み場がない状態だったのに。って、は、入ったの！？」

女性に入られたらアウト確実な部屋である。下手したら男性でも引く可能性がある混沌領域カオス領域。天井に届くまで積み重ねられたゲームパベルの山は、数知れず。ある種の芸術すら垣間見られる開かずの間。そこに入ったのはよりにもよって玻璃の媛。黎斗の精神ダメージはいかほどのものか。大半はエルの間人変化の為の資料だが、黎斗の私物もあつたわけで。

「うわあああ……」

頭を抱えて転げ回る黎斗に、生温い視線を向ける媛。

「まあ、黎斗様も殿方ですしそれらは全て処分しましたし・・・って違います違います。権能を書いていただいた書類を紛失してしまひすみません。古老のいずれかが持つて行ったものだと思うのですが・・・」

油断しました、と申し訳なそうな表情の媛。ゲームを処分したことをサラリと言うあたりちゃっかりしている。

「処分・・・ま、まあいいさ、うん。権能の紙もさ、なんとかなるっしょ。あれはもともと僕が表舞台に立った時用だもの。見られても致命傷とならないレベルでしか書いてなかったと思う。^{アイルマン}切札、^{サリエル}邪眼、^{ヤマ}不滅、^{スリーヤ}主力あたりは書いたかもしれないけど。ただ僕が神殺しと公表されるのは困るから各方面の間諜を増やしてもらえると嬉しいかな」

「畏まりました。仰せのままに。今回はまことに申し訳ありませんでした」

玻璃の媛の謝りっぷりはこちらが罪悪感を覚えるレベルだ。本当、美人は得である。大きく構えていられるのも、古老の面子なら須佐之男命の下で一枚岩であるだろう、という考えがある。それならば須佐之男命の友人たる黎斗の扱いも決して悪くはない筈だ。古老など須佐之男命以外では黒衣の僧と玻璃の媛君くらいしか知らないが。

「用件はもう一つ。黎斗様の保険証を始めとする正式な身分証作成が終了いたしました。よほどのことがない限り偽造発覚はないかと」

たしかにこれの受け渡しをするなら玻璃の媛に出てきてもらわねばならないと、黎斗は一人納得する。なにせ黎斗が神殺しであることを知る関係者の数は少ない。これは機密保持には有利に働くが人員の面でみれば圧倒的に不利だ。偽造を実行した方々が探ったところで真相には辿り着けないように配慮してあるに違いない。幽世に呼び出す、という手を用いなかったのは気を使ってくれたのだろうか。わざわざ面倒くさいことをしてくれて感謝である。

「確かに。ありがと。これでようやく堂々と旅行が出来る」

各種身分証明書を受け取って黎斗は安心したように息を吐く。これでもうやく男性職員の受付も行ける。いままでディオニユソスの権能”マインデス葡萄の誘惑”頼みだったため女性職員が受付に居なければアウトだったのだ。最悪の場合は認識障害で強引に侵入していた彼にとってこれでようやく大手を振って各種機関を利用できる。

数日後、夏休みから二学期にかけての北海道旅行が計画されていることをしった黎斗は絶叫を上げるが、この旅行が新身分証の初陣となる。

§ 小ネタ集 part 2 (後書き)

三馬鹿暴走ネタ(限度をわきまえない)もやりすぎ感があるので自重しようと思っただんですが……
あと一回お見逃しを(笑)

強引にカイムの権能名ねじ込んでみました(笑)

ごめんなさい、超訂正です

V S ペルセウスの時の宣言覆しちゃってすみません(滝汗)
すごく冷静に考えてみたらDNA検査まで騙すにはもっと広範囲かつ強力な洗脳スキルorハッキング系(ハイテク系?) 権能ないと無理ですよー、と

感想くださった方々の返信と矛盾しまくりですがご勘弁いただければ幸いです

ご意見下さった方々、ありがとうございます

願わくばまた何かあったら容赦なく突っ込んでくださると嬉しいです

ついでにルビ消し忘れ修正(汗)

9/1、小ネタ追加です。新たに一つ立てるほどの文量も無く、貯めようとしたらますます時期外れになりそうなので(爆)
タイトルが内容とほとんど関係ありません。ホントはお墓参りするはずだったんですが……どうしてこうなった

§ 17・5 夏休みの終わりに（前書き）

6/30日に小ネタ part 2 追加修正行いました、すみません
よく考えた結論は僕の考え不足で落ち着きました。これからもご迷
惑おかけしますでしょうがよろしくお願いします

……実はついさっきまた part 2 修正しました（汗
ルビを削除したただけなんですけど割と重要だったり。

§ 17・5 夏休みの終わりに

「グベえ」

蛙が潰れたような声と共に、黎斗の体は吹き飛んだ。地平線の彼方までノーバウンドで飛ばされていく様子はまるでギャグアニメ。少し見たくらいでは生きているのか死んでいるのか判別できないだろう。

左腕？ さつき天之羽々斬で切り離された。どこに飛んで行ったのかわからない。

右腕？ スケルトンと見間違える程に、骨以外が全く見えない。その骨すら、ヒビが入ったり折れていたり。

右足？ もう粉碎されている。ここまでくると原形を保っているだけで奇跡だろう。

左足？ 腿から下は須佐之男命によって発生した暴風で行方不明。

そして今、頭と胴体が天之羽々斬に両断され、左半分の残骸が暴風で飛ばされた。やはり空中浮遊している状態では回避は厳しい。浮遊が苦手だから、どうしても行動が遅くなる。

普通ならば、いや黎斗以外ならば既に死亡しているであろうグロテスクな光景。左半分の頭をくわえて、エルは懸命に黎斗の元へ走っていく。須佐之男命もそれを止めることはしない。流石にこれは放っておけば彼の命に関わることだ。代わりに彼は酒を飲む。万が一、いや億が一酔っ払っても「今の」黎斗相手なら負けはない。普段ならいざ知らず再生以外の権能不使用な上に呪力魔力も底を尽き、身体に刻まれるのは無数の傷。この状態で勝てるほど須佐之男命は甘くない。そもそも勝てるならば、数百年前の殺し合いは引き分けでなく、黎斗の勝利で幕を閉じているだろう。

「マスター、これ左半分です。いくらマスターでも頭がち割られたら十分程度しか生きられないんですから、優先的に再生してください」

左半分を右半分の上に置きながら懇願する。いくら黎斗が化け物じみた生存能力を持っていても、頭を失ってなお数時間の生存は出来ない。頭を再生しようにも、現在の状態では満身創痍すぎて再生に回す神力がほぼ無いのだ。一から再生出来ないということは、エルから左半分を持ってきてもらえなければ死亡した可能性があることを示している。

「ん…… サンキユ、エル。流石に死ぬかと思った……」

頭をくつつける。これで死亡の危険性は無くなった。全身に力を巡らせ再生を続行。原型が無い足を優先的に修復する。動けなければ話にならない。

「いやー、やっぱり呪力による肉体強化だけじゃスサノオに勝てないか」

この男、少名毘古那神の身体すら使用せずに、権能封印状態で須佐之男命に挑んでいたのだ。ヤマの再生だけは使っているがそれはご愛嬌。使わなければ死んでいるし。鎧袖一触されたのもむべなるかな。サルバトーレ・ドニと戦い知った自身の鈍り具合が、よほどショックだったのか。

「ロンギヌスの治癒も併用して使ってもこれが精一杯か」

「……普通は両足を一から再生するのにかかる時間が数分とかあり得ませんよ。神力も、呪力もすっからかんなのに……」

エルが呆れているが華麗にスルー。白骨化している右腕にロンギヌスを掴み歩き出す。神経が無いから魔力で強引に動かす。さっきので二十三連敗。

「さて、もういつちよ行きますか」

気合を入れて立ち上がり、黎斗は須佐之男命の元へ向かう。ボロ負けは避けられないだろうけれど、もう少しで一撃を叩き込める気がした。

「……それ、絶対おかしいから。神殺しの王様相手に勝てなかったからおじいちゃまと鍛錬つてれーとさん何考えてるの？ いくられーとさんが強くても勝てるわけないじゃん」

変な物を見る恵那の視線もやっぱり流し、夕食を一心不乱に食べ続ける黎斗。動きすぎたのでお腹がすいた。このカボチャの煮物、甘くてとてもおいしい。今度かぼちゃを育ててみようか。

「恵那さん、言うだけ無駄です。言っただけわかるようなら数回ボロクソになったところで悟りますから」

「だよねえ。でもおじいちゃまと戦える、つてか戦おうとするのはすごいよっぱり。それが数分で惨敗だったとしても」

「さっきからボロクソだの惨敗だのひつどい言い方だね…… 反論

できないけどさ」

我が家の女性陣は今日も厳しい。スサノオにぼこられているのは事実だが、もうちょっと言い方があるのではないだろうか？ 流石に悲しくなってくる。

「大丈夫。だんだん身体が慣れてきたのがわかる。次は一撃入れてみせるよ」

「まだやるんですか……」

結局今日は一撃入れる寸前に失神してしまった。まあ一撃叩き込める寸前までいけただけでも上出来だ。これなら全盛期に戻る日も近いかもしれない。

「おじいちゃますつごく強いよ？ こんだけやられればもうわかってると思うけれど」

「次はいける。媛さん謹製の”とっておき”も完成したし」

背後の小物袋を見やる。中身は超極細のワイヤー。全長数十mはあるだろう。黎斗の得物その三だ。双剣は手ごろなものが見つからないのでパス。瑠璃の媛に無理を言っ準備してもらった品物だ。これの性能に媛や黒衣の僧は疑問を感じているようだが、須佐之男命だけは笑っていた。そんな代物に対し恵那は前者の感想も持ったらしい。

「ソレ使えるの？ 恵那にはよくわからないんだけど」

「系使うの随分久方ぶりですね」

「まーね。コイツは結構いいよ。実戦で使う前にスサノオで最終調整しなきゃだけど。神すら殺してみせましよう、ってね」

「おじいちゃまで調整……」

恵那が複雑な表情なのはしょうがない。なにせ日本の英雄神相手の勝負で調整すると言っているのだから。それを抜きにしても各上の相手に調整などと言っているのだから呆れないだけ上々だ。

「スサノオ様々だよ。第一スサノオでもなけりゃ相手にならないし。今度またなんか酒持ってたかなきゃな」

「だーかーらー、それが既におかしいんだってばあ。……なんでおじいちゃま相手にそこまで出来るかな」

「^{こいつ}ごちそうさまー。とりあえず学校のグラウンド行ってくるわ。ワイヤーの使い方思い出さなきゃ」

神を相手にする前に使い方をある程度思い出しておかねば。いかに黎斗とて手も足も出せずに蹴られる趣味を持っていない。数百年ぶりだから念入りに練習だ。ワイヤーは不審物ではないし、幽世より現世のほう障害物などの関係で操作は難しい。ならば難しいほうで特訓しないだろう。

「あ、待ってれーとさん。恵那も行くよ」

「え？」

「本当にそれが強いのかいまい恵那には信じられないし。それに

れーとさんも相手が居たほうがいいでしょ？　ということで一手御指南お願いしまーす」

あつという間に天叢雲剣を持ち出してくる恵那。その身のこなし、まさに疾きこと風の如く。

「まあいいか。槍無し双剣無しワイヤーのみ、でいけば大丈夫かな。一本取れたら恵那の勝ちね」

「れーとさん余裕だねえ。恵那も負けないよ」

そういう巫女の瞳は派手に燃え盛る炎を映しているようだった。ハンデをこつてりつけられた、と思っっているのだろう。

「巫女様のお手並み拝見といきますかね」

「はあ……はあ……何、コレ。こんなのでありなの……？」

一時間後、満身創痍の恵那と無傷の黎斗がグラウンドにいた。

「降参？」

「っ、まだまだあー!!」

三日月を背にして笑う黎斗へ、突撃。直感で動いた恵那だが、こ

のルートならば木々が邪魔をしてワイヤーも上手く扱えないであろうことを無意識に判断していたのだろう。

「ははっ、甘い甘い。別に森の中だろうが深海だろうがあんま関係ないんだよねえ」

「嘘お!?!」

黎斗まであと数m。そこでワイヤーに全身を雁字搦めに縛られた彼女はサッカーゴールへ投げ飛ばされる。ワイヤーで投げ飛ばすのだから器用なものだ。

「ええー…… れーとさん一体どうやってるの?」

ゴールに絡まった恵那がずるとネットから脱出を果たす。天叢雲剣などもはや泥まみれだ。神々しさなどとうに消え失せ、神器と一見しただけでは見抜けないだろう。

「ワイヤーに魔力を通して自在に動くようにしてるの。操作は慣れかな。んで、あとは注ぐ魔力量を調節しながら指先の動きで相手を束縛又は切断と」

「……聞いた恵那が間違ってた」

顰め面で神剣を握る。恵那はまだ、諦めていないようだがふらついている。そろそろ限界だろう。

「そろそろ帰ろう? もう訓練十分だよ。ありがとう」

「最後にもう一回……!!」

体に鞭打つて立ち上がる恵那。天叢雲を構える彼女の瞳に迷いは無い。

「これが最後だからね」

「最後か。なら無茶出来るね。絶対れーとさんに一泡吹かせてみせるから」

不敵に笑う恵那の様子に、黎斗は嫌な予感を感じる。

「え？ それってどうい」

「天叢雲剣よ。願わくば我が身を……」

「うわ、ちょ、待て待って！！ 結界張こんかくってない場所でソレはやバイから！！」

慌てふためく黎斗を余所に、恵那は悠々言葉を紡ぐ。

「ああ、もう！！ 塩は……もってきてねえ！？ 僕の馬鹿ー！！」

我流形成しかないか、我が前にラファエル。我が前にミカエル。我が前にガブリエル。我が前にウリエル……！！」

東西南北を起点とした黎斗の呪力が渦を巻き、急速にグラウンドを覆っていく。不可視化及び魔力探知遮断の結界だ。攻撃に対する防御機能は皆無だが、相手に攻撃を何処にも当てさせなければ良いだけの話なのだから問題は無い。

「ムチャクチャやるなあ。……付き合う僕も大概か」

「いくられーとさんでも、これを防げるかな!？」

恵那の振るう、凄まじい速度の太刀を難なく回避。ワイヤーで天叢雲剣を絡め捕り遠くへ飛ばす。投げられた神刀は弧を描くようにバスケットゴールに入っていく。

「あ、ラッキー。入った入った。狙ったワケじゃないんだけどな。ついでに恵那も捕獲っ」と

相棒を失い雁字搦めに束縛された恵那に降参以外の術は無い、そう思った黎斗は仰天する。

「まだまだあ!！」

「な!？」

肉を切らせて骨を断つというのだろうか。須佐之男命から借り受けた莫大な力に物をいわせて、出血しながらも力尽くで束縛から逃れる。ワイヤーを紙一重で回避しながら突き進んでくる恵那に対する黎斗の反応は、面白い程に慌てふためいている。てっきりここで終わりだとおもったらしい。

「え、ええ!？ ねえ、ちよっちょよ、デタラメだろこんなの!！」

「れーとさんに言われたくないよ! それに窮鼠猫をかむ、っていうでしょ。最後までわからないんだから!！」

「しもつとも」

ずっと隅で傍観していたエルがぼそりと呟く。

「マスターにデタラメなんて言われるのは可哀想ですよ」

その言葉の終わらぬうちに、恵那の身体は大地にひれ伏していた。黎斗のワイヤーが、恵那の身体を捉えたのだ。

「あつぶねえー。……しかし恵那で見切れるんだっいたら神相手は精度不足かな。要練習、つと」

「お取込み中しませんかマスター、この場どうするんです？」

「え？」

なにが？と首を傾げれば、エルが恵那を尻尾で指した。

「結界は解除すれば済みますし問題ないでしょう。でも恵那さんどうやって連れて帰られるのですか？ 気を失ってますよ。傷ついた美少女を背負って深夜に歩く男。不審者ですよねどう考えても」

「……」

恵那をみやるとなるほど、確かに気を失って眠っている。服がロボロで目のやり場に困る状態。服対素肌が3：7と地球の陸海比などとくだらないことを考え現実逃避している暇はなさそうだ。そんなあられもない姿で巫女様は倒れていらっしやるわけで。これは確かに背負って歩けば職質は免れないだろう。下手したら強姦魔と間違われかねない。

「結界張って正解だったな。明日から外歩けなくなるトコだった……」

…」

「最後の神憑りで一気に服が消滅しましたね」

「ねー。試合なのにわざわざ服を破ってまで勝ちに来なくても……」

もしやこの子は恥じらいというものが無いのだろうか。もしそうならば今度瑠璃の媛に躑けてもらわねばなるまい。そんな感想を抱きつつ黎斗は恵那を背負って歩く。

「でも恵那さん、最近好戦的ですよ？ 最近は模擬戦の頻度前とは大違いですよ」

「だよ。それは気になった。別に僕を殴りたい、というような理由で挑んでくるわけでもないし。強くなりたいたい理由でもあるのかな？ こっそり式神作成をしているのも気になるんだけど。しかも種類が危害を与える類の物騒な代物だし。それにそんな種類だからっていつても隠さないで堂々とやればいいのにさ。なーんか、いやな予感がする」

「マスター、明日から北海道でしたよね。私だけでも残りますよるか？ 例の呪符使えば遠隔通信位私でも可能になりますし」

「うーん、頼める？ ヤバかったらすぐ戻るから。昼間なら護堂の”風”でエルのとこに、夜はアーリマンの邪気転移で家まで戻ってこつて」

「了解です」

これで安心だ。エルが入れば異変が発生した場合でもなんとかな

る。安心した黎斗は、北海道へと思いを馳せる。

「御老公、やはりそれはおやめになられた方が」

「今しかねえだろう。幸い黎斗^{オニ}は外出だ。鬼の居ぬ間になんとやら、つてな」

「左様。媛よ、新たな羅刹の君を試すのは今においてありませぬぞ」

美貌の顔を曇らせて、瑠璃の媛はため息を吐く。須佐之男命は意思を曲げるつもりはなさそうだ。

「……私はこの試みが行われないことを願います」

今说得するのは諦めて次の機会に回そうと考えた瑠璃の媛だが、その機会が訪れないことを知っていたならば、結末は変わっていただろう。

§ 17・5 夏休みの終わりに（後書き）

技量が全盛期でもやっぱり大騎士クラスの身体スペックじゃ権能無しでもスサノオにや敵わないでしょう、というネタ（？）

あ、ラストちよっぴり暗めですが別に暗くなる予定はありませんのであしからず（爆

§18 新たなる刺客達、もとい転校生&居候(前書き)

まさかのエリカが(今回限定)ヒロイン化(爆
エリカのキャラ崩壊が恐ろしいハメに(汗

どうしてこうなった・・・？

§18 新たなる刺客達、もとい転校生&居候

「あれ？ 僕の席……」

三馬鹿を連れて凱旋したのがついさつき。欠席よりは遅刻の方が良いだろうと三人を引きずって学校に向かった黎斗を待っていたのは、自分の席が消えているという事実。今まで黎斗が座っていた席には、クラスメイトが座っている。三人の暴拳を阻止できなかった罰かなんかのだろうかこれは。理不尽極まりない。

「あ、水羽君ひさしぶりー。新学期そうそう席替えがあったんだ。クラニチャールさんが転校してきたから」

「くらにちゃーるさん？」

どうやら罰云々は完全に被害妄想だったらしい。しかしクラニチャール。聞きなれない名前だ。語感は何外国っぽい感じがする。ということつまり外国の人だろう。はて、城楠^{シロキ}学院はいつから国際色溢れる所になったのだろうか？ 黎斗の記憶では学校で外国人が二人も同じクラスになることなどまずない。天文学的数値の筈だ。それとも関東の学校では常識だったりするのだろうか？

「男子か女子かはわからないけれど、随分急だな。今年に入ってから転校生三人目だぞ。エリカ様、黎斗、次がクラニチャー……」

徐々に尻すぼみになっていく名波。彼の視線は教室の前を捉えたまま動かない。

「どしたん？ 一体何が……あれ？」

つられて振り向いた黎斗の視線に移るのは、護堂と親しげ（に見えるが若干硬い気がする）に話す銀の髪の美少女。どうやらあの少女がクラニチャールのようなようだ。しかし、どこかで見たような気がする。あんな美少女、一回見たら忘れそうにないものなのだが。

「……あー。あのじいさんと戦った時の娘か。っーことは護堂のフラグだろうな。ここまで追っかけてくるとはなんとまあ」

たしか彼女の技量はエリカとほぼ同等。大騎士級だった筈。あの年齢では破格といえる。今から将来が楽しみだ、などと考えこれでは自分が年寄りのようだと思われ、苦笑する。あれだけの実力を得るのにどれだけ苦労したのかを考えると頭が下がる。

「護堂ハーレムは着々とでっかくなってるようで……」

「……非モテの敵め　！！」「」

ハーレム、という単語に反応し三人が護堂に襲いかかる。

「うお！？　お前らどうした!?!」

「どうした、と聞いてくる護堂もどうかと思っただけだね」

「あはは……同感だわ」

嫉妬に駆られ突撃する三人をクラスメイトとともに見送って、黎斗は自分の新しい席を探す。気がかりは休んでいる間に授業がどこまで進んでいたかだが、苦手分野筆頭の物質量やらなんやらは一学期の話だ。授業も追いつけなくなる心配はないだろう。

「まあモテる代償だとして嫉妬の視線を浴び続ければいいさ」

席を見つけると、護堂達の喧騒をしり目にノートを開く。あの少女の様子からすると魔術結社本部からの要請か何かだろう。エリカも赤銅なんかの魔術結社所属だった筈だし。その対抗馬かなんかと予想できる。それを頭の隅に置いて観察すれば彼女と護堂の関係は主従関係に見えるし。だから、このフラグが恋愛フラグかどうかは微妙なラインではないだろうか。こんな微妙なフラグにまで噛み付いていたらこっちの精神が持たない。

「フラグが本物になったら噛み付けばいいや。護堂頑張れ」

「応援するなら助けてくれ!!」

自分には関係ないとばかりに気楽にメールを送る黎斗。護堂の訴えは右の耳から左の耳へ抜けて行った。

「……………」

「あ、れーとさん。やっほー」

「……………」

放課後。護堂に”護衛”として連行された黎斗は、この学校にいない筈の人物と会ってしまった。

「……え？」

「あー、そういえば黎斗も”そっち側”なのよねえ……」

「……なんでこんなことになってんの」

かろうじて、それだけを絞り出す。困惑した様子の護堂より、達観した様子のエリカに聞いた方が早そうだ。

「……黎斗が知らない、といことはこれは総意ではないのね」

「総意って何よ。っーかこれ何よ。どうなってんのか説明を求めるッー!!」

「うんとねー、恵那は祐理が草薙さんのお「恵那さん!?!」……えー、別にいいじゃん」

慌てる祐理に口を塞がれた恵那は不満そうに口を閉じる。心底残念そうな顔だ。

「大体わかった。……僕はまーた、惚気に巻き込まれたワケね。いい加減滅びるハーレム男」

「なんで矛先が俺に来るんだよ!? 絶対おかしいだろ!!」

護堂の決死の訴えを脳内裁判所は満場一致で否決する。恵那がだいぶ前に言っていた友達の手伝いとはおそらくこれだろう。須佐之男命一（というか古老の面々）が恵那に手伝わせる用事なんてそんなに多くはない筈。数日で済むような簡単な用事なら長々と黎斗の

家に宿泊させる必要など無い訳で。つまりめんどくさい又は長期戦を覚悟する必要があったということ。恵那が来た時期もおおよそ護堂の存在が公に明るみに出たころだ。時期も一致する。

「おかしくありませんー」

祐理をちらりとみやるが、顔を真っ赤に染めた彼女は恵那の方に注意を向けていてこちらに気付く様子はない。純真無垢とはやはりよいものだ、などと頭の隅でバレたら周囲の人間に侮蔑されそうな煩惱を全開にする黎斗。

「にしても、このお茶、おいしいねえ。こうやってまったりお茶を飲むのは久しぶりだわ。いつも冷やした麦茶だったからね」

「だーから、恵那がお茶入れるよっていつも言ってるのに。お湯を沸かすところからやるのと麦茶のパックを入れ物に投げ込むのじゃ味に違いだつて出るに決まってるじゃない。もっともれーとさんの場合アテナ様がいらっしやった時以来飲んでなかったでしょ。久々に飲んだから尚更おいしいと感じているのかも」

「「「……!!?」「」」

あ、と思った時にはもう遅い。周囲からの視線が凄まじいことになってるのが嫌でもわかる。「アテナってすごい名前だよなー。まるで神様みたい」などと呑気に会話してるその女子。”まるで”神様じゃない、”本当に”神様なんだよ。とツツコミたい。無遠慮な視線に晒されている今はそんな発言が出来そうにないけれど。

「あの、黎斗さんと恵那さんはどういう関係で？」

「うんとねー、家主と居候？」

驚いた。爆弾発言が投下され場が混乱するのがこんな時のお約束セオリだとおもっていたのだが。冷静に考えれば恵那の「家主と居候」発言も十分爆弾発言なのだが、ラブコメやらラノベを読み漁ってきた黎斗にとってはまともな発言に聞こえてしまう。なんだかんだ言っているが一番驚いたのはアテナ云々が総スルーされたことだったりする。

「うん。恵那の親戚の方からちよいとワケありだね」

安全発言、というわけでもなく社会的に問題がありそうなので細かいところを補足する。周囲の雰囲気鑑みるにアテナ云々はどうかやら流されたらしい。こつちの方が重大な気はするのだけれど。古老云々はエリカ達なら勝手に察してくれるだろう。

「ふーん。ご家族の方もそれには納得なさっているのよね？」

「っーかじーさんから打診されたよ」

「……!？」

「エリカ、難しい顔してどうしたんだ？」

「なんでもないわ、護堂。……黎斗、あとで話があるのだけれど時間いい？」

「まずはお礼と謝罪を。ミラノではありがとう、助かったわ。あと貴方の正体を拡散してしまって悪かったわね。つついらしくなく感情的になってしまったわ。今まで隠し通されたことに対しての悔しさから我を忘れて、つい」

(その「つい」でスサノオ達はエラく苦労したんだよなあ……)

この件に関して今更エリカに文句を言ってもしょうがない。アンネさんドレアと違って口止め忘れてたし。それに「一応カテゴリ”人間”で洗脳してある。カンピオーネである、と万が一バレた時の混乱よりは格段に影響は少ない筈。須佐之男命に迷惑をかけるのは現世こゝちに住む、と決めた時に覚悟していたことだ。あっちも覚悟してくれていただろう。多分。

(ま、バれるのがこんなに早いのは予想外だったんだけどねえ。百年とは言わないけど数十年は騙しきれると思っただけ)

「ああ、うん。今度から気を付けてー？」

事なかれ主義を最大限に発揮してなあなあで済ませようとする黎斗にエリカが安心してくれればすぐに終わっただろう。だが若干の緊張を含ませた顔から呆れ顔に変わったエリカは口を再び開く。

「貴方ねえ。張本人の私が言つのもおかしな話だけどちょっと投げやりすぎない？ どうでも良いようにしか聞こえないわよ？ バレたら困るでしょ。……私に言えるセリフでは決しないのだけれど、それは置いておいて。本当にごめんなさい。さっきの場では言わなかったけれど祐理からお礼の手紙を預かっているわ。直接あの子に御礼参りさせると貴方の立場が大変なことになるかな、と思っ

てこうしたのだけれどよかったかしら？」

はい、と渡された手紙をカバンにしまう。年賀状以外で女子から手紙を貰ったのは初めてだ。

「ご慧眼御見せしました。マジで助かった、ありがと。護堂繫がりで昼ごはん一緒に食べてるとはいえあんま話さないからね。昼休みとかに話をすればいらぬ注目浴びるし」

その点エリカは裕理と違って同じクラスだ。機会さえあればそれなりに話す。下手をすればクラスメイトで女子で一番話すのは彼女ではなかるうか。それはつまりクラスの人間とはあまり話さないことを意味している。自分の交友関係の狭さに苦笑いしか出てこない。

「あと護堂には貴方の事何も言っていないわ。祐理とも話したのだけれど貴方のこと、護堂には話さないでおくから。仲の良い友達なんでしょ？ 自分の口から言いなさい」

傍から聞けばいいセリフだな、と思う。だが。

「魔術結社に僕の正体バラした人間の台詞とは思えねえなあおい」

「だから、あれはついつい我を忘れてだったの！！ そう言ってるでしょ！！ 私だって、そんなつもり本当はなかったわよ！！」

我を忘れる、とは今のようないりかではなかるうか。らしくなく叫ぶ彼女を唾然と見守っていると、我に返った彼女はわざとらしく咳払いを一つ。ほんのり顔が赤い。

「ッ〜！！」

流石元ツンデレ（だったと思われる）美少女、恨みがましくこちらを見てくる表情の破壊力が半端ない。なんかこっちが罪悪感を感じてしまう。これだから、美人は本当に得だ。

「護堂ってカンピオーネなんでしょ？ これからもきちんと支えてやりな。スサノオと話してよく聞くのは、カンピオーネってのは戦いを避けられないことだし」

最初は様をつけていたのだが、気付けば須佐之男命を呼び捨てだ。直す気力も起きないしこの分ならカンピオーネに敬意を払わなくても構わない筈。護堂くらいなら普段通りに接して大丈夫だろう。開き直って告げるは忠告。エリカの表情に罪悪感を感じてしまったのだ。たまにはこのくらいの気まぐれだっていいだろう。須佐之男命に聞いたなんてのは嘘っぱち。実体験とシルクロードを旅する間に聞いた話だ。嘘をつくときのコツはひと握りの嘘を真実で固めることらしいから須佐之男命の名前を借りておこうか。

「そんなこと、言われるまでもなくわかってるわ。私を誰だと思っっているの？」

自信が溢れ出るいつもの顔だ。やっぱりエリカはこの顔が一番似合う気がする。夕日を背に微笑む彼女は、とても魅力的だった。

屋上にエリカと二人でいたことで、帰りに黎斗は三馬鹿の吊るし上げにあうことになる。

§18 新たなる刺客達、もとい転校生&居候（後書き）

エリカの行動に言い訳を追加してみました

……ええ、そうとう無茶言ってるのはわかってます（汗

アーリマンの権能を拝借じゃなくて「他人と仲良くなる」とかにしておくべきだったか（爆

ま、上記にしたところでキャラ崩壊の免罪符になるワケじゃないんですが

ごどーさんに対する断罪会が絶賛難航中です（苦笑
本文をどうやって変えろと……

§ 19 嫉妬団再び（前書き）

夏です。

暑いです。

熱射病にならないように皆様お気を付けください。くれぐれも僕みたく腐ったもの食べて身体壊しませんように……

§ 19 嫉妬団再び

「清秋院家の当主が恵那もぜひ王様のお妾さんに、って申し上げちゃったんだよねえ」

「え、ええ!？」

「で、おじいちゃまがそれを小難しい顔で悩んでたんだよねえ。反対派がどーたらこーたら言ってるさー」

こんな会話を交じわしたのが、数日前の話。何を須佐之男命が悩んでいたのかはわからないが、今重要なのは恵那も護堂の妾候補に名を連ねた、ということだ。今でこそあまり乗り気ではない彼女だが、彼の天性の女殺しの才能の前にいつまで撃墜せずにいられるか。それが、裕理の悩みのタネだった。須佐之男命と交渉ができ（るか本当の所は知らないが、甘粕の話を聞いていると須佐之男命とは一応対等関係らしい）、かつ協力してくれる可能性が高いであろう、切り札とも呼べる黎斗はクラスメイトと北海道へ旅立っているとのこと。二学期始まっているのに何をしているのか。

「こんな大事な時に……どうして悪いことが重なるんでしょう」

本来無断欠席に等しい黎斗に非がある。ここで怒っても問題はない。しかしこちらから頼みごとがあるという一点が、独り言であろうとも彼女が強く言えない原因となっていた。

万里谷裕理が悩みを抱えて更に数日後、黎斗と三馬鹿は学校に登校してくる。二学期が始まってから、既に数日経過していたある日のこと。

「これより草薙護堂を以下略う！！」

「同志しよ、いくらなんでも省略しすぎだ！！」

第二回草薙護堂断罪しつとだんのつぐとの会は、のっけから混沌に包まれていた。北海道から戻ってきて数日は呑気に傍観を決め込んでいた黎斗だったが、連日イチャイチャし続ける（ように見える）護堂にとつと限界を迎えたのだ。

「こつちは三人の暴走必死に抑えて外国飛んで北海道飛んでやつと帰ってきたんだぞ！！？ どんだけ警察行つたと思つてんだ。なのにてめえ、事欠いてその間にどんだけフラグ建てとんじゃああああ！！！」

リアナはフラグじゃないと断言した数日前の自分を力一杯張り倒したい。あれは完全にフラグではないか。エリカ・裕理だけでないリアナまで。しかもなんか恵那まで最近介入してきてるし。

「てめえは人が苦勞してる間に一人楽しんでるとかどんな身分だああ！？ ギャルゲ主人公とかふつざけんなあ！！ お前が連日イチャイチャしてる間、こつちは警察とOHANASHIだったんだぞ！？ 生徒指導と二人つきりとかあの拷問受けてみるか！？」

「うおう、同志しの怒りは凄まじいな……」

「ああ、だがなぜだろう。我々がすごい勢いで貶されている気がする

るのだが……」

三人が若干引いている。それほどまでに、黎斗のネジは外れていた。三馬鹿の暴走についてなんで担任から叱られなきゃならんのだ。三馬鹿の保護者でも監督者でもないのに。護堂と黎斗。かたや美女と連日イチャイチャ。かたや担任やら警察やらからお咎め。同じ生カシヒ物モノとは思えない。

「あ、あのー、れいとさん……？」

護堂がビクビクしているのを見て、ようやく我に返った彼は本来の目的を思い出す。

「……あ。気を取り直して、これより草薙護堂は全男の敵だ地獄へ落ちろ断罪会を開幕するっ！！」

「「「おー！！」「」」

「ではまず同志S！！」

「おう！！ 被告は夏休み前半に根津三丁目商店街で姿を確認されていない。そして肝心のエリカ様と万里谷さんだが サルデーニヤ半島でバカンスを楽しんでいた。この二人が一緒に居る時点で被告が関わっていると推測される」

ああ、そういえば記憶操作して二人がバカンスしてる最中に遭遇しているという筋書きにしたんだっけ。などと思いつつ護堂の顔を見てみると、面白いぐらいに顔が変わっている。ここまで激変するのを見せつけられると機械で録画したい。そして某世界が丸見えな番組に送り付けるのだ。笑撃映像とか言って。

「ッ!?、おまえら、なんでそのことを……」

まさか彼女たちの場所を把握されているとは思っていなかったのだろう。これが普段の断罪会なら素知らぬ顔で通せたのだろうけど、今回は運が悪すぎた。なにせこっちは現地で二人と遭遇しているのだから。こんな芸当ができたのは直前で景品が豪華になっていたという異常事態のおかげだ。もし今年だけ商店街の景品がぶっ飛んでいたなどということ予想出来たらその人は素晴らしい霊視能力者なのだろう。是非とも友達に欲しい。宝くじとかで無双できそうではないか。もつともそれは才能の無駄遣いというものだろうけど。

焦っている護堂が思わず漏らした言葉。それは黎斗達の発言を全肯定するのと同様で、自分が二人と一緒に居たことを自らの口で証明したようなもの。直後に気付き口を閉じたようだが、もう遅い。二人だけで旅行に行ったんだ俺は知らん、などと言われれば証拠が無い手前どうしようもなかったが、護堂の焦りに助けられた形といえばいいのだろうか。

「草薙、貴様あああああああ!!」

「今こそ、この色情魔に神の裁きを!!」

三馬鹿中二人が吼える中、黎斗は外に気配を感じ取る。さては担任が鎮圧しに来たか
!?

「そこまでだ、下郎。随分好き勝手にやってくれたようだな」

ドアが開くと同時に、凜々しい声。最悪煙玉使用の覚悟をしていた黎斗だが、彼の予想を裏切って入ってきたのはリアナだった。

「草薙護堂、ご安心ください。すぐにこの状態を打ち破って見せましょう」

「すまない、リリアナ。恩に着る!」

「……ッ!？」

「……なんだこれ」

一言、二言、三言交わす内に顔に朱が差し護堂から背けるリリアナ。断罪の場の空気がなんだか変わりつつある。口を挟む機会を逃した黎斗がやりとりを見ていると三馬鹿vsリリアナ論戦になってしまった。三馬鹿が押されているようだ。「一人で何が出来る!」とか「ま、待ってくれ!」とかどう考えても悪役のセリフですほんとうにありがとうございました。

「異議有り!! 草薙護堂は王道を歩くものに非ず! 彼は幾人も女子を弄ぶ外道。これまさに色魔の所行なり!」

台詞が芝居がかつてる。が、これは大ダメージが見込める発言だろう。どうかんがえても。リリアナもこれに反論できるとは思えない。勝負あったか？

「その程度の讒言で私を翻意させられると本気で思っているのか? まったくもって、嘆かわしい輩だな……」

侮蔑の籠った彼女の瞳。これは正論、そう正論のはず。なのにそれでも間違っていると彼女は確信を持って言えるともいうのか。

「確かに彼は稀代の色好み。気紛れに婦女子と戯れるハレムの主人

であることは否定出来ない事実だ」

「うわぁ。認めた上でまだ言いますか……」

開き直りつぷりに黎斗はジト目でリリアナを見やる。それを認めてしまえばこの会の主旨も理解してくれそうなものだけれど。この状況で庇う彼女に尊敬の念を送ってしまう。逆境にもかかわらず頑張るね、的な意味で。「護堂＝色情魔」の図式は（本人以外にとつては）共通認識らしい。というか女の敵確定なのにこの人は庇うというのか。どんだけ情が深いんだ。いや、恋は盲目というやつだろ
うか？

「これがダメ亭主を健気に待つ女房に発展するんだな……」

延々と説教してくださるリリアナさんだが、どつからどう見てもダメ亭主を待つ女房のそれにしか見えない。堕ちると人間こうなるのか。恵那だけでなくエリカや裕理もこんなになってほしくはないものだ。媛さんは人生経験豊富だろうから（ほとんど引きこもりの可能性も高いけど）変な男に引つかかる心配はないだろう。

「げに恐ろしきは護堂のオーラか……」

少々ピントのズレた思考をする黎斗の隣から「これが……調教……」だの「絶望した！！ハーレム公認に絶望したー！！」だの悲痛な声が響き渡る。だがここは公の場だ。黎斗としては変な単語は出さないで欲しい。誤解されそうですごく怖い。兎にも角にも彼
我の実力差に愕然とする男たちだが、事態はここでは終わらない。
というか、黎斗にとっての地獄はここからだった。

「あ、いたいたー。……つてれーとさん？ 変な格好して何やって

んの？」

「清秋院！？ 助けてくれ！！ 黎斗が突然襲ってきた」

護堂がさっそく恵那に告げ口。焦った黎斗は口を封じようとするがもう遅い。

「じっ、護堂てめっ！？」

「れーとさん……」

恵那の呆れの視線が痛い痛い痛い……！！ なんてここまで来て貧乏くじをひかにならんだ！？ 神は死んだのか！？

「あの、恵那さん？」

そんな黎斗に救世主。突如恵那の後ろから疑問の声。この救世主は裕理か。

「ああ、ごめんごめん裕理。草薙さん、御取込み中失礼。イキナリで悪いんだけどさ、明日暇？ 裕理とデートに行かない？」

「デートだつて！？」

「恵那さん！！ そんな私、まだ心の準備が……」

「んもう、しょうがないなあ。……れーとさん、どーせ明日暇でしょ？ 恵那と一緒に裕理のデート手伝ってよ。二人もコブ付きならいいでしょ？」

唾然とする男共を尻目に巫女様一人の話は進んでいく。そして、これが惨劇の幕を開ける。

「同志しいや黎斗、お前もかー!!」

「ダブルデートとは良いご身分だなええ!？」

「ちよつ、待てお前ら落ち着」

「お前だけは信じていたのに……!!」

ダブルデートは否定したい。がそうとられても仕方のない状況だ。恵那が頼んだのが自分でなく三馬鹿だったり他の男ならば黎斗自身も嫉妬側に参加していた自信がある。っーか潰す。そんな余談は置いておいて、脈絡もなくいきなりそんな話題を振られて困っているのに、この仕打ち。どんな対応が正解なのだろうか。こんなADVゲームがあったとしたらどのような選択肢が出てくるか。そこにきつとこの場を打開する活路がある　　!!

「……男の争いって醜いな」

「ええ、全くです。草薙護堂。あなたもこんな輩にならないように」

冷静に眺める護堂とリアナ。彼らに言われるとすぐく腹が立つ、がこの状況では反論できない。男たちの友情は脆くも崩れ去り、残ったのは醜い同士討ち。

「え？ 恵那さんはそれで良いのですか？」

「良いって良いって。裕理が頑張ってくれるなら、わざわざ私が参

加しなくてもきつとばあちゃんも許してくれるよ。おじいちゃまだつてあんま乗り気じゃないし」

言い訳に終始する黎斗の耳は変な単語を拾い上げる。今聞き捨てならない単語が出てきた気がする。恵那の役目は裕理と護堂をくつつけるだけではないのか？　なんかとつても嫌な予感がある。

「恵那、それってどうい」

「てめえ既に呼び捨てで言うような仲なのかよ！！」

逆上した名波に揺さぶられる。頭が鞭打ちになりそうなほど激しく揺れる。頭が？げそうだ。つてかこのままだと？げる。抵抗しようにも頭がシエイクされていて動けない。これは正直、洒落になつてない。

「うわああああああ！！！！」

突如奇声を上げた高木は、黎斗の奇声と同時に護堂を抱えて走り出す。その速度、さながら疾風のごとし。

「どわあああ！！？」

意識が飛びそうな黎斗は、もちろん彼が走り出したことに気がつかなかつた。彼が護堂を抱えていたことにも。常人の域を超えていたことにも。名波は黎斗を占めることに夢中で気がつかず。反町は絶望に打ちひしがれて膝をつき。高木の爆走を追跡するは恵那が一人。リリアナも裕理もこの展開を呑み込むことは難しかったらしい。

「……………ふん、しよせんは低俗な輩だな」

「リリアナさん！……もう。水羽さん、失礼します。その……頑張ってくださいね？」

しばらくして硬直が解けた二人は教室を去る。護堂を探しに出かけたのだろうか。黎斗は結局、見捨てられたままだった。

「あゝあゝ ああああ！！！！！！！！」

男たちの涎と涙、汗と鼻水を浴びせられつつの揺らし攻撃は、一時間以上に渡って黎斗を苦しめた。結局彼が解放されたのは、騒ぎを聞きつけた担任が武力介入してから。黎斗の情けない悲鳴はそれまでひたすら校舎に響いて多くの生徒を怖がらせることになる。

§ 19 嫉妬団再び（後書き）

八月はあちこち電車でさまよいそうなので更新出来ないor遅くなる気がします……（汗）

お騒がせしますがよろしくお願いします、と冷や汗をかきながら

§20 急転直下(前書き)

書いてて違和感が出ること出ること(汗

批判反論あつたらぜひお願いします

一応だいがマトモにしたつもりなんですが……

一ヶ月以上放置してましたが気長に待ってくださりありがとうございます
いましたっ

「いたた……」

「黎斗大丈夫か？」

惨劇から一夜明け、黎斗は重症の身体を引きずり登校した。未だ首が痛い。鞭打ちになっただけではないかと思わせる痛みだ。

「あいつら手加減しろよ……」

望み薄と知りつつ空を仰ぐ。ここで手加減してくれるようならば護堂の断罪会など起こるはずが無い。

「まあ、あれは自業自得ということだ」

「……くっ。更に護堂、お前デートの件断りやがって。僕殴られ損じゃん」

形勢不利とみた黎斗は話題を変える。何のためにあそこまでボコボコにされなければならなかったのだろうか。これが護堂と自分の格の違いとでもいうのか。ここまで来ると腹も立たない。というか、腹を立てたら昨日みたいにしっぺ返しがきそうに怖い。なにせ昨夜は家で恵那とエルにお小言を頂戴する羽目になったのだから。断罪会がバレてしまったせいで「人に迷惑かけちゃダメなんじゃなかったんですか？ マスター？」などと言われ針の筵。世の中絶対間違ってる。

（あれ……？）

「だいたい、と言葉を続けようとした途端なんらかの呪力の気配を察知してしまった。学校に誰かが何か仕掛けたのか、と一瞬身構えたが攻性の物ではないようなので今は放置。こういう術式は中途半端に手を出すと痛い目を見る。担任に怒られた後で情報集めをして、それから方策を練ろう。説教中に発動しそうになったら邪眼でサックと消去すればいい。流浪の守護起動中なら黎斗の関与した痕跡は残らない。最大の欠点は説教途中で逃げ出すことによる更なる説教だ。」

「とりあえず、しばらく様子見だな」

犯人がわかるまで泳がせておこう。もし黎斗自身が巻き込まれないようだったら、最悪無視してしまう手もある。護堂にキツチリ働いてもらうのだ。別に、恨みからするわけではない。先輩からの試練である。私怨など一切合財全くない。

「どうした黎斗？」

「ん、なんでもない。いこ、護堂」

本来ならば今日は休日の筈なのに。三馬鹿の説明責任（主に二学期開始後の海外旅行という名の無断欠席）とか本当に勘弁してほしい。責任が保護者にいかずにこちらへ来るとは。護堂は遅れた課題の提出に。黎斗は担任に怒られに。同じ休日出勤でも天と地ほどの差がそこにはあった。わざわざ月曜を待たず提出に来るとは護堂も物好きなやつだ。もっとも、その課題の提出期限は昨日なのだが。

「……………終わった」

担任は予想外に優しくかった。「水羽、お前も大変だろうが頑張ってくれ……」などと同情の視線と鰻重（大盛。味噌汁付き）を頂いた。御馳走様でした、とつてもおいしかったです。どうやら担任も三馬鹿には手を相当焼いていたらしい。先生と妙な仲間意識が生まれるとは。

「しっかしなんで教頭先生があんなに厳しいんだ？」

担任よりも教頭の方が厳しいとかそんなことがありえるのだろうか。教頭にも三馬鹿監督として認識されていたのだとしたら泣けてくる。もし教頭が彼らを警戒しているのなら、三馬鹿は城南学院の要^{ブラックリスト}注意生徒殿堂入りではないか。黎斗自身も巻き添えを喰らっている可能性が高い。

「勘弁してくれ。あいつら暴走した時は無駄にカリスマみたいなのと実行力があるからなあ……………」

嘆息しながら空を見上げる。黒い太陽が燦々と輝く。輝く？

「……………つて、黒い太陽!？」

神経を研ぎ澄ませて周囲を辿る。感じるのは須佐之男命の、力。吹き荒れる暴風も全ては須佐之男命の力の一端か。

「どづいことだよ、コレ!?!？」

階段を一足飛ばしで駆け上がる。屋上に飛び出て外を見渡す。見晴らしの良いところまで移動せねば。屋上への扉に鍵がかかっているがピッキングで解決。良い子は真似したらいけません。術の中心は何処だ……？

「術式削除しときゃよかつたなこりゃ」

こうなってしまうては後の祭りか。一番高いところから外を搜索していると、派手にやりあう少女が二人。

「恵那とエリカあ!？」

どうしてこうなった。そう叫びたいのを必死にこらえて黎斗は屋上から飛び降りる。本当は目立つから飛び降りには却下したかったが背に腹は代えられない。一刻も早くあの二人を問い詰めるしかない。学園で争われたら平和な日常を謳歌することが出来なくなる。学校が吹き飛んだらニート生活に逆戻りだ。

黎斗が着地した時、事態は更に取り返しのつかないことになっていた。大地に出現していた謎の黒い何かに、あるうことが二人が飛び込んで行ったのだ。彼が駆けつける前に、黒い何かは消滅した。

「え、ちょ……」

何を無謀なことを。エリカだったらこんな危ない橋を渡ることはないと思うのだが、これはどういうことだろう。未知の領域に突撃するなんて。普段の彼女には似つかわしくない行為だ。

「……」

行かなければならない事情があったとしたら。たとえば 駄

目だ思い浮かばない。

「困りましたねえ。黎斗さんどうします?」

幽世に行つて須佐之男命を問い詰めようか、そんなことを考える黎斗に呑気な声が後ろからかかる。

「甘粕さん。これは何がどうなっているんですか?」

「わかりませんよ。失踪する瞬間は見ていませんでしたから。気配を辿つてきてみたらこんな有様です。断片的にでも見ていらつしやつた黎斗さんの方が詳しいのでは? 黎斗さんは見ていらつしたんでしよう?」

「当てにならねえ…… じゃあさ、甘粕さんはこれなんだと思ひます?」

”失踪する瞬間は”ということとはそれ以外なら見ていたのだろうか。そんなことを聞こうかとも思ったが、流石にそれはないか。

「ったく、スサノオは何考えてんだか」

「おそらく日本に初めて現れたカンピオ」

「まっつて、なんで護堂が出てくるんですか? だったらエリカさんと恵那を拉致する必要はないのですか?」

護堂を連れて行けばいいじゃないか、と続ける黎斗に対し、甘粕は微妙な表情をする。

「草薙さんがまず行方不明になりまして、次いでお二人という流れなんですが……もしかご存じない？」

「なん……だと……」

あらあら、などと肩を竦める甘粕を無視して取り出すは携帯電話。須佐之男命に電話を掛けようと試みる。裕理を嫁入りさせて護堂カンシオーネに首輪をつける、というのが黎斗の予想だったのだが何かがおかしい。

「電話に出んわ……」

「確かに残暑は厳しいですがオヤジギャグは間に合ってますよ」

思わず零れた呟きを、冷ややかな目で見つめる甘粕。本来この状況は有り得ない。これは携帯電話を用いて念話テレパシーもどきを行使しているに過ぎないのだから。ましてや相手は須佐之男命。”よほどの”状態でもない限り、音信不通といった事態になるはずがない。それに彼はここまで派手に動いておいて無視を決め込むような性格ではない。

「魔力妨害ジャミングしてるのは、誰？」

軽口を返してきた甘粕の顔が一瞬で変わる。

「妨害工作ですか？ ……我々にはわかりかねますが。お偉い様方に通じている黎斗さんの方が詳しいのでは？」

どうも事態が妙な方向へ動いている気がする。何故恵那とエリ力が争っているのだろうか？

「つてかまずスサノオが果たしてここまでするか……？」

須佐之男命がこんなに大っぴらに動くとは、考えにくい。護堂の存在を彼から聞いたのは結構前だ。行動を起こすにしては遅すぎる。彼が本気なら夏休みの前に仕掛けるはず。

「ヤツは本気じゃない？ でもそうだとしたらこの遊びには手が込みすぎてるよなあ。今スサノオと連絡がつかないことも説明できない。僕をからかってる？」

頭をガリガリかきながら悩む。本当、頭脳労働は苦手だ。脳筋万歳。敵が明確ならそいつを潰して終わりだが、今回はそう優しくはなさそうだ。

「……黎斗さん、少しよろしいですか？」

振り向いてみれば、今まで傍観一方だった甘粕が動く。何か名案があるのだろうか。

「今、祐理さんをお呼びしました。もうじき到着します。リリアナさんもいらっしゃるので、お力をお貸し願えないでしょうか？」

荒事になっても黎斗さんとリリアナさんが居ればなんとかなりそうですね、と語る表情は忍者の顔^{サラリーマン}。

「んー……」

アツサリ承諾すると思っていたのだろう、甘粕の顔が不審気に歪む。といってもほんの少しだけだが。

「……何か不都合でも？」

既に非日常側ノノチであることがバレているのだから、協力要請されることは予想出来ていた。しかし一緒に活動すると手加減が非常に難しい。今になって思えばサルバトーレ・ドニの時は正直やりすぎた。雑魚を装い適当なところで敗北しておけばこんな厄介毎に巻き込まれずにすんだだろうに。反省はしていないが後悔はしている。

（甘粕さんや万里谷さん、リリアナさんを守りながら権能封印行動ってどんだけだよ。難易度ベリーハードもいいとこだ。精神汚染使ディオニユスうには甘粕さんが邪魔だしなあ）

既に荒事が起こらない可能性など脳内から抹消した。勘が戦いを感じ取っているし。個人的には単独行動がベストなのだけれど。単騎突撃で痕跡を残さず敵を消滅させれば解決だし。いっそ、古老の意向云々とか言ってしまうおうか。そうして傍観に回るのも（若干後ろめたいが）また一手。

「そしたら問題は恵那か。あんの娘さんは……」

しかし、恵那が関わっている以上傍観という手段は最初ハナっから消去せざるを得ない。

「エルは家？ まあ、居たところで非戦闘員だからあんま変わらんけど。……この場合非戦闘員じゃなくて非戦闘狐？」

「……失礼ですね、マスター」

「うわぁ！？」

降ってわいたように現れた狐様に、黎斗は驚きの声を上げる。いくら思考していたとはいえエルは素人同然である。素人相手にここまでの接近を許すとは。

「マスター、媛様から伝言です。恵那さんとエリカさんが現在交戦中。草薙様は須佐之男命様のお屋敷です。媛様がなんとか取り持つて下さるでしょうが最悪、お二方の方でも戦闘が勃発するお覚悟を」

それは、悪夢のような内容で。

「うっそお……マジかよ」

「途中で念話が途切れた為今現在の状態は不明です」

「途中で切れた？」

エルは途中で切れた。黎斗は最初から繋がらなかった。この差は、何か。

「はい。ここに到着する直前に通信途絶しました。以降繋がる気配がありません。媛様の身に何かが起こった、とは考えにくいですが恵那さんが神懸かりを用いた際の呪力の乱れとかが原因だと思っておりますが」

「それはない。僕はスサノオと最初連絡取れてないし。もしエルが正しいなら最初は連絡とれるはず」

「須佐之男命様に嫌われた、とか喧嘩中とかは？」

「それはないと信じたいなあ……　　つて、会話が脱線してきてるからっ」

この周囲で、恵那以外によって結界が張られた形跡も呪術が行われた痕跡も無い。

「鍵となるのはやっぱ幽世あうちか」

明らかに黎斗と須佐之男命達の接触を封じようとする動き。こうなれば周りを気にせずには戦える単独行動一択。恵那もエリカも須佐之男命も護堂も全部放置。玻璃の媛に丸投げせざるを得ない。

「甘粕さん、エルを連れて行って下さい。コイツとは特殊回線があるので一応通信が途絶えることはないです。多分。きっと。めいびー」

「構いませんが……お一人で大丈夫ですか？　あと、エラく不安な言い方ですな」

謎の存在のターゲットが黎斗であることを理解したのだろう。甘粕は反論して来ない。こちらの身を案じてくれることに感謝し、術の準備。

「こっちは伊達にスサノオの盟友やってないってーの」

「マスター……御武運を」

「まだ戦うなんて確定してないんだけどなあ。可能性が濃厚なだけだ」

転移する黎斗が最後に見たのは、心配そうな狐と会社員^{にんしゅ}。転移術になんらかの干渉が入ったのを認識し、彼は一人顔をしかめた。

§20 急転直下（後書き）

デートもどき案」という名の黎斗&恵那による護堂&エリカデートの覗き見」とこの案2択だったりしたんですが、「恵那が妨害とかしない性格なので」覗きもねえだろ」的な考えの下こっちの案へ

……どっちにしる後半部は変わらないんですが
さて、もう一回原作5巻以降を最終確認。矛盾が出なければ続行、
出たら……やっぱり続行します、すいません（爆

§ 2 1 激突（前書き）

延々と続きそうで收拾が着きそうになくなってきたのでここで一旦。
超展開要注意です

……石ころを投げられない事を祈りつつ（何

§ 2 1 激突

「……ここ何処よ」

転移した黎斗がついた先は見知らぬ土地。転移の術式に割り込みを仕掛けてくる相手だ。油断はできない。しかしなぜこのような森の中なのだろう。

「てつきり罨張って待ち伏せしてるかと思っただけだなあ。ま、どっちでもいつか。とりあえずスサノオのトコまで歩きますかね」

のんびりと歩く。周囲一帯に妙な力を感じているので油断は出来ない。邪眼なり力押しで突破、というのは最終手段にして先ずは探索と洒落込もう。

「……誰？ さっきからこれみよがしに殺気ばかり放ってきてさ。って、あー。変な洒落飛ばすハメになっただじゃん」

歩き続けて数分。やむことなく、増え続けていく殺それ気に黎斗はとうとう痺れを切らした。咳く黎斗の周囲で、無数の影が蠢く。随分な数が居る。三柱の別格かみさま以外は雑魚と判断し、数えるのをやめてしまった。三十以上も数えていられるものか。

(これまた一介の高校生相手にたいそうな布陣で)

相手は殺る気満々のようだが、黎斗は狙われる覚えがない。何処の勢力なのだろう。第一これだけの神様と取り巻き軍団が行動を共にすることはありえるのか。野生の神様なんて大抵の場合他の同類カンビオーネが倒してしまふし。これは一種のレアケースということで納得したほうが良さそうだ。長年生きてきた彼にとっても複数の神が集団で行動していたことなどランスロット達くらい（これですら二人だった）しか見ていない。

「貴方様方はどちら様ですか？ まつろわぬ神の皆様とその近衛の方々とお見受けしますが」

出来るだけ穏便に済ませようと言葉を選んだ黎斗だったが、その努力は虚しく水泡に帰す。

「水羽黎斗。まさか御老公の盟友が貴様のような神殺しとはな。今まで貴様の存在が秘匿されていたのだ。公に現れたときより怪しいとは思っていたが。信じたくはなかったものだ。太古に襲来し御老公方と戦ったのは、貴様だな」

フードを被った男に賛同を表す声が、周囲より上る。

「……………」

怨嗟の聲に背筋が冷える。ぼそぼそとした声を聞き取ることは難しいが、どうせ聞いて気持ちの良い内容ではないだろう。それに呪われるように言われるのはやっぱり気味が悪い。低音でのコーラスとなれば尚更だ。だが、わかったことが一つ。彼らは”まつろわぬ神”ではない。須佐之男命と同じように俗世からの隠遁を望んだ古老達。天敵れいとスサノオ同士が仲良くしているのに我慢ならなかったのか。狭量なことだ。

「怨嗟の呟きかなにか知りませんがやめてくれませんか？ それと死ぬ気はございませんからあしからず。んで要件は、何？ 今ちよつと忙しいから出来れば後にしてほしいんだけど」

とりあえず口調が怪しくなってきたが、諦めずに交渉を申し出る。御老公なんて言葉を用いる以上古老のメンバーだろう。須佐之男命以外に神が居るとは思わなかった。だが、須佐之男命の下で意思は統率されている筈。この集団も突然暴力には訴えないだろう。過剰ともいえる武力は威嚇に過ぎない、筈。今一自信はないけれど。

「要件？ 汝が命、貰い受ける。腑抜けになつてしまわれた御老公も、貴様を殺せば元に戻ろう」

「は？」

こいつは今、なんといった？

「……なんつー回答だよ。警戒していなかったツケが回ってきたのか？ 足元掬われた形になんのか？ コレ。どっちにしるまさかの事態だなヲイ。僕の命が欲しい？ だが断る。秘儀、水隠れの術！」

名前こそ格好良いがただ単に泳いで逃げるだけである。平泳ぎでじゃぶじゃぶと川を泳ぐ。流れが急なせいなのか泳ぐというより流されている気もするが、相手の姿がもう米粒大だ。こういう時に逃亡系の権能があるやつらを羨ましいと心底思う。遁術のレベルで逃げても神様達相手だと無効化されておしまいになりかねない。おそらく取り巻き軍団は無効化系の呪術を大規模展開するための人員だろう。三十六計逃げるにしかず。

「ははははは、戦略的撤退っ！　さらばだー！！」

黎斗の勝ち誇ったような奇声が、周囲に響き渡る。

「あいつらしつこい！」

大樹に寄り添うように小休止。黎斗包囲網は止む気配がない。寧ろ酷くなっている気がする。

「スサノオ早く気づいてくんないかなあ。このままだとマジで僕死ぬぞおい」

このままでは逃亡中に殺しつくされる。もう三回くらい殺されているし。ここまでされたら正当防衛が成り立つんだから反撃しようか。だが反撃して良いものか。

「神祖だか精霊だか知らんけどあの集団ホントどうしよう。媛さんや坊さん、スサノオの友人居ないといいんだけどなあ。ウツカリ殺しちゃったら気まずいことねえしなあ。手加減するには神様が邪魔だし。……っーかさつきからなんで僕の居場所わかるわけ？」

背後から飛んできた矢を躲す。銃などといった近代兵器でなく弓なのが歴史を感じさせてくれる。もつとも、長距離弾道ミサイルやら対地雷など使われないだけマシかもしれない。

しかしさつきから逃走しているのにそれを全て察知しつづける彼

らの情報網はどのくらいの規模なのか。流浪の守護で気配を遮断し隠行の術も完璧にしている筈なのに。

「……これは異なことを。ここは幽世だぞ。この程度もわからぬとはこの羅刹の君は脳味噌も無いらしいな」

「……望めば行けるんだっけか。すっかり忘れてたわ。って、じゃあスサノ」

「無駄だ。大規模な結界を展開している。いかに神殺しとて、短期間で破ることは叶わない。御老公の呪力を借りることにより発現させる。貴様ら専用のとっておきだ、そう簡単に破られはせぬぞ。光栄に思え」

「ってまてや。とっておきの結界？ スサノオに気づかれる前に？ この状況作り出したのはお前らか」

「清秋院も存外に役に立つ。まさか小娘を動かすだけでこうも簡単に大物が連れるとはな。上手い具合に日本に生まれた神殺しとも接触できておるしの」

「清秋院の本家をお前らが唆したのか？ 媛さんや坊さんの話聞いた限りだと随分我の強そうな人だからなあ、って……ん？」

日本には（公式には）カンピオーネがいなかった。護堂が記録上初めて。その護堂の周囲はエリカ、祐理、リリアナと美少女が勢ぞろい。三人の内過半数は外国の魔術結社。のこる万理谷も格としては清秋院より下に位置する。そして孫娘（恵那）も十分美少女である。ゴイングマイウェイ（仮）な最高権力者（はっちやん）がもし存在したとすれば、この状況でどうでるか。

「……スサノオ、押し切られたか？ 恵那も護堂の嫁に、つて清秋院家当主並びに複数神様やら大魔術師やら精霊やらから一度に言われたら、押し切られるか。スサノオはNoと言える日本人……もと日本神にほんじんっぽいけど数の暴力相手じゃなあ。オマケに庇うにしても強い理由が無い。僕が人間である以上僕のトコに今までどおり、なんて案は無いも同然だしな。そうなれば日本嫁二名vs外国嫁二名のドロドロ合戦も構図がわかりやすくなる。あの三人は拮抗しているから、恵那が神懸かりでもしないかぎり戦線は膠着。でも恵那が外国嫁どつちかとガチンコ始めたら護堂が絶対邪魔をする。神懸かり使うのも護堂が阻止出来る……かなあ？ ま、護堂の相手が出るのは神様アムタラくらいのもものだろうから……そついやスサノオが今護堂と接触してるんだっけか。これでえーと……」

言つてて思った。思考がズレている。現状がどうして起こったかなのに何故護堂の嫁論評を繰り広げにやなんのだろう。もし、相手がこの現状を黎斗しびんの殺害に用いるとしたら。媛が言っていた事を思い出す。公開用にした権能解説書没案が盗まれていたことを。これを相手が持っていたならば……？

「……さてはお前らこうなること予想済みだったな？ 護堂の気配が消失すれば僕が出てこざるをえない。スサノオ達は護堂にかかりつきりで僕はノーマーク。幽界ユキの性質を利用すれば事前に色々仕掛けた狩場に僕を誘導できる。僕の情報の一部は入手しているのだからソレを元に作戦を立てる。神様の名前しかわからんやつでも大体の推測はつくだろうしね。あとは 殺すのみ」

ほう、という呟きはボスか、一般雑魚か。

「頭が回らないワケではなさそうだな」

「……おい、何を喋っている。御老公に気付かれる前に殺さねばならんのだ。無駄口をたたく暇はない」

「……手加減出来る自信ないんだけどなあ。おい、周りの人ー。こんなセコイ奴らに付き合っつて命落とすことないぞー？」

「驕るなよ、神殺しが。貴様は我らの手の内だ。全ては今日、この時の為に。先月入手できた貴様の情報も反映した我らに負けは無し。わざわざ貴様に教えているのも、貴様の顔を絶望に染めるため」

「かつこいーセリフだーありがとー。しかもその口ぶりだと媛さんが無くした資料はそっちに回ったのね。人の部屋勝手に漁るコソ泥に天罰を。……来たれ煌めく色無き柱。神をも下す灼熱を以て。その御光で大地を飲み込み。全てを滅し虚無へと帰さん」

狙うは先手必勝。カラストロワイ破壊光線で消滅させる。取り巻き軍団が死ぬであろうことを考えると正直この手段は採りたくはなかったのだが

「悪いけどこっちもまだ死にたくないんでね。……消えろ」

「貴様がな」

天より放たれた光の柱が敵集団を呑み込むと思われた刹那、カ...黎斗を灼熱の光線が襲う。

爆風が吹き荒れ砂塵が舞い散る。簡単に神殺しを殺せたことで、周囲からどよめきが巻き起こる。

「待て、落ち着け皆。奴は何度でも蘇る。引きずりだし、奴の力で本命の結界も完全起動を果たした。たここからが本番だ。手筈通りに行くぞ」

「了解です。では頼みますよ、迦具土、大国主。貴方達が要だ」

「スクナビコナの仇は、必ずとる」

「片鱗が見られた権能から順次破壊するが、やつとて神殺しの端くれ。全部破壊できると思うなよ。貴様らは始める」

「……はっ」「……」

迦具土は、持っていた鏡を八雷神に渡す。死の光線を反射させた鏡を。それと同時に、周囲の集団が呪術を始める。黎斗に対する、破魔の術。結界展開かつこれだけの質・量ならば、権能でもかなり減衰させられるだろう。まして相手は神殺しの絶対的な耐性を持たないのだ。

「……くっ、今のは何よ」

「答える義理なし」

「そりゃごもつともで。こっちも期待してなかった、けど、ねえ！」

大国主の剣筋を躲し、見切り、反撃を叩き込もうとして、失敗。

いつの間にか背後によられた八雷神に、羽交い絞めにされ動きを封じられる。左の死角から接近されたか。絡みつき分かれる八匹の蛇は、黎斗の抵抗を容易く封じる。

「くっ、やっぱ無理か。つてかさ、八匹の蛇になつて襲つてくるとか反則だと思うの。しかも僕蛇苦手なんだけどこんな仕打ちって嫌がらせですかそうですか」

軽口を叩いてはみせるものの正直辛い。こいつには魂直撃や対屍ドキライ特攻でもあるのだろうか。電気を纏う八匹の大蛇は黎斗の行動を許さない。触れた所から身体が腐食し剥がれていく。ロンギヌスの治癒だけではいずれ致命的になる。早く再生の力を使うべきなのだろう、が使わないのは本能が「使うな」と叫んでいるから。

「この期に及んで余裕だな」

そう言う迦具土の気配が変わる。こいつは、ヤバイ。

「天空よ、我が名の下に裁きを与えよ。未来より迫る滅びを縛れ。左に剣を。右には鎖を。我が腕かいなを贅とし汝を封ぜん」

破滅の呪鎖具現化。対象は迦具土。起動方法・結界。結界は通常形式の捕縛と異なっており黎斗側から伸びた鎖が対象を捕獲する訳ではない。大地から鎖を召喚し相手を絡め取るのだ。こつすることとで黎斗の攻撃範囲に入れることが出来なくても、相手の位置を固定できる。孤立している敵などに用いること乱戦用の派生型バリエーション。外部からの攻撃に弱いのは変わらないが、相手が一人だけ離れていて、残りが全て黎斗と交戦しているならば、他の敵に鎖を破壊されるより黎斗が相手を殺す方が早い。

今がまさにその状況。迦具土以外の神二柱はこちらにつきっきり

だし、雑魚軍団は何やら行動を開始しているがおそらく間に合わない。だから、破壊はされない。相手が行動を起こす前に月読の権能”時詠”^{イモータル}で時間加速、ロンギヌスで撃破。
そんな黎斗の目論見は儂くも崩れ去ることになる。

「やれ、カグツチ!!」

「対象、神殺し。対象、破滅の呪鎖。^{グレイブニール} 逝け!!」

迦具土より放たれるのは不吉な言葉と三日月の劫火。邪眼の影響で弱体化しつつも斬撃のように飛んでくるそれを、八雷神に拘束された黎斗は回避する術を持つはずもない。

「仲間まで!?!」

「安心しろ。今は貴様専用だ」

背後から耳に声がかかる、と同時に黎斗の身体を劫火が焼く。邪眼で消去しきれなかった分が身体の中に吸い込まれるようになっていく。

「……?」

痛みは、無い。違和感を探る黎斗を、大国主の剣が襲う。

「これでまた一回だ。死ね」

とつさに黎斗は右腕を上げる。壊死しているはずの、右腕で。血飛沫が舞い散り、視界が朱に染まる。この位なら治癒で^{ロンギヌス}十分回復させられる。

「はっ、そう甘くはないっての!」

緩んだ一瞬を逃さず拘束から離脱、神達から距離をとる。

「しかしマジでどうなってる?」

破滅の呪鎖が消滅している。右腕も、普通に存在している。破滅の呪鎖を発動した時点で右手は壊死する。だが今回は壊死してはいない。ほんの僅かに死んでいる部分があるが、それだけだ。もう一度、破滅の呪鎖を発動させようと試みるが　不発に終わった。

「権能封印系の何か、か?　だがそれなら壊死は残るはずだ。……まさか権能破壊?」

さつき超再生^{ヤマ}の力を使うな、と勅が言っていたのはこういうことか。脳内警告^{レッドフライト}が鳴りっぱなしだが、気にしていられる余裕などない。権能破壊系能力の具体例が護堂しかいないので似たような能力と推測する。もつと危険な能力ならご愁傷様だ。

「最低でも一定期間権能無力化、ってトコ?　こりゃ下手したら死ぬな。本腰入れないと」

戦場において、黎斗は数百年ぶりに冷や汗を流す

§21 激突（後書き）

僕「いつから古老にスサノオ以外神が居ないと錯覚していた？」

……とか言ってみますが原作に記述あったらどーしよう、とビクビクしてます（苦笑）

おそらく無いと思うんですが、あったらごめんなさい。理解不足です。

ま、その時はオリ設定ということでしょうか……

§22 そして全ては水の泡（前書き）

皆様前回色々ご助言ありがとうございましたっ

少しはマシになっているといいなあ、と思いつつヒヤヒヤものだったり

……超展開はいつものことです（爆

§ 22 そして全ては水の泡

「俺をあそこまで案内しろ!!」

頭痛を必死に堪えながら護堂は”剣”を須佐之男命に向ける。つまりなそうな須佐之男命。茶化すような黒衣の僧。一触即発の状態は、玻璃の媛によって打ち消される。

「御老公、御坊」

若干の焦りを含んだ声。いつもと違う声音の彼女に須佐之男命は訝しげな視線を向ける。

「ん？」

「エル様と連絡が…… 黎斗様とも本日早朝より……」

媛の言葉は怒り心頭の護堂にもしつかりと伝わる。

「れ、黎斗お!?!? おい、どういうことだよ!!」

護堂からしてみればわけがわからない。日常生活の友人たる黎斗の名前がなぜここで出てくるのか。エリカと恵那のことを忘れて一瞬だけ、呆けてしまう。だがそんな護堂を三人とも気にする気配はなかった、というより気にしている余裕が無い。非常事態なのだから。

「黎斗が音信不通って。あいつが死ぬことはないだろうし、どうせ念話の類を封印してんじゃねーのか」

「……媛、黎斗様は今朝から。エルとはついさつきですか？」

「その通りです」

しばしの間、黒衣の僧が黙り込む。黎斗の権能の一部を記載したままほったらかしていた紙。誰も見ないだろうと主張する持ち主の一声で彼の部屋に放置されていたそれが行方不明になってから随分経つ。

「……御老公、黎斗様を搜索すべきかと。一部の方々の蛮行に巻き込まれている可能性が」

須佐之男命の親友として黎斗の存在を公表した時、古老内部ですら懐疑的な声が上がっていた。彼らがもしこの神殺しの情報を得ていたとしたら。もし、黎斗が神殺しだと知ったとしたら。元”まつろわぬ神”である須佐之男命の盟友が宿敵である神殺し。この状況に異議を唱えそうな存在に彼はいくつかの心当たりがあった。

「内乱？ アイツならなんとかすんだろ。俺とアニキとスクナの三人がかりですら無理だったのにひよっ子どもにも何が出来る」

須佐之男命の黎斗に対する信頼はとても厚い。だが、信頼が厚ければ良いというわけではない。黎斗抹殺派は相当事前準備をしているはず。いくら黎斗が規格外の一角でも、無事に済むとは言い難い。そんな彼の予想は残念なことの中する。

「……先程調べるよう指示した情報が今来ましたが、八咫鏡が現在持ち出されています。持ち出したのは、大国主様です。ついでに迦具土様を始め、黎斗様に懐疑的な方々の全員が現在行方不明です」

やはりか、呻きたいがそんなことをしてはられない。後手に回っているのだ。

「八咫鏡？ ……オイオイ、ちいーとばかり、不味くね？」

須佐之男命もここにきてようやく察したらしい。相手が黎斗の情報を得ているであろうということに。

「御老公、ただちに黎斗様搜索を。交戦している場合どうにかして停戦させてくださいませ」

自分たちに介入は不可能だ。神クラスの存在が数人ひしめく危険地帯から生還できる自信はない。

「……あいつら」

腹立たしげな声と共に須佐之男命の姿が掻き消える。

「最善は戦闘前に御老公が間に合うことですな。時間がかかりすぎていることを考える限りこれは望み薄ですが」

次善は、黎斗の生存。友人云々を抜きにしても、彼の能力をここで失う訳にはいかない。それに神は（気の遠くなるほどの年月を必要とするもの）復活できるが黎斗はそうはいかない、というものもある。抹殺派は古老の勢力のおそらく半分程に上るだろう。勢力半減は非常に痛い。願わくば停戦が間に合ってくれれば良いのだが。

「私の失策でしたな。まさかあの方々がここまで大胆とは」

須佐之男命に話を通して来ると思っていた自分の甘さに頭を抱える黒衣の僧。悩む二人は、部外者こじっそっちのけで頭を悩ませる。

「あ、あのー……」

「「あ」」

深刻そうに話す三人にすっかり毒気を抜かれてしまった護堂が遠慮気味に声をかけるまで、二人は難しい顔だった。二人の顔には一様に「やってしまった」という表情。屋敷の時間が、止まった。

「参ったなあ」

状況はけっこう悪い。魂攻撃、屍特攻能力所有疑惑のある八雷神。不死破壊、という黎斗にとっての一撃必殺を持つ迦具土。二者に比べれば対したことないのだが、それでも黎斗に追隨出来る近接戦闘をこなせ、バランス良くまとまっているように見える大国主。他取り巻き数十名。オマケに敵は破壊光線カタストロフ無効。

「まあスサノオ&ツクヨミ&スクナビコナの三連星再び、じゃないだけマシか」

時間弄られるわ嵐叩きつけられるわ触手プレイに大津波etcetc……あの時に比べれば現状は大したことない。そう思うだけでなんとなく楽になった気がする。現金なものだと内心で苦笑しつつロンギヌスを構えて前を睨む。前衛が大国主、後衛が迦具土、補

助が八雷神、といったところか。大体の立ち位置を把握する。

「破壊光線で取り巻き殲滅、神様重症で休戦、ってシナリオは無理だったか」

かくなるうえは本当に本気でいくしかない。やるならば、徹底的に。二度と襲ってこれないように大損害をださせるのみ。中途半端な加減が危ないことはよく知っている。

「流浪の守護、解除」

莫大な力が黎斗の身体から放出される。これを解除しておかないと、強力な一撃を放った際にその余波で守護が自壊してしまうのだ。修復も可能だが面倒くさいので全力の際は解除する必要がある。これをしてしまうと気配の解放だけでなく盗み防止や隠密といった地味に有用な副次作用も消滅してしまうのだがしょうがない。幽世なのだし誰も見ていないことに賭ける。相手の面子を眺めた限りだと盗む輩もいないだろうし幽世では隠密など意味がないとさきほど理解させられた。つまり解除にデメリットが無い。

「ロンギヌス相棒、行くよ　　！！」

呪力を大地に込め、爆発させる。土砂が勢いよく舞い上がり黎斗の姿が見えなくなる。正攻法で若干厳しいのなら、奇策あるのみ。無理をして真つ向勝負をする必要性などどこにもない。舞い散る粉塵の中、月読の権能、時詠を発動。イモータル黎斗vs神々では砂嵐など一瞬の目晦ましになるかどうかの下策だろう。だが、黎斗にとっては一瞬あれば十分。自身の時間を加速させることで結果的に神速での行動が可能となるのだから。相手が仮に心眼を使えたとしても、見失った相手の姿を捉えることは叶わない。見えないものは心眼だろう

が神眼だろつが見えないのだ。神殺し片手に突貫。一番近い神から順に潰していく。瞬時に距離を詰め八雷神を切り裂く。まず一人。次に行こうとして　突如、時詠イモータルの効力が切れる

「え？」

本来ならばまだ使えるはずなのに。あり得ないほどに短い効果時間。周囲を見渡すとその疑問は霧散する。遠くから黎斗達を囲む奇怪な軍団。色々な種族が入り込んでいるだろう。そんな彼らが一心不乱に唱えているのはおそらく解呪の言霊。

「……やっぱただの飾りじゃなかったのね。予想通り、か。ちよっぴりただの飾りを期待したんだけどな。しっかしよくまあ、これだけの戦力を掻き集めたもので」

「我らの宿敵を倒すのだ。全勢力を結集したさ。一人で挑んで勝てると思うほど思い上がってなどいない。あの三方を退けた者に対し油断などするものか」

何でもない事のように言う迦具土だが、ここまで準備を整えるのには苦労したはずだ。この努力を別のところへ使えばよいのと思わずにはいられない。しみじみと感じつつ黎斗の視線は、数秒、八雷神の死骸に留まる。戦場で敵から目を離すのは命取りだと知っ
いても。

「しっかも八咫鏡なんてレトロな代物持ち出しやがって。スーリヤ無効、タネはコレか」

八咫鏡は天照大御神の姿を映した鏡。太陽神の権能を反射できたのもつまりはそういうことだろう。破壊光線は言っカタストロフイてしまえば超強

力な太陽光のような物。

「太陽ビームだから反射しました、と。ホント対策練ってるのね…
…でもこの発想は無かったわ」

つまりは左目損だったわけだ。最初から集団でわざわざ来たのも、
包囲していたのも、全ては広範囲殲滅技を撃たせる為に。八雷神に
持たせたのはおそらく彼の主任務が束縛であり積極的こちらへ来る
から。被弾率が一番高いと予想したのだろう。破壊光線をただ避け
れば良い（効果範囲が広大なので避けきれるとは思えないが）大国
主や迦具土と違い彼は束縛を最優先する為回避を念頭に置かない行
動パターンと推測する。もしくは二者が攻撃で彼は防御なのかもしれ
ない。

「だけど、もう同じ手なんか使えない。使わせない。こつから僕の
ターンだよ、つてうわお!？」

自信満々に言い切ろうとした黎斗に向けて雷撃が飛んでくる。辛
くも回避に成功するが動揺は隠せない。雷神、と名のつく神はこ
こしまたおしたやつでは八雷神くらいの筈だ。

「何だよお前!! カグツチ、お前火の神だろ!! なんで雷撃使
つてくるんだよ! おかしいだろ!! 雷神に謝れ!!」

黎斗が抗議しても迦具土はそれにとりあう気配がない。当然だが。

「……よろしい、ならば戦争だ、つてね。そつちがそうならこつち
もいくぞ」

権能破壊疑惑の焰に注意するため、再び砂塵を巻き起こす。

「小賢しいわ!!」

気合一閃。同一視されることもあるシヴァ神の力だろうか。暴風が吹き荒れ、時間稼ぎの間もなく土砂は吹き飛ばされていく。

「我、主の御心に従わせし者」

右目も閉じる。破壊光線の代償で左目が使えない今これは非常に危険な方法だ。視界が漆黒に染まる中、思考するのは日々の鍛練^{リハビリ}。発現させるのは言霊によって一時的にだが全盛期の力を取り戻せるまでに復帰したサリエルの権能。発動までは視界が皆無になってしまったため、精神を統一する。周囲の気配を読み取り、空気の揺らぎで飛んでくる”何か”を察知、回避する。

「!?!」

目を閉じている相手に避けられるとは思わなかったのだろう。おそらく迦具土であろう存在が息をのみ、大国主がこちらへ駆けてくる。だが、もう遅い。

「月よ、魔女よ、理よ」

「月に狂え、地に墮ちよ」

「頭^{カブタ}を垂らせ、命を捧げ。今宵は月の踊る夜。厄災の下、魂灌ぐ夜!」

言葉を紡ぐ度に、どういう原理なのか、残響が辺りに響き声がい
たる所から聞こえてくる。再び右目を開いたとき、暴風は微風へ、

劫火は火の粉へ変貌する。直撃してもこの程度なら支障は無い。邪眼 十全に力を発揮できている”オンリー・ザ・シャイニング我が前に邪悪無し”の前後はこの程度の嵐も、焰も、黎斗に近づくことなど出来はしない。自らが望む力以外の全てを無効にしてしまうこの瞳の効果範囲は、視界内全域。視界内に収めてさえいれば、対象が目視できるようなものでなくとも対象にとれる。

「……っ」

目元を流れるのは血の涙。全力解放出来る時間は長くは、無い。痛みが酷くならないうちに決着をつける。黎斗の意思に応えるかのように空間が軋み始める。黎斗の力を封じている結界は容易く破壊され、視界内に解呪の術者がいる分解呪も威力が激減する。力を抑えるはずの結界も”邪眼”の情報で作成されたからか、オンリー・ザ・シャイニング我が前に邪悪無しの前では塵屑同然だった。

「つとな」

「ぐあー!!」

「ぎゃん!!」

二柱の神から距離をとってさりげなく大地に触れる。次いで連鎖する悲鳴の数。大地を伝い少名毘古那神の権能、”でいだらぼつち”が木々に力を与えてくれる。樹木に協力を要請、異常活性化した木々による触手プレイであっけなく術者の群れは壊滅する。圧殺されていく運命を逃れた者は、黎斗が放つ雷にその身を消し炭にされていく。草薙護堂”ウルスラグナ軍神”アーリマンの力の一端を友愛の神の権能により一時拝借したのだ。

「山羊つえー……」

単体出力こそ本家しんかに及ばないものの周囲の植物の意思を束ねることとで生み出される破壊力は恐ろしいことになっている。護堂のものとは比較にならないほどだ。一撃で砂が融解する威力に黎斗も軽く引いてしまう。

「……そうだったな。貴様はスクナビコナの仇、ここからが本番だ」

スクナビコナ
親友の仇と明確に意識したからか。大国主の気配が更に狂気を帯びていく。暴風が吹き荒れる。同時に飛んでくる光線。光速の一撃に対し雷撃をぶつけて相殺を試みる。

「っはー……」

まだ迦具土がいる。ここで時間をとられるわけにはいかない。こんな拮抗状態でヤマの権能を破壊しに来られたらたまらない。一瞬で塵になってしまう。

「目には目を。歯には歯を」

結界はもう無い。力の制限以外に太陽神の力を封じる効果も含まれているらしい結界だったが、壊してしまえばこっちのものだ。

「面白いものを見せてやるよ」

その言葉と共に、黎斗は雷撃を中止する。拮抗していた一筋の光線は、黎斗を消し炭に周囲を抉って吹き飛ばす。黎斗が笑みを浮かべていたことを、見る事が出来た者は当然いない。

「……？」

凄まじい破壊力。だから大国主は、自分の身体が消し炭になることが理解できなかった。黎斗が光に包まれるのと同時に、大国主も消滅する。

「さてと、残るは迦具土^{おまえ}だけだ」

「何!？」

迦具土は動揺するがそれはしょうがない。光線を放ったはずの大国主が灰となつて、灰となつたはずの黎斗が現れたのだから。超再生と呼ぶに相応しく、黎斗は復活を遂げていた。灰が集まり黎斗の身体を修復していく。もつとも神力ももう半分程度しか残っていないが、迦具土のみが相手なら十分すぎる。その光景に思わず迦具土は、膝をつく。不死^{ヤミ}を分離させても、他の神格を分離させても独力でこの怪物を撃破できる気がしなかった。神が屈する状況など前代未聞だろうその状況にも黎斗は全く動じない。

「冥土の土産に教えてあげる。大半の不思議攻撃には効果がないけど物理攻撃と一部の不思議攻撃に対する究極のカウンター。これがヤマシユの権能^{ちから}、ヤマアラシのジレンマ。ネーミングセンスは突っ込まないでね。目には目を、歯には歯を、の言葉の通り術者に与えたダメージの全てを与えた者も受けるのさ。僕は今光線で消し炭になった。だから大国主も消し炭になった。OK？」

再生系能力が無かつたら相討ちになつちゃつてたけどね、とロンギヌスを左肩に担いで気楽に言う。そもそも神々の呪術耐性は規格外だ。神々相手だとこの権能を用いても自身の負った傷と同等の傷を相手に与えることはない。せいぜい八割から七割程度。一瞬で消

し炭になった大国主を考えるに黎斗が直撃した分はよっぽどオーバークールだったのだろう。

そんなことを考える黎斗の右手には一筋の剣。光り輝くそれは放心状態にある迦具土をして危険なものだと予想がつく。護堂の切り札”戦士”の力を今度は借りたのだ。アカシツクから強引に知識を引き出す荒業つきで。頭の中に膨大な情報が流れてくるので正直取捨選択が上手くできる自信がない。

「カゲツチ……神武紀に「火の名をいつのかぐつち巖香来雷と為す」と記された焰の神。落雷による火災が多かった古代では火神と雷神の連想は自然なこと。お前の死骸……お前がここにいるのに死骸とか言うのも変な話だけどさ。とにかくそつから雷神イカツチが出たという言い伝えもある。それが、お前が稲妻を放てる理由だったのね……火と雷の発生する因果関係が逆な気もするけどさ。」

そんな不安を隠しつつ黎斗は世間話でもするかのように、だがその瞳に油断はない。

「ホムスビ、ヒノカガビコ……様々な名前を持つお前の正体は大地イの女神ザナミを焼き殺した邪悪なる神。未っ子の母親殺し。鎮火祭祀詞にも「心悪しき子を生み置きて来ぬと宣りたまひて、返りまして更に生み給ふ子、水の神・匏・川菜・埴山姫、四種の物を生み給ひて、この心悪しき子の心荒びるは、水の神・匏・川菜・埴山姫を持ちて鎮め奉れ」とある。燃えやすい住居に住んでいた古代の人々にとって火の神は悪しき神の代表ともいえる存在だ」

鎮火祭祀詞には火結神、とあり日本書紀にもだいたい同様の文献が見られる。初期から邪神扱いされるわ母ちゃんイザナミ殺すハメになるわ父ちゃんイザナキに殺されるわ可哀想に、などと同情するには黎斗の迦具土に対するあまりにも好感度が不足していた。容赦せずに続行する。

「さて、イザナギイザナミ天と地を分離した焰。イザナギイザナミ男と女を別離させた神。火を契機として天地が分かれ、男女が分かれる。天地乖離すなんとやら、か。お前の話は火山の爆発系云々は聞いたことあつたけどこつちはなかつたわ。離婚式にも鎮火儀礼があるんだってね。幸いなことに実際見たことないからわからんけど」

火を契機とする天地分離の神話は東南アジアにもいくつも見られる。そこまで語っていると無理な使い方をしているからか、頭痛が始まった。だが、やめるつもりは毛頭ない。

「密接に関連する物を断ち切り”分離”させる力。権能を”破壊”する力だとばっか思ってたけど微妙に違ったのね」

「無念。だが、一死報いてくれる!!」

凶悪なまでに輝く剣を向ける黎斗に向けて、迦具土は焰と雷撃を全方位から放つ。その焰の数、九つ。回避は不可能。相手の気が緩む一瞬に放つ一撃。圧倒的優位にいる相手が自分に放つトドメの一撃。それを遂げる瞬間は気が緩むであろう。勝利が確定しているのだから警戒する必要などないのだから。だが、それでもまだ足りなかった。

「はい、残念でしたー」

平然と立つ黎斗。今の攻撃で外傷を負った気配は、無い。初撃が当たる直前黎斗の姿が掻き消えた《…………》。全弾が黎斗の存在していた空間を過ぎた瞬間には黎斗は変わらずそこにいる。しかも気付けば自身は、細い鋼線で一部の隙もないほどに束縛されている。そして胸には、光り輝く言霊の剣。

「…………!?」

ドツ、と冷や汗が流れる。術を使った気配は無かった。物理的な回避も不可能のはず。今、正面の男は何をした？

「最後のネタバレタイム。この夏休みに北海道に行って潰してきた悪魔、フェニックス。その原型オリジナルとなった不死鳥ベンヌの特徴を加えた権能。能力は　　時間を繰り返す」

発動から前後七十二秒の間の好きな時間に移動することが出来る能力。キングクリムゾンも時をかける少女（少年というべきか）も思いのまま。発動回数は一週間に殺めた神の数だけ。この能力で攻撃を受ける直前にほんの僅か未来へ飛んだのだ。つまり直撃した瞬間はその場に黎斗は存在していない。

ベンヌの鳴き声で時間は始まったと言われる。

フェニックス不死鳥は死の淵に炎の中に飛び込んで雛となる。

生命を繰

り返す。

二つの特徴が合わさった凶悪な能力。

「さて、終わりだ」

アールリマンの力で今度は須佐之男命の能力を拝借、暴風を巻き起こして上空に吹き飛ばす。ワイヤーで雁字搦めに縛られて、遙か上空に打ち上げられた迦具土にもはやなす術などない。

「来たれ煌めく色無き柱。神をも下す灼熱を以て。その御光で大地を飲み込み。全てを滅し虚無へと帰さん。……大盤振る舞い光栄に思え」

破壊光線を発動させる瞬間、過去に戻る。再び破壊光線を唱える。これを六回繰り返すと、どうなるか。

「カラストロフィー破壊光線は無理に天からの一撃にしなくてもいいんだよ。掌から放つてもいい。ただ、そつちは被害が論外だから使わないだけ。空から光線を地上に叩きつけた方が被害が少ないのさ。手から放つたら正面根こそぎ焦土と化すわオゾン層ぶち壊すわでもう大変なんだから。幽世とか宇宙でもなきや使えないっての」

呟く黎斗の声は、誰にも届くことはない。迦具土の末路は確定した。オンリー・サ・シャイニング我が前に邪悪無しの影響下で束縛されて上空なのだ。その上、”戦士”の剣が直撃している彼に出来ることは何もない。

「さて、と。実は初めてなんだけどね、破壊光線同時撃ちつて。時間戻すの地味にめんどいな。っーかこんなん出来るのかね？」

黎斗を取り囲むように輝く球体が出現していく。手を上空に掲げた彼の掌に出現したのを合わせると、総勢七つ。

「……出来ちゃったよおい。時間戻したら破壊光線もキャンセルされそうなものに。時空でも歪ませたのか？ ま、いつか。さて、殲滅したし恵那を探すかね。変なことになってなきやいいけど。って恰好つけてるヒマはないか」

背を向け走り始める黎斗の背後で極太の光線が七つ、上空の迦具土を貫く。周囲を焼き尽くす程の閃光が消えると同時に流浪の守護を発動させ邪眼に戻す。時間を繰り返すことにより発生させた同時攻撃。迦具土の末路など、確認するまでもない。

§22 そして全ては水の泡（後書き）

サリエルの能力発動セリフが格好良いのは考案者が僕ではないから
です

考えてもらいました（殴

ということ、改めて某赤い蛇の作者様に感謝を

迦具土ですが鍛冶神話だったり火山神話だったり入れ始めると僕の
キヤパを超えるのでこれで勘弁してください

これが（大したこととしてないでしょうが）僕の限界でさあ……

つかこれって参考文献入りますかね？

原作者様や他の作者様がどうかは存じ上げませんが僕今回けっこう
資料ひっくり返しましたし

ま、僕でも使える資料見つけるのに苦労してたんですが（泣
うーん、どうなんでしょ

344

以下、長文注意

いつもの如く（？）与太話です（爆

迦具土&ベンヌはやりすぎ感が否めませんがまあ、いつかと開き直
りました（笑

問題はこれを僕が説得力ある表現に出来るかどうか……

あ、シヤマシユとかの権能名が酷いのは仕様です（爆

センスさえあれば……orz

っ！かハンムラビ法典とか今まで以上に神様と関係ありませんね
奉納された、ってだけなんじゃなかるうか（汗

ま、ここまで読んでくださっている皆様は「アーリマン（友愛の神）

で能力拝借だし超解釈なんて今更だろ」って思って流して下さる方もいらつしやるかもしれませんが

冒頭の須佐之男命一行&護堂の会話、居るかな？と正直悩んでいます
これだと須佐之男命一行がおい、ってカンジなので（汗
とりあえず護堂の存在を忘れるくらい慌てていた、とでも脳内解釈
お願いします

……それでも厳しい気がしますけど
ここ抜いてもそんなに変わらないだろうし抜くべきなのだろうか
ま、抜くと黎斗〃カンピのカミングアウトが遅れるんですが（何

§23 染井吉野が鳴く頃に（前書き）

実はすっかり原作通り進行していた叢雲の暴走（笑
前回、前々回やらかしたので今回は抑え目（な筈）

寧ろサブタイが酷すぎますがこれが限界でした（苦笑

§23 染井吉野が鳴く頃に

「……あれ？ 気配が、ない。……ま、まさかもう現世に戻っ、た？」

何が悲しいって、神様と戦ってまで事態の收拾を図ろうとしたのに肝心の少女達はもう幽世に居ないのである。いったい何のためにここまでできたのだろうか？

古老軍団を殲滅した後、数時間彷徨っていた襲いかかる更なる悲劇に黎斗は絶望してしまう。幽世に長々いたので自業自得、と言われたらそれまでなのだけれど。

「ねーよ……ねえ…よ……」

意気消沈した黎斗は足取り重く現世へ向かう。特殊結界か何かのせいで幽世内の転移は使えず、だから念しても恵那達の所へ行けない、と考えていたのだがそれはどうやら誤解だったようだ。現世ということはおそらくもう事態は解決したのだから。護堂がなんとかしてくれたか。

「護堂に感謝だなこりゃ。あとで恵那にお仕置き据えて、あースサノオに一応話しておかないと。……ってか護堂のハーレムが原因なんだろうし、感謝する必要ないじゃん」

正当防衛とはいえ全滅させたのだから一応話は通しておかなければ。三柱とも須佐之男命とそれなりに関係深い。日本神話の神なんかほとんど血が繋がっているような気がするし、家族をぶちのめしたのだから伝えておくべきだろう。復活するにしてもいつになるかわからないし。

「あーあ、めんどくさ……　　つと、一応視界修復しておくかね。せ
つかく修復できるんだから使うにこしたことはない。布留部、由良
由良止、布留部」

八雷神の権能、名前はまだ決めてない。八雷神は生の女神が死の
女神に変わったときに、彼女を貪っていた八匹の蛇。この蛇達がイ
ザナミの神格を作り変えた、と解釈してしまったのだろうか？ 八
匹の雷を纏う蛇を召喚し相手に攻撃、というのはこの権能の力の一
部でしかないらしい。

真の力は神格の改竄。自分の所有する神格を一時的に別の神格へ
と書き換える。書き換えるには書き換え先の神格がどんなものかを
多少把握していないと無理らしい。蛇を相手に噛み付かせることに
より相手との疑似権能交換や権能貸与も可能。書き換えや交換は時
間がかかるが対象に接触している蛇の数に比例して時間が短縮され
る。期間は一週間といったところだろうか。

「蛇嫌いなんだよね……デザインを龍に変更しよう」

火花を散らせ這いよる八匹の蛇に鳥肌が思わず立つ。蛇に必死に
念じると祈りが届いたのか、勇ましい龍に姿が変わった。自身にま
とわりついた龍がスーリヤの神格を須佐之男命の神格に改竄してい
く。これにより、使用できなかつた左目も視界が開けるようになる。
破壊光線が今日一日使えないが、どうせもう使うことはないだろう。

「……ん。八匹全部使って書き換え所要時間は二分ってトコか」

これでは実戦での活用は厳しい。数秒で変換出来ればとても便利
だったのだが。そうすれば使える手札の数が飛躍的に増える。世の
中其処まで甘くはなかつたか。

「あーあ、これじゃ予めエルに力を貸しておくとかそんなところか。実戦で使うにしても破滅の呪鎖グレイブニールや破壊光線の代償一時解除、くらいかね。それもそうとう隙がなきゃ厳しいよなあ」

これで自身の神格の何かを護堂ウルスラゲナの神格に書き換えた場合、能力は護堂と同一になるのだろうか？ 能力を譲渡した場合権能は黎斗と同じなのだろうか？ 現時点では謎だらけだ。いずれにしても要研究・考察である。彼を知り己を知れば、なんとやら。とりあえずエルに力を預ける案がこの権能を一番有効に使う方法になりそうだ。現時点では……その案にしてもエルがカンピオーネの強大な力を受け止めきれるか、という重大な問題があるのだがそこはそこ。当たって砕ける特攻精神。やってみて無理だったら一部譲渡で留めることにすれば良い。

「この能力は事前準備に使えても突然の対応とかには厳しいか」

結局考察はそこに落ち着いた。全ての龍で自身の権能を改竄するのに二分。敵にする場合全ての龍を直撃させられるとは限らない。龍の数が多いほど時間短縮出来るのだから一匹や二匹しか命中しなかったらどう考えても二分以上かかる。大体二分ですら致命的な隙になりえるものだ。予め非戦闘系権能を改竄するくらいが関の山か。考察終了、これ以上考えてもキリがない。

「一応一段落ついたかな。さーて、スサノオへの連絡を先にするか、現世に戻るか。スサノオは直接話すべきだよなあ、やっぱり」

ここまで暴れたのだから念話で終わり、ではなく黎斗としては直接行きたい。だが、行くのならこの件全てが終わってからの方がいいのもまた事実。恵那の乱（仮）が終わるまではこちらに集中する

べきか。

「現世に戻って護堂と遭遇も不味いよな。エルにとりあえず連絡かな」

エルに向けて思念を飛ばす。もう妨害は消滅しているだろう。ならば通信用の呪符（怪しまれないように木の葉に擬態させてある特注品）も今なら使える筈。

「エル？」

「……あ、マスター！ ごオ無事でしッた……かああ!？」

「うんうん、無事よー。つーかそっちはどうなってるのよ？」

「つい先程っ護お堂様がエ……さんと共にこちらへ戻ら……た。恵……は現在暴……です」

エルは呪術の類が使えない。今は呪符を携帯電話のようにして黎斗と連絡をとっている。そして黎斗は念話だ。思念を直接送り付けている。もし、現地が騒がしいと通信がおかしくなる。いや、それよりひどい。頭の中にこの状況を叩きつけられるのだ。「リリイー!」だの「きゃああ!」だの甲高い悲鳴が直接響くのだ。金属音やエルの声が聞こえない程度で済めばどれほど良かったか。

「ぐおおおおおおお……!!?」

頭を押さえてのた打ち回る黎斗の姿がそこにはあった。頭が割れるなんて生易しいレベルではない。頭が粉碎してしまいそうだ。

「マ……！？ まさあかああああ敵いー襲ですかあ！？」

エルの声が攻撃だと言ってやりたいがそんな余力すら残らない。ごろごろのたうち回る黎斗はやむを得ず念話を切断する。

「し、死ぬかと思った……」

こんな展開になるなんて。呪符は至急要改造である。こんな戦闘中に使ったら命とり以外の何物でもない。まだ頭ががんがんする。どうやら海外に行ったときのように須佐之男命の助力を借りないとマトモな呪符作成は出来ないようだ。独自作成にはまだ技量不足らしい。

「情報が欲しいんだけどなあ。通信があんなんじゃあエルはあてにできない。こりゃこっそり戻るしかない、か」

仮に戦闘になったとしても問題ない。被害はワイヤーが多少汚れてはいるものの、その程度だ。破滅の呪鎖も破壊光線もしばらく使えないし時詠イモータルなども今日は使えないが、使うような事態にはならないだろう。困ったら護堂に全部押し付ければ問題ない。

「あ、いかんいかん。守護展開しないと。って、そっぴやもう展開してた…… ま、これで変な人にはバレないでしょう」

ディオニユスの力でエリカと裕理は問題ない。ナポリまで行ったときに「黎斗が神殺しであると考えないように」無意識レベルで思考操作しているのだから。だが他の術者が居ないとも考えにくい。だから守護の展開は重要だ。我が前に邪悪無しの長時間の持続は正直まだしんどいし。”邪眼”に戻すことにより負荷は格段に下がる。もう頬を流れる血も止まっている。

「権能使うにしてもバレない邪眼程度かな。あとは護堂に働いても
らいますか」

護堂が聞いたらすごい速度で拒否反応を示しそうなセリフと共に、
黎斗は再び現世へ飛ぶ。どうせもう解決済みなのだろう、という予
想をしながら。

「……何アレ？」

黎斗が真っ先に目にしたのは、目を疑うような光景。

「怪獣大決戦？ いや、巨人決戦か。ウルトラマンはやくきてー…
…」

千鳥ヶ淵近辺で暴れているのは謎の巨人。こんなところでこんなこ
として、情報操作は大丈夫なのだろうか。正直、上司にこの状況の
隠蔽仕事を命じられたらパワハラで訴えても良いと思う。そんな有
様。

「……甘粕さん過労死しなきゃいいけど。これ洒落にならんでしょ
」
「マスター、ご無事で！！」

呆然と眼前の光景に気を取られていると背後からエルが肩に乗る。
この場所を見つけるとは、獣の勘恐るべし。

「……ムラクモの気配がする。木偶あられの坊、化身なんか？ なるかな様じゃないだけマシか。あんなチート勝てる気がしないし。ま、それは置いといて活性化してるって何があったんだろ？」

「ナルカナ様って何ですか。ゲームのやりすぎですよ。って、そんなこと言ってる場合じゃない。マスター、援護行きますよ！！」

「雑魚あこひくらい、護堂で一蹴出来るだろ。寧ろ”人間”を主張している僕が行ったら邪魔な気がってええええええええええ！！？」

ああいった相手は人間にとっては「滅茶苦茶強力な」存在だろうが黎斗達にとつては「ちょっと手ごわい」もしくは「うつとおしい」程度の存在でしかない。アテナみたいな化け物相手にいい勝負をした護堂が負けることは無いだろう。そう思い護堂に丸投げしようとしたまでは良かったのだが、よくよく観察してみたのが運のつき。

「なんで、恵那が、取り込まれて、いるんだよっ！？」

「だから今恵那さんが天叢雲に取り込まれてるんですよ！！ そう言ったじゃないですか！ 何聞いてたんですかマスター！？」

「何も聞いてないわ！！」

醜い争いを始める主従。ギヤーギヤー騒ぐ一人と一匹を尻目に、事態はどんどん悪化する。とうとう内輪揉めの余裕がなくなった黎斗が数歩、後ずさった。

「……オイオイ、皇居だぜ。……マジでちょっとやめようよやめてくださいおねがいします」

冷や汗を流し、頬を引きつかせながら黎斗が呟く。口調がおかしくなっている辺り相当参っているのがわかる。こんなところで暴れられたら罰当たりなだけでなく、今後の生活に支障が出る。ただでさえ日本の中核たる東京で事件が多発しているのにここまで壊されたら、警戒ランクが限界突破してしまう。二、三歩歩けば術者に遭遇するくらい警備人員が増員されてしまったら、黎斗の正体が些細なことでバレかねない。

「遠隔攻撃で巨人^{アイト}のみ抹消させるには……うーん。護堂の山羊は今日はもう使ったから無理。ってかもう夜やん。いつの間に。じゃあ邪気　　これだ。僕天才」

アールマンの邪気攻撃なら闇に紛れて攻撃できる。上手くやれば護堂達に気付かれないで無力化できるかもしれない。叢雲だったら全力をぶつけければ一撃だろう。

「恵那さん死んじやいますよ？」

「……あ」

そうだった。恵那が人質の如く囚われているのだった。これでは邪気攻撃など出来はしない。

「だあああああああ！　もう、やってられっか！　どうしてこうなったし！」

「ついでに、古老の勢力が半ば崩壊したらしいことはもう数時間前に伝わってます。マスターを狙って動いていた事を知っている組織が皆無とは限りません。ここで下手にマスターが動くと、マスター

への警戒度を引き上げることになりかねませんよ」

私としてはマスターに恵那さんを救出して欲しいのですが一応お伝えしておきます、と言うエルに黎斗は頭を悩ませる。情報の拡散が、早すぎる。もっとも古老の中でもおそらく須佐之男命に次ぐであろう権力者達が一昼夜にして脱落したのだからしょうがないともいえるが。

「ついでにそんな状況ですので正史編纂委員会の皆様はもう阿鼻叫喚です。甘粕さんはもう見るからにゲツソリした表情で電話をかけたばなしですし。つい先程とうとう処理に向かわれました」

「甘粕さん……」

被害者側とは言え間接的に黎斗が彼らの仕事を増やしたも同然、そう考えると罪悪感がわいてくる。正当防衛ではなく過剰防衛だ、と言われればそれまでだ。神達はともかく雑魚軍団くらいは上手くすれば生かせたかな、と少し反省する。

「エル、事態を早期收拾させよう。護堂を無理矢理動かすしかない、か」

自販機に百十円を投入。がこん、と音がして冷え冷えのミネラルウォーターが落ちてくる。少名毘古那神の権能で中の水を癒し効果のある温泉水に。一応予備でもう一個。

「さーて、行きますか」

”鳳”を発動。神速という力を手にした護堂は、巨大な刀を余裕で回避。巨人の腕代わりの刀を易々と駆け上がる。絶妙なバランス感覚が無ければ出来ないであろう芸当も今の彼には見戯に等しい。

「…………お気楽そうにしてるなコイツ」

あつという間に恵那の元へたどり着いた護堂は救出作戦を敢行。まず、引っ張ってみる。しっかり捕らえられていて動きそうに無い、失敗。次。引いて駄目なら押してみる。押してみると隙間が少し出来た気がする。気のせいかもしれないが。もう一回、今度は引っ張ると、身体を少し解放できた。力を込めてまた引っ張る。

「頼むから持ってくれよ……………!!」

”鳳”の制限時間は決して長いわけではない。ここで切れてしまえば恵那は助けられないわ自分は落下するわで散々なことになる。

「うし！」

押したり引っ張ったりを繰り返すこと数度、ようやく恵那の解放に成功した護堂は彼女を抱いて一目散に大地へ疾る。心臓の痛みが少しずつ、強くなっていく。残された時間はもう無い。

「ぐっ」

「草薙さん…………」

「王様と祐理？　なんでここに？　ってあれ？」

祐理の元へたどり着くと同時に、時間切れ。激痛に顔を歪める護堂、心配そうに寄り添う祐理、状況をよく理解していない恵那。だが、巨人はそんな彼らを待つてくれるわけではない。

「くっ、二人とも早く逃げろ。鈍重そうな外見と移動速度とは裏腹にアイツの反応意外に機敏だぞ」

「草薙さんをおいて先には、行けません!!」

祐理の宣言と同時に、三人の前に影が飛び出す。更なる敵か、と身構えた彼らは意外な人物らしくない声を揃って上げた。

「黎斗さん!?!」

「れーとさん!?!」

「……黎、斗?」

護堂の目に潜む困惑の僅かな感情。それに黎斗は気付かない。

「護堂、居候が迷惑掛けた。ごめん。恵那、あとで説教だからね。つたく……」

事態についていけない三人を無視して黎斗はペットボトルの蓋をあけ、そのまま中身を護堂にぶっかける。

「わぶ!?!」

「黎斗さん!?! いきなり何をなさるのですか!?!」

「そうだよれーとさん！！　今はそんなふざけてる時じゃないって！！」

巫女媛二人から責められるが、黎斗はどこ吹く風でかけ続ける。行動できない護堂にそれを回避する術は無い。

「……マスター、護堂様はマスターと違うのですから、経口摂取にしなければ無意味ですよ？　カンピオーネの方々は超絶耐性を持たれていますから」

唯一事情を理解しているエルが黎斗に言う。案の定、黎斗はすっかり忘れていた。自分が効くのだから護堂も効くと思っていたのだ。

「……あ、そつか。悪い護堂、すっかり忘れてたわ。一応予備が……っと、あったあった。ほら護堂、飲め」

「はぁお前何言って……むぐっ」

もう一本を無理矢理飲ませる。味がマズイがそれは勘弁願おう。良薬口に苦し。少名毘古那神の権能で作った温泉だ。温泉水に味なんか関係ない。治療主体の能力ではない為これで完全な治癒、とまではないかないが”鳳”の代償を軽くする程度ならなんとかなる筈。

「さて、と。これで護堂は幾分マシだと思う。んで、僕がとりあえず挑んでみるわ」

「ええ！？　そんな、れーとさんムチャクチャだよ！！　いくられーとさんが強くて、天叢雲はもつとムチャクチャなんだよ！？」

「そうですね、黎斗さん！　いくら”剣の王”と張り合えたとはいえ、ただの人間が勝てるような存在じゃありませんよ。神降ろしをした恵那さんでもわからないのに……！！」

慌てる少女たちに内心苦笑い。心配してくれることへの感謝と、実際は余裕な事の落差に。もちろん巨人を倒す気はない。今回はあくまで足止め要員だ。ここで巨人に勝つてしまつと更に各組織から警戒されかねない。適度に善戦して、敗北。護堂にあとは丸投げだ。二人の言い分だとどうやら自分はまだ聖騎士以上とは見られていないらしい。そこは嬉しい誤算だ。それならば、自分への警戒はそれほど多くは無いだらう。

しかしこんな気苦労をするくらいならば本当、魔王相手に適度に負けるべきだった。なまじつか引き分けたばかりに聖騎士に準ずる槍使いとして調査されているのだから。今、聖騎士以下に見られているならそれは普段から能力を使わないで猫を被っていた甲斐があったというものだ。彼と互角なのはまぐれだった、と各組織が納得してくれていれば最高なのだけだ。

「だいじょーぶだいじょーぶ。護堂が復活するまでの時間稼ぎだからさ。僕だって天叢雲バケモノに勝とうとは考えていないよ」

そう言つて黎斗は気楽に走り出す。三人が呼び止める間もなく、あつという間に巨人へ肉薄する。直後、巨人の動きが停止した。動こうとしているのはわかるのだが、不吉な音と微弱な振動しかしていない。何が起こっているかわからないまま見ていると、巨人の装甲に罅が入り亀裂が入り始める。

「え……？」

「嘘……」

眼前の光景を信じられず停止する周囲を余所に、恵那は一人納得する。

「あー、れーとさんお得意のワイヤーか。れーとさんって縛るの大好きだからなあ。……恵那も何回縛られたことか」

遠い目で語る恵那と、愕然とする護堂。

「黎斗は清秋院相手に一体何やってんだよ!？」

護堂が叫んだ直後、人影が一つ、空を舞った。ぼーん、とでも擬音がつきそうな光景。

「おわあああー……」

マヌケな声と共に飛んでいくのは、さっきまでワイヤーで巨人と張り合っていた少年。

「「あ……」」

「れーとさん……格好悪っ……」

呆氣にとられる二人と呆れる恵那。

「あーあ。あとでれーとさん拾いに行かなきゃ……あのままだと絶対口クな事にならないし」

(あれが……本当に俺と同じ神殺し?)

ため息をつく恵那と疑問を浮かべる護堂だが、叢雲がこちらへ動くのを再開させたことで束の間の休憩は終わりインターバルを告げる。黎斗が来たことで霧散した緊張感が戻ってくる。

「……身体が動く。黎斗のやつ、一体何を飲ませたんだ？」

依然として身体に違和感こそあるものの、激痛はほとんど消えている。彼が何をしでかしたのかわからない。が、そんなことを詮索していられるほどの暇はない。やるべきことは巨人の撃破。謎液のおかげで体調が悪くない今なら　あのデカブツを倒せる

「背を砕き、骨、髪、脳髓を抉り出せ！！」

大地を踏みしめて唱えるのは異界より強大な獣を呼び出す術。千鳥ヶ淵に、黒き猪が降臨する。

猪による蹂躞劇が開幕する数秒前の出来事だった。この直後、一方的な虐殺劇が開幕する。

§23 染井吉野が鳴く頃に（後書き）

日誌の方でグダグダ言ってますがご助言下さった皆様、
本当であり
がとうございました（謝）

この場を借りて改めてお礼をば

…… ツッコまれないような権能に頑張りたいと思います

既に八雷神でダメ出しされそうですが（苦笑）

§24 叢雲古老恵那委員会、あとしまつ（前書き）

なんでこんなに長引いたんでしょうねえ……（汗）

普段より期間も量も長引いた原因は自明なんです、反省はしていないっ！

……ちよっぴり後悔はしていますが（苦笑）

§24 叢雲古老恵那委員会、あとしまつ

「さて、叢雲。^{スサノオ}主ナシでどんだけやるか、見せてちょーだいなっ……！！」

瞳を爛々と輝かせ、黎斗は巨人と向かい合う。巨大生物などと戦う機会は今までほとんどなかったのだ。手を抜くにしても、少しくらい遊んだってバチはあたるまい。

目標まで一直線に駆け抜けながら張り巡らされたワイヤーが、巨人を一気に拘束する。幾重にも束ねられたそれによって彼の巨人の装甲はぎちぎちに束縛され、巨躯の兵器は停止を余儀なくされる。莫大な呪力により強化されたせいだろうか、叢雲が力を振り絞っているが脱出には至っていない。

「さて、と。縛るだけだと思ったら大間違いだよ」

呪力を更に流し込み、足をしっかりと大地に踏みしめ、黎斗は勢いよく腕を引く。糸が限界まで張られ、叢雲の身体を締め付ける。そのあまりの圧力に耐え切れず、巨人の身体が膝をつく。みしり、みしりと、不吉な音を大音量で響かせて叢雲の崩壊が始まった。

「……あ。倒しちゃダメだよな。どーすんべ」

意外に早く根を上げた叢雲に、黎斗は慌てて手を緩める。ここで倒したら神獣クラスの怪物を倒した人間として注目を浴びてしまう。それは、困る。聖騎士級の間人として注目されてしまいかねないではないか。

「おいおいおい……この状態からどーやって負けるってんだよ……」

こっから手加減したら違和感MAXになるだろうしバレるよなあ、絶対。やっべえ。調子乗りすぎた？ 叢雲頑張れー」

拘束をこれ以上緩めるわけにもいかず、かといって倒すわけにもいかず。黎斗に新たに出来ることは応援のみ。護堂が早く来て倒してくれるといいのだけれど、この展開では望み薄か。かくして攻撃している相手を応援する、という奇妙な構図が出来上がった。攻撃しながらの応援なのだから叢雲にしてみればふざけるなといったいだろう。

「詰んでるよ、コレ。ここまで弱めても拘束脱出ならず、か。はてさて、こやつ自体が元から弱ってたのか調子に乗って痛めつけすぎたか。どっちにしるまっずいな。……一か八か。こやつの生存本能に賭けてみよう」

それは、あまりにも無謀な賭け。叢雲を更に追い詰め、危機的状況を作り出すことによって火事場の馬鹿力を無理矢理発動させる。第三者が聞いたら鼻で笑いそうな作戦だ。正直黎斗もこんな立場に追い込まれなければこんな阿呆なことしなかつただろう。

「っつと!?!」

殺気を相手に叩きつけ、締め付ける力を更に強める。罅がとうとう芯までできたのか、叢雲の装甲がとうとう割れて、破片が次々降り注ぐ。一か所だけでなく、身体中をバランス良く破壊していく。一か所だけ集中的に破壊しても良いのだが、叢雲が再生という選択肢をとった時、他の部位をほったらかして再生したら困ったことになる。最悪待ち受けているのは黎斗が破壊し、叢雲が治すという千日手。これを延々と繰り返し返そうものなら叢雲を圧倒した人間として確実に注目を集める。第一叢雲がジリ貧だ。いずれ再生で神力を使い

果たして倒れてしまう。そもそも叢雲が再生能力を持つのかもわからない。

「……ロンギヌス、叢雲あいつに力、貸してやってくんない？ 同じチー
ト武器の仲間のよしみでさ」

黎斗がするバカげた提案に、ロンギヌス相棒からの答えはない、がどことなく呆れている気配を感じる。当然だろう、何処の世界に敵の再生能力を強化して、自分を負けさせるために己の武器を差し出す者がいるというのだ。ならばやはり再生ではなく攻撃以外に道は無し、と叢雲の身体に理解させる他は無し。全体をまんべんなくかつ修復が容易ではないように破壊する。

そんなくだらないやりとりをする黎斗の願いはどうやら天に通じたらしい。突如叢雲の動きが激しくなったのだ。

「……………!!」

このままでは、死ぬ。そう感じたのであろう叢雲が渾身の力で暴れ出す。暴れた衝撃は糸を經由し、当然黎斗まで伝達される。普段の彼ならこの程度なんのことはないだろう。普段なら。

「おわあああー……………覚えてろおお……………」

暴れる気配を察し、敢えて力を抜いた黎斗は、当然の如く飛ばされた。紆余曲折あったが作戦通りである。顔がにやけないように必死で我慢しながら、負け台詞っぽいのを叫びながら宙を舞う。これで部外者わいどは退場し、魔王まおうが再び場に現れる。

「計画通り……………!!」

そんな眩きと共に、黎斗の頭は大地に激突し飛散した。

「あいたたた……」

もぞもぞと、地面から生えた足が動く。じたばたを数分繰り返した後、諦めたのか抵抗が止んだ。次の瞬間、地面から黎斗の上半身が姿を現した。土の中からバタフライをするかのように両手を動かしながら。上半身が埋まっていた穴など見当たらない。実はここ土色の水のプールなんですよ、と言えば信じる人は決して少なくないはずだ。

「土遁で出た方がやっぱ楽か。魔術使わなくて脱出してみせる、なんてくだらん意地張るんじゃないやあなかつたな」

そう言う彼の姿はいたって普通。泥まみれになっていなければ服が汚れているわけでもない。寧ろ大地にむき出しにされていた下半身、特にズボンが酷い有様だ。土砂が飛び散っていてなかなか汚い。とりあえず見渡してみても若干散らかっている自身の身体を焼却処分。黎斗自身は再生を果たしているのにここにこんなのが置いてあったら混乱すること請け合いだ。

「さて。護堂は上手にやってくれたかな、っと」

笑みを浮かべながら振り向いた黎斗は護堂が
猪が堀を破壊
する光景を直視する

「……」

笑みが、凍った。そんな黎斗をあざ笑うかのように、猪が勝利の咆哮をあげる。巨人の破片が飛散しこつちまで降ってくるがそんなもの、黎斗の目には入らない。運悪く飛んできた破片が黎斗の腹部を貫通するが、それすらも黎斗の中では些事といえる。瞬時に再生される内臓より、修復が絶望的な目の前の惨状の方に気を取られるのはしょうがないだろう。

「「おおおおどおおおおお……！！！」

怨嗟の怒鳴り声が周囲に響き渡る。もちろん発生源は黎斗一人だ。

「僕がつ、一体つ、何つ、の為にっ……！！！」

……ここでの破壊は黎斗が一番して欲しくなかった出来事だ。まさか、それをピンポイントでしかしてくるとは。これでは身体を張ってまで時間を稼いだ意味が全くない。山羊なり駱駝なり牡牛なりで潰してくればよかったのに。

「スサノオ引き摺り出して始末させるべきだった……」

後悔するが、それはもう後の祭りというほかない。術者たちへの警戒を今まで以上に気を配る必要があるだろう。しばらくマモンでの資金調達は玻璃の媛経由にしたほうが良さそうだ。術者にこれ以上この街に入り浸れたら換金先の宝石店から足がつきかねない。

「あー、最悪だ……」

力無く頂垂れる黎斗。だが落ち込んでばかりはいられない。須佐

之男命達と合流し情報の共有を急がねば。そう思ったのだが。

「やーっとれーとさん見つけたー。もう、間抜けな声と一緒に飛んでかないでよ」

気楽な声と共に恵那が隣へ着地した。後ろを見れば護堂達の姿も見える。恵那が先行してきている形で護堂と裕理はゆっくり向かってきているようだ。裕理に肩を借りながら歩いてくくらいなら護堂までやってこなくてよいのに、と思ってしまう。無理せず休むべきだろうに。

「マスター、派手に飛びましたね。人間ロケットになれるんじゃないですか？」

恵那の巫女服からエルが顔を出す。どうやら黎斗がエルを置いて巨人へ向かった後、恵那の袖の中に潜んでいたらしい。

「なりたくてなったわけじゃないっての」

肩を竦めて返事をする。ふと、護堂達を見やればエリカとリアナまで加わっている。これは面倒くさいことになりそうだ。ここで時間をとられるわけにはいかないのだが。

「しよーがない、か。……もっしー、スサノオ？ ごめん、全部消したよ。やられ役ズは残そうかと思ったんだけど、つい、カッとなっちゃって」

やむを得ず、電話で須佐之男命と会話する。エリカと裕理は思考自体を汚染しているから問題無いがリアナは別だ。リアナと正史編纂委員会に突っ込まれたら最悪朝まで帰れない。須佐之男命に

それまで無連絡は流石に拙いだろう。

「うん……うん……そっかー、よかったよかった。三人とも友人はそんなに居ないのか。あ、そうそう鏡、こっちで回収したよ。後で返すわ。他にもなんかいっぱい転がってたのもいらんから返すー」

実は黎斗、死屍累々な戦場に長時間残って死体漁りをやっていた。オリジナル 黎斗の独自魔術、デッドキープ 死体放置。死後即座に消滅する神祖や精霊の死体を現世に留めておく秘法。ルーン魔術の一つ、死人の呪法が原型を留めなくらい黎斗によつて魔改造された結果出来上がったこの呪術、出来あがったのはいわば偶然の産物だ。

シルクロード 絹の道を横断していた頃には地盤が無い。襲われ続けていれ
ばいずれ武器がなくなる。糸だけではいずれ限界が来る。戦闘の気配そのものは流浪の守護で気配を遮断し回避出来るが厄介事に自ら首を突っ込むこともあるわけで。初期装備の剣ばかり使っていて壊したら洒落にならない。黎斗には武器を作れないし作れる人に師事したこともない。だから、彼は考えた。「武器を作れないなら、奪もらっちゃえば良いじゃない」結果として滅茶苦茶な方針に達した彼は戦うことになる相手の武器に目をつけた。

敵から武器を回収すれば何も問題は無い。だが敵はすぐに消滅してしまい、一人ならいざ知らず複数からの回収は困難を極める。ならばどうするか。消滅させなければ良い。敵を倒す度に実験を繰り返し、数十数百の試行錯誤の未完成させたこの呪法は敵を倒す直前にある呪印をした物で貫くことで消滅を防ぐ代物だ。おかげで黎斗は格こそ決して高くないものの大量の魔術武器を保有していたりする。

入手したものは影に収納。影は自分と異界を繋ぐ扉ゲート。繋がる先は倉庫だ。最初は、星幽界の森林の中に黎斗が苦労して作ったほつたて小屋だった。流浪の守護による大結界を敷いている為呪力探知などによる発覚の危険性はまずないのだが、散歩の最中に誰かにバレ

ないか、というのが黎斗の悩みのタネだった。だが、そんな状況も太陽神を屠った時、「どうせならコイツみたく空から下を見てみないなあ」などと思ったことにより一転する。邪気化により夜限定の飛行能力を得ていた彼は日が暮れるや否や上空に飛翔、ほったて小屋を星幽界の遙か上空へと動かした。人工衛星と同じ要領で星幽界の上空をぐるんぐるん回っているほったて小屋の完成である。あとは簡単だった。膨大な年月をかけ内装を豪華に、防衛術を強固に。今では周囲に茂る数多の植物が、少名毘古那神の加護を受け強力な守衛と化している。もっとも、場所が場所なので見つかることはないだろう。これまでも、これからも。

兎に角、黎斗は集団を始末するとき、ワイヤーにこの呪印をしておいたのだ。凄まじい量の遺体が残ってしまったためその処理をしないで恵那や護堂と幽世で合流できなかったのだからやはり自業自得ではあるが。倒した後探索している最中に死体漁りを思い出して戻ってきた彼の表情はとても情けないものだった。

「いらないよ。大体僕が漁ったのだからあの人達がお前んトコのアモノを持ち出してた時の為なんすけど。」鏡”みたいなもんが消滅したらマズいっしょ？ 有用そうなほとんどねーぞ」

倒した奴の物は黎斗の物、といい洪る須佐之男命に黎斗は返却の意思を伝える。ただでさえ整理整頓が苦手なのにいきなり武器防具合わせて三桁近い装備を入手してしまったのだ。これを全部貰ってしまったら武具の海に埋もれてしまう。黎斗の技量では影の中に収納するにしても限界がある。しかももうすぐ限界を迎えるのだから割と事態は深刻だ。須佐之男命の館の武具保管部屋もそろそろ満杯だし。

「だいたい……へ？ それどころじゃない？ 護堂に……はあ！？」

護堂にバレた。とりあえず黙っていてもらおうようにお願いしたけど、ごめん。要約すればそういうことだ。

「……」

予想外の事態に沈黙した黎斗は呆然と近づいてくる護堂を見る。もう表情が見えるくらいにまで接近していた。

「れーとさんどしたの？」

恵那の呼びかけに思考が復活する。ここで呆然としているわけにはいかない。合流する前にこっちの話は終わらせなければ。須佐之男命と歓談している、と考えてくれているであろう恵那と違い、護堂達はそうは受け取らないだろう。この話が聞かれるのは不味い。

「スサノオ、貸し一つ、ね。覚悟しろよ…… 媛さんと坊さんにもそう伝えといて」

「れーとさん、顔怖いよ……」

青ざめた表情で後ずさる恵那と暗い表情で嗤う黎斗。あまりにも似合わないその笑い方。

「……どーせマスターの事です。くだらないですよ。それよりマスター、服のお腹の辺りが破れてますよ」

「おっと、そうだったそうだった」

恵那に気付かれなかったのは運が良かった。この近辺は匂いが酷くなっており、嗅覚が役立たない事が幸いしたか。自身の肉片が泥

にまみれ一目で肉とわからないことも味方した。

「燃えろや燃えろー」

陽気な黎斗の声と共に付近の土を燃やしていく。念のため、この一帯すべてから肉片＋ を消滅させる。

「れ、れーとさんなにやらかしてるの!？」

慌てる恵那。当然だろう、下手をすれば大火事だ。だがこちらには会心の言い訳がある。秋、という季節しか使えない究極の切り札。本当は土日に近所の児童ホームでやるうと思っていたのだが、ここでもやってもまあ、さほど問題はあるまい。

「ん？ 事件解決したし焼き芋でも焼こうかと」

「……!?!」

数秒後、倒れ伏す黎斗と鞘でぶんなぐるエルがそこにいた。鞘と相棒を強奪された恵那が目を丸くしている。口に啞えた一閃は、それはもう見事なものだった。

「黒、だね。」

「黎斗さんは神殺しだと？」

目の下に隈が出来ている甘粕が馨に問いかける。髪はボサボサ、服はしわくちゃで泥まみれ。ほつれもちらほら見えている。靴は底がすり減りすぎていることが一目でわかる。過労死直前のサラリーマンを思わせる風貌だ。古老の混乱により正史編纂委員会の上層部が機能麻痺していたせいで、今回の件の工作が難航したのだ。

「意見の相違により一部が離反。御老公直々にこれを肅清、とあるけどね」

甘粕もエルが黎斗に言った「連絡が取れなくなりました」という発言は聞いている。黎斗が幽世に転移した後エルと黎斗の通信手段も途絶えてしまったこともエルに聞いて確認している。あれは明らかに黎斗と周囲を分断しようとする動きだった。その後行われた須佐之男命による大虐殺。外国の組織なら誤魔化せるかもしれないが、流石に国内組織はこの違和感に気付く。情報が全く無ければ違和感も流していたかもしれないが、これだけ情報が集まれば看過するわけにはいかない。

「水羽さんが仮に人間だったとしても”元まつろわぬ神”と敵対して生存している時点でおそらく神殺しを成し遂げている」

黎斗との通信手段が隔絶してから古老半壊による大混乱が発生するまで相当の時間が経過している。全ての戦闘から逃走しきるのはいかな術者といえども不可能に近い。まして幽世。更に戦闘に遭遇して生き残っているのだ。神を殺していても、おかしくは無い。というか、状況的な証拠がそろい過ぎている。

「では、そのような対応を？」

カンピオーネとして扱うのか、と暗に問いかける甘粕に、馨は一

人笑って返す。

「まさか。我らが魔王陛下が沈黙を望むのなら、そのように計らうのが賢明なんじゃないかな。対外的には”人間の術者”として扱わせてもらおうか。御老公の秘蔵っ子なんだろう？ そのままの扱いでいこうか。どうしようも無い案件が発生した時に私達が個人的に相談すればいい。おそらく無碍にはしないだろうね。幽世に彼は単独で移動できる。しかも平然としているのだろう？ 現世の厄介事に巻き込まれるのが嫌なら幽世で隠遁したりなんなり手はある筈だ。出てきているという時点でこちらに関わってくる意思が皆無とは思えない」

草薙護堂に続き、二人目。日本人で日本在住。しかも傍にいるのは清秋院家の媛巫女のみ。魔術結社の影は無し。日本大好き。これは正史編纂委員会にとって絶好の機会だ。調子が良すぎてこれが嘘なのではないかと疑うくらいに。だからこそ、慎重にいかなければ下手を打って機嫌を損ねたら終わりだ。今、他組織に先んじているからとはいえその状態に驕り魔王の逆鱗に触れるわけにはいかない。それに、先輩魔王と喧嘩になったら最悪、東京が壊滅する。いや、東京だけで済めば幸いなのかもしれない。前例が無い以上最悪関東一帯が焦土になる、程度の事は考慮しておくべきか。

「馨さん、流石にそれは」

呆れたような甘粕の表情に我に返る。相手は”魔王”なのだ。今の自分は軽率すぎた。魔王二人目発覚で浮かっていたか。これではいけない。

「……そうだね、危ない危ない。とにかく、草薙さんとの関係にも注意しておいて。殴り合いの喧嘩ならまだしもお互い激怒になった

らどうなるかわからない」

甘粕が頷き姿を消すのを確認して、馨は清秋院家当主に送る手紙を書き始めた。

「これでちょっとはマシになればいいけどね」

不安そうなおそのセリフとは裏腹に、彼女の表情は晴れやかだった。

§24 叢雲古老恵那委員会、あとしまつ（後書き）

プロットはしっかり組みましよう（爆）
何当たり前の事言ってるんだこいつ的な目で見てくる皆様、アホの子
ですみません（汗）

さて、結局叢雲は護堂の下へ

9巻の恵那フラグどーすんべ僕……

叢雲没収使用かしら（酷）

今まで考えるの後回しにしていたツケです（苦笑）

あ、大国主ですが大体決まってきました

ご意見を下さった皆様、ありがとうございます（感謝）

ま、某能力の丸パクリかつ”カンピのルール違反”ワザなのでこれ
から修正なんですけど（苦笑）

やっぱよくばりはいけませんね（笑）

§25 黎斗と護堂と須佐之男命と（前書き）

あるえー？

どうしてこうなった……

正直、何か忘れてる気がします（汗

§25 黎斗と護堂と須佐之男命と

「お、お邪魔しま……なんだコレ!？」

「あはははは……やっぱりそれ見ちゃうといくら王様でもビククリしちゃうよね」

黎斗のアパートに遊びに来た護堂を迎えたのは厳つい顔の彫像。一階入口に置かれていてその威圧感は尋常ではない。そしてそれをみて怯む護堂に苦笑する恵那。しかしこの彫像、どこかで見たことある顔をしている。まじまじ見ていると、身体が反応していることに気付く。まさか、これはまつろわぬ神なのか!？」

「本当、見れば見るほどこの像おじいちゃんにそっくりだよねえ。れーとさんこの像何処から拾ってきたんだろう」

「まさか……須佐之男命!？」

そつえばあの英雄神はこんな顔をしていた。しかし、何故ここに存在しているのだろうか？

「つて、そつだ。ちょっと用事があるんだつた。王様どうぞ、ごゆつくりー」

恵那が駆け出した後も護堂はしばらく呆然としていた。良く見ると子供が落書きをいたるところにしている。うんこの絵だの相合傘だの電話番号だのヒゲだの。らくがき帳ならぬらくがき像と言つべきだろうか。ピラまでいくつか貼つてある。どうやら掲示板の役割も果たしているようだ。

「これ……本物の須佐之男命だよ……」

想像の範疇を超え、斜め上に飛んで行った状況に、戦慄しながらも護堂は黎斗の部屋を目指す。まつろわぬ神をやめた神が、現世で像になっているなんて。一体全体、何をしたらこんな事になるのだろうか？

「なあ？ 何をしでかしたんだよ、アంత」

去り際の護堂の言葉に、須佐之男命は答えなかった。答えなかったのか、答えられなかったのかは定かではない。しかし多分後者なのだろう、と彼の勘は告げていた。風雨にさらされたのである。須佐之男命の像は、どこか哀愁を漂わせて見えた。

「黎斗の部屋は二階だったよな」

階段を上がり、部屋の前へ。電話口で「バレたくないから一人でこっそり来てちょうだいな」と言われた時は罨かと思っただけだ。元々クラスメートだし玻璃の媛達の懇願もあった。だから黎斗を信じ一人でやって来たのだが、これは不味い。須佐之男命が野晒しになっているということは、彼は事を起こす気なのだろうか。だとすれば、まず最初の目標は同族 自分とかを始末することだろう。須佐之男命と自分を倒してしまえば、黎斗にとって敵となりうる障害は日本に存在しない。

「厄介事にはならない気がするんだけど、一応連絡しておくか……？」

迷ったのも束の間。

「ま、どーにかなるだろう。黎斗はオレと同じように暴走マトモなしないカ
ンピオーネだろう、うん」

エリカや裕理、リリアナが居たらため息を吐きそうな結論に帰結。

「黎斗ー？」

軽くドアを叩いてみる。チャイムがぶち壊れているらしく反応し
ないのだ。こんこん、という音は思いの外良く響いた。

「はいー」

ドアが開き、キツネが現れる。たしかエルといったか。キツネは
ぺこりとお辞儀をし、中へと護堂を招き入れる。

「ようこそ、草薙護堂様。八人目の羅刹の君。私は神殺カンシキオーネし、水羽黎
斗の使い魔を務めさせていただいておりますエルと申します。以後
お見知りおきを」

「あ、ああ……よろしく」

流暢に喋るキツネに目が点になる。こんなに饒舌な動物に会った
ことなど、ない。もっとも喋る動物自体見ないけれど。

「そうそう、私は分類上妖狐に分類されますしもう少しで千年を生
きますがこれといって特別な能力はありません。そこらの野犬に負
けるくらいの実力です。私の事は人語を介するだけの一般動物、と
してお考えくださいますようお願い申し上げます」

「喋れるっただけで十分すごい……っつて、もっすぐ千年？」

「^{マスター}黎斗に命を救われたのが数百年前ですので」

胆が冷える。黎斗は少なく見積もっても数百年生きていらっしゃるらしい。それでは、あのヴォバン侯爵ですら比較にならない大御所中の大御所ではないか！

「は、はあ！？」

「もつとも、マスターの精神年齢は護堂様と同等かそれ以下ですのでご安心ください。少なくとも深夜までPCゲームにハマ^{えな}って同居人にパソコン禁止を言い渡されるようなマヌケな御方、私はマスター以外に知りません」

どこか呆れた風なエルの声だが、護堂の頭の中は新情報の洪水だ。

「……え？　ちょよ、ちょつと待て！！　PCゲームってなんだ！？　つてかあの彫像^{スサノオ}は一体なんなんだ！？」

その問いに答えることなくエルは尻尾で器用に扉を開けた。こちらを向いたエルは笑っている。その問いが至極当然だ、とでもいうかのよう。

「全てはマスターに、尋ねてください」

「だー！！　なんでここでForce of Will^{ウィル}が来るんだよ、打ち消すなー！！」

エルの声に被さるように、黎斗の絶叫が響き渡る。ついでに何か

が布団に倒れ込む音。

「……」

護堂とエル、両者揃って気まずい沈黙が包み込む。なんだかよくわからないが、部屋に入りにくい状況になってしまった。

「……マスターはまた敗北したようですね。まあいいです。無視して入っちゃってください」

数瞬の躊躇いの後、決心した表情でエルが護堂に言葉を紡ぐ。

「え？ え？」

足元で必死にエルが護堂を押しってくる。キツネに押されたところで護堂にとっては痛くも痒くもない。寧ろ微笑ましいくらいだ。が、そんな表情を見抜いたのか不貞腐れた表情をエルが見せる。

「……悪趣味ですよ」

「ははっ。ハイハイ」

見ているとどこか和むキツネを背後に、護堂は黎斗の部屋へと進み 勉強机が最初に目に入った 絶句する。

「嘘、だろ……」

左側の棚。ラノベがぎっしり詰まっている。取り出すのも一苦労しそうな程に。何十冊あるのか数えたくもない。縦横斜め。一見、無造作にしまいこまれているように見えるがよく見ると絶妙なバラ

ンスの上になりたつてしていることがわかるだろう。なんとというか、才能の無駄遣いだ。感心してしまいつい、これだけ趣味丸出しで恵那はドン引きしないのだろうかなどくだらないことを考えてしまう。右側の棚。こちらは細かい。下段にはゲーム機がコンパクトに、中段にはゲームソフトがびっしりと、上段にはマンガが一部の間もないほど収納されている。棚の上に申し訳程度に教科書が置かれているが、ノートの種類は床に放置されている。開かれたページにはミズの這ったような文字が並んでいて解読不能。きつと距離が遠いからみれないだけなのだ、そうに違いないと必死に自分を信じ込ませる。

「……………これはひどい」

荒廃した大地の如く。そんな表現が似合う黎斗の机の反対側には押入れが開けっ放しで放置されている。その奥の方には綺麗に畳まれた布団が見え、タオルがぎっしり詰まっていると思われるバスケットがその前方に鎮座していた。部屋の左と右での対比が、ひどい。そして、視線を部屋の正面に戻す。最奥に放置されている一つの布団。素足が上がったり下がったりぶらぶらしている。その度の上に吊るされた洗濯物と思しきタオルがゆらゆら揺れた。危ないな、と思ってみていたのもつかのま、足が洗濯していたタオル類にクリティカルヒット、雪崩の如く落ちてくる。

「んー!?!?」

声にならない悲鳴と共に、足の持ち主はタオルの山に埋まっていた。つた。

「……………黎斗?」

なんていうか、最悪だ。こんなのが自分の先輩だと認めたくなかった。間違いない、コイツもベクトルは（大幅に違えど）ダメ人間だ。カンピオーネは変人ばかり、改めて認識した護堂は肩を落とした。

「ぶはっ。ご、護堂！？ あー、来るの忘れてた！！」

もつとも黎斗こんなのと一緒にしたら他の同胞カンピオーネに失礼だな、と思ったのだがそれを知るのは思った当人以外に居るはずもない。

「……なるほど。今日はオレが来ることを忘れてひたすらオンライン対戦をやっていたと」

半眼で睨む護堂に黎斗は「あはは」と誤魔化しの笑みを浮かべる。エルは「いい薬です」と素知らぬふり。まったく、いい性格をしている。

「とりあえず、以下はオフレコで。僕は多分現存する中で最古のカンピオーネ。スサノオ達は友人で恵那は預かってる。僕は気楽に生きたいからカンピとかバラさんでね、よろしく。はいQED！」

「まてい！！！」

そんな説明で納得できるものか。そんな意を込めて黎斗を見つめる。

「護堂、僕ノーマルなんだ。ごめん、護堂の想いには、答えられな」

「言わせねえよ！？」

見つめあうこと数秒、黎斗の発言に護堂は再び怒鳴り込む。こいつもサルバトーレと同じく言い方が危険だ。わかってやっているであろうことを考えると、比べ物にならないかもしれない。

「カツカしてるなー。牛乳足りてないぞー」

「誰のせいだ誰の……」

「マスター、そろそろ本題に」

疲れたような表情の護堂に、とうとうエルが助け舟を出してくる。

「やれやれ。何が聞きたいのよ？ 一応全部話したと思うんだけど」

ようやく話す気になったか。真面目に答える気になったと感じた護堂は黎斗に最大の疑問を叩きつける。今日の全てはこのためといつても過言などでは決していない。

「なんで、今まで黙ってた？ いつからオレがカンピオーネだと知っていたんだ？」

「それについては、ごめん。陰でひっそりと生活したかったんだ。護堂がカンピオーネだと知ったのは最初に会ったとき。あの時に察することが出来た」

そんな簡単にわかるものなのだろうか、と疑問に思うが相手は最古参の一角だ。それが頭の片隅にあるせいで説得力を持って聞こえる。たとえば言っている人間が社会不適合者こなでも。

「とりあえず、護堂の助っ人はある程度してたよ？ アテナとヴォ

バンの時だけだけど。叢雲入れればみつつか」

「え？」

「アテナ戦ではアテナの障壁崩す手伝い、ヴォバン戦では”山羊”の強化。もつともヴォバンの時は近隣の生物の避難を優先したけれど」

これで”ある程度”なのだろうか、と黎斗自信も首をかしげる。やっていることは地味どころか下手したらやってもやらなくても大差無いことばかりだ。無論思ってもそんなことはおくびにも出さないが。一応は戦局をひっくり返すことに貢献したはずだと信じる。

「ちょっと待て、どういうことだ？」

護堂からしてみれば、寝耳に水だ。必死に戦って打倒してきた強敵達の裏で密かに暗躍してきたという友人^{れいと}。だが、彼の気配は微塵も感じとれなかった。

「んー……」

黎斗は少し悩みこむ。大雑把な説明だとしても楽なのだが、それでは護堂は信用してくれそうに無い。かといって詳しく説明すると面倒くさい。権能について解説しなければならぬし。雷撃増強^{ロッキンクス}に用いた意思疎通^{カイクム}、ヴォバンの雷撃を打ち破った時間加速&相棒^{ラファエル}、アテナの閻障壁を突破した邪眼^{サリエル}、隠密活動を今まで出来た最大の要因である気配断絶^{ラファエル}。最低でもこれらを教える羽目になる。自身の手の内を知られること自体はそれほど痛手ではないのだが、こんなに教えていると権能説明だけで日が暮れそうだ。

「……えつと、僕は邪眼つーモンを持つているのね？ 鈍っているから効果は対象の魔法やらなんやらの無効化、権能の軽減程度なんだけど。それでアテナの障壁崩し手伝いました。んで、生物と意思疎通が出来る能力もあるのよ。それで大量の「護堂に協力してくれる意思」を雷放つてた護堂に送り込んだの」

「もつと、普通に協力してくれても良かったんじゃ……」

護堂の言うことももつともだ。だが、それでは黎斗の目的が果たせない。もつとも、当初の目的である”同郷のカンピオーネに会う”なら既に達成しているのだが。ぶつちゃけいつ引き籠もつても問題ない。せつかく久々に友達が出来たんだし、現世で知り合った友人達の一生を見届けてから戻ろう、と予定を立てているからいるだけだ。

「それだと護堂強くなれませんしー。とりあえず護堂が強くなってくれれば僕は楽隠居できるからさ。基本僕は手を貸さないよ。無理ゲーだったりそんな日和つたこと言える様な状況じゃないようだったら協力するけれど」

だから頑張つて、と爽やかな笑みを浮かべる黎斗。

「……協力自体は、してくれるんだな？」

辛うじて護堂が言えたのはその一言だけだった。

「まーね。護堂一人で手が回らないと独断で判断した場合も勝手に動くけど、基本裏方に回るよ」

「……まあ、敵対しないだけマシか」

味方であるだけマシ、護堂はとりあえずそう思うことにする。勝手に戦局を引つ掻き回される恐れがあるのが心配だが、敵宣言されて襲い掛かられるほうがたまらない。それに比べれば、十分マシか。

「マスター、恵那さんとの関係も説明なされたほうが」

「そうだそうだ。普段オレの事散々言ってるくせに、清秋院はどうなんだよ？」

エルに追隨してこちらへ問いかけてくる護堂。顔がニヤけておりつつついてくるからだろうか、すごくムカつく。ハーレム王に冷やかしを受けるなんて……！！

「恵那は現在叢雲の一件で謹慎処分になったのよ。んで同居人たる僕が監督責任者となっております以上QED証明終了ー！！」

「はええよ!？」

一気に説明したらつつこまれた。だが他にどう説明しろというのか。

「いつとくけどなんで僕が監督とか理由なんて聞かないですよ？ 僕だってわからないんだから。なんか謹慎処分の決定に当たりスサノオやら正史編纂委員会からなんか言われたらしいけど」

「そうだ、スサノオだ！ 玄関のアレなんだよ」

神殺しの話、恵那の話ときて次は須佐之男命。まったく、話題の移り変わりが早い。ちとばかしせっかちすぎはしないだろうか？

「あ、わかった？ うん、アレはスサノオよ。護堂にバラしたから、ね」

「え……？」

黎斗の笑みを見て、護堂の顔色が青褪める。

「僕の能力の一つ。マモンの権能^{チカラ}。触れたモノを貴金属・宝石の類に変質させる。これは生命にも有効だ。あとは……わかるな？」

予想外に須佐之男命の抵抗が激しかったので数回死ぬハメになったが、戦果は上々だろう。

「期間はできとー。僕の気の済むまで。まあ一週間かそこらにするつもりだけど。それまでタングステン製の彫像として玄関で伝言掲示板の役目を果たしてもらう。ご近所さんの為にもなる、とっても素敵な罰ゲーム。加減して体表面コーティングで済ませているから命に別状はないよ。邪眼で解けば一発さね。もっとも、一般人ならもう餓死しているだろうけど」

普段と変わらぬ口調で、サラリと凶悪な事を言う黎斗に、護堂は数歩後ずさる。

「スサノオは……脱出しないのか？」

くさつても彼は神。黎斗の言が正しければ 表面コーティングとやらだけならば すぐにでも脱出できそうなものだが。

「したら更に恐ろしい目にあわせるよ、って言うてあるから大丈夫」

大丈夫なものか！ 護堂は初めて須佐之男命に同情した。あとどれくらいの間この苦行が続くのかはわからないが、黎斗の気が済むまで近所の人々にラクガキをされ続けるのだろう。

「第一ここで解除したらアパートの庭にカミサマ爆誕よ？ 大事件じゃん。今は不思議パワーごと金属化してるから問題ないけど、少しでも解除しようもんなら大惨事になるのは目に見えてる。そこまですわかって抜けだすほどスサノオも馬鹿じゃあないさ」

信頼しているんだか信頼していないんだかよくわからない論法である。というか黎斗は「大惨事覚悟で”罰ゲーム”とやらをおっぱじめたのか。」

「俺の同胞は人格破綻者ばかりだ……」

お前がいうな、と普段なら言われる台詞。ツッコミ役不在の状況だったからだろうか。その言葉はすぐに場の空気に溶け込んだ。ため息をつく彼の視界の片隅に、丸まり寝ているエルがいた。

§25 黎斗と護堂と須佐之男命と（後書き）

恵那のくだり、ホントはもっと長かったんですが護堂と会うこと考
えると時系列がかみ合わず泣く泣くカット（爆）

いや、恵那 護堂の順で行けばたぶん行けたんですけどしょうけどね……
あれですかこれは小ネタ集に突っ込めフラグですか（死）

ホントは教主の姉さま登場まで詰め込んでただけどなあ……

§26 とある富豪（リッチ）な魔王陛下（れいとさん）（前書き）

なんだこれ……

更新が遅れたのにグダってるだけです（汗

次こそは姐さんを……

「？ おい、黎斗。聞いてるか？」

「ああ、ごめん。んでなにー？」

ふと意識を通話口に戻す。いけないいけない、ネットサーフィンに夢中になって護堂の話の話半分^にに流していた。少し罪悪感を感じつつ、もう一度護堂に用件を問いただしてみる。

「おまえ……まあいいや。媛巫女とかいうやつ^のことで相談があるんだ。黎斗は”そっち側”に詳しいだろ？」

媛巫女ってなんだろう。そんな疑問が頭をよぎった。何処かで聞いたような気もするが、それは果たしてどこだったっけ？

「護堂悪い…… 僕その媛巫女？^{つて}の知らない…… それって何？ どこかの国のお姫様が巫女^{リンセス}になってたりするの？ それともお姫様は魔法少女とかそんなノリ？」

「全然違え……」

落胆したらしい彼のため息が聞こえてくる。須佐之男命に聞いてみるべきだろうか？

「うーん、スサノオに聞いてみる？」

「……事態がこんがらがりそうだから遠慮しとく」

「言つときながらなんだけど、その選択肢は正しいと思う。絶対めんどくさいことになる」

「はあ。……とりあえずこっちでもう一回考えてみる。もしかしたらまた電話するかもしれない」

「あいよー」

電話を切つてから黎斗は気付く。そういえば相談内容を全く聞いていなかったな、と。聞けばよかったかとも思うがやはり聞かなくてよかったのだろうか。ロクな相談じゃない気がする。

「媛巫女とやら知らないんだから聞かされたところでわかるわけないか。面倒事に巻き込まれないですみそうだし」

「え、れーとさんどしたの？ 恵那達がどうかした？」

「え？ 何が？」

恵那が突然横槍を入れてくる。恵那の名前を口にした記憶はないのだけれど。それとも無意識で恵那の名前を言っていたのだろうか。だとしたらかなり恥ずかしいが。

「媛巫女って言ったじゃん。恵那達になんか用事あるの？」

「……恵那って媛巫女？」

「言つてなかったっけ？」

小首をかしげる恵那。

「……護堂、ごめん」

電話を掛けなおそうかとも考えたが、途中まで電話番号をつつたところでやめて携帯電話をしまつ。どうせ近いのだ。直接行った方が都合が良いだろう。

「恵那、エル、ちょっと護堂んとこ一緒に来てもらえる？」

「？ 了解しました」

「王様のところ？」

詳しい話を聞いたそうな二人だが解説は省略させてもらおう。自分もよくわかっていないのだから話せるわけがない。

「とりあえず現役媛巫女えなほんにんがいれば問題はソッコー解決すると思うんだけどなあ。……恵那が媛巫女なら万里谷さんもそうなんじゃないのか？ なんで彼女に聞かなかつたんだらう？」

カンシヒオーネ魔王の権力をフル活用すればなんとかかなりそうな気もするのだけれど。護堂も隠遁生活を送る気なのだろうか？

「ハーレム建設を試みるわ物をド派手にぶち壊すわで隠す気ゼロだとばかり思ってたわ」

巫女。護堂の口からこの単語が出てくる時点でロクな運命にならない気がするが乗りかかった船だ。とりあえず明日にでも様子見に出かけてみよう。

そんなことがあったのが昨日の話。

「すみませーん、護堂いますー？」

エルと恵那を連れて草薙家を訪れたのは、もうすぐお昼という頃合いだった。もしかしたら昼食の邪魔かもしれない、と後悔する。時計を見てから家を出てくればよかった。そもそも時計は電池切れで動いていないけれど。いつも携帯電話で時間を確認していたツケが回ってきたか。携帯が電池切れを引き起こすだけでこんなことになるなんて。

「あ、黎斗さんこんにちは。お兄ちゃんですか？ つい先程一人で出かけましたけど……」

「なんてこったい…… ありがとう」

静花にお礼を言って来た道を戻る。行き先を聞こうかとも思ったのだが、どうせ明日にでも学校で会うのだ。帰りに恵那と引き合わせれば問題ないだろう。問題は午後が暇になったことだ。せっかく外に出たのに、もう住処に帰るのはなんだか勿体ない。恵那とエルを引き連れて、たまには何処かへ行ってみるのも悪くない。恵那は元々謹慎の身だから黎斗と一緒にでもない限り外出は許されないだろうし。一緒でも外出は許されないと反論されそうだが監督する義務があるのだ、多分。とりあえず通りの方へ行けば色々な店があることだし、そこで昼ご飯でも食べながら相談してみよう。

「んと、スサノオと夜なべした呪符は確か財布の中に……」

樋口さんの台頭により今や見かけることすらも希少となった新渡戸さんを数枚取り出す。ついでに厚紙ほどの厚さとなった紫式部と福沢さんを恵那に持つてもらい、財布の中を搜索する。十数人目の夏目さんの間にお目当ての呪符は挟まっていた。ここまでやっていて時間がかかり過ぎと実感する。今度から入れる場所を変えようと心に決めた。

「ほい、エル。人化して。基本的に動物は飲食店進入禁止だから」

「れーとさん、どっか行くの？」

「うん。せっかくだし三人で適当にぶらっこうかと。どうせ帰ってもレベル上げ作業するだけだし」

三馬鹿とつるむ案も一応あるが、せっかくならこの二人と過ごしたい。一日くらいバチは当たらないだろう。自宅で延々ゲームをするのは色々終わっている気もするし。

「マスターにしては珍しく気が利きますね。行きましょう」

涼しげな声音に振り向けば、そこには人化したエルの姿。どことなく嬉しそうな表情なのは、久々に飲食店の料理が食べられるからか。認識障害の呪を一応仕掛けておいたので、一般人に見られたというような失態は無い筈だ。

「え、エルちゃん……？」

呆気にとられた様子の恵那を見て気付く。そういえばエルのこの姿を彼女に見せるのは今日が初めてだった。

「発案、僕。協力、スサノオで作った呪符。媛さんの意見も参考にしつつ完成させたんだ」

女の子の前だから元ネタはギャルゲとは敢えて言わない。そこら辺はいくら彼でも見栄があるのだ。ラノベ収集している時点でもう恵那に苦笑いされているけれど。

「さて、んじゃ何食べたい？」

「マスターの好きなトコで構いません」

「れーとさんの行きたいところがいいなあ」

困った。黎斗としてはなんでも良かったのだがこんなことになるとは。まさかである。とりあえず適当な案を提案してみるしかない。近辺の地図を頭の中に思い浮かべる。

「ファミレスとかは？」

「マスター、せっかくですし豪華に行きましょうよ。一食数千円とかの。お金は天下の周りものですよ？」

「学生の身分でそんなところに行けるか！ 僕たち全員（外見上は）未成年だぞ！ 絶対目立つじゃない！」

エルの暴挙とも言える提案を却下する。大体そんな高級料理店、この近辺にあるのだろうか。エルが当てになりそうにないので恵那と二人で悩んでいると脳裏に響くはエルの声。改良型の呪符はエルも念話を可能にしたのだが、問題は無いようだ。外部の音は聞こえないし、クリアに聞こえる。

(マスター、三人合わせて諭吉さん一人とちよつとで安全が買えると思えば安いものですよ?)

久々の外食が出来るエルとしてはせつかくなのだから豪華にしたい。財力も気にする必要は無いし。マモン様々である。恐れることは、何も無い。だから必死に己の主に交渉する。

(安全?)

(……マスターまで護堂様の鈍感癖移りました? 恵那さんと私と一緒になんですよ?)

そこまで言われてはたと気づく。恵那はまごうことなき美少女だ。いわゆる大和撫子。エルも化けた先は美少女だ。外国人の。二人の美少女を侍らせた男がファミレスに居座る。

「居ずれえ……」

「れーとさんどしたの?」

(加えて容姿が護堂様ほど優れているわけじゃないんですよ?)

(わかった。わかったからそれ以上心を挟らないで……)

容赦のないエルにたまらず敗北宣言。たしかに彼女の言うとおりだ。

黎斗のような冴えない、平凡な容姿の者が美少女を二人も侍らせる。それで人通りの多いところを歩き、人の出入りの激しい店に入る。仮に、護堂のように優れた容姿を持っていたのなら、受けるの

は嫉妬の視線くらいだろう。もしかしたら変なのに絡まれるかもしれないけどそれほど多くは無いだろう。だが、現実是非常だ。黎斗は決してイケメンと呼ばれる部類の存在ではない。黎斗より容姿の良い男などこの世にはごまんという。

もし、自分より容姿の劣る者が美少女を侍らしていたら。嫉妬の視線は当たり前。変なのに絡まれる確率も先程とは比べ物にならないだろう。それどころか、自分に自信のある者達がナンパを仕掛けてくることもありえる。ファミレスなどで少し席を離れた際に黎斗の席が奪われている可能性だって決してゼロではないのだ。

もし、黎斗の居ない内に過激な行為をしてくる男がいたら。今の恵那は謹慎中なのだ。暴力沙汰がマズイことは考えなくてもわかる。エルは戦力になりはしない。それどころか機動力すらない彼女がいる以上逃亡という選択肢も採ることは叶わない。二人に出来ることは耐えて黎斗を待つことか実力行使か。今、他の魔術組織が多くの人員を派遣しているであろう地域ゴコでなら、その有り得ない仮定も本当に有り得ないかはわからない。策謀に巻き込まれる可能性だってあるのだ。ただでさえ正史編纂委員会は混乱から完全に復旧していないのにここでやらかされたら国内にも関わらず諸外国の機関が幅を利かせることになりかねない。東京の、日本の勢力図が激変してしまう。

（確かに、日本の平和がゆきっちゃん一人で買えるなら安いもんだ）
黎斗のぶっ飛んだ考えが、エルに理解される筈もない。

（い、いやマスター、そこまでは無いと思いますよ……）

呆れたというか引いているというか。渴いた声を返してくるエルは危機感が足りないと思うのだけれど。

「ま、マスターのお好きなようにどうぞ」

とうとうエルも匙を投げた。頭の悪い想像を主がしていることを即座に察する辺り、付き合いの長さは伊達ではない。黎斗の思考の全てを把握することは出来なくても、どうせロクな事を考えているはずがないという奇妙な信頼のおかげで、彼女は真実に限りなく近い推測をすることに成功する。だが彼女が黙ってしまったことで、高級料理店に学生のみで行くのは目立つ、という意見を出せる存在は消滅してしまった。

「うし、高級料理店か。……蟹料理？」

蟹。高級料理食材筆頭といえ蟹である。ツバメの巢とか世界三大珍味が筆頭なのかもしれないが、おそらく黎斗の庶民舌では違いを理解することは難しいだろう。スーパーの安売り牛肉と高級松坂牛の違いすら曖昧なのだから。そもそもそんな”超”高級食材が周辺地域にあるとは思えない。蟹がそもそもあるかどうかも怪しいところはあるのだけれど。

「蟹かー。恵那はれーとさんの行きたいところだったらどこでもよいけれど」

「カニカマとズワイガニの違いがわからない人間がそんなトコ行ってどうするんですか……」

「……御尤も」

「れーとさん、いくらなんでもそれはないよ……」

どうしよう。高級料理なんて縁がなかったからわからない。困っ

た黎斗は辺りを見回して、とある建物に目をつけた。ここで作戦会議と洒落込もう。我ながらなんとという名案だろう。

「よし、そのスタバで細かいことを考えよう。ここで歩きながら話すのもなんだし。今店に行ってもピークで混雑しているだろうし。」

「……そうですね。ここで立ち止まって衆目を集めるよりはよろしいかと」

「ここって入ったことなかったんだよねー、ちょっと楽しみー」

店に入ってメニューを見る。二人が考えている中、黎斗はすぐに店員の下へ向かっていった。既に頼むものは決めている。

「すみません、ベントイアドショットヘーゼルナッツバナリアーモンド キャラメルエキストラホイップキャラメルソースモカソース
ランバチップチョコレート クリームフラペチーノください」

店員さんの営業スマイルが固まった。

「……え？」

「ベントイアドショットヘーゼルナッツバナリアーモンド キャラメルエキストラホイップキャラメルソースモカソースランバチップチョコレート クリームフラペチーノをお願いします」

「……お客様、申し訳ありませんがもう一度お願いします」

「……これ、見ます？」

「……お願いします」

予め用意していた紙を渡す。ホツとしたような表情でそれを受け取った店員の目が点になった。

「これとっても甘いですが、大丈夫ですか？」

「大丈夫、というわけではないですか大丈夫です」

どっちだよ、と突っ込まれそんな返答と苦笑い。つられたのか思わず店員さんも苦笑い。

「ちなみにコレ、何処でお知りになったんですか？」

「ちよつとネットで……」

人間だったころ、友達と行った時に彼が頼んでいた代物だ。正直ジューズよりも甘い、とんでもない代物。昔を思い出すからか、黎斗個人としては嫌いではない。

「さて、と」

精算を済ませ、恵那とエルを待とうとした彼に、大勢の好奇心あふれる目が降り注ぐ。こんなものを頼めば当然である。

「あ」

目立ってはいけないと、そう理解したはずなのに。こんなものを頼めば目立つのは必定。我ながらなんということをしてかしたのだ

るっ。

「……わざわざ目立とうとなさいますか」

「れーとさん、何頼んでんのね……」

呆れる二人の冷めた視線に、思わず黎斗も崩れ落ちた。

§26 とある富豪（リッチ）な魔王陛下（れいとさん）（後書き）

アニメ化らしいですね

素直に喜んで良いのだろうか……

コミックも直接読んではいないのですが皆様割と……（汗

SD文庫はアニメ化作品の原作が……げふんげふん

とりあえず無事に成功することを祈ります。

でも”戦士”の剣、どーすんでしょうね？（笑

まさか毎回キスが入るのかしら。描写的に大丈夫なんだろうか（笑

……後書きがいつにもまして後書きになってないけど、まあいいですよねー（殴

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5043q/>

魔王と魔王の友達と

2011年12月19日02時48分発行